HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オホーツク文化の研究 5 目梨泊遺跡 (2)
Author(s)	天野, 哲也
Citation	北海道大学総合博物館研究報告, 9, 1-117
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91488
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	v.9_1-117.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第Ⅰ部　第２章　第２節

基本的に本オホーツク文化の研究シリーズ２『香深井遺跡』上（大場・大井 1976）の分類に従う。ただし地域と時間それにおそらく集団の出自・系統の違いも関わるのであろう[2)]、この目梨泊遺跡の遺物には香深井１遺跡のものとかなり差異をもつ例が少なくない。これらに関しては次の補足的な分類基準を設けてそれに従って記載することにする。

遺物の分類について

土器の器形（第１図）[3)]

IVa 型：胴あるいは肩が顕著に張り、口縁の開きは小さい。

IVb 型：最大径が胴部にあり、紡錘形である。これら二つの型は貼付文土器にほぼ限られる。

土器の文様（第１図）[4)]

貼付文を藤本強氏の分類（藤本 1966）を元に Ha~Hg の６タイプ・単位に分ける。

Ha：直線的なもの。Hb：波状のもの。Hc：直線的なものと波状のものが組み合う（上下は問わない）。

Hd：波状のものの上下に直線的なものを配す。He：複数の波状の貼付文を周期を半分ずらせて上下組み合わせる（波頂と波底が接する）。Hg：刻みをもつ（擬縄貼付文）。

石鏃の形態（第２図）

ほとんどが鏃Ⅰ（有茎鏃）であり、鏃Ⅱ（葉形鏃）は極めて少ない特色が認められる。そこで鏃Ⅰについて、茎部の形態は無視し、身部の形態に基づいて a~d の４タイプに分ける[5)]。すなわち a：両側縁が直線的で結果として三角形をなす。b：両側縁が内湾する。c：両側縁が外湾する。d：両側縁が角を持って屈曲し、結果として五角形・将棋の駒形をなす。これらを含めた石器分類図を掲げる。

骨角器（第３・４図）

香深井１遺跡の分類基準で説明が可能なのでその分類図を再掲しておく。

Ha　直線的なもの

Hb　波状のもの

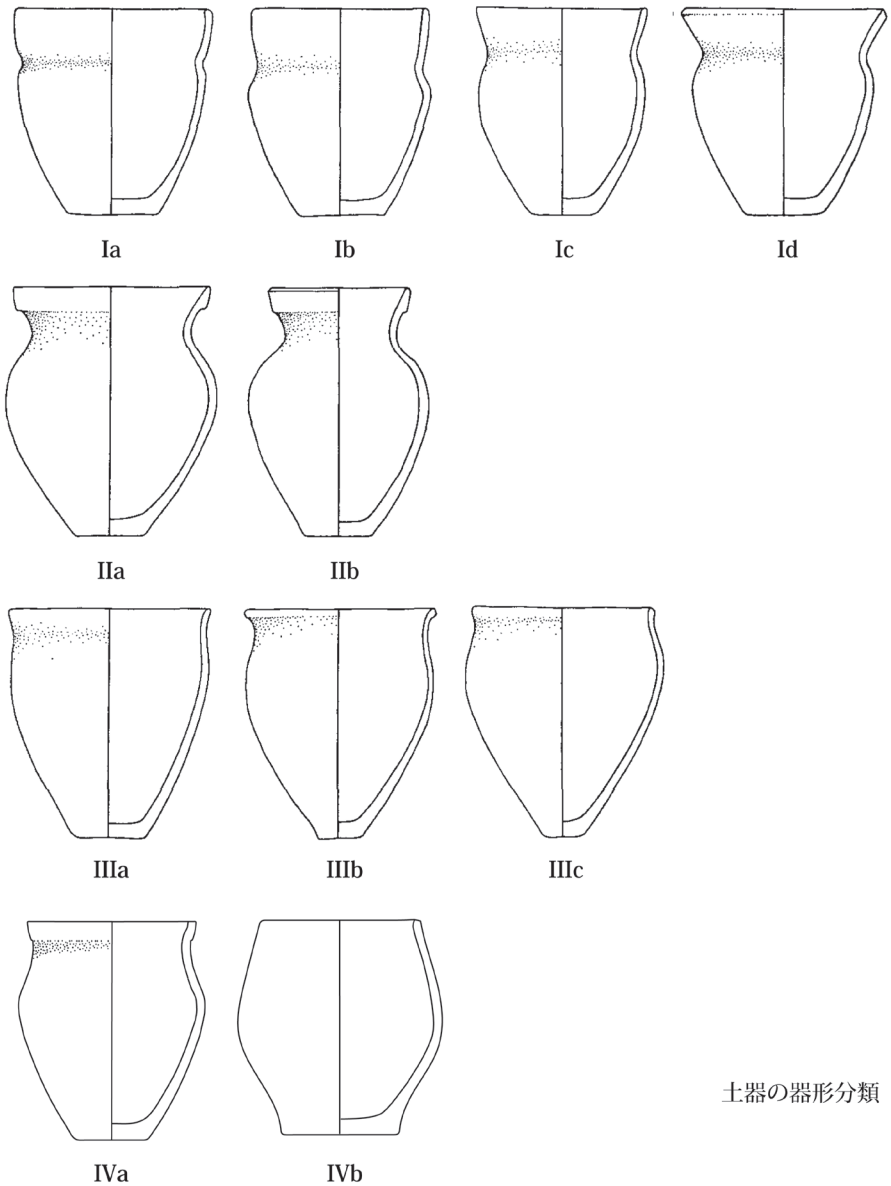
Hc　直線的なものと波状のものが組み合う（上下は問わない）

Hd　波状のものの上下に直線的なものを配する

He　複数の波状の貼付文を周期を半分ずらせて上下組み合わせる（波頂と波底が接する）

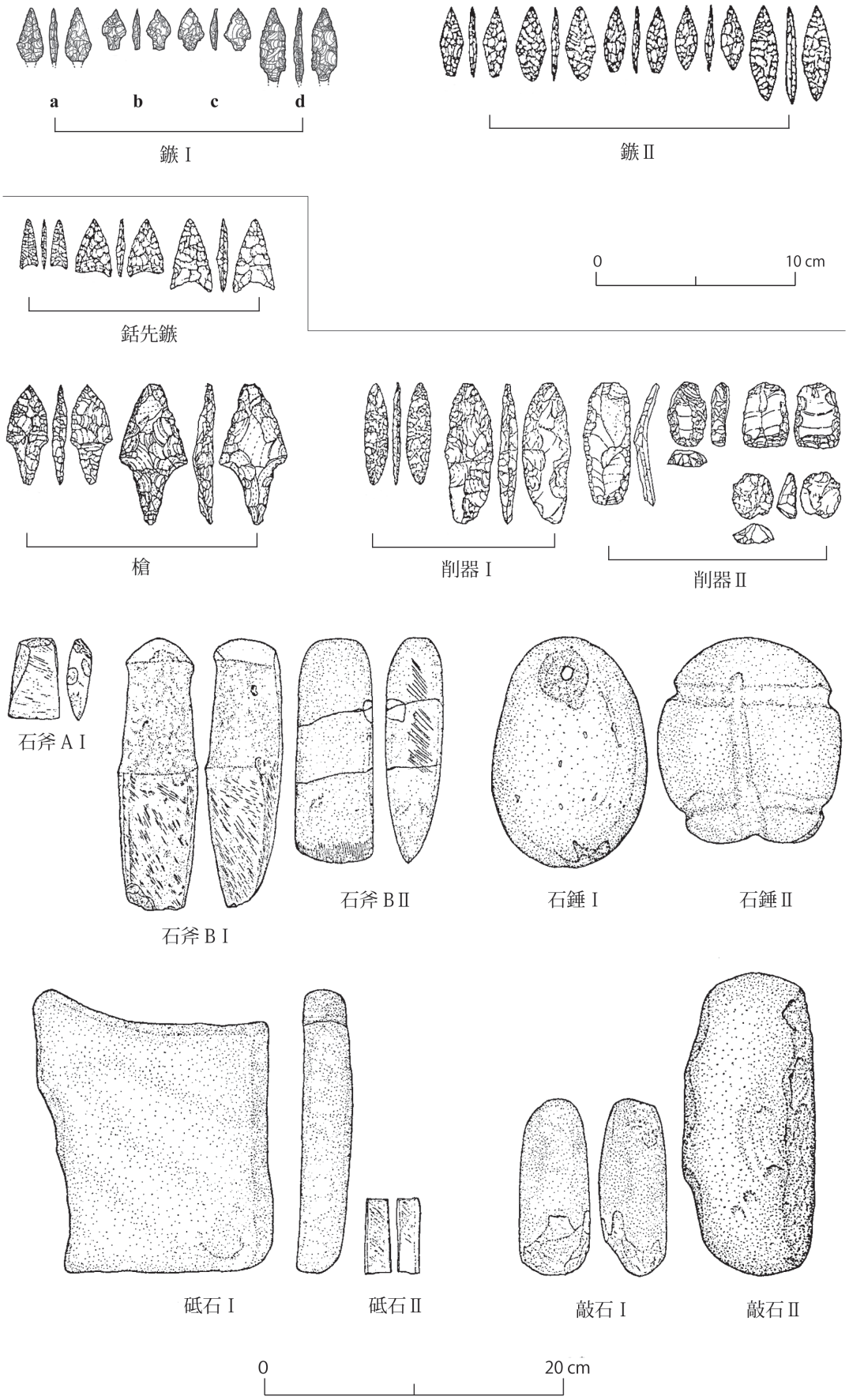
Hg　刻みをもつ（擬縄貼付文）

貼付文の文様分類

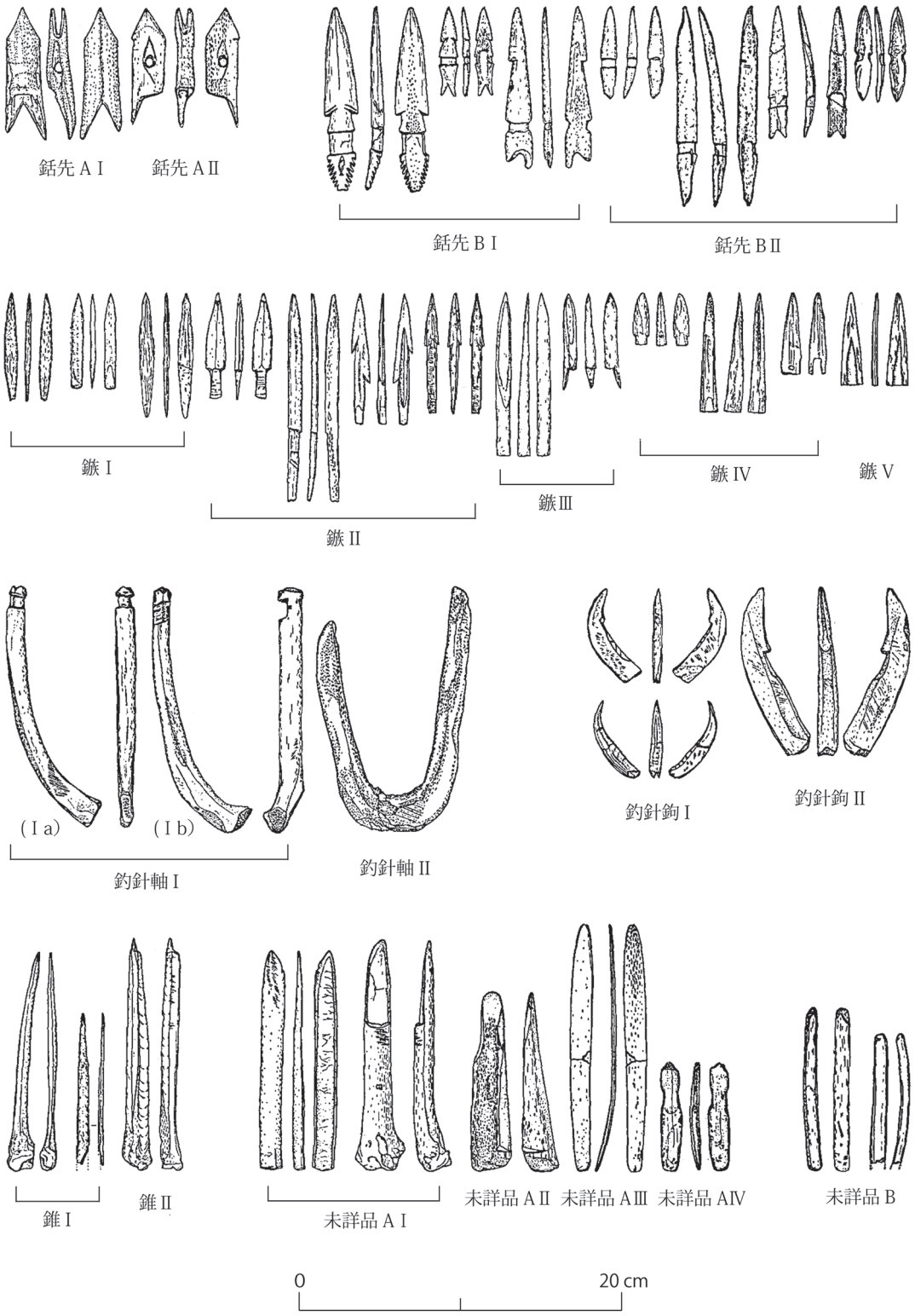


土器の器形分類

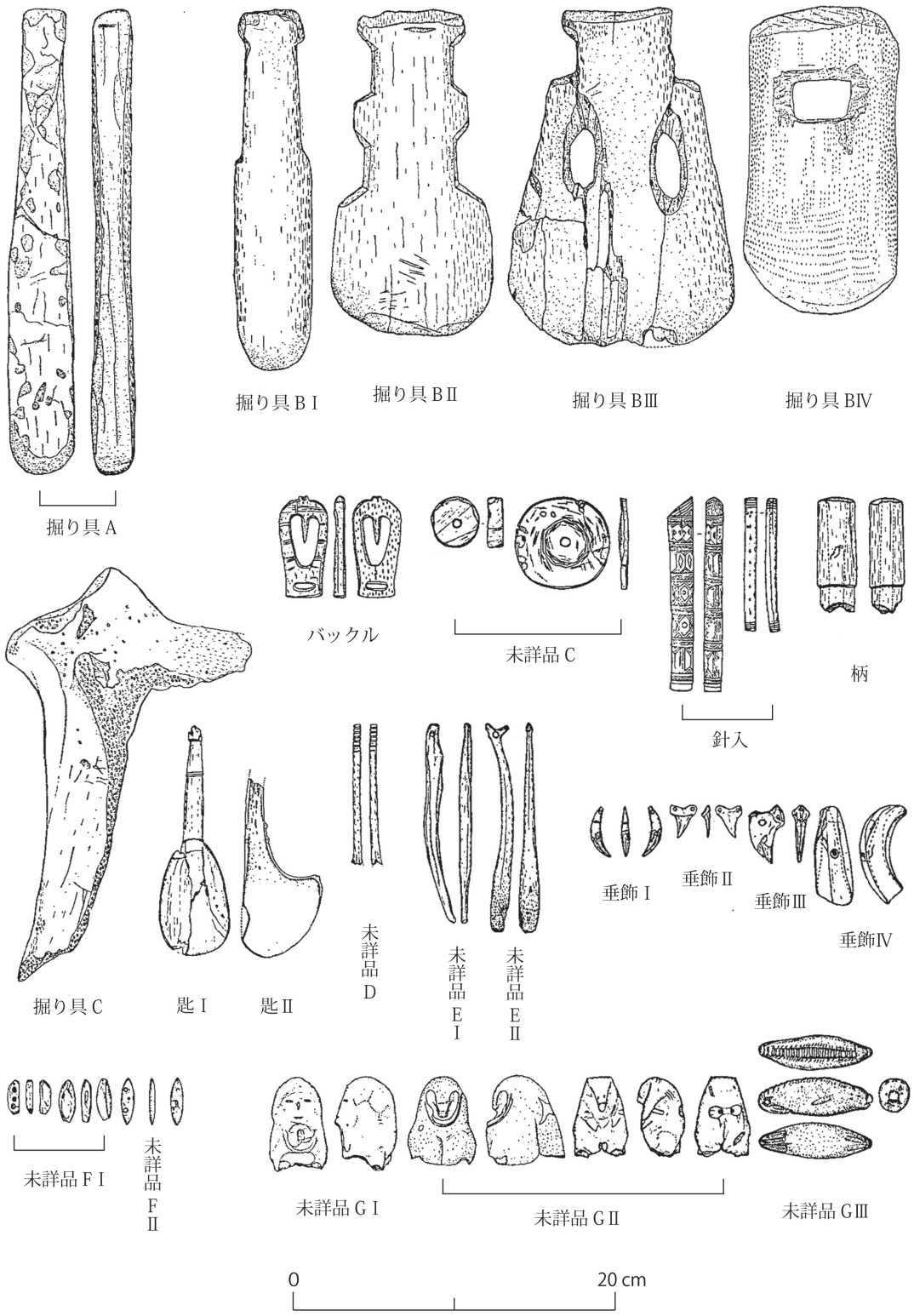
第１図　土器の貼付文様と器形による分類模式図


a
b
c
d
鏃Ⅰ
鏃Ⅱ
0
10 cm
銛先鏃
槍
削器Ⅰ
削器Ⅱ
石斧AⅠ
石斧BⅠ
石斧BⅡ
石錘Ⅰ
石錘Ⅱ
砥石Ⅰ
砥石Ⅱ
敲石Ⅰ
敲石Ⅱ
0
20 cm

第2図　石器分類図


銛先ＡⅠ
銛先ＡⅡ
銛先ＢⅠ
銛先ＢⅡ
鏃Ⅰ
鏃Ⅱ
鏃Ⅲ
鏃Ⅳ
鏃Ⅴ
(Ⅰa)
(Ⅰb)
釣針軸Ⅰ
釣針軸Ⅱ
釣針鉤Ⅰ
釣針鉤Ⅱ
錐Ⅰ
錐Ⅱ
未詳品ＡⅠ
未詳品ＡⅡ
未詳品ＡⅢ
未詳品ＡⅣ
未詳品Ｂ
0
20 cm

第３図　骨角器分類図（1）


掘り具A
掘り具BⅠ
掘り具BⅡ
掘り具BⅢ
掘り具BⅣ
バックル
未詳品C
針入
柄
掘り具C
匙Ⅰ
匙Ⅱ
未詳品D
未詳品EⅠ
未詳品EⅡ
垂飾Ⅰ
垂飾Ⅱ
垂飾Ⅲ
垂飾Ⅳ
未詳品FⅠ
未詳品FⅡ
未詳品GⅠ
未詳品GⅡ
未詳品GⅢ
0
20 cm

第4図　骨角器分類図（2）

Ⅴ　２号竪穴住居址とその遺物

§1a.　竪穴住居址の状態と層位

この２号竪穴住居址は、南側はフーシナイポ（ヤムワッカ）沢、北側はチカポオツナイ沢の浸食・開析によって形成された東やや北寄りの方向に伸びる舌状の台地上にある（第５図）。第Ⅰ部第１章第２節および第２章第１節でみたように、この台地上ではその周縁部にオホーツク文化期の竪穴住居址が連なっている。この２号竪穴住居址も台地の北縁に沿ってほぼ等間隔で位置する竪穴住居址群の中のひとつであり、その北東方向には３号・４号住居址を、またすぐ南西側には未調査であるが規模・位置などからオホーツク文化期の大型竪穴住居址のものである可能性が高い窪みを１箇所確認できる。

この住居址は 1970 年Ｍトレンチ調査の際に初めて確認された。道路工事によって著しく削平され、しかも後にササその他の草本類に深く覆われていたため気付くのが遅れたのである。その中心は N-11 区南東部にあり、範囲は L-12、M–10・11・12、N-10・11・12、O-11 の各区におよぶ（第６図）。

住居址のほぼ東半 M-10~12 および L-11・12 区部分は 1970 年に完掘し、N 列以西の部分は 1973 年に調査した。その結果これは床面が長六角形で、長軸方向（I-I'）が N24.5° W で、壁の下端で測った長さは 9.3 m、幅は 7.3 m、床面積は約 62.9 ㎡の典型的なオホーツク文化の竪穴住居址であることが明らかになった（第７図、PL. 1）[6)]。

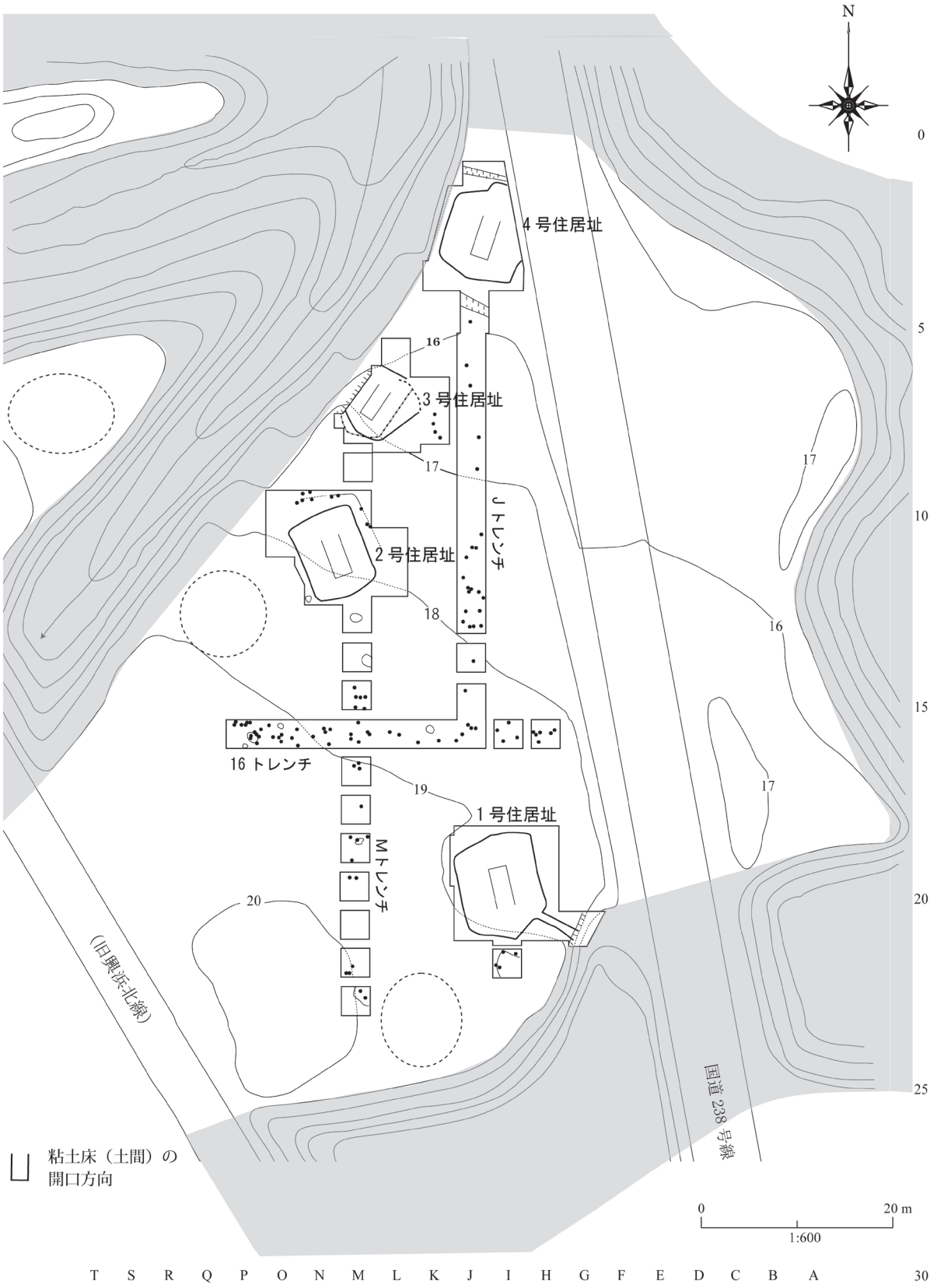
なおここでトレンチおよび土層断面図の位置・表記について若干の説明をおこなっておく。基本単位は、磁北を基準に設定した東西軸と南北軸を座標軸とし、これらを４ｍごとに区切って設定したグリッド（区）・トレンチである。東西軸をアルファベット、南北軸をアラビア数字で表記する。発掘調査は各区で各辺に 50 cm 幅のブリッヂ部分（隣接区の背中合わせのブリッヂと合わせると１ｍ幅）を残して進めた。つまり各区で３ｍ四方の面を掘り下げる形で開始した。土層断面図は各区で原則として北側ブリッヂ面と東側ブリッヂ面の観察・記録によって作成し、最後に全体を総合した。竪穴住居址の平面図と土層断面図および遺物出土状況図上の区名（＋M-12 など）は、各区の南西角のポイント（杭）を原点として表記したものである。またこれらの図では土器を P、石を S、獣骨を B でそれぞれ略記し、ピットについては P に連番を添えて表記した（P. 20 など）。

層　位

さきにみたようにこの舌状台地は国道工事などのために広い範囲で削られている。この住居に関わる調査区（L~O 列の 10~13 区）も全区で削平を被っており、とりわけ東部と北部でそれが甚だしい。このため竪穴住居址の壁は南部と西部では比較的高く 30 cm ほど残存するものの、東壁は床面近くまで失われている。いずれにせよこれらの掘り込み面は不明である（第７・８図）。

基盤の含礫黄褐色粘土層中に設けられた床面は、北東部でも辛うじて破壊を免れて残っていた。A-A' 断面図にみるように床面上には黒色土が堆積し、これを「埋土」とした。この「埋土」は床面に接する部分が茶褐色や黒褐色を呈するところもある。この竪穴埋土（黒色土）は、中央で薄く、壁に向かって層厚を増す。竪穴の上部が崩壊・削平されているために竪穴外との層位的関係は不明であるが、この埋土は竪穴の壁体が崩落してなだれ込んだものであり、その上面に密集する炭化材は焼け落ちた住居の部材に由来するものと考えられる。黒色土の上には黒褐色砂質土・黒色土層が堆積し、竪穴外に連続する後者のほぼ上半部は草本類の根が密に入り込んで褐色味を帯びており、これを便宜的に「表土」として区分した。

なお C-C' 断面図 O 区あるいは A-A' 断面図 12 区でみられるように、２号竪穴住居址の壁は何枚かの遺物含層



第 6 図　目梨泊遺跡トレンチ配置図

を切っているので、この住居が建てられる前にオホーツク文化集団（ないしそれ以前）の活動がここにあったことは明らかであるものの、その時期や活動の内容については、資料が乏しいために未解明の点が多い。

ただし、とくに竪穴の東側 L-11・12 区では西半部にピット群が密集し、以下に述べるいくつかの注目すべき所見が得られている。すなわちピット８は、直径約 10 cm、深さ 28 cm で砂が充満しており、赤褐色粘土層中で確認されたが、それより上部は重機によって削られているために、掘り込み面は正確には不明である。ここでは刻文をもつ土器(第 13 図:10)がみつかっている。また黒色土層の調査中に北東隅でその一部が確認されたピット 153 は、直径 50 cm 前後、深さ 10 cm 余りで断面が皿状になるものと推定され、黒色土が充満しているので、掘り込み面は黒色土層よりも下位である可能性が高い。ここでは円形刺突文をもつ土器（第 14 図：11）などが見つかっている。これらのピットは、ともなう土器群が貼付文系を含まないので、かなり限られた時期のものと考えられる。２号竪穴住居址に至近なのでこれと同時期ではありえず前か後となるが、関連する土器などからみて、前の時期の活動にともなうものである可能性が高い。

資料の記述は、床面に密着したものをこの住居に伴うもの「床面」、床面上に堆積した黒色（一部で黒褐色）土層中のものを「埋土」、それより上および住居外の土層中のものを「表土」と層位的に扱うことにする。なお「竪穴外」のものを「表土」と扱う理由は、おそらく上に述べた削平を被っているために、表土・黒色土・黒褐色砂質土および竪穴埋土との関係が明快でないからである。

関連して、ピット類は後世の削平によってほとんどの例で掘り込み面は不明であり、竪穴外のものは、層位的には表土層に準じた扱いにする。

遺　構

竪穴床面の形は長六角形であり、床面の中央やや北寄りに長さ５ m、幅１ m、深さ 5~10 cm ほどの浅い矩形の窪みがある（第７図）。灰や炭などはとくに認められたわけではないが、炉であろう。その中心は竪穴の中心より１ m ほど北に寄っているので、結果的に南壁との間が広くなっている。他の例からみて炉の南側が「上座」であり、反対側・北が「下座」すなわち出入口側であると考えられる。つまりこの住居は北側に向けて建てられたものであり、それはチカポオツナイ沢に沿って伸びていたと想定される海へのアクセス・踏分道への利便性によるのであろう。なお、出入口の実際の場所、構造は未詳である。

上に I-I' (N24.5° W) と推定した住居長軸の方向は、保存状態がよく構造も明快な炉の長軸を基準にして求めると N 23.4° W となる。ただいずれにしても竪穴住居址の主柱穴と想定されるピット 20/21（南壁）や同 176/175（北壁）などの中心と完全に一致するわけではないことは他のオホーツク文化の住居の場合と異ならない。

床面はほぼ平坦・水平であるが、やや北東方向に下がる傾斜をもち、とくにその北東隅部分では 20 cm ほどのレベル差をもつ。除湿・排水を考慮した造りであるのかもしれない。床面には溝が認められる。長軸に平行に２本 (内側から a・b)、直交方向に３本 (内側から a・b・c) で幅は 5~10 cm、深さは深いところで５ cm 前後である。a・b は途切れる部分はあるものの、基本的に炉を中心にしてこれを取り囲むかたちで完周する。一方 c は奥壁および南壁のカーブに沿って伸び、東西両壁に当たる。これらのなかで c をひとまず措くと、壁との間隔が概して狭く、しかも東壁との平行性が小さい b の特異さが目を惹く。すべての溝が同時に機能していたと想定することはやや困難なので、建て替えないし改築がおこなわれた可能性を考えてみよう。その場合 b は内側の竪穴の壁に合致し、a はこれにともなう、もしくは外側の壁、あるいは両方にともなう内溝であると推定できる。問題は竪穴 b の時間的位置である。３号竪穴では、古い方の竪穴の壁際に土を足して突き固め、新しい竪穴の壁を造った部分が確認されたので、建て替えの関係を復原できた。２号竪穴ではこのように明らかな痕跡は確認されなかったので拡大か縮小かは不明とせざるを得ない。ただし、N-12 区の南西隅では b で約 45°の傾斜

で土層が立ち上がり、しかもこの傾斜面は炭化材で覆われていることが観察されている。同様に M-12 区の南西隅では c で土層が立ち上がり、その前面（北側）の床面には炭化物が密集し、c およびピット 23 に接して灰が認められている。これらは炉の清掃・掻き出しに由来するものであり、それぞれ竪穴の改築すなわち最外部のものから c・b への縮小によって生じたものであることを示しているものと考えられる。最後に、c 外側の段は床面としてはやや不自然である。確証はないが、最外部の壁にともなう竪穴では、南北の壁に沿って段を設けていたか、あるいは床面は元々このレベルに設けられており、縮小によって c 部に壁をもつ竪穴を構築する際に床面が掘り下げられたことも考えられる[7]。なお北壁側では、工事による削平も影響しているのか、対応する位置に溝 c は認められるが、段は明瞭ではない。

いずれにせよ炉は、どの竪穴のときにもその位置はほぼ変わらず、規模も大きくは変更されなかったことになる。炉は基盤の含礫黄褐色粘土層を浅く皿状に掘り窪めて造っており、南北両端部の外側付近で若干の炭や焼土がみられる程度で、一般的な分厚い炭層や焼土さらには石囲いなど枠を欠く。他方、周囲とくに北東側には礫や灰、木炭、焼骨が床面からやや浮いた状態で広がっている。これらは、炉の改築、あるいは炉の清掃に関連するものと考えられる。

ピット類のうち竪穴内の床面付近で確認されたものは基本的に住居に伴うものとする。そのなかで、深さ 40cm 前後の深いものは中軸線上および 4 隅に多くみられる。うち南壁中央のピット 20・23・25 や北壁中央のピット 176・80 などは主柱穴であろうし、炉の南北両端部に位置するピット 136・99 なども棟を支える柱をいれたものであろう。東西両側壁でほぼ等間隔に位置する比較的深いピット 46・52/53・56・143/144・158・164 なども屋根を支える壁「桁」を構成していた柱のものであろう。

なお M-10 区、竪穴の北東隅の外側に掘り込みが認められ、そのラインはあたかも竪穴の壁に並行するかのカーブを描く。またこれと竪穴の間にはピット群があり、そのひろがりは竪穴北壁の外側 N-10 区・O-10 区にまでおよんでいる。排水施設などなんらかの遺構をなすものである可能性は残るが、その性格は明らかではない。

遺物の出土状況

床面の南東部にはクジラを主とし他にトド、アシカ類を混じえる獣骨群がひろがっていた。またそれらに混じって、南東コーナー部、周溝 a と b の間、ピット 30 と 31 の中間では、刻文をもつ土器（第 24 図：5）が押し潰された状態であったが（PL. 2）、この土器は胴部下半以下および口縁部の一部を欠く。これらはいわゆる骨塚ないしそれに近いものを構成していた可能性は考えられる。ピット 23/25 付近でも床面に貼り付いた状態で刻文系土器の破片（第 25 図：19）、および削器（第 33 図：9）がみつかった。

埋土中では、M-12 区、位置的には南壁中央近くの周溝 b の上、ピット 24 に接して床面上 10 cm ほどのレベルで、擬縄貼付文のめぐらされた大型の土器（第 17 図：8）が伏せられた状態であった例が特に注目される（PL. 3）。これは口縁部は完周するが肩部以下は、おそらく重機による削平工事のために失われていた。さらにこの土器の内側に接して管玉（第 31 図：48）が 1 点、外側で北東 6 cm ほどのところに牙製有孔円板（第 35 図：4）があった（PL. 4）。これらの付近には炭化材も集中するので、墓などなんらかの施設・遺構である可能性が大きいとみて精査したが確証は得られなかった[8]。

また O-11 区では、竪穴北西隅の外側で南北に伸びる性格未詳の溝付近、ピット 65 の南西 1.5 m 程の位置で、包含層・木炭面上に、貼付文をもつ完形の未詳品小型土器（第 15 図：1）が、さらに骨製有孔円板（第 34 図：2）や袋柄の鉄斧（第 36 図：2）もその近くで見つかっている。これらが墓などなんらかの遺構にともなうものである可能性も想定して精査したが、付近の撹乱が甚だしいこともあり確証は得られなかった。

§2b.　２号竪穴住居址出土の土器・土製品

この竪穴住居址の発掘調査で得られた土器は全部で 12,356 点にのぼり、これは続縄文式土器および土師器各一点をふくむ。オホーツク式土器は、口縁部で数えると 1,468 点（最大個体数）であり、底面円周の半分以上を残す底部で数えると 29 点（最少個体数）[9] である。この口縁部資料を出土層位ごとに竪穴床面、竪穴埋土、表土・撹乱の３つに分けてみても際立った違いはみられない。これは、竪穴住居と包含層の遺存状況が良好でないことに関連するのであろう。ただ貼付文に関しては床面に伴うものが少ないこと、さらに敢えていえばそれと逆の関係で、爪形文・刻文の比率が竪穴床面・竪穴埋土・表土・撹乱の順で減少する傾向を指摘できる。加えて、口縁から底部までつながって復原できたものが貼付文例で、しかも小型のものに限られることにはなんらかの意味があるのかもしれない。これらの現象はこの竪穴住居の帰属集団・集落そして遺跡のその後の変遷と関連するものと思われる。後に触れることにする。

表土層出土の土器・土製品

当然ながら多種多様な土器がみられるなか、ある程度にまで復原できた資料では貼付文例が多い。

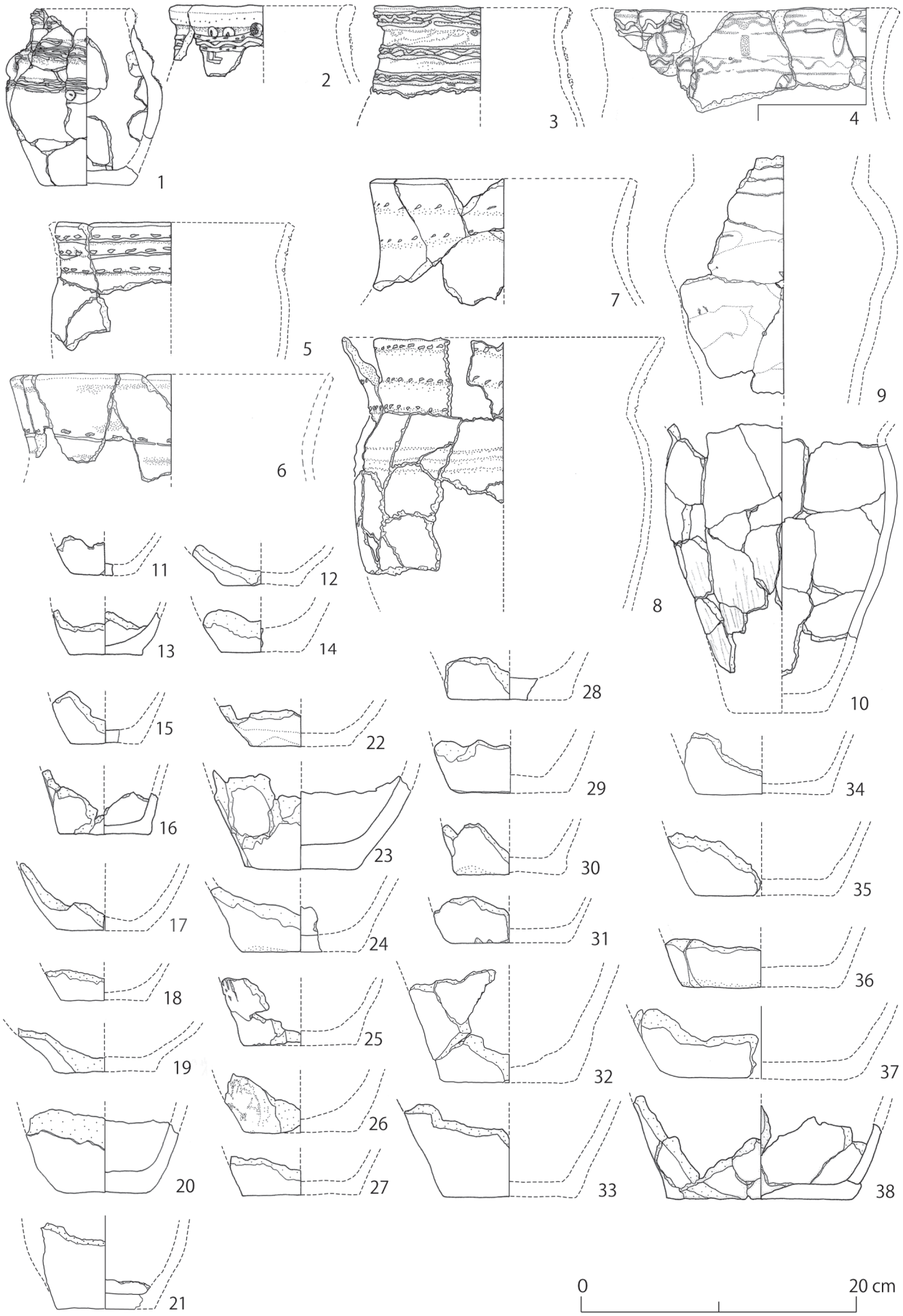
貼付文（第９図：1~4、第 10 図：1~14、第 11 図：1~11）

器形の面では、４例中（第９図:1~4）IVa は４のみで、あとは IVb である。唯一、口縁から底部までつながって復原できた小型の１は、肩部の隆帯を境にその上下に直線と波状の貼付文で文様帯をめぐらせ、この隆帯からは幅６ mm ほどの把手状の帯を肩に垂下する。この把手状の帯を確認できるのはこの１箇所のみであるが、この部位の円周を約３等分した場合に、ここから右方、まさにその 1/3 程の箇所に剥落痕がみられる。もう一箇所、円周上 1/3 前後の該当する可能性のある部分は欠失しているためにその有無を確認できない。肩部の貼付文文様帯の下端にはボタン状の貼付文が３箇所に付けられている。これらも円周上でほぼ等間隔であり、その位置に関しては、うえに述べた把手状の帯同士の中間に配置する企画性を認めることができる。貼付文自体は細く、間隔が稠密で蛇行する部分もあるために文様の単位を見極めることが困難であるが、肩部では Hd のパターンを確認できる。最上部（口縁部）では波状の貼付文を２本並行させており、これは新しい様相であろう。胎土は赤褐色を呈し、砂を多く含み粗である。2~4 は Hd 貼付文をもつもので、うち２は口縁部肥厚帯に直径 1mm ほどの穴を等間隔に巡らす点で特異である。この穴に類するものは頸部の貼付文にも付けられている。この貼付文帯の上側には円形のボタン状貼付文が２個ずつ、下側には鍵の手に折れ曲がる意匠で貼付文がやはり２本ずつ付されている。３・４は典型的な Hd 貼付文帯を口縁部肥厚帯上と頸部そして肩部の３段めぐらせており、３は破片の下縁には貼付文が残存しているので、少なくともさらにもう１段同様の貼付文帯が付けられていたことが推定できる。４は貼付文帯の間をさまざまな小貼付文でつなぐ。上段のものは円盤を二つ折りにして楕円形の形状に仕上げている。一方、下段では２点しか残存しないが、上段のものより薄く仕上げ、入れられた刻みも相互に異なっている。またこれらは上段のものの中間に配置されている。

破片資料で文様を中心にもう少しヴァリエイションをみてみよう。

He の文様をもつ例（第 10 図：1・2）

波形の貼付文を上下に配置する場合、1・２では両者の波長を 1/2 ずらせ上の山と下の谷を同じ位置に配置する（結果的に網目になる）。これは新しい様相だと考えられる。



第9図　2号竪穴住居址　表土層出土の土器実測図　オホーツク式土器

Hd の文様をもつ例（第 10 図：3~8）

これらでは上下の波状の貼付文の間に直線の貼付文を介在させてこれらの上下に直線の貼付文を配す。さらに３では、わずかな無文帯を介して、その下方に波長の揃った２本の貼付文と直線貼付文２本を配す。この波長の揃った２本の貼付文も新しい様相だと考えられる。７は口唇部に爪形文をもつ。波状の貼付文を直線貼付文で上下から挟む８は一般的な Hd 例であり、口唇面に突起を配す。

Hc の文様をもつ例（第 10 図：9~14）

これらでは一対の波状の貼付文と直線貼付文が文様の基本となり、14 では両者の間隔がかなり拡がっている。これらでは貼付文を強く押圧する例がやや目立つ。なお９では、内壁口唇部の直下から外壁中段の貼付文の下方にかけて、最上段の粘土帯の、外傾する接合面が明瞭に残っている。

Hb の文様をもつ例（第 11 図：1~3）

これらは波状の貼付文のみの例であり、やはり強く押圧している。

擬縄貼付文様をもつ例（第 11 図：4~11）

これらのなかには貼付文と複合施文される例も少なくなく、その場合モチーフも９のように Hc など貼付文単独例の場合のパターンを採用するものもみられる。さらにまた比較的太く押圧が顕著な例も目につき、ひとつのグループないしは段階を示すものと考えられる。擬縄貼付文を縦に施文した１０やきわめて細い例 11 などは稀なものである。

沈線文系（第９図：5・6、第 11 図：12~14、第 12 図：1~15、第 13 図：1~5））

沈線と刻文、型押文の複合例が得られており（５・６）、いずれも口縁部は肥厚帯が顕著ではなく、そこに幅広く頸部近くまで文様帯がおよんでいる。５は頸部が短く肩の張りが弱い器形で、直立気味で幅の広い口縁部全体に、沈線と刻文の複合文様を３段、６では沈線と４歯の櫛歯文の複合文を頸部近くにめぐらせる。

破片資料では、これらの文様要素の太さや数・位置に関してさまざまな例がみられるなか、２本単位（第 11 図：12・13）が主流をなす。第 11 図：14 はその変形と考えられ、ほかに奇数本の例もみられる（第 12 図：1~4）。なお２は口唇部に付随的に刻文をもち、内壁には櫛引状の整形痕がみられ、やや特異である[10)]。

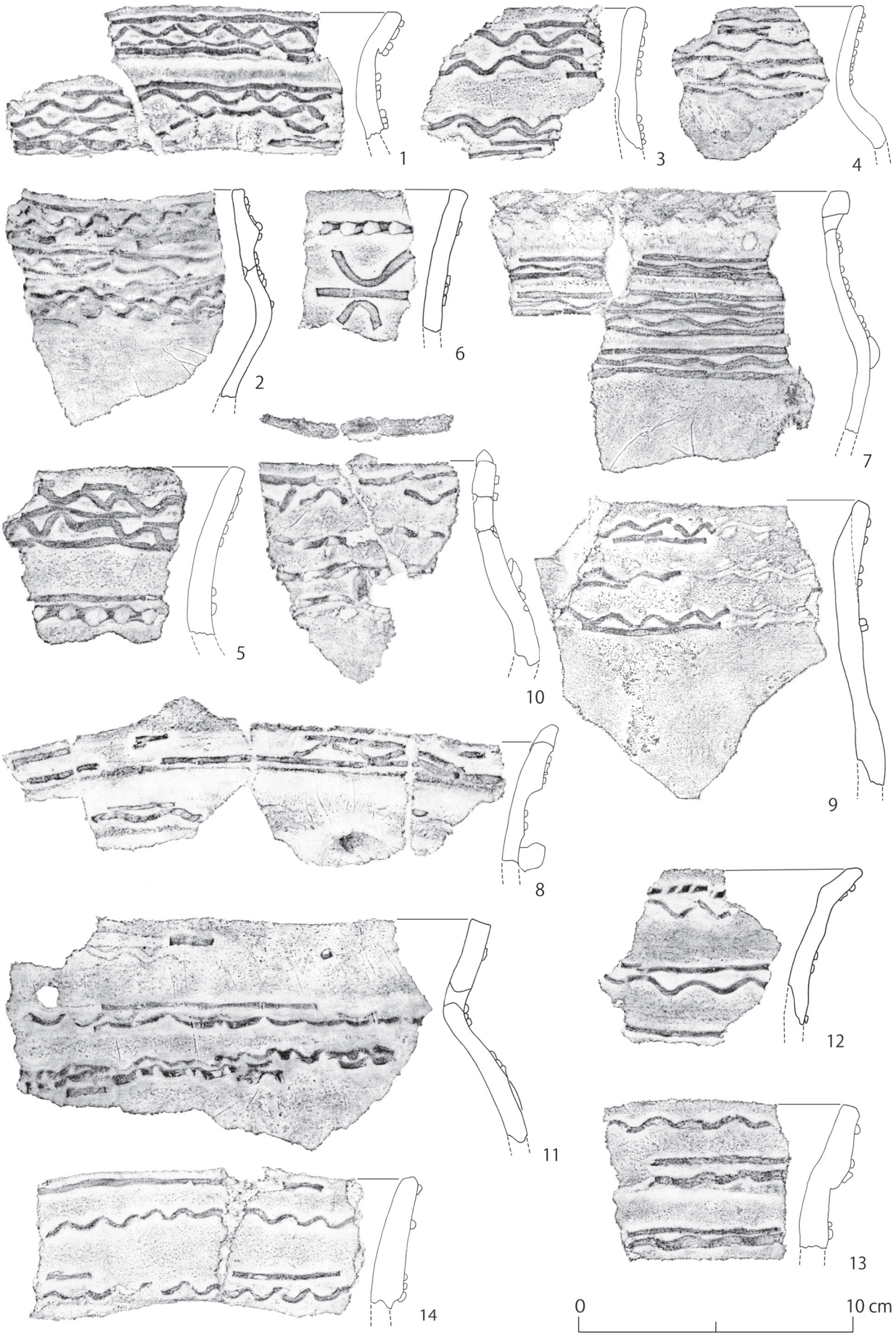
沈線と横位の舟形刻文の複合は一般的で、さまざまなヴァリエイションがみられる（第 12 図：5~15）。文様帯が頸部付近にまで拡大し刻文も付加的な第 12 図：5 は新しい傾向を示しているのかもしれない。第 12 図：13~15 では斜位の刻文も加わり、第 13 図:1 では斜位のみである。沈線で区画を描く第 13 図:2 は稀な例である。刻文にはほかに三角（第 13 図：3）や丸い形のもの同 4・5 などもみられる。

摩擦式浮文（第 13 図：6~8）

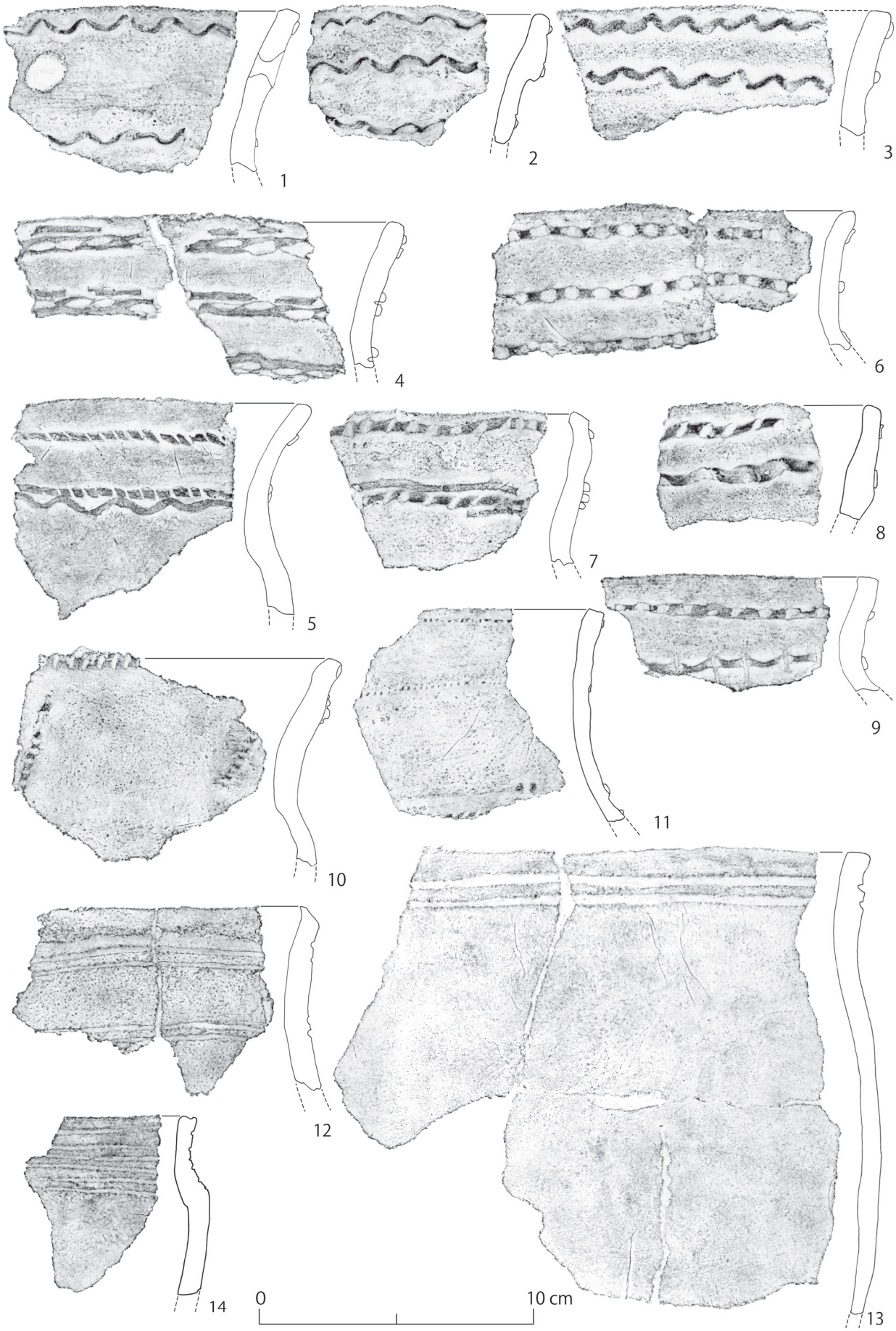
ごく一般的な第 13 図：6・7 のほかに、下縁を爪形文で区切った狭い肥厚帯上に摩擦式浮文をめぐらすもの同８もみられる。

刻文系（第９図：7・8、第 13 図：9~12、第 14 図：1~9）

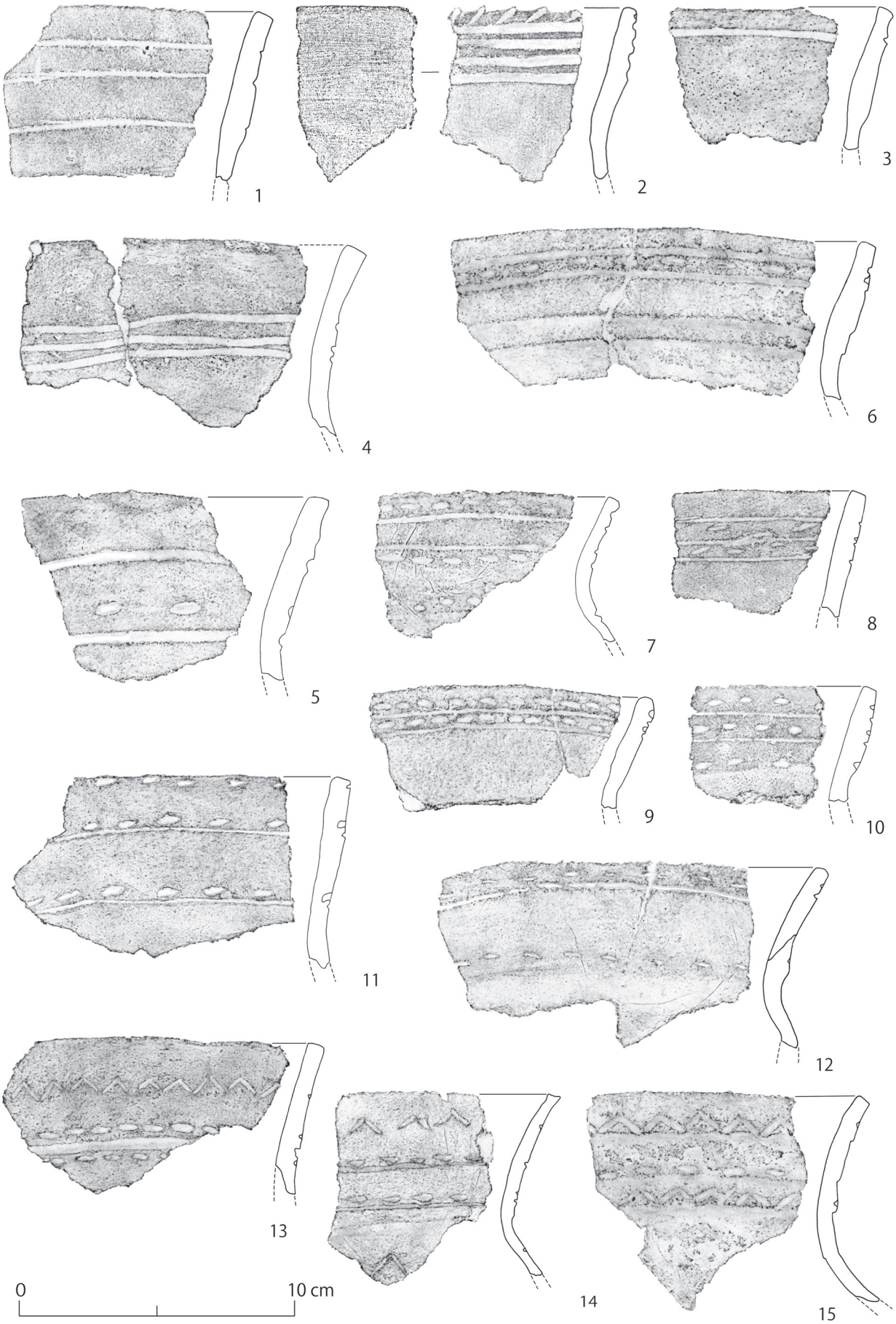
２点復元できた。やはりともに口縁部は幅広く、複段の文様帯が頸部近くにまで及ぶ第９図：７では口縁部を低い段で上下に分け、下の方の下縁は肥厚帯の痕跡とみることもできる。同８は浅い段、ないし微隆起を３列削りだし、それぞれに爪形文を刻む。また、やや乱れた摩擦式浮文を肩部に３条めぐらせる。



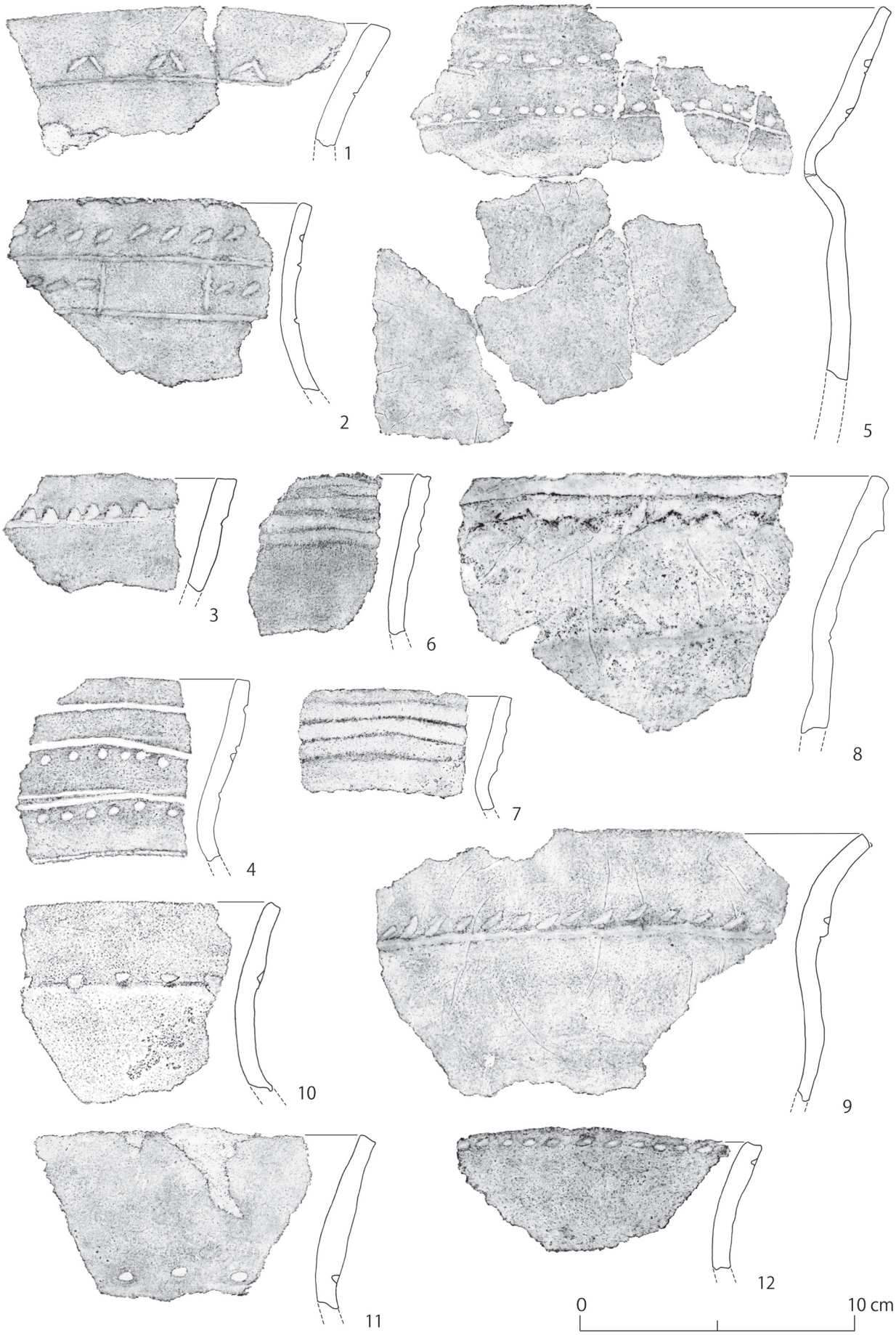
第10図　2号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器



第 11 図　２号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（2）　オホーツク式土器



第 12 図　2号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（3）　オホーツク式土器



第 13 図　２号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（4）　オホーツク式土器

破片資料では、さまざまな例がみられる中で、第13図：9~11など刻文の施文位置が著しく低いものが目を惹く。同12は逆にそれが高い。肥厚帯上の微隆起帯に、刻文を配した第14図：1、あるいは爪形文を刻んだ同2~5などはかなり一般的な例であり、肥厚帯下縁に大きめの爪形文をめぐらす同6は典型的な例である。型押文でも施文位置が著しく低い例（同7）や施文帯が頸部付近まで拡大されたもの（同8）などが目立つ。肥厚帯下縁に一対の型押文を配す同9は、内壁上縁部に細かめの刻文を連接させ、擬縄貼付文的な効果をみせることが、硬質な胎土と併せてきわめて特異であり、後にあらためて取り上げることにする。

刺突文（第14図：10~12）

典型的な例はなく、いずれも刺突が浅く、10では平面形が円形ですらなく、同12では浅い竹管文となっている。

無文（第14図：13・14）

特異なものを2点挙げておく。いずれも器形は球形に近い鉢型のようであり後者では肩部に沈線で鋸歯様の図柄を描く。

胴部（第9図：9・10、第14図：15）

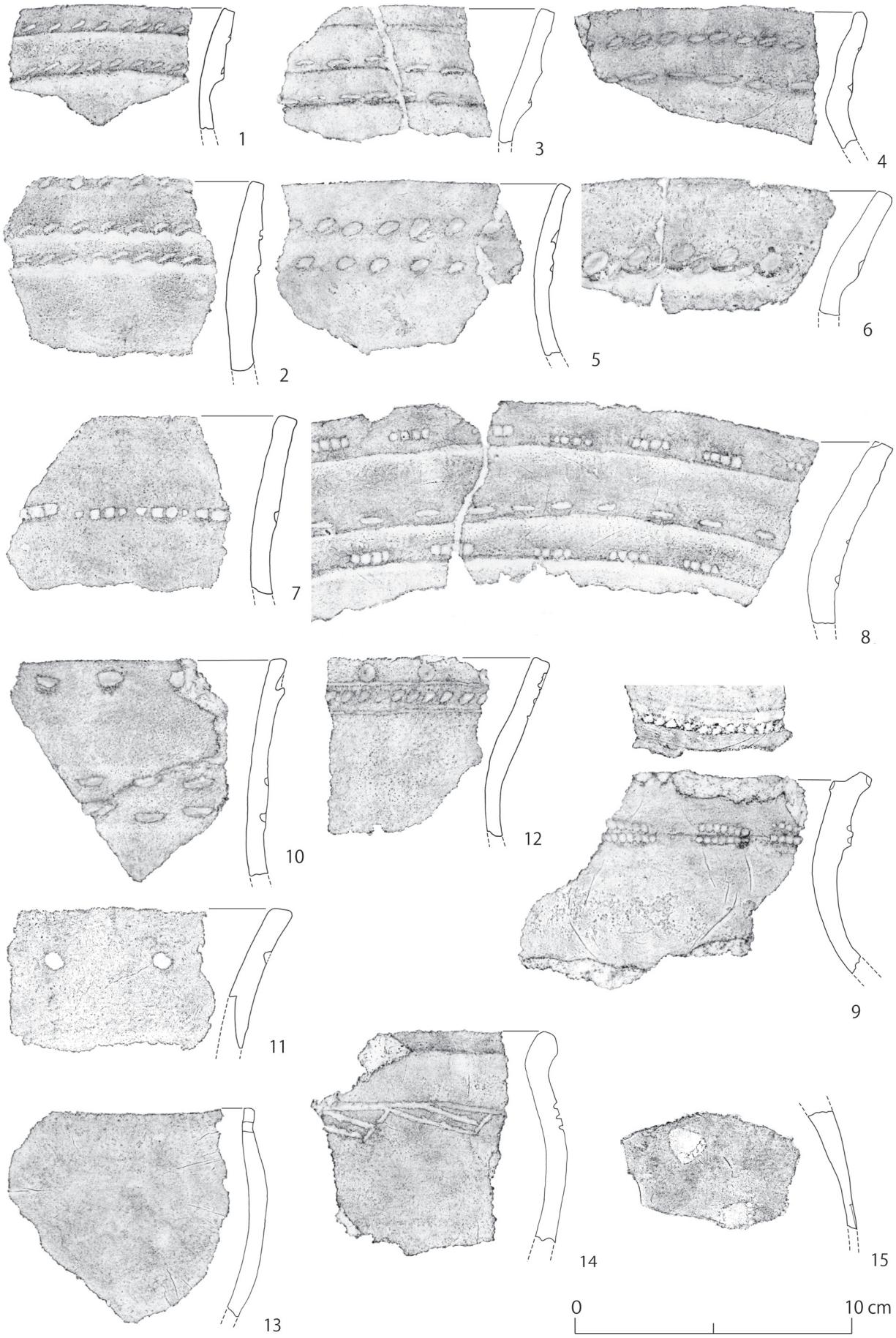
2点が肩部以下底部近くまでかなりの程度復原できた。うち9は下半部に粘土帯の接合部が埋まりきらず浅い溝状のくぼみとして残り、これによって粘土帯は幅2.5cm前後であると推定できる。外壁では横方向になでた後に、下から上方にやや粗い整形をおこなっている。内壁側では肩部を含む上半部には押圧の整形痕が残り、下半部はその上を縦方向の研磨整形痕が覆っている。胎土は微粒の砂を若干含むが堅緻、灰色で、やや特異である。他方10は胎土に白色の粒をふくむ点を除くと一般的な例といえる。第14図:15はクマの足跡を模したもので、後足の歩行跡を表現したものと考えられる[11)]。

底部（第9図：11~38）

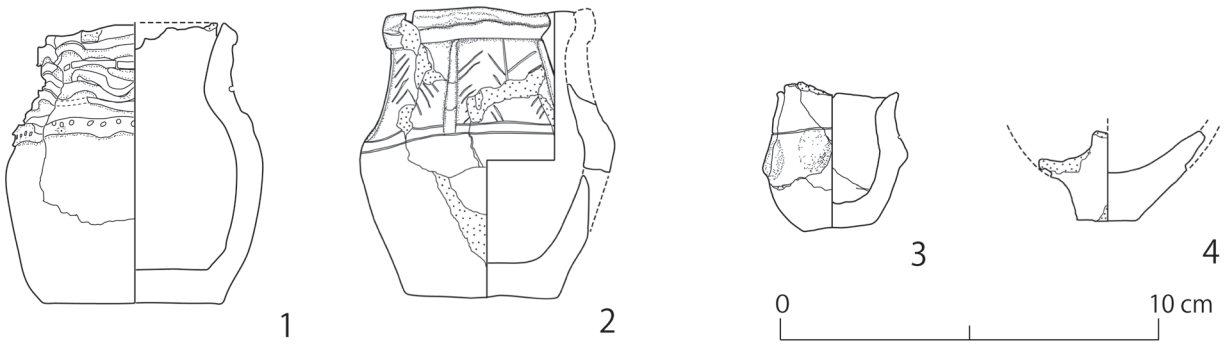
形態、サイズなどさまざまなものがあり、便宜的に底径順に配列した。形態的には、内壁側の底面が、比較的平らなものと（11・22・27・33・35・38など）、窪みをもち、なだらかな傾斜をもって壁につながるもの（13・14・26・28・32など）に分けることができる。また底径の割に厚いものも挙げることができる（14・20・23・36など）。そのほか、使用形態・頻度ないし時間によるものか底面がきわめて滑らかな例16や、胎土に白色の粒を大量に含むもの25・30・38、草本類の茎かと思われるものの圧痕のみられる例35などが目を惹く。

未詳品（第15図：1~4）

形態まちまちな容器型のものであり、1は壺形の容器型のものである。口唇直下と頸部それに肩部に直線貼付文をそれぞれめぐらせ、これらの間を波状の貼付文で充填する。波状のものは一部、とくに下段側で二本密接する。また肩部には太めの貼付文をめぐらせこれに刻文を刻む。内外とも全体に煤けている。2は胴径が大きな壺形、敢えていえばIVb型の器形で、明らかに擦文式土器を模倣しているが胎土や焼成はオホーツク式土器の特徴をもつ。貼付文が重要な要素であり、丸く膨らみをもつ口唇の直下に太めの貼付文をめぐらせて一種の肥厚帯を形成する。肩部には貼付文の文様を並行沈線文で表現し、口縁との間の広い文様帯を垂直の貼付文で6分割するが、かならずしも等間隔ではない。この区画を綾杉状に配した沈線で充填する。ただし貼付文が不整におかれた区画もみられ、全体に統一性を欠く印象を受ける。3は頸部に沈線文を一条めぐらせ、これに接して胴部に小突起を設ける。4は底面が突出した形態で、胎土は砂をほとんど含まず焼きは堅緻である。



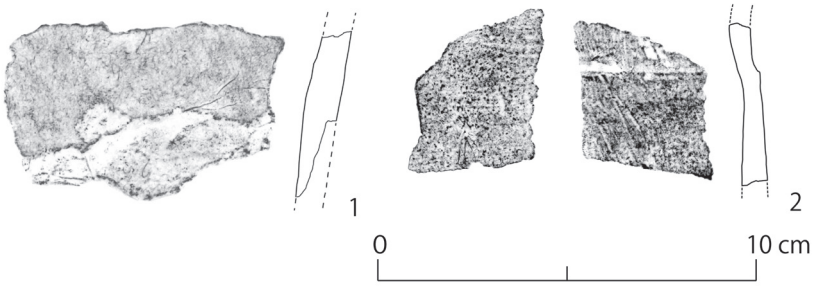
第 14 図　２号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（5）　オホーツク式土器



第 15 図　2 号竪穴住居址　表土層出土の土製品実測図　オホーツク式土器

その他の土器（第 16 図：1・2）

1 は続縄文後半期のものと推定される胴部破片であり、この破片の上端で径 24cm ほどと推定されることから比較的大型の土器胴部下半とみられる。より状態のよい右表面に RL と推定される浅い縦行縄文が 2 cm 余の幅で切り合っている。施文時の押圧の弱さに加えナデツケによる平滑化が認められる。胎土は一部に礫を混入するが、中 ~ 細粒砂を主とする比較的堅緻な焼きである。この破片は、内傾する接合面で破折したらしく、3 cm 余の粘土帯を輪積み成形していたことが窺える。内面は縦のナデツケで付着物は内外面共に認められない [12]。後に改めて触れることにする。2 は頸部を削り出して、段をもって肩部と接する部分の小片である。厚さは頸部 5 mm、肩部 6 mm 前後で、段の部分で外径は 26 cm 前後と推定でき、敢えていえば器高 30 cm 内外のやや小型の甕形の土器が想定される。外壁の頸部は櫛状工具によると思われる巾 0.5 mm ほどの溝が並走（単位は 5mm 以上）し、肩部では巾 4~5 mm ほどのヘラもしくは木口によるものかと思われる巾 0.5 mm ほどの溝がやや粗く斜め - 縦方向に走る。内壁は櫛状工具によると思われる巾 0.5 mm 以下の溝が 1 mm 弱の間隔で横方向に走る。色調は、外壁は黒灰色、内壁は灰褐色で、粒径 0.5 mm 以下の鉱物をふくみ、器質は堅緻である。土師器であろう [13]。後に改めて触れることにする。



第 16 図　2 号竪穴住居址　表土層出土の土器拓影図（6）　その他の土器

埋土出土の土器・土製品

貼付文（第 17 図：1~9、第 19 図：1~18、第 20 図：1~4）

多種多様な土器がみられ、ある程度まで復原できた資料では貼付文例が多い点も表土層に共通する。加えて本層ではやや幅広で粗い擬縄貼付文もみられる。貼付文例では胴部が張り出す紡錘形の IVb タイプの器形が多い。小型の例（第 17 図：1~3）では貼付文は波状のものが主で、しばしば密接し He のモチーフが見られる。さらにこれに小貼付文（1・2）や、3 では口唇面に山形の突起を配置し、また肩部には隆帯をめぐらせ、その上に口唇面の山形突起の間におさまるように、やはり山形の突起を配置するようである。同 5 は口縁部に把手様のも

のを付け、その上を含めて、全面覆い尽くすかのように貼付文を密接させる特異な土器である。同４・６・７は波状貼付文を２本の直線貼付文ではさむ一般的な文様 Hd をもち、大きさも普通である。器形は４と７は IVa 型、６は IVb 型である。なお７の頸部では貼付文は押圧されて横断面四角形なし、最下段の直線貼付文は擬縄貼付文風に刻まれている。同８・９擬縄貼付文例は大型であり貼付文を、８ではヘラ様の工具で押圧ないし刻み、９では棒状のもので突いている。

つぎに破片資料でヴァリエイションをみよう。

He の文様をもつ例（第 19 図：1~6）

貼付文を２本並行させる１や、波状の貼付文を上下に配置する場合、山と谷を同じ位置におく同２などはいずれも新しい様相だと考えられる。波状の貼付文を直線貼付文で上下から挟む同 3~6 のうち後３者では口唇面に円形の貼付文や山形の突起をもつ。

Hd の文様をもつ例（第 19 図：7~12）

波状の貼付文と直線の貼付文をさまざまな間隔で配置するものであり、後３者では擬縄貼付文の要素もみられる。

Hb の文様をもつ例（第 19 図：13）

やや間隔をおいて波状の貼付文を３段めぐらせる。

Ha の文様をもつ例（第 19 図：14・15）

14 は多少波打つ部分もみられるが基本的には直線の貼付文を口縁部から肩部まで様々な間隔でめぐらせる。15 は非常に太い貼付文でなんらかの形象を描くかと思われ、内湾する器形をふくめ、特異な例である。

擬縄貼付文（第 19 図：16~18、第 20 図：1~4）

太めの例（16・17）や鎖様のデザイン同 18、刻むもの（第 20 図：1~3）などさまざまなヴァリエイションがみられる。肥厚帯下縁に刻文をもち、肩部に擬縄貼付文をめぐらす個体の口縁部にも擬縄貼付文が付加的に取り入れられたかのような同４も注目される [14)]。

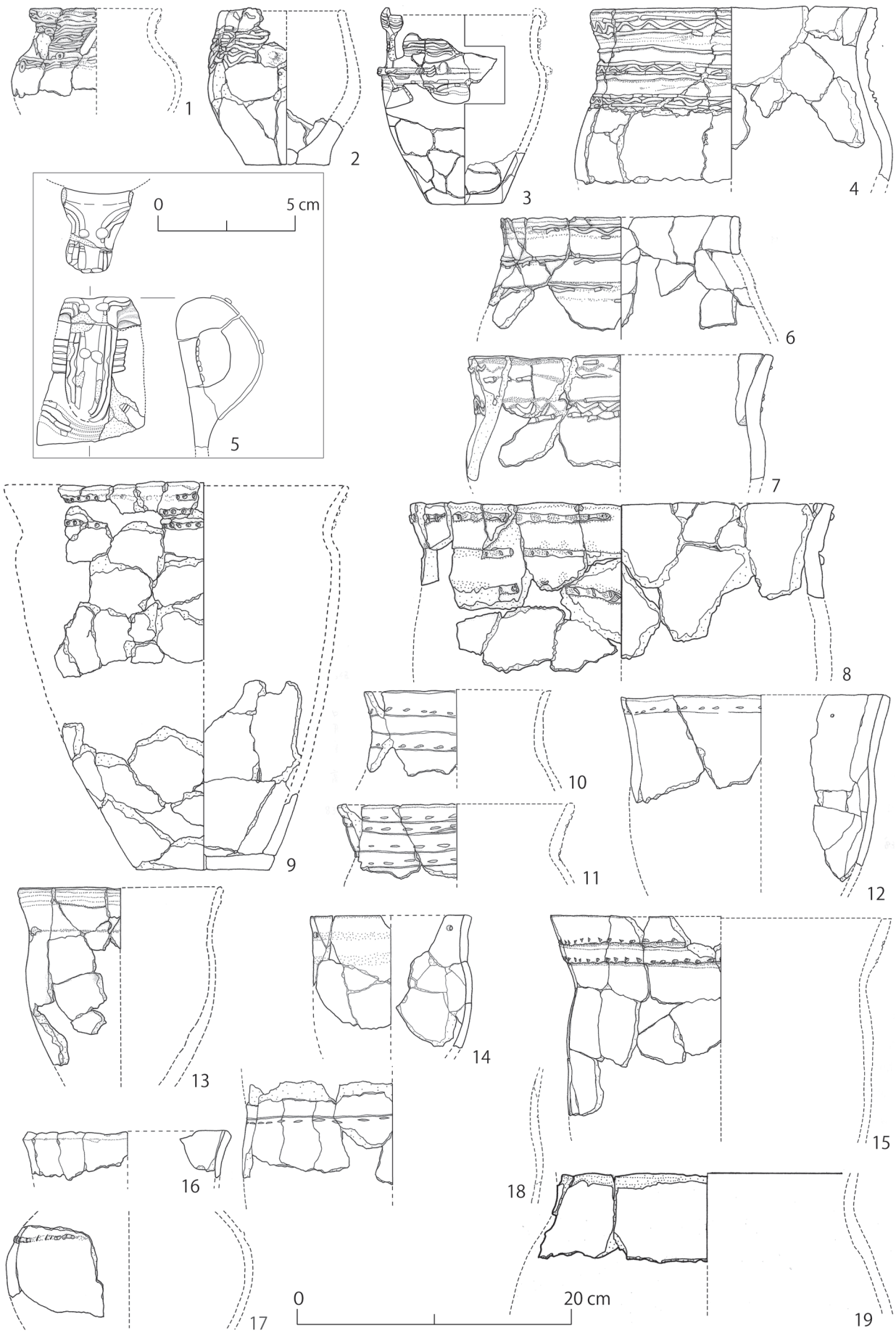
沈線文系（第 17 図：10~12、第 20 図：5~13、第 21 図：1~4）

沈線と刻文の複合例で、第 17 図：10・11 は文様帯が広く頸部におよんでいるのにたいし、12 では口唇部直下に限られている。

破片資料の第 20 図：5・6 も文様帯がひろがる例で、頸部付近にまで施文される。この傾向は沈線文と刻文の複合例でも共通し（同 7~ 9）、同 10 は胴部にまでこれがおよぶ例である。同 11~13 は一般的な例であり、第 21 図：1・2 では鋸歯のモチーフが採用され、同３は肥厚帯下縁に爪形文をもつ典型的なものであり、その肥厚帯に一部痕跡的に沈線文が認められる。同４は型押文との複合例である。

摩擦式浮文（第 17 図：13・14、第 21 図：5・6）

いずれもきわめて浅いものであり第 17 図：13 は胴下半部までよく研磨されている。同 14 の場合は文様というより一種の整形痕とみることもできよう。後者には焼成前に開けられた直径 4~5 mm ほどの貫通孔が少なくとも２箇所にみられる。これらは対置する位置関係にはなく多少ずれているので、欠損部分にはさらに別の孔が



第17図　2号竪穴住居址　埋土層出土の土器実測図（1）　オホーツク式土器

第 18 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の土器実測図（2）　オホーツク式土器

開けられていた可能性は残る。孔はいずれも縁に摩滅が認められ、外壁側は全周でこれがやや著しい。破片で２点を挙げておく。第 21 図：5 は典型例であり、同 6 は口唇直下に一条のみめぐらす。

刻文系（第 17 図：15、第 21 図：7~17）

第 17 図：15 はやや広めの口縁部肥厚帯を上下２段に削り出した大型のものであり、この帯状の区画を太めの沈線文と理解することもできる。二段の肥厚帯にめぐらせた三角形の刻文は、肥厚帯の各下縁を波状に押し下げて爪形文の効果を生み出している。

破片資料で文様を中心にもう少しヴァリエイションをみてみよう。

文様帯がひろがり頸部付近に施文される第 21 図：7・8、微隆起上に刻まれる同 9~11、口唇外縁に刻文（同 12）、爪形文を刻む例（同 13）、刻文で鋸歯のモチーフを描く同 14、縦に刻むやや異例な同 15 などがみられる。大ぶりの舟形刻文例同 16 や爪形文例同 17 は典型的なものといえる。

型押文（第22図：1・2）

デザインは一対のものが主流のようである。

刺突文（第22図：4~8）

円形刺突文では、施文具を深く突き刺して内壁に突瘤を作る4は稀な方で、浅いものが多く（5~8）、しかも8では円形を逸脱している。

無文（第17図：16、第22図：9・10）

多少とも異形なものが目に付き、第17図：16は口唇面が外傾する小型の例である。

破片資料でも、第22図：9は壺形をなすのであろうか口縁と頸部は短く、肩に向かって大きく開く特異な形状で、おまけに口唇面にはなだらかな山形の突起が付けられている。同10は低平でやや広い、痕跡的というべき肥厚帯をもつ。

胴部（第17図：17~19、第22図：11~14）

第17図：17は球胴形の器形をもつ小型土器で、その肩部に擬縄貼付文をめぐらす。同18は沈線文と刻文の複合文様を頸部にめぐらすやや大型の土器であり、炭化物の付着がとくに内壁で著しい。同19は頸部の縮約、肩の張りが顕著な壺形土器であり、胎土に白色粒を含む。

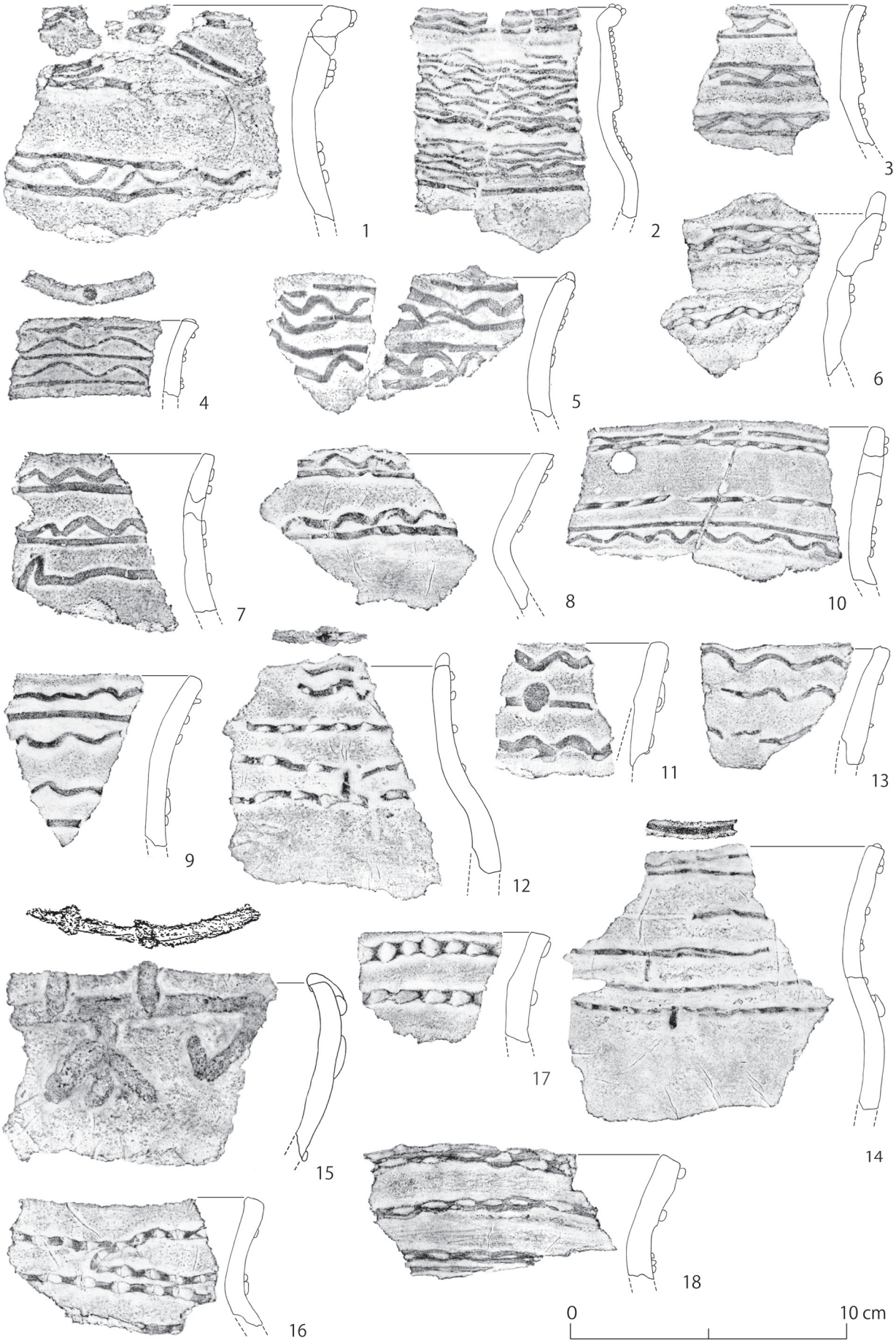
やや珍しい例を破片資料で4点挙げておく。第22図：11は頸部下端付近で3条の貼付文をめぐらし、間のものには刻みを入れて擬縄貼付文風にしている。同12は互いに刻み方のやや異なる擬縄貼付文2本を肩部にめぐらす。同13・14は沈線と刻文でやや特異なモチーフを描くものであり、擦文式土器の影響が考えられる。

底部（第18図：1~37）

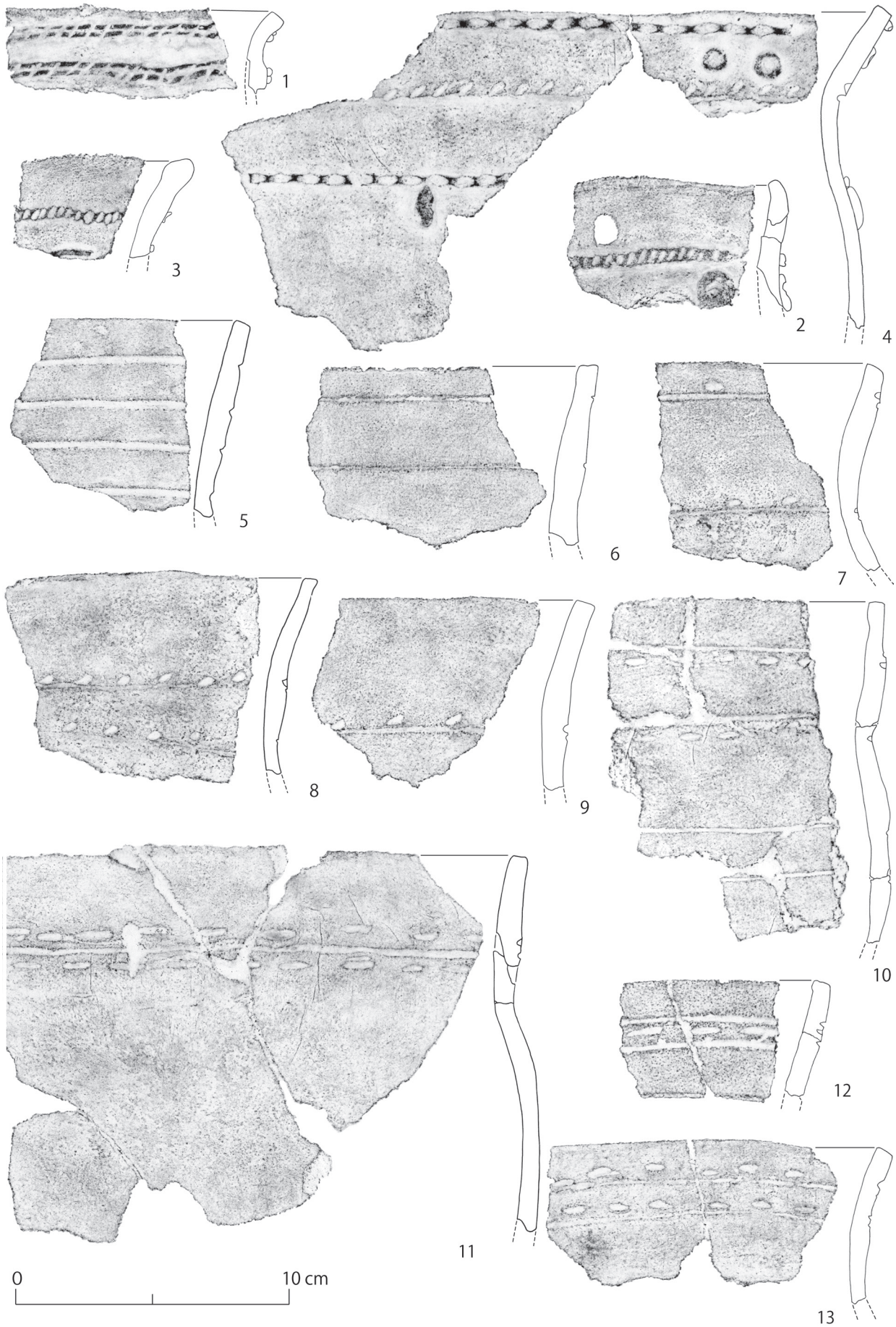
形態、サイズなどさまざまである。便宜的に底径順に配列する。形態的には、内壁側の底面が、なだらかな傾斜をもって壁につながるもの（1・6・8・11など）と、比較的平らなもの（3~5や31~37など）に分けることができ、後者は大型のものに多いようである。また底径の割に部厚いものも挙げることができる（7・15・19・28・37など）。そのほか、胎土に白色ないし灰白色の粒を大量に含むもの7・9・19・22・26・28・37、外側の底面に板あるいは草本類の茎によるかと思われる筋状の圧痕のみられる例20・31が目を惹く。14・16・18など成形時の接合面で割れている例は少なくなく、1は小型であるにも関わらず底面から2.5 cm程のところに窪みとしてこれを観察できる。

土製品（第23図：1）

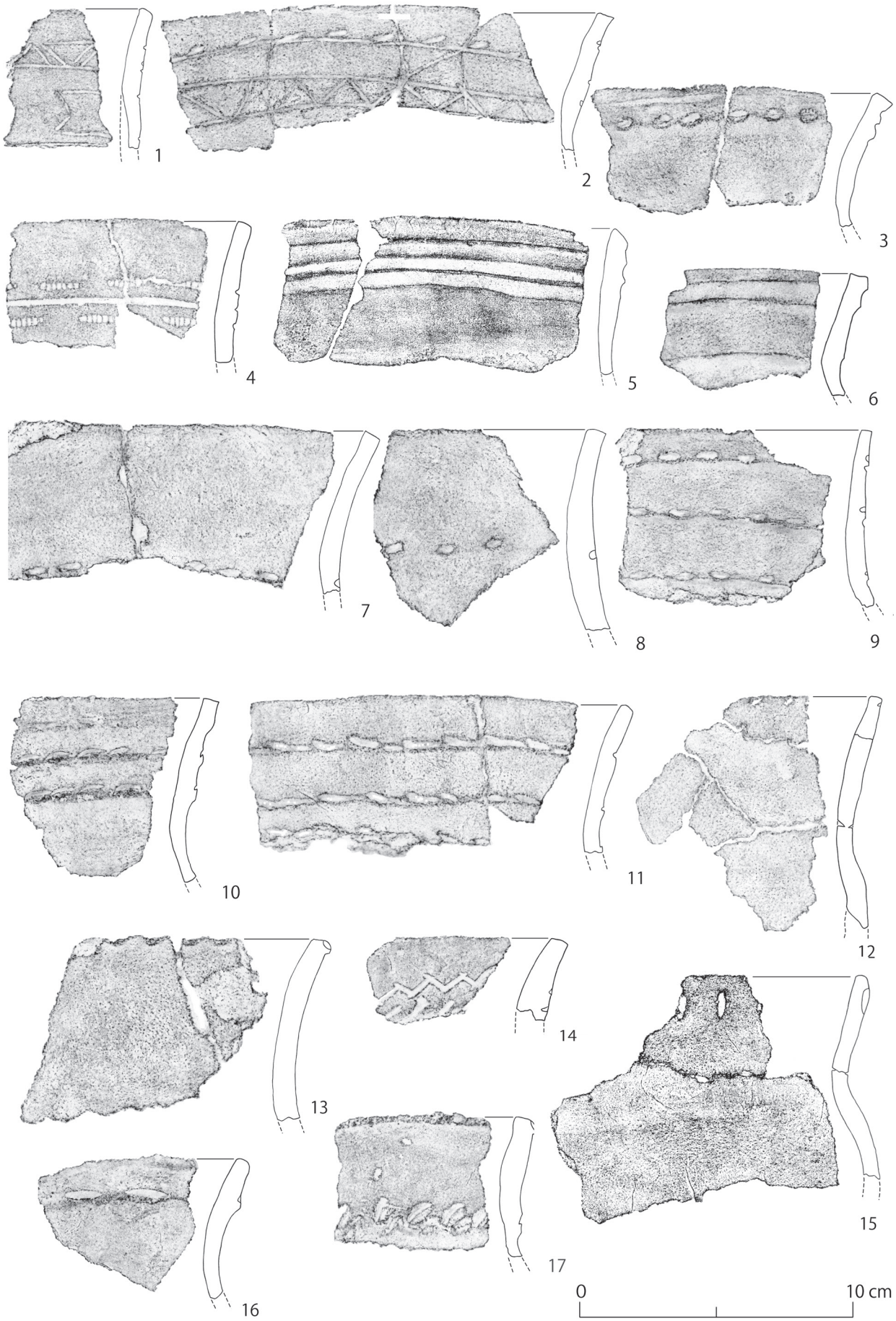
鍛治に転用された土器であり、竪穴奥部に当たるM-12区の西側ブリッヂの埋土中で見つかり、近くでスラグも得られている。ただし鍛治に関わる施設・遺構は確認されていない。口縁部破片と胴部は直接に接合するわけではないが、器形と文様などの特徴に依って推定・復元した。推定口径28 cm前後の長めの口縁に、沈線に刻文を複合させる文様を4段巡らせる深鉢型土器であり、色は灰褐色である。胴部の上方、肩部下に直径2 cmほどの孔が開けられており、その内外縁は滑らかである。外壁、孔の右側は高熱に曝されたために一部溶融して黒灰色を呈し、その外（右）側の部分は灰色に変色している。内壁側は孔を中心に直径10 cm内外の範囲が明褐色に変色している。なおこれと同一個体である可能性が高い破片は3号竪穴埋土Ⅳ層（第35図：13）でも出土している。また4号竪穴住居址の奥壁近くでもこの種の土器片が見つかっている。類例としてはまずサシルイ遺跡（宇田川1975）そしてモヨロ貝塚遺跡（天野2009）を挙げることができ、使用方法としては元地遺跡



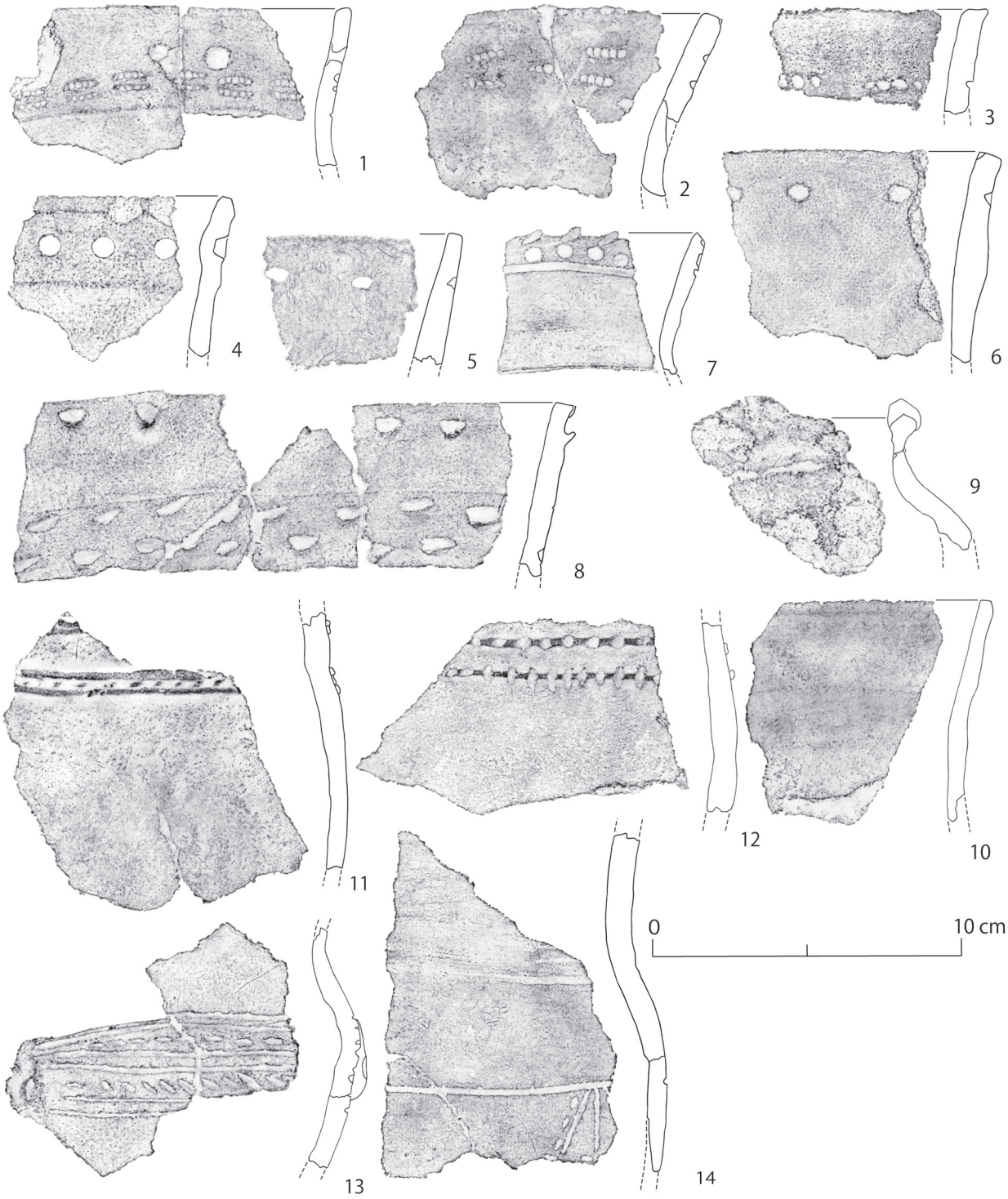
第 19 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器



第20図　2号竪穴住居址　埋土層出土の土器拓影図（2）　オホーツク式土器



第 21 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の土器拓影図（3）　オホーツク式土器



第 22 図　2号竪穴住居址　埋土層出土の土器拓影図（4）　オホーツク式土器

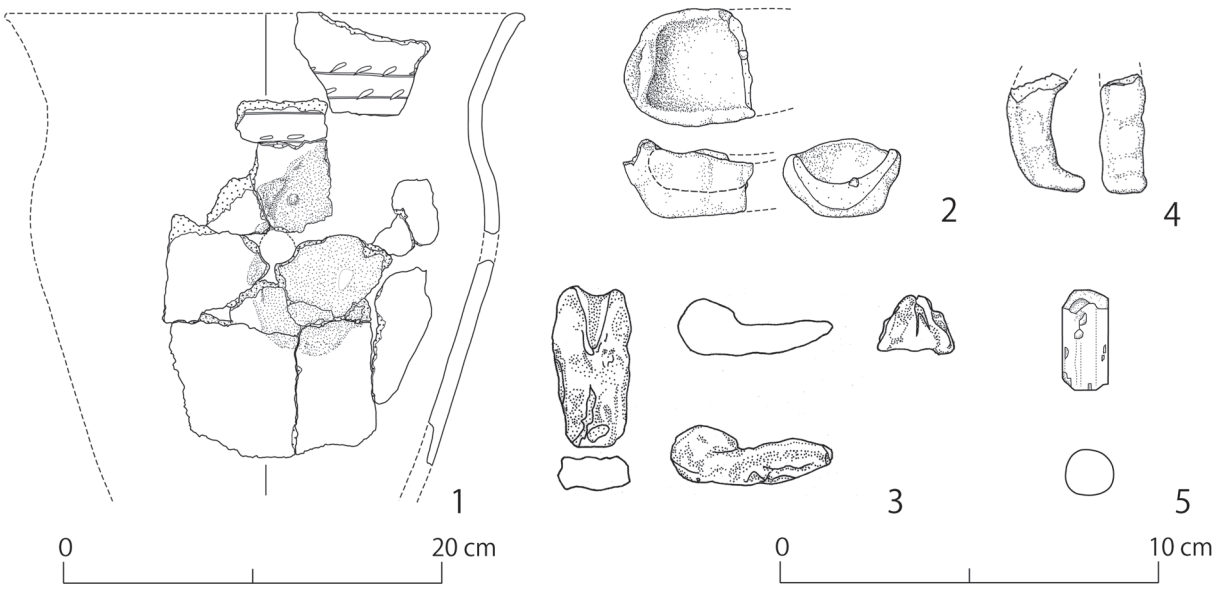
の類例からみて、比較的大きな破片2個を対にして立てて羽口兼鍛治炉の壁として用いたことを想定できる[15]。

未詳品（第23図：2~5）

形態まちまちで、2は舟を模したものかと思われる。3・4は異形のものであり、5は円柱形である。

床面出土の土器・土製品　（第24図、第25図、第26図）

貼付文例は無いわけではないが沈線文系や刻文系が多く円形刺突文例すらみられる。



第 23 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の土製品実測図　オホーツク式土器

貼付文（第 24 図：1、第 25 図：1~5）

復原資料ではどういうわけか小型の例が多い。第 24 図：１は典型的な IVb 型の器形をもつ。３本の直線貼付文の間に波状貼付文を充填する He のモチーフの文様帯を口縁肥厚帯上と頸部にめぐらし、穴の空いた円形の小貼付文をその下縁に等間隔に配す。文様部分を含めて内外壁ともよく研磨されているため器面は平滑である。胎土は細粒砂をわずかにふくみ、軟質、緻密な器質である。破片資料（第 25 図：1~5）では、直線と波状の単純な文様構成 1 や、Hb 波状のみの 2、擬縄貼付文例 3~5 などがみられる。

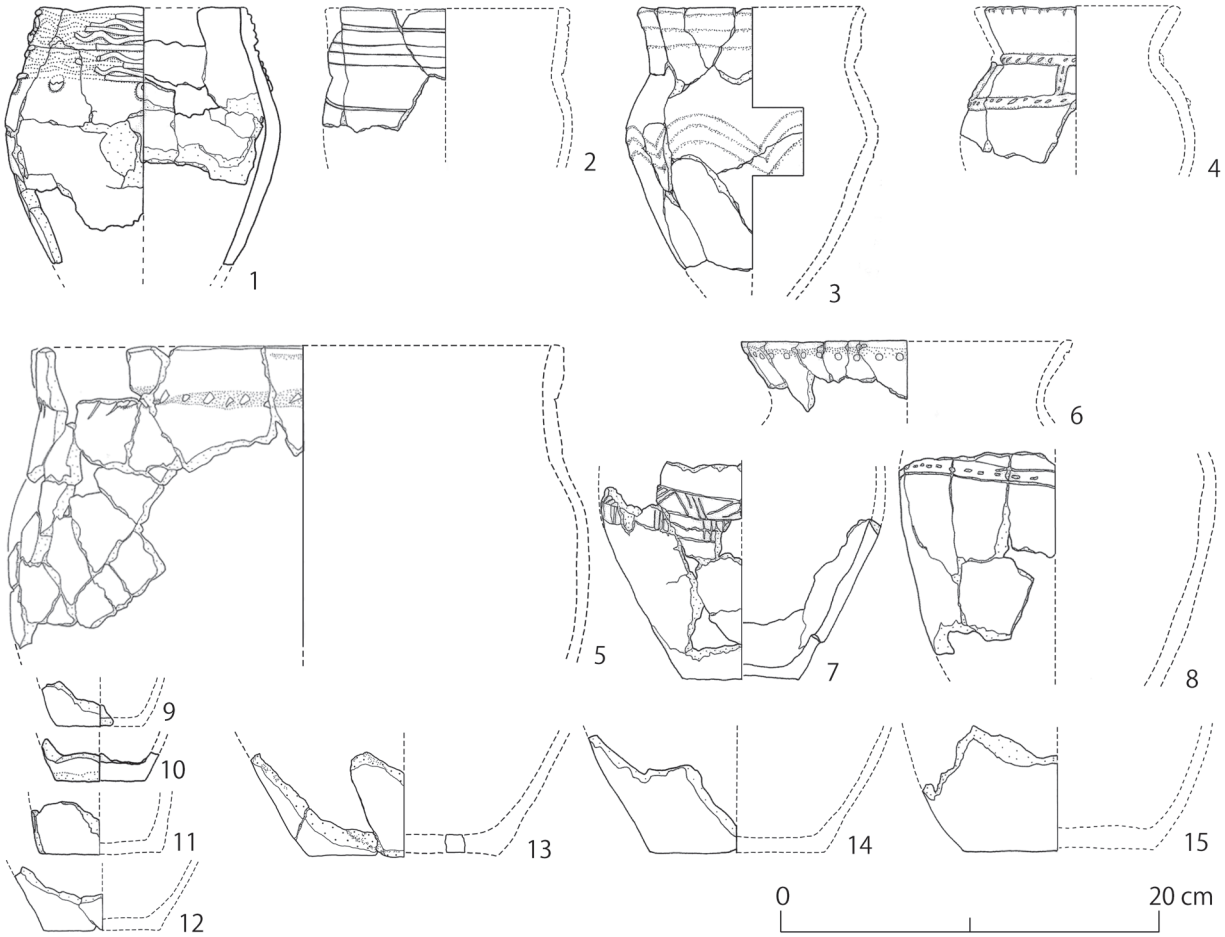
沈線文系（第 24 図：2・3、第 25 図：6~12）

２例（第 24 図：2・3）のうち２は縁が鋭い沈線を口縁直下、および肩部では２本密接させて、口縁下半部ではやや間隔をおいて３本、それぞれめぐらせる。胎土は砂を多く含み器質粗であり、炭化物が内外壁を広く覆う。３は３条の摩擦式浮文を、口縁部では間隔やや広めに、胴部では狭く、しかも緩やかな波状にめぐらせる。

破片資料（第 25 図:6~12）では、文様帯の広いもの 6~9 がめだつ。複段構成の 11 は一般的なものといえる。12 はやや稀な文様構成である。図示はしないが、肥厚帯のない口縁に太めの沈線文を２本めぐらせる、２の類例が得られている。大型の破片であり、補修孔をもつ。表土層第 11 図：13 と同一の個体であろう。

刻文系（第 24 図：4・5、第 25 図：13~20）

２例のうち第 24 図：４は、口唇外縁に刻文をもつ。頸部と肩部には太い貼付文をめぐらせ、両者は何箇所かで細めの貼付文でつながれ、口唇部の刻文に似たものがこれらの貼付文にも刻まれている。５は唯一大型の例であり、口縁部肥厚帯下縁を斜めにやや長く刻み、刻みの下端が頸部にまで及んだ箇所がある。白色の粒子をふくむ。破片資料（第 25 図）でも沈線文系と同様、やはり文様帯の広い例が、複段例 13・14 でも、一段例 15 でも目につく。ほかに刻文を２列もつ例 16、口唇部に刻文（17）や爪形文（18）を刻むものなどがみられ、肥厚帯下縁に刻文をほどこす 19、爪形文を刻む 20 などは典型的な例といえる。



第 24 図　２号竪穴住居址　床面出土の土製品実測図　オホーツク式土器

円形刺突文（第 24 図：6）

やや大きく開く口縁部に円形刺突文を近接させて施文するものである。刺突文は、直径 4 mm ほどで底面は平らであり、浅いために内壁側に突瘤を形成していないので文様の名称にそぐわないが了解されたい。

胴部（第 24 図：7・8）

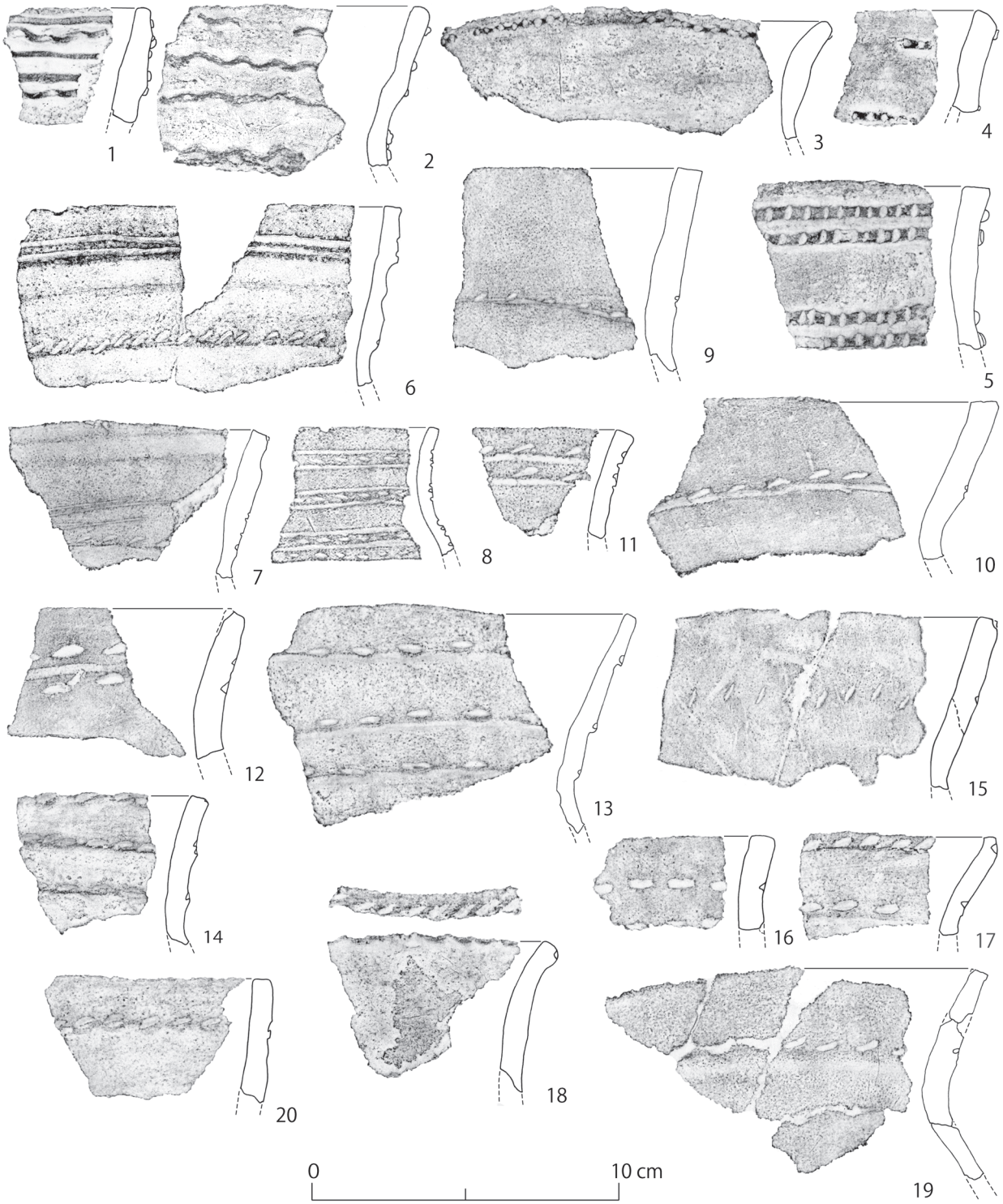
沈線文系の文様を肩部にもつ２例が得られている。ともに中型であり、７では３本の並行沈線の間を３本の短い沈線で、上位では鋸歯形を、下位では縦列のモチーフを描く。おそらく横方向に回しながら施文したのであろう、一周して文様帯が合わさる部分で食い違いが生じている。意匠は擦文式土器に通じるところがあるが、土器の胎土、輪積成形、焼成はオホーツク式土器そのものである。８は幅の狭い沈線間に刻文を配している。

底部（第 24 図：9~15）

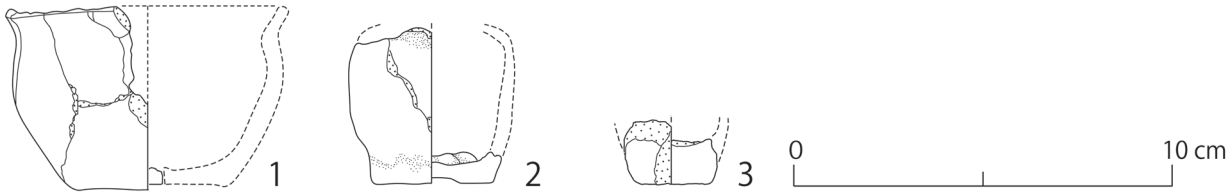
大小様々であり、数が少ないためか内壁底面と壁が円みをもってつながる例は見当たらない。

未詳品（第 26 図：1~3）

形態がまちまちな容器形のものであり、１は作りが丁寧で歪み凹凸が目立たないのに対し、２はやや不整で、３は底面部が非常に厚い。



第 25 図　２号竪穴住居址　床面出土の土器拓影図　オホーツク式土器



第 26 図　２号竪穴住居址　床面出土の土製品実測図　オホーツク式土器

第1表 2号竪穴住居址出土の土器・土製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類 文様	分類 器形	口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物 内/外	備考
第9図：1	表土	6612	N-12	Hd	IVb	7.2	11.1	**6.8/7.0**	12.9	砂多い	粗	−/−	
第9図：2	表土	6805,6871	N-10	Hd	IVb	13.6						X/B	
第9図：3	表土	7103	O-10	Hd	IVb	13.2						X/B	
第9図：4	表土	6833,6839	N-10	Hd	IVa	25.7						−/−	
第9図：5	表土	2509	M-13	沈・刻	Ic	18.8	19.3					X/B	
第9図：6	表土	2509,2515, 2520,2522	M-13	沈・刻		25.2						Y/A	
第9図：7	表土	6403	M-11	爪		19						X/A	
第9図：8	表土	2501,2507, 2509,2515	M-13	爪	Id	26	24.2					X/A	
第9図：9	表土	6609,6610	N-12				18.4						
第9図：10	表土	6321	M-12				16.6/17.8						
第9図：11	表土	2205	M-10					4.6					
第9図：12	表土	6422	M-11					5.4					
第9図：13	表土	6833②	N-10					**5.4**					
第9図：14	表土	6318	M-12					5.8					
第9図：15	表土	6746	N-11					5.8					
第9図：16	表土	6851	N-10					**6.1**					
第9図：17	表土	6701	N-11					6.2					
第9図：18	表土	6609	N-12					6.2					
第9図：19	表土	6659	N-12					7.0					
第9図：20	表土	6805	N-10					**7.2**					
第9図：21	表土	6609	N-12					**7.2**		砂多い			
第9図：22	表土	7102	O-10					7.4					
第9図：23	表土	7104	O-10					**7.9**					
第9図：24	表土	6813	N-10					8.0					
第9図：25	表土	6517	M-10					8.1					
第9図：26	表土	6603	N-12					8.2					
第9図：27	表土	6422	M-11					8.4					
第9図：28	表土	6724	N-11					8.6					
第9図：29	表土	7101	O-10					8.6					
第9図：30	表土	7132	O-10					9.0					
第9図：31	表土	7102	O-10					9.2					
第9図：32	表土	6732	N-11					9.4					
第9図：33	表土	6807	N-10					9.6					
第9図：34	表土	6807	N-10					9.6					
第9図：35	表土	6101	L-11					9.8					
第9図：36	表土	6608	N-12					**11.0**		砂多い			
第9図：37	表土	2304	M-11					12.4					
第9図：38	表土	6440	M-11					12.7		砂多い			
第15図：1	表土	7014	O-11	未詳品A		5.1	7.2	**5.2/4.95**				X/A	
第15図：2	表土	6621	N-12	未詳品A		5.6/5.7	6.5/6.9	4.2/4.4	8.1			X/A	
第15図：3	表土	2505	M-13	未詳品A		3/3.1	3.3	1.9/2.0	3.4				
第15図：4	表土	6305	M-12	未詳品A				1.5					
第17図：1	埋土	6316,6318, 6327,6340	M-12	Hd	Ib	11						−/C	
第17図：2	埋土	6318,6322, 6324	M-12	Hd	IVb	10.4	12	**6.2/6.5**		砂多い		−/−	
第17図：3	埋土	6326	M-12	Hd	IVa	10.7	**12**	**5/5.5**	14			Y/−	
第17図：4	埋土	6323	M-12	Hd	IVa	23.5/22.6	25.8					−/−	
第17図：5	埋土	6629	N-12	H						砂多い			土器把手
第17図：6	埋土	6636,6646, 6647,6648	N-12	Hd	IVb	17.9/18.0				砂多い		−/−	
第17図：7	埋土	6318,6323, 6324	M-12	Hd	IVa	23.9	24.5					−/−	
第17図：8	埋土	6331	M-12	Hg	IVa	29.9						−/−	
第17図：9	埋土	7127	O-10	Hg	IIIb	24.9	23.7	9.5	28.4			−/−	
第17図：10	埋土	6428	M-11	沈・刻	IIIa	15.2						Y/A	
第17図：11	埋土	2509,2520	M-13	沈・刻	Id	19						X/A	
第17図：12	埋土	2503,2523	M-13	沈・刻	Id	21.2						Y/A	
第17図：13	埋土	6717	N-11	摩	IIIa	14.8						Y/B	
第17図：14	埋土	6327,6334	M-12	摩	IIIa	13.2						Y/B	

（第１表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類 文様	分類 器形	口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物 内/外	備考
第17図：15	埋土	6346,6347	M-12	刻	Id	28	25.2					－/－	
第17図：16	埋土	7140,7141, 7146	O-10	無		16.2						Y/A	
第17図：17	埋土	6613	N-12			－	20.2						
第17図：18	埋土	6706	N-11			－	24.6						
第17図：19	埋土	2515	M-13			－	－						
第18図：1	埋土	6666	N-12					**3.9**					
第18図：2	埋土	6132	L-11					4.4					
第18図：3	埋土	6410	M-11					4.7					
第18図：4	埋土	6675	N-12					4.8					
第18図：5	埋土	6636	N-12					5.0					
第18図：6	埋土	6421	M-11					**5.0**					
第18図：7	埋土	6613	N-12					9.8					
第18図：8	埋土	6103	L-11					5.8					
第18図：9	埋土	6631	N-12					6.0		砂多い			
第18図：10	埋土	6646	N-12					6.0					
第18図：11	埋土	6005	L-12					**6.1**					
第18図：12	埋土	6326	M-12					**6.2**					
第18図：13	埋土	6410	M-11					6.4					
第18図：14	埋土	6427	M-11					6.4					
第18図：15	埋土	6324	M-12					**6.6**					
第18図：16	埋土	7013	O-11					**6.7**					
第18図：17	埋土	6630	N-12					**6.7**					
第18図：18	埋土	6703	N-11					7.8					
第18図：19	埋土	7117	O-10					**7.8**					
第18図：20	埋土	7146	O-10					**7.8**					木目
第18図：21	埋土	6341	M-12					7.8					
第18図：22	埋土	6011	L-12					7.8					
第18図：23	埋土	6105	L-11					8.0					
第18図：24	埋土	2215	M-10					**8.2**					
第18図：25	埋土	6864	N-10					8.4					
第18図：26	埋土	6672	N-12					8.6					
第18図：27	埋土	6418	M-11					8.8					
第18図：28	埋土	6636	N-12					**8.9**					
第18図：29	埋土	6706	N-11					9.4					所在不明
第18図：30	埋土	6672	N-12					9.8					
第18図：31	埋土	6646	N-12					9.8					
第18図：32	埋土	6107	L-11					10.0					
第18図：33	埋土	6410	M-11					**10.3**					
第18図：34	埋土	6427	M-11					10.6					
第18図：35	埋土	2444	M-12					**10.7**					
第18図：36	埋土	6410	M-11					11.0					
第18図：37	埋土	6011	L-12					13.0					
第23図：1	埋土	6346	M-12			27.6							鍛治に転用
第23図：2	埋土	6510	M-10	未詳品		不明							土製，舟？
第23図：3	埋土	6655	N-12	未詳品									
第23図：4	埋土	6506	M-10	未詳品		不明							資料・実測図 所在不明
第23図：5	埋土	6337	M-12	未詳品									管玉風土製品
第24図：1	床面	6857	N-10	He	IVb	11.2						Y/C	
第24図：2	床面	6672	N-12	沈		14.4						X/B	
第24図：3	床面	7013,7034	O-11	摩		13	15					X/B	
第24図：4	床面	6675	N-12	刻		12.4						X/B	
第24図：5	床面	6334,6457	M-11	刻		29.7						Y/－	
第24図：6	床面	4806,6410, 6428,6435, 6444	M-11	刺		19.6						Y/B	
第24図：7	床面	6438,6440	M-11			－	16.2	**6.8/6.4**					
第24図：8	床面	6427,6438	M-11			－	16.4						
第24図：9	床面	6450	M-11				－	5.0					
第24図：10	床面	6438	M-11				－	5.2					
第24図：11	床面	6460	M-11					7.2					所在不明

（第1表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類 文様	分類 器形	口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物 内/外	備考
第24図：12	床面	6453	M-11					7.4					所在不明
第24図：13	床面	6743	N-11					10.0		砂多い			
第24図：14	床面	6460	M-11					10.0					所在不明
第24図：15	床面	6834	N-10					11.0					所在不明
第26図：1	床面	6407	M-11	未詳品A		7.6	7.2	4	4.8				
第26図：2	床面	6408	M-11	未詳品A		－	4.4	3.2					
第26図：3	床面	6510	M-10	未詳品A		－	－	**1.7**					所在不明

§3 c. 2号竪穴住居址出土の石器・石製品

この竪穴住居址の調査で得られた石器は破損・未完成の例を含めて173点である。
その特徴としては、石鏃が圧倒的に多く銛先鏃が少ないこと、また石錘に比べて砥石の方が多いことを指摘でき、これらは3号竪穴住居址と共通し、1・4号や各トレンチでの傾向と異なる（ただし3号は石鏃でも未製品が著しく多い点で特異）。石鏃ではII葉形・無茎（柄）のものは極めて少なく、ほとんど例外的（第28図：11）である。茎部は多少とも抉られているが、なかには逆刺状になるように深く抉られた例もある。以下、層位ごとに記載する。

表土層出土の石器・石製品

表土層から得られた石器は、銛先鏃4、石鏃86（Ia37点・Ib2点・Ic8点・Id30点・未詳9点）、削器1、石斧1、石錘4、砥石9、叩き石3、全部で107点である[16)]。
以下、機種ごとに記載する。

銛先鏃（第27図：1~4）

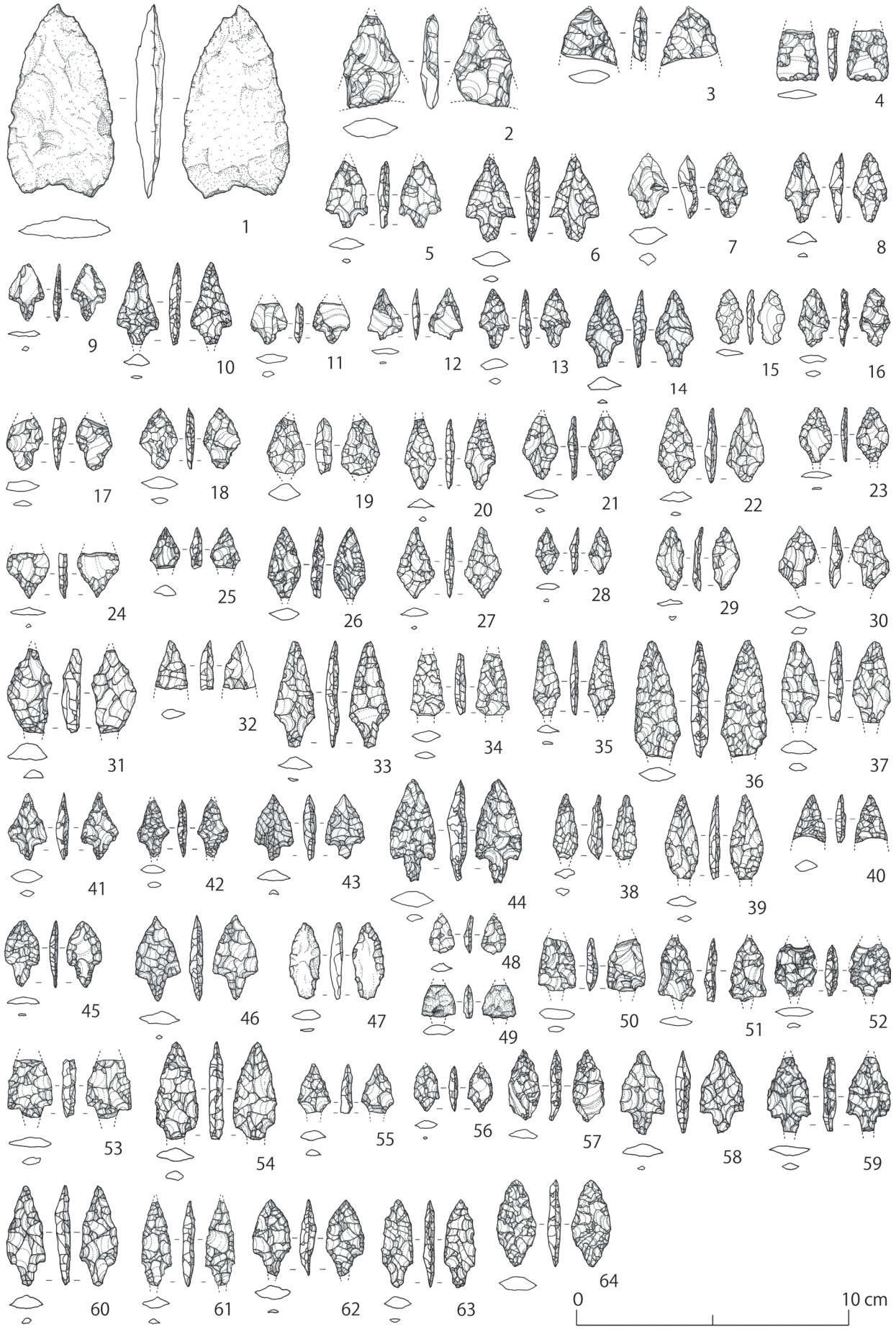
形態、大きさともにまちまちである。うち中粒砂岩製の1は基底部をふくめてかなり入念に両面から剥離している。これは飛び抜けて大きく、形態も両側縁が基部に向かって縮約し結果的にハート形を呈する特異な例である。16トレンチ例や枝幸町教育委員会調査例（佐藤編1994　144図：11、同1988　Fig. 29：18) などはやはり非黒曜石製で酷似しており、礼文島香深井1遺跡（大場・大井編1976　第65図：5、大場・大井編1981第377図：16）も類例として挙げることができる。2は両基端部が折損しているため確かではないが、基底縁が若干コンケイブする形態を推定できる。厚目なので剥離加工の途中であろう。3は主剥離面に残ったバルブが先端近でなお厚みを残すものである。4は整美な仕上がりの薄手・細身の例である。

石　鏃（27図：5~64、第28図：1~26）

石鏃の内容をみると1aが48.1％、1bが2.6％、1cが10.4％、1dが39.0％である。

Ia（27図：5~40）

Iaとした36点中でほぼ全容のうかがえるものは32点である。身部両側縁に注目すれば短めのものから長細いものまでさまざまであり、最大幅部 - 先端 / 最大幅の値2を基準に、未満の太身のタイプと2以上の細身のタイプに細分する。太身のタイプは、基底縁に注目すると、まず抉るもの（27図：5・6・7・8）、ほぼ平らなもの（27図：9・10・11・12）、逆に張り出したもので、茎部が細身のもの（27図：13~19）、茎部が太身のもの（27図：20~28）の4つに分けることができ、後2者になると菱形にちかい。厚目の7・8のうち7は未完成であり、9・11・12は薄手の剥片に僅かに周辺加工をほどこしている。19はやや厚いが両面加工は完了している。28は実用性が疑われるほど小さい。27図：29~31は茎部の加工が未完で、これを欠く32はタイプ未詳である。細身のタイプは茎部の縮約が大きいもの（27図：33~35）から、これが小さいもの（27図：36~39）まであり、直



第 27 図　２号竪穴住居址　表土層出土の石器実測図（1）

線的に両側縁下端につながる後2者などになると鏃IIにちかいものといえる。なお34の石質は緑色チャートであり、38はやや厚く錐的である。また40は残存する身部両側縁が直線的なのでここに加える。

Ib（第27図：41・42）

41・42が該当し、後者は身部側縁がやや複雑にS字形をなす。

Ic（第27図：43~49）

基底縁を抉る例43・44、これがほぼ水平もしくはやや張り出す例45・46があり、これらでは茎部はやや細身である。茎部が太めの47は高熱を受けたのであろう、肌が荒れており、48は石質が赤色チャートである。49は身部以下を大きく欠損する。

Id（第27図：50~64、第28図：1~10・12~16）

身部が三角形の要素を留めるもののうち50~54は茎部を抉り出し、55~57は身部基底縁が張り出す。身部側縁は、51では左右非対称ではあるが内湾し53では中程の突起部から先に向かって急に細くなる。57は特に尾部が未完のためか反りを残す。身部両側縁の平行性がかなり大きいもののうち58~61は茎部を抉り出し、62・63ではこれがゆるやかで、64はスムーズに茎部に移行する。両側縁がほとんど平行な例のうち28図1~4は茎部を強く抉り出しており、5・6はこれが軽微である。うち3は最大幅部 - 先端 / 最大幅の値2以上で細長く、茎部を欠損した7~9のうち後2者もまたこの細身のタイプに属するものであるのかもしれない。両側縁がややカーブする10および、上下部分を欠く薄手の12・13は鏃II葉形（11）に近い形態、あるいは鏃IIそのものであるのかもしれない。その他、両側縁に突起をもつ14・15や、16はやや異形である。身部の欠損が大きい17~19のうち18は両側縁の平行性が大きいのでdタイプであるのかもしれない。20~26は鏃の未製品と考えられるもので、厚手の22~26のうち26は両側縁からそれぞれ片面のみに入念な剥離を加えた横断面三角形の厚手・縦長のフレイクであり、鏃の製作を目指したものかもしれない。そうであれば両面加工の段階にはいる前のものとなる。

鏃II（第28図：11）

これは完全に葉形で石質もチャートであり特異である。

削　器（第28図：27）

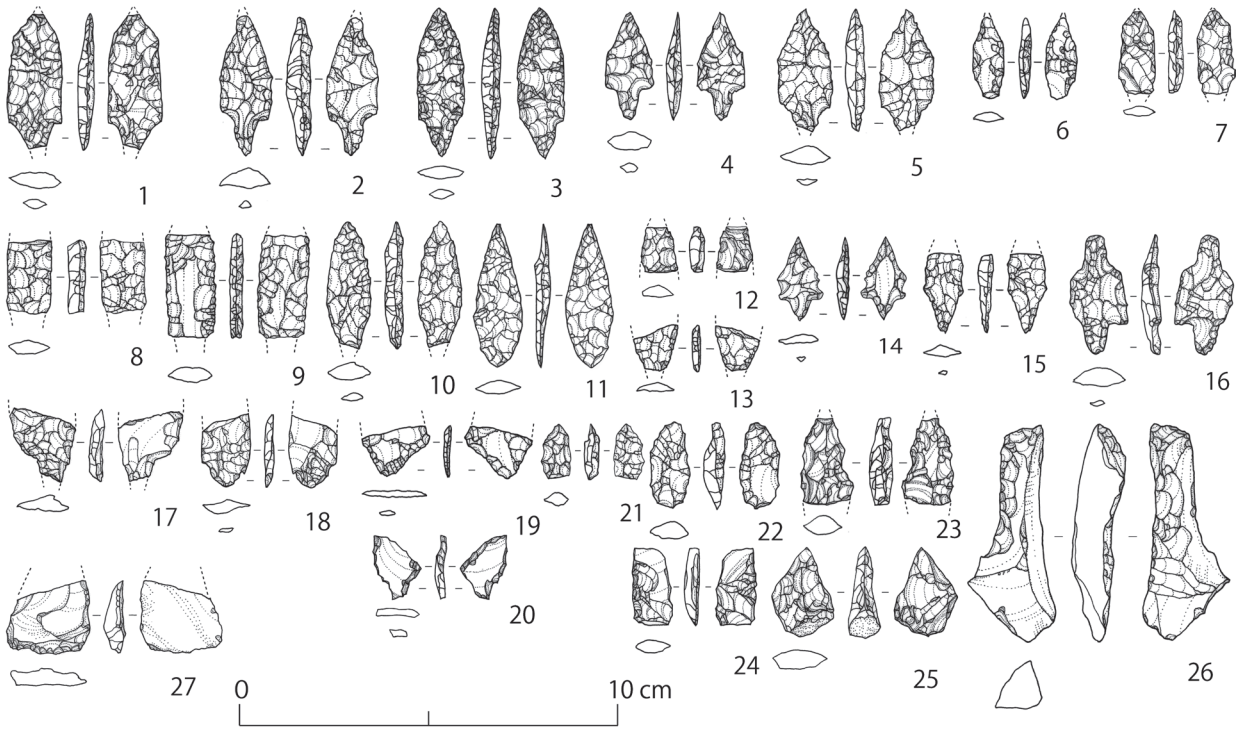
本例はエンドスクレーパー的な用途を目指したものなのであろうか、比較的大きな剥片を折り取って、かなり急角度の剥離を下縁および右縁上端に加えている。

石　斧（第29図：1）

入念に研磨して仕上げた横断面ほぼ正方形の斧であり、刃はゆるやかなカーブで張り出しやや蛤刃的である。折損後ほとんど使用しなかったのであろうか、刃の損傷は軽微である。

石　錘（第29図：2~5）

有孔タイプであるが形態はまちまちで、石質は5のみ凝灰岩で、ほかは球顆状流紋岩である。やや丈の低い2は、水平にめぐる溝を孔の位置とその下方、底面との中間あたりにめぐらす。底面は真っ平らに加工されている。縦長の3も紐掛かりであろうか両側縁に溝を2段もつ。さらに頂部にも縦溝が刻まれ、背面側では孔を超えて



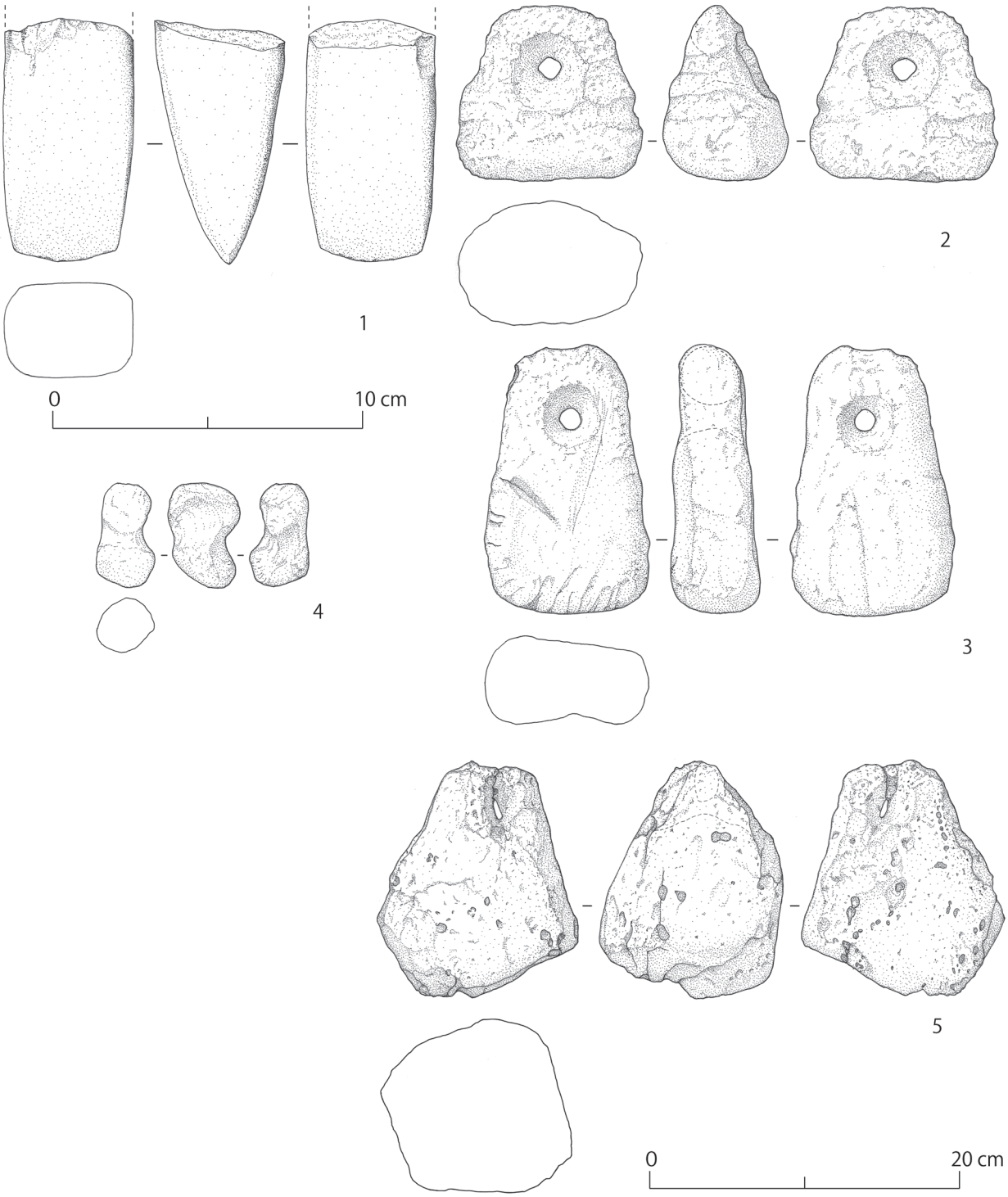
第 28 図　2 号竪穴住居址　表土層出土の石器実測図（2）

下半部の縦の浅い凹みにつながりそうである。なお表面側の左下半縁と下縁には長さ 3~5 cm ほどの鋭い溝が多数みられる。砥石に転用された痕跡であろうか。4 は辛うじて残った頭頂部で、やはり縦溝が両面を垂下するタイプであろう。5 は未完なのか孔が縦長で極めて狭く右下端部を欠損する。やや軽い点を含め床面例（第 30 図：10）と共通している。この比重の小さな石材を敢えて選んだ理由はなにであろうか？

砥　石（第 30 図：1~9）

板状の石を用いており、1・2 は 5 cm ほどと特に厚い。うち 1 は使用によって摩り減ったのであろうか中央に向かってゆるやかに凹み、右上縁付近にはこれと並行に幅 1 mm 前後のやや深めの筋状の擦痕群がはしる。底面も滑らかな凹帯が認められるので使用されたと考えられるが、裏面や両側面は破折面のままである。2 は表面側には筋状の使用痕が左上と右半さらに下縁左半部にみとめられる。裏面もゆるやかに凹んでいるので使用されたのであろう。3 も 3 cm 前後とかなり厚く、表面側には幅 2 mm 前後の溝が縦横にはしり深いものは 1 mm 余りに達する。裏面は大半が剥離しており、使用によるものと思われる滑らかな面が上半部左右と右下縁付近にわずかに残る。

4~7 は比較的薄いもので、うち 4 は表面には元の面がほぼそのまま残った状態で、そこに幅 2 mm 深さ 1 mm ほどの溝が縦に一条はしる。この溝は使用痕であろうが、真っ直ぐではない。裏面は縁がどこも角が落ちて丸みをもち使用に供された結果だと思われる。5 は、表面は使用によって全面にわたって滑らかになっており、加えて筋状の使用痕もみとめられる。熱を受け表面はほぼ全面、裏面は上半部が浸炭して黒灰色を呈する。6 は表面側にはほとんど使用痕がみとめられない。裏面は、使用による摩滅で上部に向かって薄くなるので、これはかなり大きな砥石の一部であることがわかる。筋状の使用痕も上半部と下縁付近にみとめられる。7 は破損品のごく一部なのであろう、表面側左上端に僅かに元の縁が残されているのみで、右下隅部も剥落している（8・9 は所在不明）。



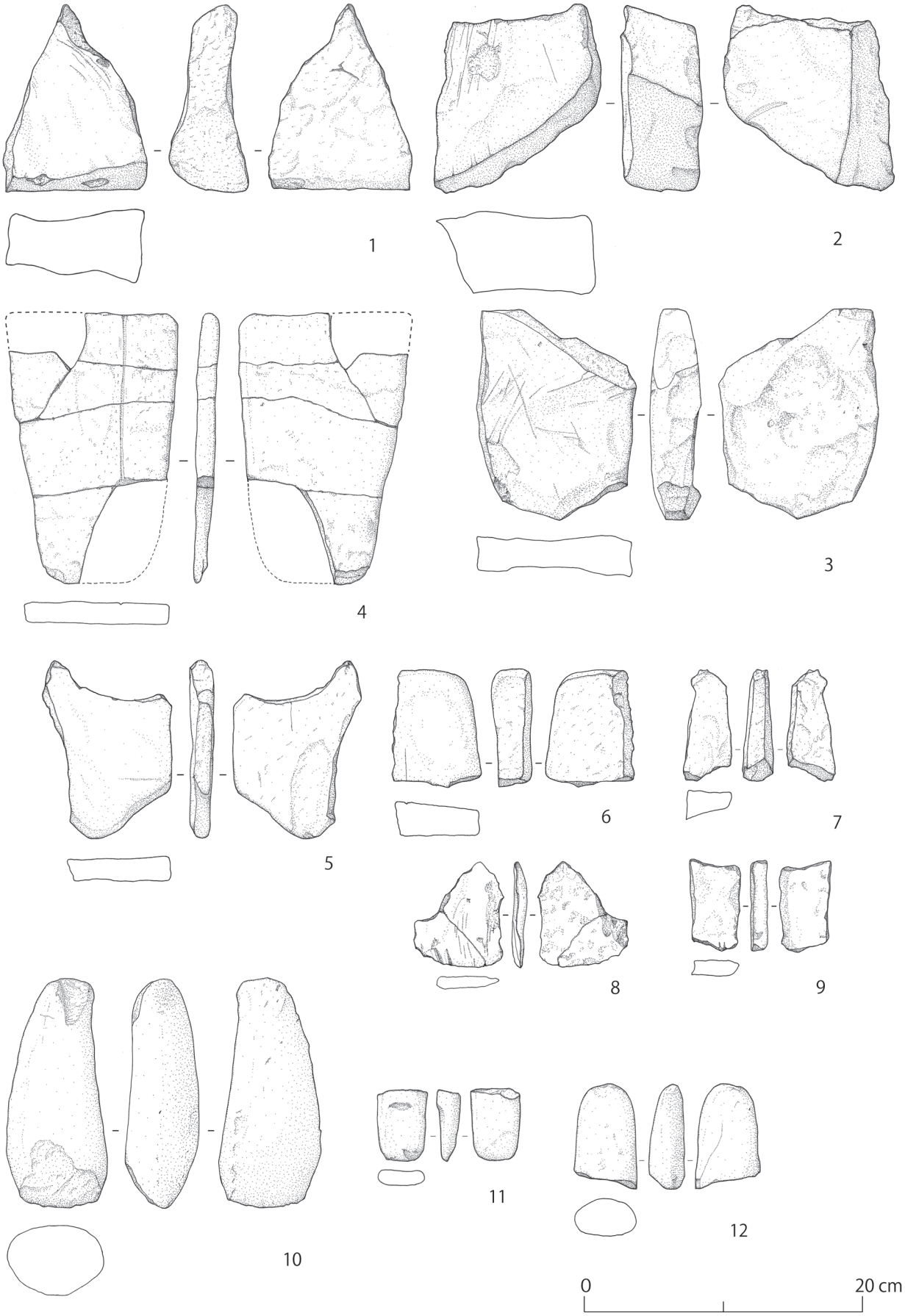
第29図　2号竪穴住居址　表土層出土の石器実測図（3）

敲　石（第30図：10~12）

10は上下端ともに敲打に因る剥落部があり、しかもそれらの面は摩滅せず尖り気味である。それに比べ11・12は、残された作業縁は細かな剥離面はあるものの、摩滅して比較的なめらかなので、作業としては押し潰しの要素も想定できる。

埋土出土の石器

得られた石器は、銛先鏃4、石鏃39（Ia11点・Ib1点・c4点・Id16点・未詳7点）、削器5、石錘3、砥石4、



第 30 図　２号竪穴住居址　表土層出土の石器実測図（4）

管玉1、全部で55点である。以下、機種ごとに記載する。

銛先鏃（第31図：1~4）

上半部とわずかに逆刺部を欠損する1の他、2~4は未製品で厚い。

石　鏃（第31図：5~42）

石鏃の内容をみると1dが48.5%、1aが33.3%、1-cが12.1%である。

Ia（第31図：5~16）

最大幅部 - 先端 / 最大幅の値2を基準に、未満の太身のタイプと2以上のもの（15）を細分する。太身のタイプの基底縁に注目すると、抉る例（5・6）、ほぼ平らなもの（7・8）、逆に張り出したもので、抉りが比較的強い9~11、弱い12~14の4つに分けることができる。後者14は茎部の形態を除くと細身の15とよく似ている。16は薄手の剥片に周縁加工している。

Ib（第31図：17）

これは、身部両側は凹湾気味であるが、左側には長軸と平行する部分をもち、右側は尖りしかもその位置がやや高い。この左右非対称性は表土層の第27図：41・42などとも共通しむしろ普通といえるくらいである。

Ic（第31図：18~21）

身部基底縁が、ほぼ平らな18、やや突出する19、太めの茎部に滑らかにつながる20・21が得られている。

Id（第31図：22~37）

最大幅部 - 先端 / 最大幅の値2を基準に、未満の太身のタイプと2以上のもの（22~26）を細分する。太身のタイプの基底縁に注目すると、まず抉り様の例（27~29）、ほぼ平らなもの（30）、逆に張り出したもの（31~35）に分けることができる。うち34は石質が珪質頁岩である。36および縦に半割し、また茎部を欠損する37もこの種の未製品と思われる。

未詳鏃（第31図：38~42）

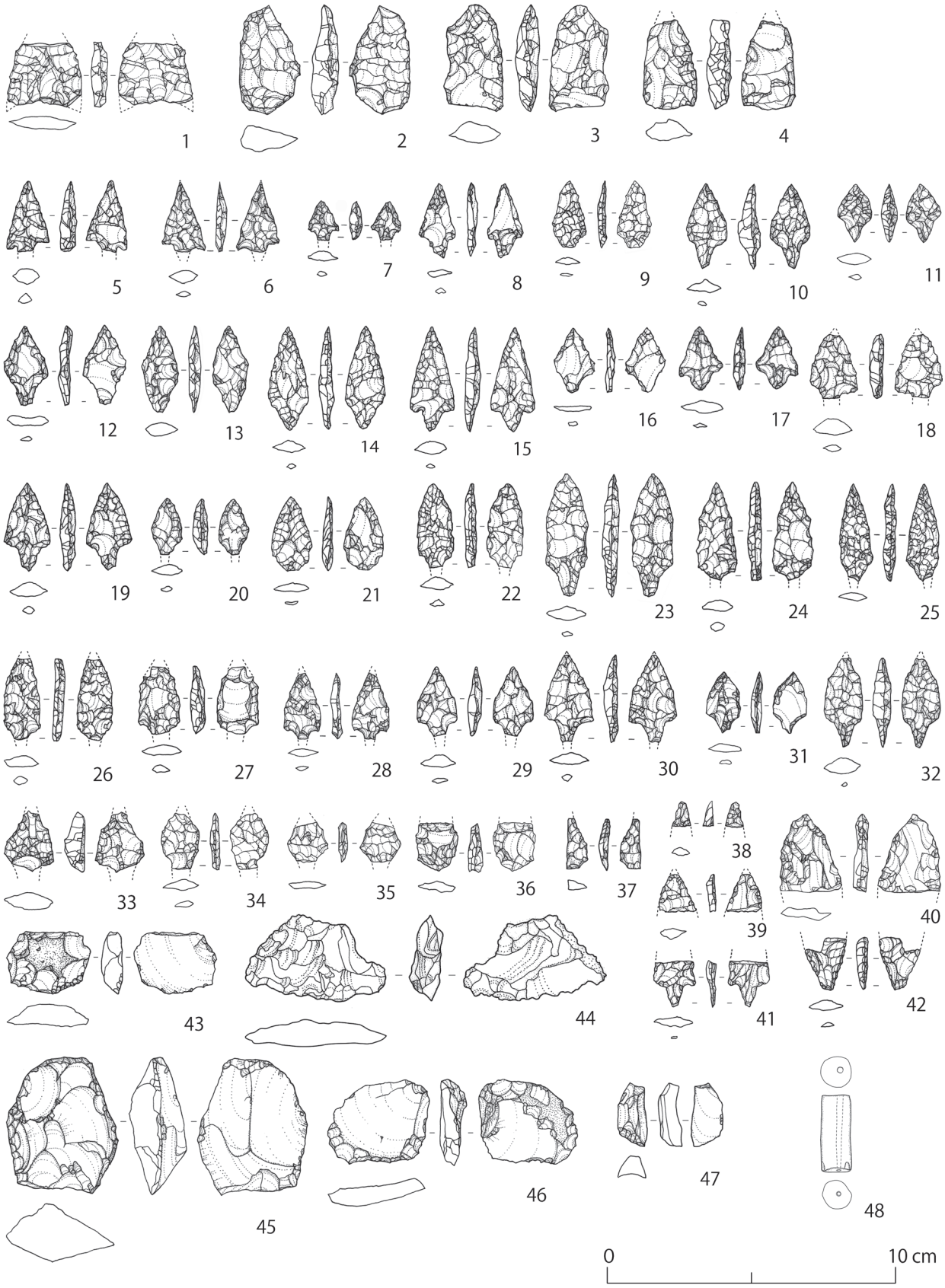
38~40は鏃の先端部と思われ、40はまだ厚いので茎部である可能性も残る。茎部41・42のうち後者はやや厚手である。

削　器（第31図：43~47）

いずれも一部に礫面を残し、使用痕は、43は下縁に、47は下縁に急角度で付けられた刃部に認められる。44は左図の左辺と下縁および右辺に、右図上縁と下部左辺にいずれも急角度の刃部剥離が加えられている。とくに左図の右端部は嘴状に突出しており、ドリル機能をもっていたのかもしれない。46は左図下端縁に急角度の刃部剥離が加えられているが、使用による摩滅は軽微である。

管　玉（第31図：48）

円筒形で長さ26.3 mm、外径11.1 mmである。孔径は1.1 mmで、両端部で皿状に広がり、それらの径は広い側で3.6 mm、狭い側で3.0 mmである。欠けた部分は入念に研磨・補修をおこなっている。濃いいオリーブ色で、かなりの範囲に黒色の斑がはいっている。



第 31 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の石器・石製品実測図（1）

石　錘（第32図：1~3）

大小あり、ごく小型の1は孔と底縁を表裏面ともやや太い縦溝で結ぶ。2は孔を水平に囲む形の横溝をもつ。3は穿孔の位置が表裏でやや食い違っている。また表面側下半部には叩打による穿孔途中の凹みが残されている。

砥　石（第32図：4~7）

4は上端部に孔をもつ精巧な仕上げの手砥であり、鉄錆であろうか赤褐色の付着物が3面のほぼ全面にみとめられる。5は表面側中央上部に向かって緩やかな凹みをもつ。砥磨の作業の結果であろう。この面にはまた長さ1 cm、幅1 mmほどの筋が主に上半部に、より長く浅い筋が主に左半部にみられる。裏面は大部分が剥落しているが右端部は比較的なめらかなので作業面であるのかもしれない。7は四角柱の3側面に使用痕がみとめられる。表面側の使用による磨り減りの中心が中央より上方なので、下端は折損しているのではなく原形である可能性が大きい。（6：所在不明）

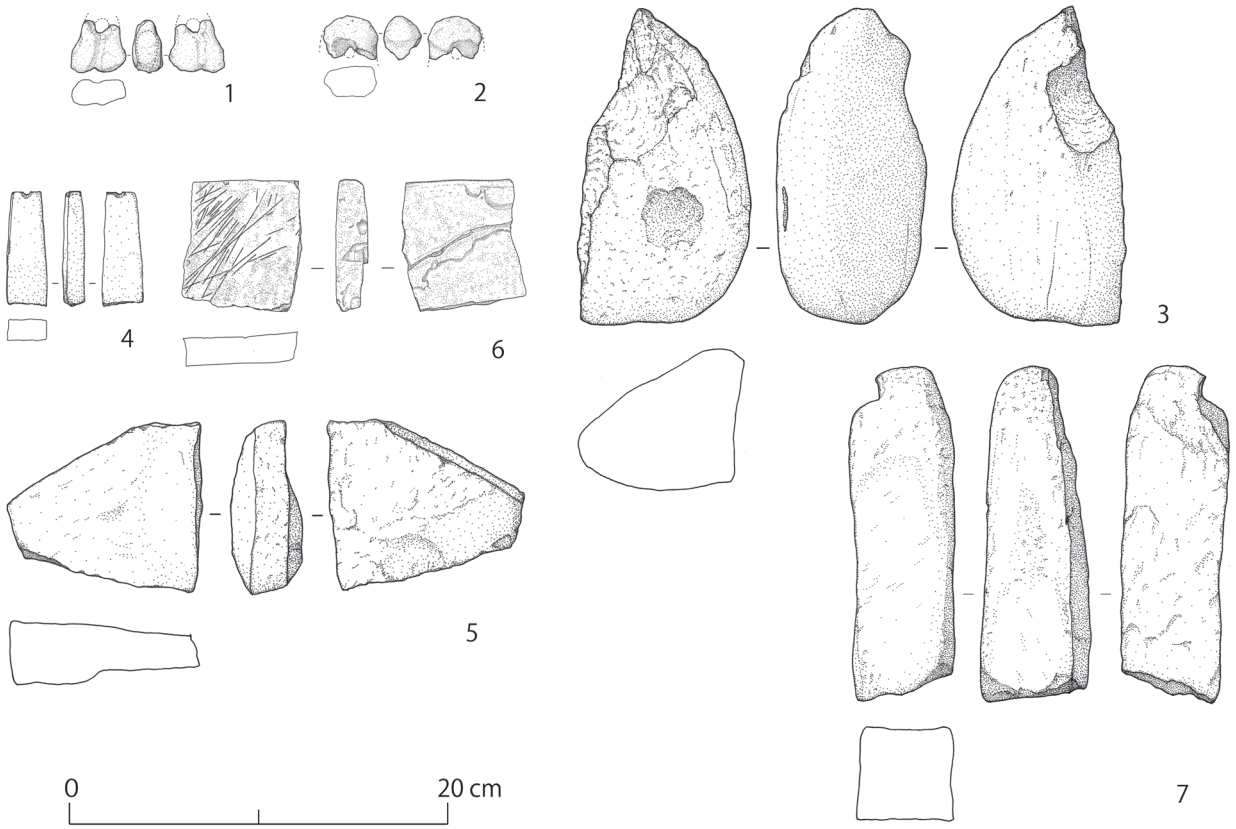
床面出土の石器

竪穴床面に伴って得られた石器は、石錘1、石鏃8（Ia 3点・Ic 1点・Id 4点）、削器1、全部で10点である。以下、機種ごとに記載する。

石　鏃（第33図：1~8）

Ia（第33図：1~3）

1~3のうち1は薄手の剥片の周縁加工のみで整美に仕上げ、2は細身の割に厚みをもつ。3は左図下半の主剥



第32図　2号竪穴住居址　埋土層出土の石器実測図（2）

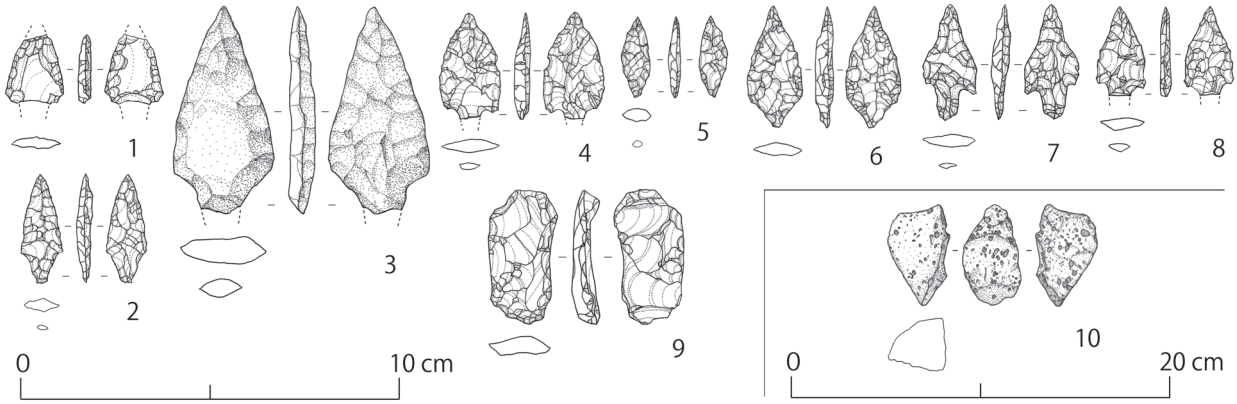
離面のほかは荒いながらも調整剥離がゆきとどいている。鏃としては大型重厚で、石質も玄武岩もしくは細粒砂岩で特異である。

Ic（第 33 図：4）
4 は茎部をかなり強く抉っている。

Id（第 33 図：5~8）
細身の 5、太身の 6、先端に向かって側縁が強く縮約する 7・8 が得られている。7 の側縁非対称性は先に指摘した諸例（表土層第 27 図：41・42、埋土層第 31 図：11・17・18・31 など）に共通する特色である。

削　器（第 33 図：9）
これは縦長剥片の下端を刃部加工し、両側縁を潰している。

石　錘（第 33 図：10）
これは軽石凝灰岩に両面から穿孔したものであり、その頂部付近にあたるが欠損部分が大きいので全容不明である。なお比較的軽いが、比重は 1 より大きい。



第 33 図　２号竪穴住居址　床面出土の石器実測図

第2表 2号竪穴住居址出土の石器・石製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	材　質	備　考
第27図：1	表土	6519	M-10	銛先鏃	71.5	39	8.9	24.4	中粒砂岩	
第27図：2	表土	6306	M-12	銛先鏃	35+	21	7.4	4.9	黒曜石	先端と基部両端欠損
第27図：3	表土	7106	O-10	銛先鏃	19.5+	20.5+	5.2	1.8	黒曜石	先端やや厚く、胴部以下を欠く
第27図：4	表土	7134	O-10	銛先鏃	19.5	15.5	3.9	1.3	黒曜石	基部両端欠く
第27図：5	表土	6620	N-12	石鏃I a	24.5	15	4.3	1.1	黒曜石	
第27図：6	表土	6525	M-10	石鏃I a	31	18	5.4	1.9	黒曜石	先端欠損
第27図：7	表土	7106	O-10	石鏃I a	23	15	6.2	1.5	黒曜石	先端欠損
第27図：8	表土	6852	N-10	石鏃I a	26	13	4.4	0.9	黒曜石	
第27図：9	表土	6607	N-12	石鏃I a	21	13	2.6	0.4	黒曜石	
第27図：10	表土	6747	N-11	石鏃I a	30+	15	4.2	1.3	黒曜石	基部欠損
第27図：11	表土	7108	O-10	石鏃I a	15+	13.5	3.4	0.6	黒曜石	
第27図：12	表土	7106	O-10	石鏃I a	19	13	2.7	0.3	黒曜石	片側頸部加工、破損放棄か？
第27図：13	表土	7118	O-10	石鏃I a	22	11	3.5	0.6	黒曜石	
第27図：14	表土	6725	N-11	石鏃I a	28.5	14	4.9	1.2	黒曜石	
第27図：15	表土	7137	O-10	石鏃I a	20	9.2	2.5	0.3	黒曜石	
第27図：16	表土	7122	O-10	石鏃I a	21.5	11.5	3.2	0.6	黒曜石	
第27図：17	表土	7106	O-10	石鏃I a	19.5	13	4.7	0.9	黒曜石	
第27図：18	表土	7106	O-10	石鏃I a	22.5	14	3.6	0.9	黒曜石	
第27図：19	表土	6620	N-12	石鏃I a	21+	14	6.5	1.6	黒曜石	基部欠損
第27図：20	表土	2203	M-10	石鏃I a	25.5	11	4.1	1	黒曜石	先端欠損
第27図：21	表土	6725	N-11	石鏃I a	23.5	12	3	0.7	黒曜石	先端欠損
第27図：22	表土	2506	M-13	石鏃I a	27	13	4.1	1.1	黒曜石	
第27図：23	表土	6852	N-10	石鏃I a	20+	12	2	0.5	黒曜石	先端・基部欠損
第27図：24	表土	6726	N-11	石鏃I a	17	15.5	2.7	0.6	黒曜石	
第27図：25	表土	7119	O-10	石鏃I a	15	10	3.6	0.5	黒曜石	
第27図：26	表土	7122	O-10	石鏃I a	26.5	12	3.6	1	黒曜石	基部欠損
第27図：27	表土	6829	N-10	石鏃I a	26	14	2.9	0.8	黒曜石	
第27図：28	表土	6320	M-12	石鏃I a	17.5	8.5	2.7	0.3	黒曜石	
第27図：29	表土	6607	N-12	石鏃I a	23.5	9.5	2.4	0.5	黒曜石	
第27図：30	表土	6738	N-11	石鏃I a	22.5+	11	4	1.1	黒曜石	基部未完放棄
第27図：31	表土	6747	N-11	石鏃I a	31	15.5	6.3	3.3	黒曜石	先端・基部欠損
第27図：32	表土	6405	M-11	石鏃I a	18	12	4.4	0.7	黒曜石	胴部以下欠く
第27図：33	表土	6747	N-11	石鏃I a	39	15	4.4	1.9	黒曜石	先端欠損
第27図：34	表土	6729	N-11	石鏃I a	23+	13	3.2	1	緑色チャート	
第27図：35	表土	2305	M-11	石鏃I a	28	10	5.3	0.7	黒曜石	基部欠損
第27図：36	表土	7133	O-10	石鏃I a	43	16.5	5.4	3.5	黒曜石	基部欠損
第27図：37	表土	6317	M-12	石鏃I a	30+	13.5	5.4	2	黒曜石	先端欠損
第27図：38	表土	6607	N-12	石鏃I a	24	9	5.6	0.9	黒曜石	基部欠損
第27図：39	表土	6019	L-12	石鏃I a	31	12	4.2	1.3	黒曜石	基部欠損
第27図：40	表土	6320	M-12	石鏃I a	18+	12	3.6	0.6	黒曜石	胴部以下欠く
第27図：41	表土	7133	O-10	石鏃I b	24.5	13.5	4.6	1	黒曜石	基部欠損
第27図：42	表土	7122	O-10	石鏃I b	21	11.5	2.9	0.5	黒曜石	先端・基部欠損
第27図：43	表土	6738	N-11	石鏃I c	24	14.5	3.4	0.9	黒曜石	
第27図：44	表土	7142	O-10	石鏃I c	37.5	16.5	6	3	黒曜石	
第27図：45	表土	2305	M-11	石鏃I c	34.5	12.5	6.4	0.7	黒曜石	
第27図：46	表土	6423	M-11	石鏃I c	31	17	4.4	1.7	黒曜石	
第27図：47	表土	6303	M-12	石鏃I c	28	11	3.4	1.1	黒曜石	全面焼けている
第27図：48	表土	6842	N-10	石鏃I c	14	9	2.2	0.3	赤色チャート	先端欠損
第27図：49	表土	7108	O-10	石鏃I c	12.5+	12	3.9	0.6	黒曜石	
第27図：50	表土	7108	O-10	石鏃I d	20+	13.5	3.9	1.1	黒曜石	

（第２表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	材　質	備　考
第27図：51	表土	7122	O-10	石鏃I d	23.5	13.5	3.7	1	黒曜石	
第27図：52	表土	7134	O-10	石鏃I d	19	15	4.1	1.1	黒曜石	
第27図：53	表土	6862	N-10	石鏃I d	21+	16.5	4.2	1.7	黒曜石	
第27図：54	表土	6006	L-12	石鏃I d	36	15	5.5	2.8	黒曜石	
第27図：55	表土	6660	N-12	石鏃I d	18+	11.5	3.6	0.6	黒曜石	
第27図：56	表土	6660	N-12	石鏃I d	17	9	2.7	0.3	黒曜石	先端欠損
第27図：57	表土	7133	O-10	石鏃I d	26	11	3.1	0.9	黒曜石	基部欠損
第27図：58	表土	6747	N-11	石鏃I d	30.5	16.5	4.9	1.8	黒曜石	
第27図：59	表土	7133	O-10	石鏃I d	26	14.5	4.1	1.3	黒曜石	
第27図：60	表土	6747	N-11	石鏃I d	37	13.5	5.1	2.1	黒曜石	
第27図：61	表土	6019	L-12	石鏃I d	31.5	11	4.1	1.2	黒曜石	先端・基部欠損
第27図：62	表土	6607	N-12	石鏃I d	28	14	5.7	1.9	黒曜石	基部欠損
第27図：63	表土	6838	N-11	石鏃I d	32	11.5	3.9	1.3	黒曜石	
第27図：64	表土	7106	O-10	石鏃I d	32	15	5.1	1.8	黒曜石	
第28図: 1	表土	7002	O-11	石鏃I d	36.5+	14.5	4.4	2.3	黒曜石	
第28図: 2	表土	6747	N-11	石鏃I d	37	14	6.2	2.4	黒曜石	先端欠損
第28図: 3	表土	7133	O-10	石鏃I d	40	12.5	4.2	2.1	黒曜石	
第28図: 4	表土	7106	O-10	石鏃I d	28.5	13	4.6	1.1	黒曜石	
第28図: 5	表土	6002	L-12	石鏃I d	32.5	14	55	2.2	黒曜石	基部欠損
第28図: 6	表土	2210	M-10	石鏃I d	21.5	8.5	2.5	0.6	黒曜石	先端欠損
第28図: 7	表土	7137	O-10	石鏃I d	22	9.5	3.7	0.9	黒曜石	先端・基部
第28図: 8	表土	6019	L-12	石鏃I d	20+	11.5	3.6	1.2	黒曜石	
第28図: 9	表土	6423	M-11	石鏃I d	28+	13	3.3	1.6	黒曜石	
第28図: 10	表土	6104	L-11	石鏃I d	33.5	11	4.5	2.1	黒曜石	基部欠損
第28図: 11	表土	6138	L-11	石鏃II	38	13	3.6	1.5	赤色チャート	
第28図: 12	表土	7134	O-10	石鏃I d	12	9	3.4	0.5	黒曜石	
第28図: 13	表土	6127	L-11	石鏃I d	12+	11+	2.8+	0.4	暗灰色チャート	基部欠損
第28図: 14	表土	6858	N-10	石鏃I d	22	12	2.3	0.5	黒曜石	
第28図: 15	表土	6106	L-11	石鏃I d	21+	10.5	3	0.5	黒曜石	
第28図: 16	表土	6604	N-12	石鏃I d	32	15.5	4.9	1.6	黒曜石	逆刺欠損
第28図: 17	表土	6607	N-12	石鏃	19	16.5	3.8	1	黒曜石	基部欠損
第28図: 18	表土	6747	N-11	石鏃I d	19.5	13	3.4	0.8	黒曜石	
第28図: 19	表土	2512	M-13	石鏃	14+	17	2		黒曜石	所在不明
第28図: 20	表土	7123	O-10	石鏃	17	11.5	2.4	0.5	黒曜石	retouched flake?
第28図: 21	表土	6112	L-11	石鏃	14.5	8	3.5	0.3	黒曜石	鏃　未完？
第28図: 22	表土	6002	L-12	石鏃	23	10	4.7	1.1	黒曜石	基部未完
第28図: 23	表土	7119	O-10	石鏃	23	14	4.5	1.3	黒曜石	鏃未成品？
第28図: 24	表土	7106	O-10	石鏃	24.5	16	3.5		黒曜石	鏃未成品？
第28図: 25	表土	7119	O-10	石鏃	20	10	4		黒曜石	鏃未成品？
第28図: 26	表土	7107	O-10	石鏃未成品	56	20	12	9.4	黒曜石	retouched flake/core?
第28図: 27	表土	6604	N-12	削器	19.5+	22	5.3	2.2	黒曜石	先端？欠損
第29図: 1	表土	2533	M-13	石斧	79+	42	41	212	はんれい岩	
第29図: 2	表土	6616	N-12	石錘	127	135	89	1768	球顆状流紋岩	
第29図: 3	表土	6802	N-10	石錘	197	119	65	2013	球顆状流紋岩	
第29図: 4	表土	7107	O-10	石錘	76+	43	41	173	球顆状流紋岩	
第29図: 5	表土	6601	N-12	石錘	173	146	124	2500	凝灰岩	
第30図: 1	表土	6657	N-12	砥石	153+	177	61	959	中粒砂岩	
第30図: 2	表土	2529	M-13	砥石	120+	129	65	1408	中粒砂岩	折損後も上縁で作業
第30図: 3	表土	2536	M-13	砥石	170＋	124	40	825	中粒砂岩	
第30図: 4	表土	6128	L-11	砥石	219	137+	17	570	中粒砂岩	
第30図: 5	表土	6307	M-12	砥石	143+	99	20	353	中粒砂岩	

（第２表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	材　質	備　考
第30図: 6	表土	2529	M-13	砥石	95	71.5	32	242	中～粗粒砂岩	
第30図: 7	表土	7107	O-10	砥石	90.5＋	37.5	24	91	中粒砂岩	
第30図: 8	表土	6105	L-11	砥石						所在不明
第30図: 9	表土	2201	M-10	砥石						所在不明
第30図: 10	表土	7107	O-10	叩き石	187	80	56.5	1137	粗～極粗粒砂岩	
第30図: 11	表土	6402	M-11	叩き石	56.5＋	40.5	19	58	細粒砂岩	
第30図: 12	表土	2401	M-12	叩き石	84.5＋	50	29	178	ホルンフェルス	
第31図: 1	埋土	7028	O-11	銛先鏃	22.5+	25.5	4.7	2.8	黒曜石	
第31図: 2	埋土	6634	N-12	銛先鏃	38	21	8.6	6.3	黒曜石	鏃/銛先鏃 未成品
第31図: 3	埋土	6336	M-12	銛先鏃	37	20	7.9	5.9	黒曜石	未成品？
第31図: 4	埋土	6336	M-12	銛先鏃	31	18	9.3	5.1	黒曜石	未成品？
第31図: 5	埋土	6432	M-11	石鏃I a	24.5+	14.5	5.6	1.3	黒曜石	
第31図: 6	埋土	7010	O-11	石鏃I a	23.5+	14	4.5	1.1	黒曜石	
第31図: 7	埋土	6651	N-12	石鏃I a	13.5	10.5	3.8	0.4	黒曜石	基部欠損
第31図: 8	埋土	6634	N-12	石鏃I a	26	13	3.9	0.7	黒曜石	
第31図: 9	埋土	6507	M-10	石鏃I a	33	11	2.7	0.6	黒曜石	
第31図: 10	埋土	6750	N-11	石鏃I a	29	13.5	6.7	1.6	黒曜石	
第31図: 11	埋土	7025	O-11	石鏃I a	20.5	12	4.6	0.8	黒曜石	
第31図: 12	埋土	6729	N-11	石鏃I a	28	15	3.5	1.2	黒曜石	
第31図: 13	埋土	7006	O-11	石鏃I a	30.5	12	4.5	1.4	黒曜石	
第31図: 14	埋土	6003	L-12	石鏃I a	36	14	4.3	1.6	黒曜石	
第31図: 15	埋土	6430	M-11	石鏃I a	36	15.5	5.1	2.1	黒曜石	
第31図: 16	埋土	6750	N-11	石鏃I a	22.5	14	2.5	0.6	黒曜石	
第31図: 17	埋土	6651	N-12	石鏃I b	22	15	4.3	0.9	黒曜石	
第31図: 18	埋土	6640	N-12	石鏃I c	22.5	16	4.9	1.6	黒曜石	
第31図: 19	埋土	6527	M-10	石鏃I c	30.5	16	5.6	1.9	黒曜石	
第31図: 20	埋土	6634	N-12	石鏃I c	19.5	10.5	4.5	0.9	黒曜石	基部欠損
第31図: 21	埋土	6729	N-11	石鏃I c	26	14	3.1	1	黒曜石	
第31図: 22	埋土	6527	M-10	石鏃I d	29+	12.5	4.5	1.5	黒曜石	
第31図: 23	埋土	6513	M-10	石鏃I d	42.5	14.5	5.2	2.9	黒曜石	
第31図: 24	埋土	6875	N-10	石鏃I d	35+	14	4.5	1.9	黒曜石	
第31図: 25	埋土	7015	O-11	石鏃I d	34	11.5	3.6	1.2	黒曜石	基部欠損
第31図: 26	埋土	7011	O-11	石鏃I d	28.5+	12.5	3.9	1.5	黒曜石	
第31図: 27	埋土	6729	N-11	石鏃I d	24	14.5	3.7	1.3	黒曜石	
第31図: 28	埋土	7025	O-11	石鏃I d	23	12.5	3.5	1	黒曜石	基部欠損
第31図: 29	埋土	6847	N-10	石鏃I d	24+	14.5	4.2	1.2	黒曜石	
第31図: 30	埋土	6750	N-11	石鏃I d	30.5+	16	4.5	1.8	黒曜石	先端・基部欠損
第31図: 31	埋土	7019	O-11	石鏃I d	21.5	12	2.9	0.7	黒曜石	
第31図: 32	埋土	6644	N-12	石鏃I d	31	13.5	6.1	2	黒曜石	先端欠損
第31図: 33	埋土	6651	N-12	石鏃I d	21	17	5.6	1.8	黒曜石	基部欠損
第31図: 34	埋土	6715	N-11	石鏃I d	19.5	13	3.3	0.7	珪質頁岩	先端・基部欠損
第31図: 35	埋土	7007	O-11	石鏃I d	14+	14	3.1	0.6	黒曜石	
第31図: 36	埋土	6651	N-12	石鏃I d	17	14	4.2	1	黒曜石	
第31図: 37	埋土	6329	M-12	石鏃I d	17.5+	7+	4.1	0.5	黒曜石	
第31図: 38	埋土	6651	N-12	石鏃	9.0+	6.5	3	0.1	黒曜石	
第31図: 39	埋土	6006	L-12	石鏃	13+	12.5+	3.2	0.5	黒曜石	先端欠損。基部かも？
第31図: 40	埋土	7039	O-11	石鏃	27	21	5.4	2.9	黒曜石	
第31図: 41	埋土	6640	N-12	石鏃	16	14	3.5	0.6	黒曜石	
第31図: 42	埋土	6707	N-11	石鏃	18+	13.5	3.8	0.8	黒曜石	
第31図: 43	埋土	6730	N-11	削器	21.5	28.5	7.4	5.4	黒曜石	右端欠損
第31図: 44	埋土	6640	N-12	削器	45.2	25.1	10.0	10.5	黒曜石	

（第２表の続き）

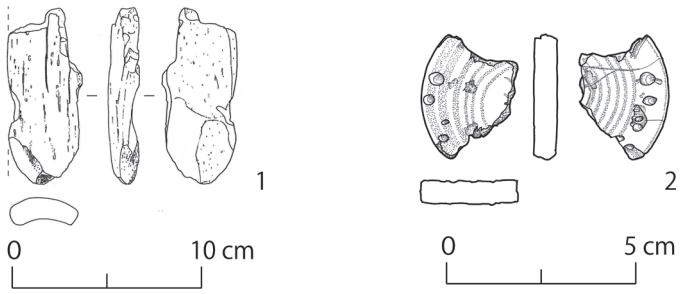
挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	材　質	備　考
第31図: 45	埋土	6003	L-12	削器/コア？	47.5	37	20		黒曜石	
第31図: 46	埋土	6707	N-11	削器	29.5	32	6.5	9.3	黒曜石	
第31図: 47	埋土	6707	N-11	削器	22	10	6	1.6	黒曜石	retouched flake
第31図: 48	埋土	6332	M-12	管玉	26.3	11.1	11.1	5.9	碧玉	内径：0.36，0.30
第32図: 1	埋土	6641	N-12	石錘	62+	65	30	157	球顆状流紋岩	
第32図: 2	埋土	6641	N-12	石錘	53+	63	37.5	161	球顆状流紋岩	
第32図: 3	埋土	6615	N-12	石錘	188+	101	80	1726	球顆状流紋岩	
第32図: 4	埋土	6679	N-12	砥石	69+	24.5	13	35	細～中粒砂岩	
第32図: 5	埋土	6413	M-11	砥石	103.5	116	38	526	細～中粒砂岩	
第32図: 6	埋土	6707	N-11	砥石	141	118	29	141.3	細～中粒砂岩	
第32図: 7	埋土	6656	N-12	砥石	200+	61	57	1203	細～中粒砂岩	
第33図: 1	床	6667	M-12	石鏃I a	18	15.5	2.8	1	黒曜石	
第33図: 2	床	6416	M-11	石鏃I a	29	11	3.6	0.9	黒曜石	
第33図: 3	床	6451	M-11	石鏃I a	55+	26.5	6.9	9.3	玄武岩か細粒砂岩	
第33図: 4	床	7035	O-11	石鏃I c	28.5	16	4.1	1.7	黒曜石	
第33図: 5	床	6451	M-11	石鏃I d	25	8.5	3.4	0.7	黒曜石	
第33図: 6	床	7043	O-11	石鏃I d	32	14.5	3.6	1.4	黒曜石	
第33図: 7	床	6689	N-12	石鏃I d	30.5	14	4.1	1.2	黒曜石	
第33図: 8	床	6451	M-11	石鏃I d	24+	13	2.8	0.8	黒曜石	
第33図: 9	床	2433	M-12	削器	34.4	16.9	5.9	4.3	黒曜石	
第33図: 10	床	6812	N-10	石錘	119+	72	66	321	軽石凝灰岩	

§　4d.　２号竪穴住居址出土の骨角器・骨角製品

２号竪穴の調査で得られた骨角器は、表土層中の掘具１と有孔円板［未詳品 C］１、埋土中の銛先２と有孔円板２であり、竪穴床面に伴ったものはない。これら骨角器・骨角製品は大半が焼けており、数が少ない割には銛先と有孔円板が多い。これをいわゆる「骨焼き」に由来するものかとも考えたが、撹乱の影響もあるのか、広範囲に散在した状況なので確かではない。

表土出土の骨角器（第 34 図：1・2）

１は縦長板状の素材（クジラ肋骨）を両面とも削って樋状に仕上げており、左図左縁は辛うじて原形をとどめている。掘具であろう。２は 未詳品 C（有孔円板）であり全体の約 1/4 部分にあたる。同心円状に配した溝が表裏面ともに６本認められ、溝は表面（左図）では外側２本は浅く幅２ mm ほどと太く、内側４本は細く深めである。裏面では外側に広い無文帯をもち､内側に６本の溝を密接させる。この意匠は埋土層出土の例(第 35 図：３）と共通する[17]。外縁近くに大小の貫通孔が４箇所みられる。いずれも平面形正円ではなく、また中心軸は鉛直ではなく区々にやや傾きをもち、意図的な穿孔であるのか疑問である。高熱を受けて白色化しており、竪穴外 O-11 区で多種類の獣骨とともにみつかった。



第 34 図　２号竪穴住居址　表土層出土の骨角器・骨角製品実測図

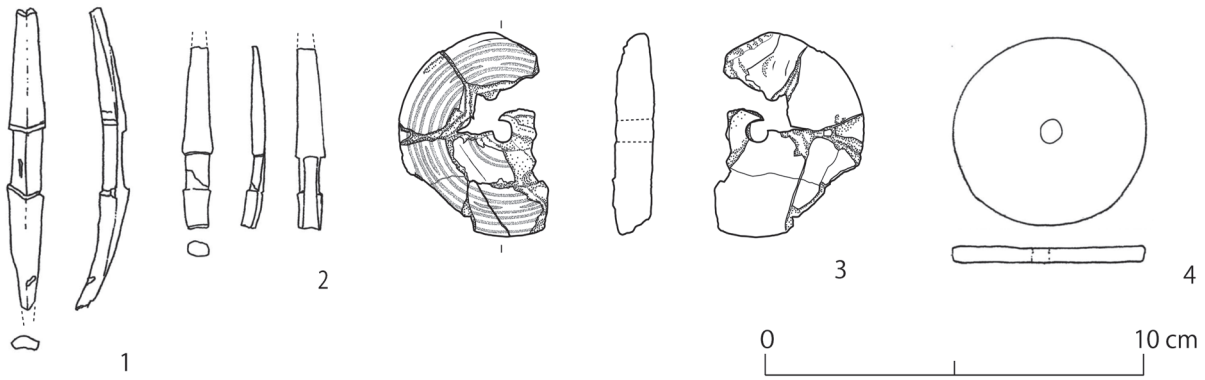
埋土出土の骨角器（第 35 図：1~4）

銛先（第 35 図：1・2）

銛先はオープンソケット式が２点得られている。ともに高熱を受けて白色化し、上下両端部を欠損している。うち１は横断面が三角形をなし、背面では紐掛かり抉り部の上下を緩やかな膨らみをもつ凸帯で縁どり、さらに上縁側ではやや雑な沈線を１条加えている。腹面側の紐掛かり抉り部の上端には段が認められるが、ごく低くしかも左側に限られるので中柄先端を留める機能的な加工であるとは考え難い。２は横断面が楕円を基調とし、シャープな紐掛かり抉り部をもつ。腹面には深い柄槽が彫られ、その上端は位置的にこの紐掛かり抉り部上縁に完全に一致する。

有孔円板［未詳品 C］（第 35 図：3・4）

３・４のうち３は直径 5 cm、厚さ 0.6 cm、孔径 0.5 cm ほどで、全面研磨されて平滑で、側面は丸味をもつ。装飾は表面に限られ、沈線を同心円状に配す。これを詳しくみると、沈線が中央部無文帯をはさんで外側に８本、内側に少なくとも３本刻まれている。沈線の幅は 1 mm 弱で、内側のものは全体に若干細めである。なお、外側の沈線群のうち内側から４番目のものは断続的であり、残存部分で５本（箇所）確認できる。不連続箇所ではいずれも、その内外の沈線の間隔がやや狭いので、４番目の沈線を連続・完周させることは難しいであろう。またこの４番目の沈線５本は、長さは 1 cm 弱でほぼ揃っているようであるが相互の間隔はまちまちである。おそらくこの４番目の沈線の不連続は意図的な意匠ではなく、作業精度の限界に因るものと考えられる。材質は極めて均質･緻密なので鯨類や海獣類(マッコウクジラもしくはセイウチ)の牙であろう。高熱を受けて白色を呈する。４も高熱を受けて白色化、変形し亀裂の入った極めて脆い円板である。上面を露出させた段階でこれを土ごと取り上げて保存している。実測は不可能なので概念図と写真を掲げる。直径は約 6.4 cm、厚さ 0.4 cm 前後、孔径は 0.7 cm ほどであり、やや薄い点を除くと３とよく類似する。観察できる限りでは文様は認められず、牙の年輪かと思われる原材の性状に由来する幅 1 mm ほどの薄層の積層構造が観察される。



第 35 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の骨角器・骨角製品実測図

第３表　２号竪穴住居址出土の骨角器・骨角製品一覧

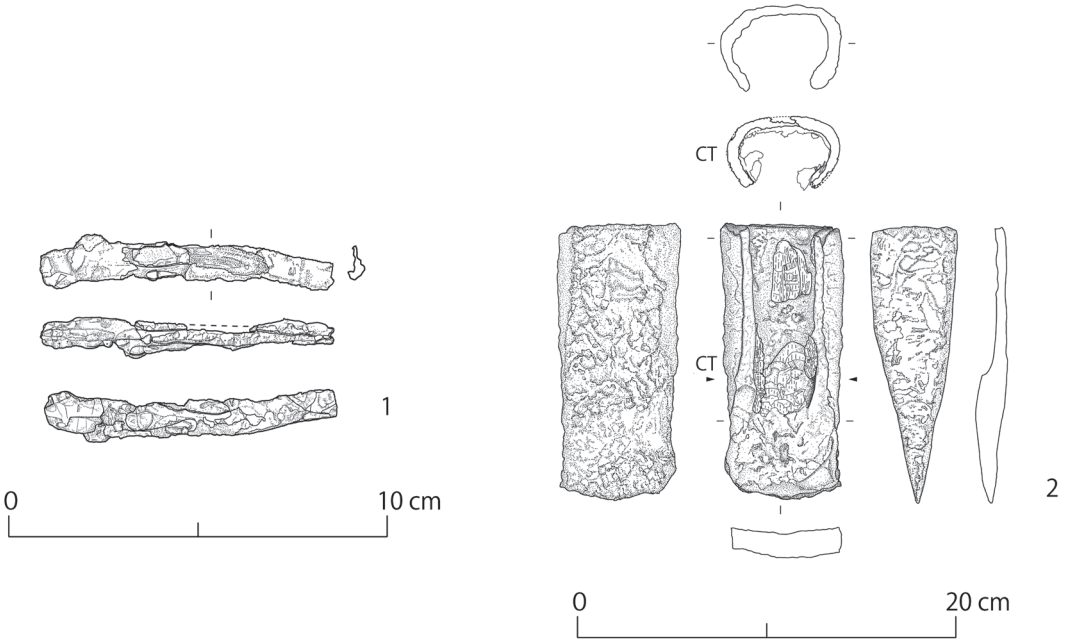
挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 ㎜	幅 ㎜	厚 ㎜	重 g	材　質	備　考
第34図: 1	表土	2410	M-12	掘具B	(92.25)	(36.29)	(13.48)	(27.1)	クジラ骨	
第34図: 2	表土	7017	O-11	未詳品C（有孔円板）	(31.16)	(22.89)	6.8	(3.4)	角？	高熱で白色化
第35図: 1	埋土	6638	N-12	銛先B II	(72.9)	8.8	6.63	(4.4)		高熱で白色化
第35図: 2	埋土	6330	M-12	銛先B II	(46.31)	8.94	4.95	(2.5)		高熱で白色化
第35図: 3	埋土	6845	N-10 S.B	未詳品C（有孔円板）	(52.43)	(36.41)	(6.44)	(9.6)		高熱で白色化
第35図: 4	埋土	6333	M-12	未詳品C（有孔円板）	約64	約64	約4	－	マッコウクジラもしくはセイウチの牙	孔径約8、高熱で白色化し粉々，Pl. 4

§５e.　２号竪穴住居址出土の金属器・金属製品

鉄斧のほか大小さまざまな形状の鉄器、同破片が得られている。ただし竪穴床面に確実にともなったものはない。

表土層出土の金属器・金属製品（第 36 図：1・2）

１は泥の付着が著しいので機種未詳で、ほそい薄板状の素材としておく。右端部の断面は両凸レンズ状である。２の袋柄タイプの鉄斧は O-11 区、竪穴外の包含層で得られ、袋柄部内側には木製の柄および泥が固着・残存している。長さ 13.2 cm、幅は刃部で 5.4 cm 柄部では 6.0 cm、高さ 4.2 cm、厚さは刃部で 1.5 cm、柄部では 0.4~0.5 cm である。ただし刃先部は錆によって 1 cm 前後は剥落・欠失しているものと思われる。重量は 551.6 g（固着物を含む）である。両側縁は刃と柄の移行部で緩やかにくびれ、刃先は丸味を帯びてやや突出する。U 字形に折り曲げられた柄部の横断面は楕円形ではなく背面側はやや直線的であり、柄の隙間は 3 cm ほどでかなり大きい。柄部縦断面の形状は、固着物によって正確にはつかめないが X 線透過画像に拠ると、柄部では後端部から刃部に向かって緩やかに厚さを増し、かなり急なカーブで刃部に移行する。刃部最大厚は中ほどやや後寄りの



第 36 図　２号竪穴住居址　表土層出土の金属器・金属製品実測図

位置にある。これらの特徴は、個体差を考慮しないとすれば、全体として笹田の「前期」（笹田 2013）、渡邉のIIIb・IIId（渡邉 2016）の各要素に共通する。瀬川の指摘にあるように新しい時期のタイプであるといえ（瀬川 1984）、渡邉編年では 10 世紀以降になろう。類例として、大きさ形態とも酷似している弁天島遺跡 1995 年度９号住居の覆土中の斧を挙げることができる（西本 2003）。なお上に触れたとおり貼付文をもつ小型の土器（未詳品）（第 15 図：1）が完全な形でこれの近くで出土しており、これらの組み合わせも弁天島例に共通する。

なおこの斧の袋部には柄の木部が残存していた。断面の特徴から、これは広葉樹であることが明らかにされた。さらに導管や放射組織の特徴（単列放射組織と広放射組織の２階級併有）によってミズナラやカシワ・コナラなどブナ科コナラ属（*Quercus* L.）の可能性が考えられるが、採取試料の状態から樹種の識別には至らなかった[18]。

埋土出土の金属器（第 37 図）

これは竪穴床上南西隅の埋土中で多くの獣骨や貝殻、土器片などとともに見つかったものであり、この住居址にともなう可能性をもつ。断面四角形で、わずかに残る刃部の基部は幅 1.2 cm ほどである。和釘の可能性も考えたが刃部断面に鍛接面が認められるので刀子と判断した。

第 37 図　２号竪穴住居址
埋土層出土の金属器・金属製品実測図

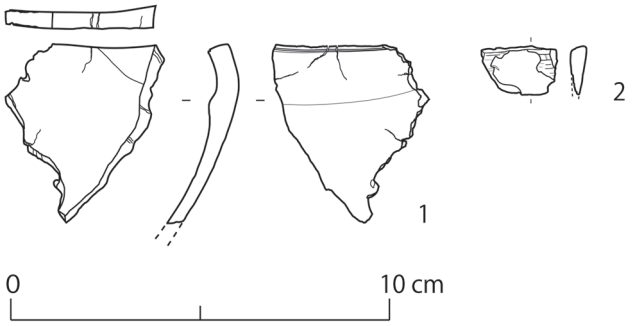
第 4 表　２号竪穴住居址出土の金属器・金属製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 ㎜	幅 ㎜	厚 ㎜	重 g	備　考
第36図: 1	表土	2522	M-13	薄板	76.75	9.54	3.64	7.1	泥固着
第36図: 2	表土	7022	O-11	袋柄鉄斧	132.0	60.0	15.0	551.6	刃先欠損、袋部に木製柄残存し泥固着
第37図: 1	埋土	6687	N-12	刀子	46.61	11.48	4.52	4.9	泥固着

§6 f.　２号竪穴住居址出土の木器・木製品

埋土出土の木器・木製品（第 38 図：1・2）

原形をある程度とどめるものは２点で、うち１は完全に炭化した小型の浅鉢形刳り物である。厚さはかなり不均一で、胴部は下端に向かって薄くなり、口唇面では左端で厚く右に向かって薄くなる。口縁内側に摩擦式浮文様の凹帯が１条めぐり、その上縁、口唇に接して幅 1 mm ほどの細くシャープな溝が１条めぐる。凹帯の幅は最大 1.3 mm ほどで右に向かうにつれて狭まる。面の曲率、口縁部内側の凹帯・溝を含めて作り仕上げは整美なので、手工業製品であろう。２はごく薄い剥片を把ねるもしくは巻き付けて圧着したものであり、一部の剥片断面には小孔組織が認められるので樹皮もしくは木部薄片であろう。全体に鉄錆が沈着して褐色であり、かすかに



題 38 図　２号竪穴住居址　埋土層出土の木器・木製品実測

磁着する。中心部の中空部は鉄分が溶脱したものと思われる。片刃刀子の残存部分かその柄ないしは鞘の一部であろう。

第５表　２号竪穴住居址出土の木器・木製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 ㎜	幅 ㎜	厚 ㎜	重 g	備考
第38図: 1	表土	6665	N-12	木器	(47.0)	(39.5)	(7.16)	(4.3)	浅鉢形刳物
第38図: 2	表土	7031	O-11	木製品	(19.21)	(12.36)	(3.74)	(0.8)	刀子柄？

§７g.　２号竪穴住居址出土の動物遺存体

竪穴床面の南東部、ピット 30・31 を中心とする一帯にはクジラを主とし他にトド、アシカ類を混じえる獣骨群がひろがっていた。詳細は後に報告することにする。

小　括

この竪穴住居址は、主に、床面に残された溝の特徴によって、規模を縮小する形で少なくとも１回は改築が行われていることがいえる。いずれの時にも炉の位置はほとんど動かず、南東側が上座で北西を向く形で建てられていた。その存続期間全体は短くはなかったはずであるが、伴う遺物はごくわずかである。住人たちは器物を整理して転居したのであろう。奥壁近く南東部にはクジラを主としトド、アシカ類を混じえる獣骨群がひろがり、それらに混じって、刻文をもつ土器（第 24 図：5）が押し潰された状態で、また奥壁近く中央あたりでも刻文系土器の破片（第 25 図：19）、および削器（第 33 図：9）がみつかった。これらはいわゆる骨塚に関わるものであったのかもしれない。

このようにこの竪穴住居では刻文をもつ土器が床面にともなっていることから、その時期は中期にかかるものであることが可能性をもつ。また埋土中には、管玉や穿孔された牙製の円板をともなって、擬縄貼付文をもつ土器が伏せられた、遺構かと考えられるものが確認されているので、その終わりに関しては、後期初頭より前であることを推定できる。

（天野哲也）

註

註１　江田真毅・天野哲也・小野裕子編『北海道大学総合博物館研究報告　オホーツク文化の研究４　目梨泊遺跡（1）』第８号　北海道大学総合博物館

註２　小野・天野 2008 など参照されたい。

註３　熊木俊朗氏による批判がある（熊木 2012）。次回総括のところで論じることにする。

註４　この作業は 1970 年代の後半に４号竪穴住居址の遺物整理にあたっていた出利葉浩司氏が主におこなった。

註５　松田 2018 なども参考にした。

註６　1970 年代の北海道大学文学部附属北方文化研究施設において、当初この２号竪穴住居址の報告書の分担執筆者は西本豊弘氏であった。1981 年に氏が国立歴史民俗博物館に転出した後、後任は未定のままであった。この段階で職員による遺物実測図はほぼ完成しており（トレースはおこなわれていない）、これを用いた西本氏による大まかなレイアウト素案も残されていた。その後、調査責任者・大井晴男先生も亡くなられたため、天野がこれを引き継ぐことになった。ただ、現物資料にあたりながら執筆を開始すると、実測図の不正確さ不備などに気づき、またいくつかの資料が所在不明の状態にあることもわかった（主に保管場所の度重なる変更にともなう資料の移動による）。なお、

執筆者の間で記述に精粗、かなりの不統一が生じた（また次号以降に生じる）ことも併せて了解されたい。残された時間は限られており、「歳月人を待たず」の感が深い。

註7　床面を追って壁を確認する調査方法では、内側の新しい竪穴の壁に気づかず掘り進めてしまうおそれがある。小トレンチを開けて壁の断面を確認するやり方を適時併用することが望ましい。

註8　住居と墓が近接している例は目梨泊遺跡だけでも、E-1（貼付文土器）西側の1号墓（刻文土器）・22号墓、E-2（貼付文土器）南側の23号墓（刻文土器）、E-6（貼付文土器）東側の41号墓（沈線文土器）（以上佐藤隆広編1994）、北海道大学調査1号竪穴住居址北東側の3号墓（擬縄貼付文土器）（佐藤隆広編1988）などがあり、いずれも墓の方が時間的に古い。前代の墓壙の存在に気づかず偶然そのそばに竪穴住居を建てたのであろう。しかしこの2号竪穴の場合は、廃棄後間もないため埋まりきっていなかったはずであり、明らかに竪穴住居址と認識できるところに墓を設けたことになる。オホーツク文化では、墓域は住居など生活域とは区別・隔離して設けることが一般的であり、竪穴住居内に墓を設ける例は乏しかった。その稀な例が弁天島遺跡1995年度調査の9号住居覆土中で見つかった鉄斧・貼付文をもつ土器・石である（西本2003）。これらはひとつの墓に伴う副葬品のセットととらえられており、しかもこの遺跡では他にも類例があるとされ、時期の点でも興味深い。その後、7号竪穴住居の埋土中で倒立した土器や刀剣などが確認され、遺体を回収できない不慮の死あるいは逆縁などを想定した「廃屋墓」の概念が提示された（川名2007）。これら7号や2号竪穴例などを、後の伊茶仁遺跡6号竪穴住居址（「トビニタイ期」）内に設けられた擦文文化期のものと推定される墓（北構・石附編1973）などの魁と考えることは飛躍に過ぎるであろうか。

なお、もしこの2号竪穴例が墓壙であるとすれば類例としては他に、枝幸町教育委員会調査1号墓（ガラス玉7点・琥珀玉2点）、同23号墓（土器の下にガラス玉2点）を挙げることができる（佐藤編1994）。また骨製円板をともなう墓の類例は船泊砂丘浜中1・4・6・10・11号（児玉・大場1952）、モヨロ貝塚8・20号（駒井編1963）、ウトロ遺跡神社山3・5号（石田・松田・西本1994）・7号（高橋1993）などかなりの数にのぼる（5%前後）。

また仮にこの円板が垂飾など装身具であるとすれば、首以下上腕・胸部～膝部を飾った可能性が高い。そうであれば竪穴壁との関係から埋葬は、これと平行の西～南西頭位であったことが考えられる。なお、倒立した状態でみつかったこの土器は、胴下半を欠くのでもとより推測にすぎないが、もし副葬品であれば8・34号墓例のように底面が穿孔されていた可能性をもつ。

註9　条件として、底面の円周が①連続1/2以上か②残りの部分が単独で1/2以上になることがないものと規定できる。

註10　これらは擦文文化的な様相であり、K-446札幌市麻生球場遺跡（上野編1979）などに類例がみられる。

註11　表 渓太氏（北海道博物館）のご教示によると、本例の足跡の形は手（根球）ではなく、踵がしっかりと表現されているのでヒグマの後足を表したものだと考えられる。またこのような足跡の並び方は、自然状態では柔らかい地面や雪上をゆっくりと歩いた場合に表れることが多いが、土器製作上のデザインの条件も考慮する必要があるかも知れないとのことである。なおクマの足跡を表現した類例としては、本遺跡Mトレンチ21区№3223資料、礼文島香深井1遺跡1号b竪穴埋土例（大場・大井1976第222図：17）、同2号竪穴埋土例（大場・大井1981第421図：7）、モヨロ貝塚例（宇田川2002：120「参考資料」）などが挙げられる。

註12　目梨泊遺跡では、枝幸町教育委員会による調査で包含層から縄文土器片が出土している（佐藤編1994）が、続縄文土器の報告はない。また枝幸町内では続縄文期に登録されている遺跡は14箇所あり（北海道教育委員会「北の遺跡案内」2020.3更新、http：//www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/bnh/kitanoisekiannai.htm）、うち5遺跡は「続縄文後半」とされるので、本資料がそれらに関係するものである可能性は残されている。

註13　たとえば青森県の湯浅屋新田遺跡1号住居（宇部1984）、田面木平遺跡44号住居（藤田・宇部編1989、藤田編1993）や恵庭市中島松5遺跡（松谷編1989）などの土師器を参考例として挙げることができる。

註14　類例はウトロチャシコツ遺跡で得られており、藤本c群の標識資料である（駒井編1964）。これは胴部貼付文（隆帯）が口縁部にも採用されて典型的な貼付文に発展してゆく中間形態をあらわしているものと考えられる。

註 15　天野 1985 の推定復原図（Fig. 2）は不正確であり、今回のように改めることにする。併せて天野 2017 も参照されたい。

註 16　石質の鑑定は在田一則氏（一般社団法人北海道自然保護協会会長）に依頼し、また氏を通じて岡村　聡氏（北海道教育大学名誉教授）・加藤孝幸氏（アースサイエンス㈱）のご教示も得た。

註 17　船泊砂丘遺跡第２地点で類例が５点得られている（児玉・大場 1952）。本例とは同心円群のモチーフは共通するが、ここでは２点がジグザグの円列を併せもつ。

註 18　なお、これには導管が認められ、その配列から環孔材であることが確認されたのでアカガシ亜属 (subgen. *Cyclobalanopsis*)（分布は宮城・新潟以南）の可能性は排除できる。分析は公益財団法人 元興寺文化財研究所に委託した。また北海道大学大学院農学研究院の佐野雄三教授に分析結果の検討とご教示をお願いした。

引用文献

天野哲也　1985 「オホーツク社会のメタル・インダストリーに関する基礎的考察」『北方文化研究』17　北海道大学 pp. 19-44（再録　天野哲也　2008 『古代の海洋民オホーツク人の世界　アイヌ文化をさかのぼる』 雄山閣 pp. 342-368）

天野哲也　2009 「有孔・溶融土器」 米村 衛編『史跡最寄貝塚』 網走市教育委員会　pp. 337-341

天野哲也　2017 「オホーツク文化における鍛冶の精神的な意味」 小口雅史編『古代国家と北方世界』　同成社　pp. 10-17

石田　肇・松田　功・西本豊弘　1994 「ウトロ遺跡神社山地点 第三次（1990 年度）発掘報告」『知床博物館研究報告』15　斜里町立知床博物館　pp. 1–12

上野秀一編　1979 『K 446 遺跡』 札幌市文化財調査報告書 XX　札幌市教育委員会

宇田川　洋　1975 「サシルイ北岸遺跡の調査」『羅臼町文化財報告２　幾田』 羅臼町教育委員会　pp. 38-48

宇田川　洋　2002 「オホーツク『クマ祀り』の世界」 西秋良宏・宇田川　洋編『北の異界　古代オホーツクと氷民文化』 東京大学コレクション XIII　東京大学総合総合研究博物館　pp. 106-120

宇部則保　1984 「八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書—湯浅屋新田遺跡 (2)」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』 13　八戸市教育委員会

大場利夫・大井晴男　1976 『オホーツク文化の研究２　香深井遺跡 上』 東京大学出版会

大場利夫・大井晴男　1981 『オホーツク文化の研究３　香深井遺跡 下』 東京大学出版会

小野裕子・天野哲也　2008 「オホーツク文化の形成と展開に関わる集団の文化的系統について」 榎森進・小口雅史・澤登寛聡編『エミシ・エゾ・アイヌ　アイヌ文化の成立と変容－交易と交流を中心として』上　岩田書院 pp. 139-192

川名広文　2007 「オホーツク文化期目梨泊遺跡住居跡出土の直刀」『比較文化論叢』19　札幌大学　pp. 123-144

北構保男・石附喜三男編　1973 『伊茶仁遺跡 B 地点発掘調査報告書—北海道根室国標津—』 北地文化研究会　根室市

児玉作左衛門・大場利夫　1952 「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7　北海道大学　pp. 167-270

駒井和愛編　1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（下）　東京大学

熊木俊朗　2012 「香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』26　pp. 1-38（再録　熊木俊朗　2018 『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』 北海道出版企画センター　pp. 115-149）

熊木俊朗　2023 「オホーツク文化の集落と社会」『季刊考古学・別冊 42　北海道考古学の最前線』 雄山閣　pp. 90-93

笹田朋孝　2013 『北海道における鉄文化の考古学的研究—鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心として—』 北海道出版企画センター　pp. 1-175

佐藤隆広編　1988 『目梨泊遺跡　一般国道 238 号線枝幸町地内カムイ道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 枝幸町教育委員会

佐藤隆広編　1994 『目梨泊遺跡　一般国道 238 号　枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 枝幸町教育委員会

瀬川拓郎　1984 「擦文期の鉄斧について」『北海道史研究』34　みやま書房　pp. 45-54

高橋　理　1993 「ウトロ遺跡神社山地点発掘報告３号・５号第一次・第二次」『知床博物館研究報告』14　斜里町立知床博物館　pp. 63-72

高畠孝宗　2020 「枝幸町・目梨泊遺跡出土の金銅装直刀」『北海道考古学』56　p. ii

高畠孝宗　2023 「目梨泊遺跡出土刀剣の意義　－流氷よせる北溟の「金の刀」－」『季刊考古学・別冊 42　北海道考古学の最前線』　雄山閣　pp. 94-96

西本豊弘　2003 「第４章　墓抗と出土遺物」『国立歴史民俗博物館研究報告』107　国立歴史民俗博物館　pp. 68-69

藤田亮一・宇部則保編　1989「八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 VIII- 田面木平 (1) 遺跡」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』34　八戸市教育委員会

藤田亮一編　1993 「田面木平 (1)・(2) 遺跡」『八戸市埋蔵文化財調査報告書』53　八戸市教育委員会

藤本　強　1966 「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51-4　pp. 28-44

松谷　純編　1989 『中島松 5 遺跡 A 地点』 恵庭市教育委員会

松田　功　2018 「チャシコツ岬上遺跡出土石器分析」『チャシコツ岬上遺跡 総括報告書』 斜里町教育委員会　pp. 106-112

渡邉つづり　2016 「日本列島東部における鉄斧の研究」『北海道考古学』52　pp. 19-38

PL. 1　２号竪穴住居址全景（南から見る）

PL. 2　２号竪穴住居址の土器出土状況（1）（スケールは 30 cm）

PL. 3　2 号竪穴住居址の土器出土状況（2）　(スケールは 30 ㎝）

PL. 4　2 号竪穴住居址の管玉・骨製円盤出土状況　（スケールは 5 ㎝）

VI　3号竪穴住居址とその遺物

§1 a.　竪穴住居址の状態と層位

本節では3号竪穴住居址、およびこの竪穴住居址の調査の際に認められた遺構・遺物それに遺物包含層の状態ついて報告する。この竪穴住居址は2号・4号竪穴住居址にはさまれる形で、これらとともに台地の北西縁に位置し、L・M列の境界と7・8列の境の交点あたりにその中心をおき、長軸は北東―南西方向をとる。対象とする範囲はK-6・7・8、L-6・7・8、M-6・7・8・9それにN-7・8の各区もしくはその一部からなる。

1970年のMトレンチ調査では、台地北西縁の崖にかかる7・8区は崩落の恐れがあるため除外し、その範囲をM-9区以南に限った[1)]。また、前号の第I部・第1章・第2節に触れた1965年の国道の緊急工事などに関連すると思われる重機による削平が台地面の広範囲に及んでおり、この竪穴住居も全面にわたって削られたために竪穴は掘りこみ面を全く残さぬばかりか、その北半部にいたっては壁面すら失い、辛うじて残された溝や柱穴によってそのプランを想定できる有様であった。加えて、この竪穴はクマザサなどに深く覆われていた。これらの諸条件が重なって1970年の調査ではこの竪穴住居址を確認できず、翌1971年Jトレンチの調査時に拡張・設定したL-8区（グリッド）によって初めてその存在が気づかれた。

後に詳しく述べるとおり本竪穴住居址はほぼ同じ地点で少なくとも一度は建て替えがおこなわれており、その建て替えられた住居の長軸方向は旧のそれより20°右回りに振れている(第1図、PL. 1)。上に触れたように遺存状態がよくないので、住居の規模や構造を正確に知ることは難しいが、規模に関しては、旧い方の住居aが長さ約7.5 m、最大幅6.4 m、新しい住居bはこれより短縮されて長さ 約6.6 m、幅は6.8 mほどであったと推定される。この推定に大過なければ、床面積はそれぞれ40.14 ㎡、39.3 ㎡前後と算出できる。壁の高さは、削平による被害が比較的小さい南部でみる限り、30 cmくらいまでたどれる。

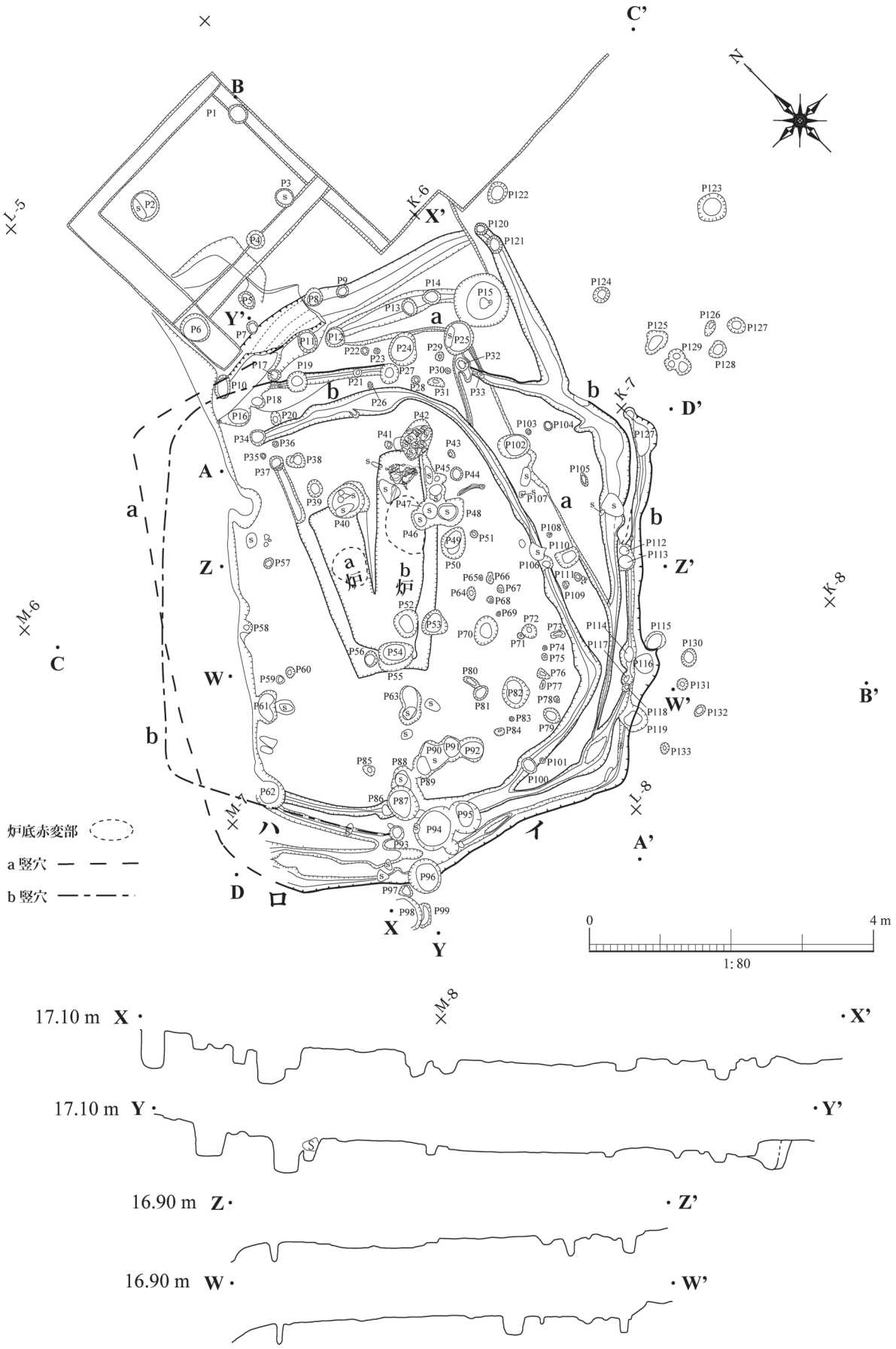
層　位

I層~V層で表示する。I層は表土層であり、II層は魚骨層、III層は砂利層、IV層は竪穴住居址の埋土層であり、灰褐色砂質土層・灰色砂質粘土層からなる。V層は竪穴住居址の床である。以下それぞれについて記述する。

I層　表土層

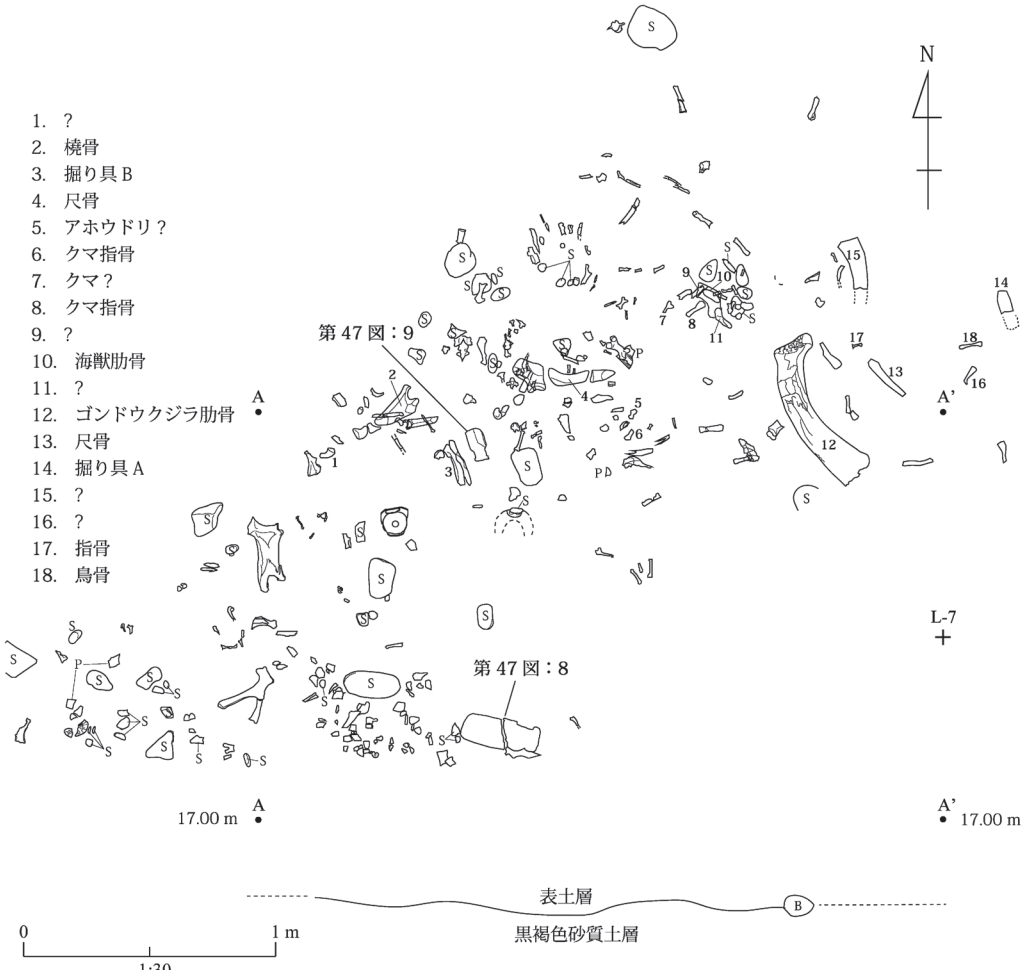
黒色腐植土層（狭義の表土層）)・黒褐色砂質土層などがこの表土層を構成する（第2・3図)。黒色腐植土層は下位の黒褐色砂質土層より土質が微粒であるが、必ずしもそれと截然と識別できるわけではない。むしろ草の根が密に入りこんだ、地表から10 cm前後のあたりまでの部分という便宜的な区分・名称と理解されたい。全体として、ほぼ竪穴東半部を含むL列、および、それより東側では重機による削平を著しく蒙っているため、これらの層はほとんど存在しないか、存在する場合でも、一度動かされたものが大部分である(たとえば、A-A'断面図東半部の大半)。逆にM-8区西端付近では、重機によって他から寄せ集められた土が旧表土の上に高さ40 cmほどの堆をなしている。黒褐色砂質土層は厚さが10~20 cmほどの幅をもつ。概して竪穴住居址中央で厚く、ここではA-A'・D-D'断面図の中ほどにみられるように、魚骨を混える埋土層と接している。なお竪穴のほぼ東半すなわちL-8区の大部分およびL-7区中ほどより東側では黒褐色砂質土層は重機により削除されてしまっている。

表土層について注目すべき点は、これに包含される遺物の位置ならびに種類の偏りである。すなわち、竪穴中央部（L~7区西南隅）西寄りのあたりを中心にして、東西5 m、南北3 mほどの楕円形の範内に、大量の獣骨



第１図　３号竪穴住居址平面図

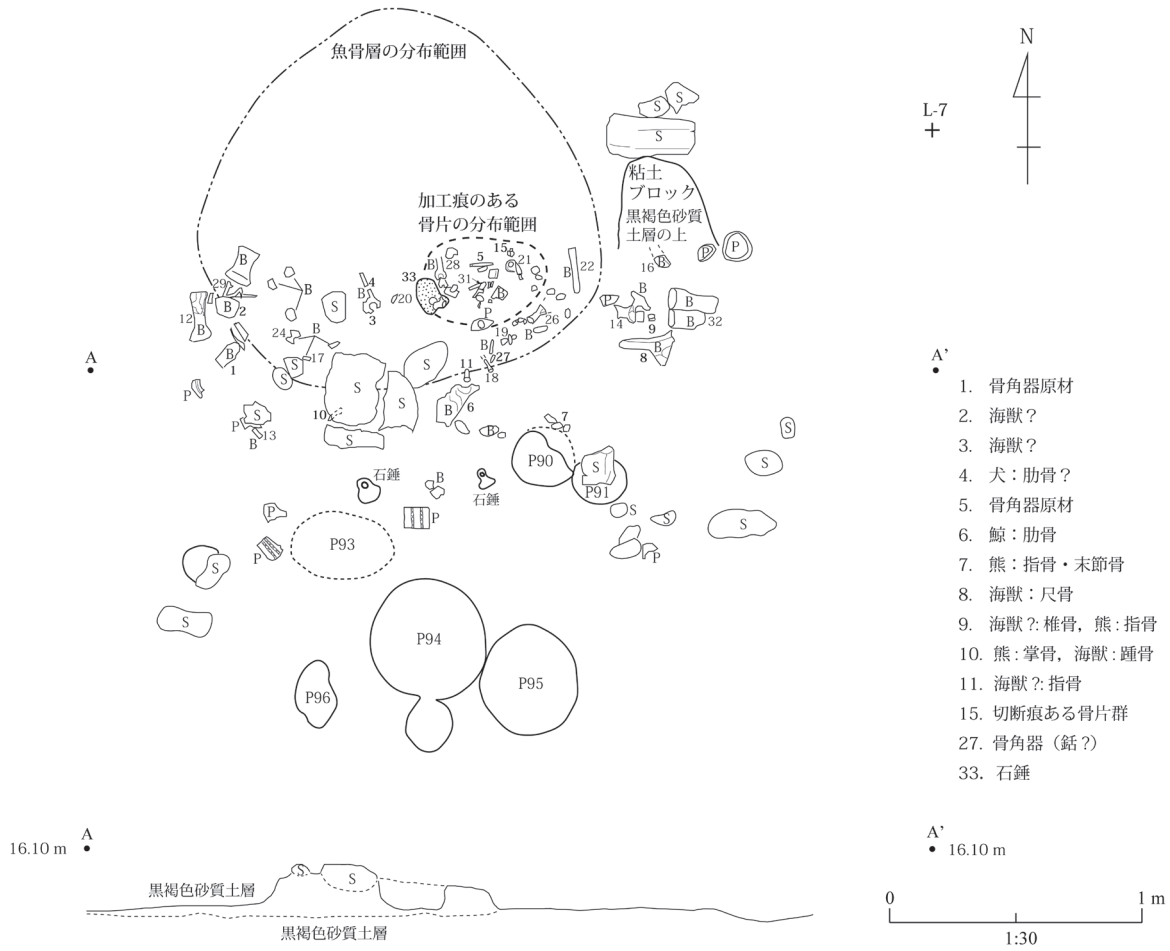
（ヒグマほか）が釣針軸や銛先・掘具などの骨角器および土器等とともに集中していた（第 4 図、PL. 2）。また、A-A' 断面図にもみられるように、M-8 区北部中央部の黒褐色砂層中には、直径 50 cm 前後の円の範囲内に、利器でたたき切られた 5 cm 角、厚さ 5 cm ほどの木端状の鯨骨片の集中がみとめられた。さらに同じ区、西部では直径 2 m 内外の範囲で、おびただしい量の黒曜石製フレイクが同じ石質の石鏃・コアとともに散在していた。これらの状況は、表土層が堆積してゆく過程のある時点で、当時未だ完全に埋まりきらずに凹地をなしていた 3 号竪穴内で、動物の解体や骨角器・石器の製作など特定の作業がかなり限定された範囲内でおこなわれたことを物語るものであるのかも知れない。



第 4 図　I 層（表土層）中の遺物出土状況

II 層　魚骨層

この層は褐色を呈する魚骨がほぼ純粋な形でレンズ状に密集・堆積したものでありブロックというべきかもしれない。その最大厚は 7 cm に達し（D-D' 断面図）、平面形はほぼ円形、直径は 120 cm 前後で、中心は M-8 区北部中央のピット 85（平面図中では大文字 P と略し、これに連番を組み合わせて表記）あたり、すなわち 3 号竪穴の南部、奥壁寄りにある（第 5 図）。この層は、西端部付近では砂利層（III 層）上に、それより東ではその砂利層を覆う灰褐色粘土の薄層、およびこれらを覆う褐色土層 (魚骨を若干含む) 上に堆積し、全体に黒褐色砂質土層によって覆われている。したがってその時間的位置は、褐色土層の堆積以降、そして表土層とした黒褐色砂層の堆積以前ということになる。この褐色土層は東に向かって層厚を増すが、L 列より西 1.5 m あたりで小礫混じりの黄褐色粘土ブロックで断ち切られ、それより東ではこれを確認できない。ただ土層の性状、および、や



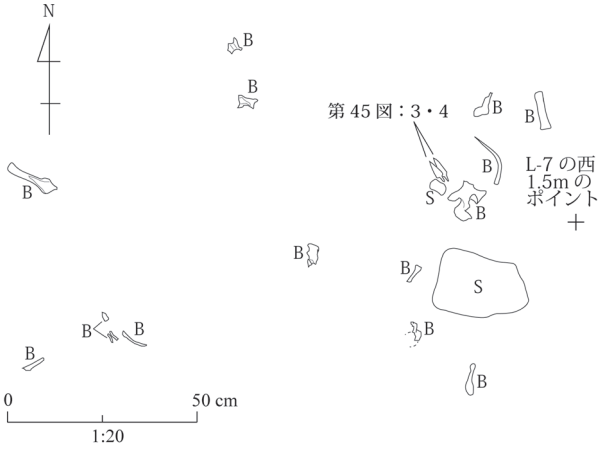
第 5 図　Ⅱ層（魚骨層）の分布

はり礫層上に堆積するという位置関係の共通性からみて、L 列にかかって分布する灰色砂質土層上層に対応する可能性が大きい。そうであれば、魚骨層は、3 号竪穴埋土とした灰色砂質土層 (上層) よりも後に時間的位置をもつことになる。しかも、この灰色砂質土層上層および先の褐色土層をともに覆う黒褐色砂層は、これら両者に重なる部分でやや顕著に魚骨を混えている。魚骨層近辺における土層中のこのような魚骨の存在を一連のものと理解すれば、この魚骨層は、3 号竪穴埋土の堆積末期から表土層 (黒褐色砂層) 堆積のある時期までの、魚骨投棄が最も集中的におこなわれた時に形成されたものと考えられる。

この魚骨層の内容を次にみよう。魚種ではコマイが主 (67%) で、ニシンがそれにつぐ (28%)。他にわずかにカレイ・ホッケ・ソイ・ウグイ・サケそれにカジカ・ツノザメ・イトウなどがみられた。その内外には石錘や土器片、ヒグマ・イヌ他の獣骨や切断痕のある骨片などが散見され、またこの魚骨層の上面で石鏃 2 点（第 45 図：3・4）が先端を北西方向に向けて重なり合った状態で発見された (第 6 図)。さらに石鏃のすぐ南側には長さ 30 cm 弱の石があった。断言はできないが、これらは何らかの遺構ないしは一つの作業面をなすものかもしれない。

ではこの魚骨層などはどのように形成されたのであろうか。それを検討するための層位的情報はほとんど無いに等しい。可能性としては、本竪穴に隣接する 2 号またさらに 4 号竪穴との関連が考えられる。まず 2 号竪穴住居は、刻文をもつ土器が床面にともなっているので 3 号竪穴と同様に中期に遡るものであることがいえる。またその埋土中では擬縄貼付文をもつ土器が伏せられた状態で、しかも管玉や牙製穿孔円盤をともなってみつかっており、これらは墓に関わるものである可能性をもつ。したがって後期初頭にはこの竪穴住居は廃絶しているものの、その上ではなんらかの活動が展開されていた可能性が高く、隣接する 3 号竪穴の埋土中に投棄された

魚骨などはこの活動と一連のものであるのかもしれない。他方、4号竪穴は、後期に属するものなので時間的にはこの魚骨層の形成と整合的であり、また想定される竪穴開口部も3号に向かう南向きであるが、魚骨層形成の中心すなわち形成開始地点が3号竪穴廃棄後の凹地内で南寄りに位置するのでアクセスを考えると、その可能性は低いといえる。



第6図　Ⅱ層（魚骨層）上面の遺物出土状況

Ⅲ層　砂利層

この砂利層は、上に述べた魚骨層およびその直下の魚骨を混じえる褐色土層の下に拡がるものであり、竪穴埋土であるⅣ層（灰褐色砂質土層）の上に位置し、その範囲はM-7区に収まる。厚さは最も大きい部分で10 m内外である。おそらく、掘り上げられた基盤の粘土礫層由来のものであろう。この層からは若干の遺物が得られているが、例えばその骨角器・鏃が上位の魚骨層出土のものと類似しているので、これら二つの層（褐色土層を含めると3層）は然程の空白期間をおかずに形成されたものと考えられる。

Ⅳ層　灰褐色砂質土層・灰色砂質粘土層

この竪穴住居址内に他の竪穴には見られない特異な層、灰褐色砂質土層・灰色砂質粘土層が埋土として床面上に直接堆積している。これらは固くしまっており、壁際で厚く、竪穴内に向かって層厚を減じて、灰色砂質粘土層は竪穴住居址の中央部にはおよんでいない。その分量は、D-D' 断面図（第3図）にみられるように特に竪穴東部、およびA-A' 断面図（第2図）にみられるように南半分部で多く、北部 - 西部の数倍にのぼっていたものと推定できる。このような量的なアンバランスは以下のように、ほぼ同一地点で竪穴住居が一度建て替えられたことに因るものと理解される。最初のa竪穴住居の廃棄後、恐らく直後に、ほぼ同一地点で長軸を20°程右にふる形でb竪穴が建てられた。その際にa竪穴の南西壁内側の部分（第1図でイロハと示した）に灰色砂質粘土（やや褐色味をおびる）を投入して突き固めb竪穴の壁を設けたのであろう。

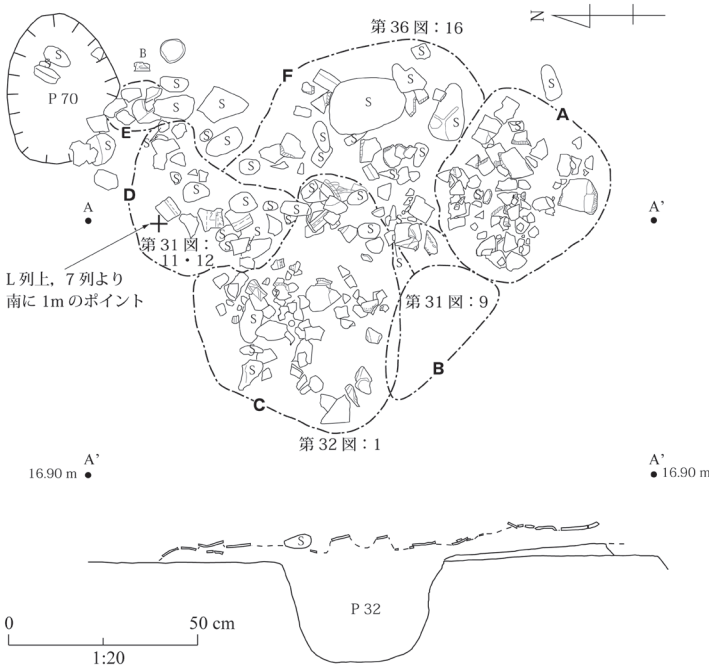
竪穴の南半部L-8・M-8区の境付近では、この灰色砂質粘土の上面およびこれに沿ってその直下に、しかし床面からは離れて、主に沈線文系の文様をもつ土器約4個体分（第31図：9・11・12、32図：1、第36図：16）がかなりまとまった状態で礫群とともにみとめられた（第7図）。ただし礫群は、他の箇所に比較して明らかに集中してはいるものの、それらの配列に企画性は見出し難く、また焼痕や炭化物・灰の付着・随伴もみられないので、その意味は不明である。

灰色砂質粘土層上、さらにこの層が及ばなかった竪穴中央床面の上には灰褐色砂質土層が堆積している。層厚は20 cm前後であり、部分的に介在させる礫層・粘土層などを境にして、茶あるいは黒色味のつよい上層と、灰色味のまさる下層に細分できる。上層中には獣骨類が散見され、ことにL-7区・M-7区ではその上面にこれが集中し、合わせて銛先（第50図：1）などがえられている（第8図、Pl. 3）。下層は、L-8区あたりでは獣・魚骨を特に豊富に含むため、やや黄褐色味をおび、竪穴北部では炭片を多く含んでいる。なお、礫層・粘土層は、その組成が地山のそれによく類似する点からみて、この灰色砂質粘土層が堆積する過程でピットが地山まで掘り抜かれることがあり、その排土に由来するものと考えられる。その性格は明らかではないが、竪穴住居址の凹所を利用する形で何らかの構造物がつくられたのであろう。上記の土器や自然遺物などの集中もこれと関連するものであるのかもしれない。なお、これら灰色砂質粘土層・灰褐色砂質土層の供給源は次に述べる地山の基盤粘土層であろうと思われる。3号竪穴を構築する際にこの基盤粘土層を掘り込んでその排土・粘土を竪穴周辺に積み

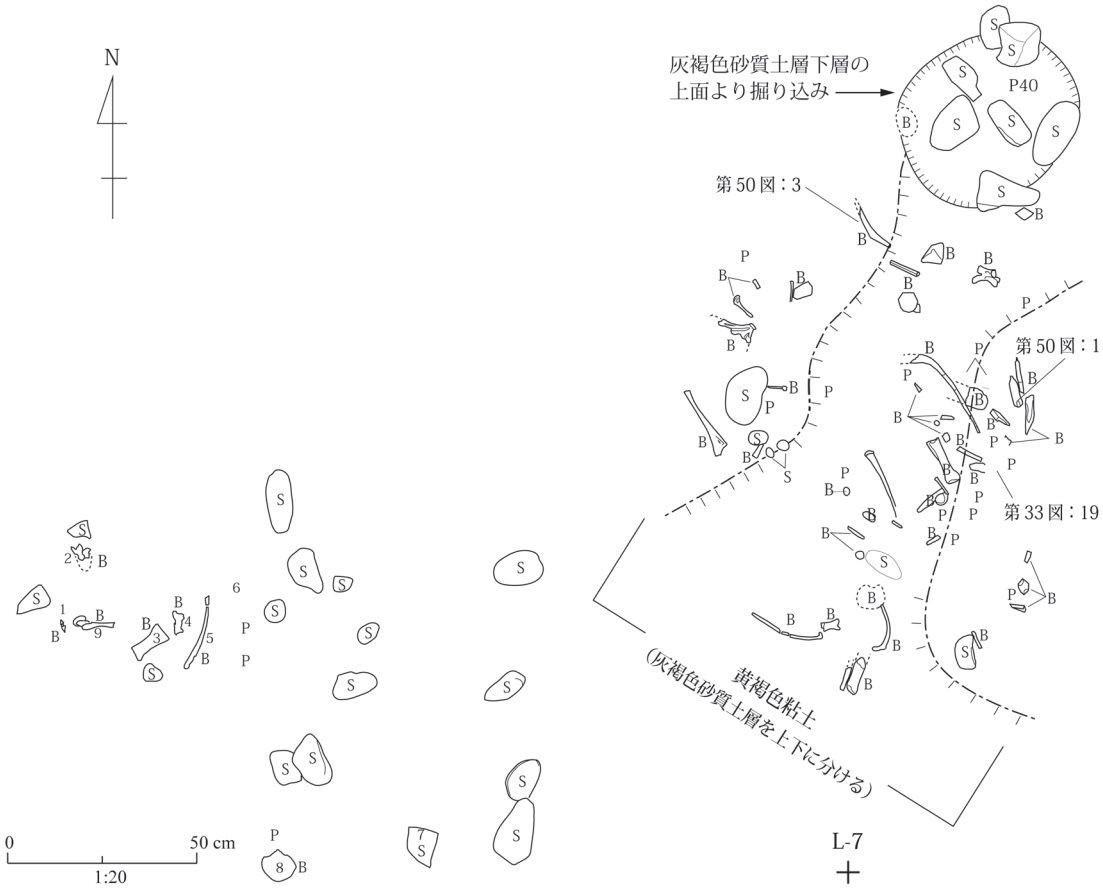
上げ、また充填し、竪穴住居廃絶後にこの積み上げ土・充填土は住居内に崩落・再堆積したものと推定できる。

Ⅴ層　竪穴住居床面

この層は竪穴住居址の床面であり、基盤（地山）を掘り込んで設けられている。本遺跡が立地する海岸段丘に関して充分な地質・地形学的検討をおこなっていないので、地山の構成層については未詳の点が多い。しかも、既に触れたように、この調査区では竪穴外のほとんどの部分で重機による削平が地山にまで及んでいるために、その上部についてデータを欠く。ただ竪穴外に残存する最もレベルの高い部分(D-D' 断面、南部)でみる限り、地山の上部はうす茶色粘土でなっている。これは、下方に向うにつれて白色味を増し、竪穴住居床面レベル辺りでは礫を混じえ黄白色を呈する。この礫がほとんど全域に拡がっていることは、随所にあけられたピット内で礫が薄層や小ブロックの形でみられる点から推定できるので、この部分を



第7図　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（1）



第8図　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（2）

上位の粘土層と区分して、含礫黄白色粘土層とする。

少なくとも一度の建て替えもしくは改築がおこなわれた都合３軒の竪穴住居は、その掘りこみ面はいずれも不明であるが、床面のレベルはほとんど同一で、この含礫黄白色粘土層上面あるいはその直上のうす茶色粘土層に設定されている。

遺　構

この３号竪穴住居址は建て替えが行われていることは既に述べた。しかも、それがほぼ同じ地点で床面のレベルもそう違わない形で重複してなされているために、遺構が錯綜し、また、かなりの部分で損なわれている。さらに、残念なことに、近年の重機を用いた土層の削除によって竪穴の掘りこみ面その他が失われているために、住居間の時間的関係を層位的に確かめることも相当の制約をうけざるを得ない。このように、いくつかの困難な条件が重なってはいるが、それでもなお、その推移を含めて、３号竪穴住居址を復原することはある程度可能である。

先にも触れたように、竪穴住居址の壁ないしその直下の床面をめぐる周溝と考えられるものは２組 (a・b) 認められる（第１図)。ただ、これらの他に、a・b の北東側にも溝が２本存在する。そのうち外側のものは、ピット 120 のところでほぼ 90°の角度をもって屈曲しており、竪穴住居隅付近の周溝の様相を示している。その内側のものも、これに伴う周溝とみることも不可能ではない。もしこのように、これらを竪穴住居に関わる溝であると考えれば、先の２軒に加えて、さらに１軒 (0 住居とよんでおく)、都合３軒の住居がここで推移したことになる。そして、この０住居の周溝かと思われるものは、南部で b 竪穴によって切られているので、この０住居は b 竪穴に先立って造られたことになる。そのほかの竪穴と０住居の関係を直接示すデータは得られていないけれども、炉址をみると、０住居に対応するものは残されていないので、０住居が３者の中で最も古いと判断できる。しかし、この０住居竪穴は、仮にそれが住居であったとしても、これの残された部分は全体のごく僅にすぎず、考察すべき資料にも乏しいので、特に取りあげることはせず、その存在の可能性を示唆しておくことにとどめる。あるいはこれは竪穴式ではなく香深井５遺跡などに推定された平地式の仮設住居であったのかもしれない[2)]。

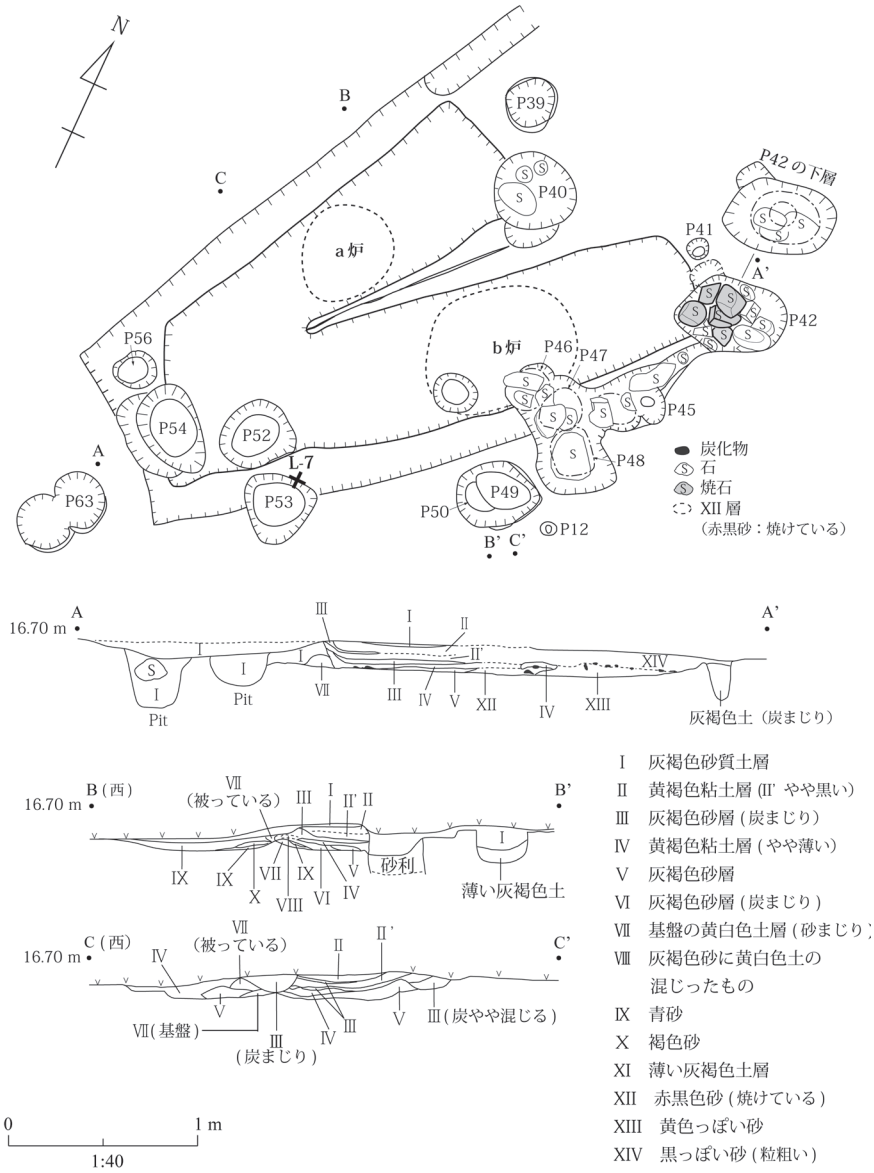
さて、他の２者のうち a・b 竪穴の関係については、これを考えるためのいくつかの手懸かりがある。ひとつは M-8 区における壁の切り合いである。即ち、そこでは a 竪穴とこれより 20°ほど右にフレた長軸をもつ b 竪穴の壁どうしがイの点で切り合っている。そしてイの北西部、a 竪穴の壁と b 竪穴の周溝の間の部分 (三角形イロハ) は、地山および３号竪穴埋土の灰色砂質粘土層に酷似した、遺物のみられない灰色砂質粘土（やや褐色味をおびる）が構成していた。この土は叩きしめられたかのように固いために、その色調もあいまって、地山と見紛うほどであった。これらのことから、a 竪穴が先にあって、後にその一部（イロハの部分）を埋めて突き固めて、また逆にイの東では a 竪穴の壁を掘りこむ形で、b 竪穴が建てられたと推定できる。

つぎに、竪穴中央の炉址をみよう (第９図)。ここでは、外見上２つの炉が、各々の南西側の短辺がほぼ重なり合う形で切り合っている。このため、これら２つの炉 (西北のものを a 炉、他を b 炉とよぶ) の各長辺のうち内側の方の地山が大幅に削られることになり、その結果、削り残された地山部分が岬状に南西方向に突き出すかっこうをとる。ところで、この岬状のものは b 炉の南東側長辺と並行にのびているために、先の方では a 炉側にくいこんでいる。そして炉の断面図 B-B'・C-C' にみられるとおり、この a 炉側にくいこんだ部分Ⅶは、地山そのものではなく、地山の土を積んだものⅦ・ロである。つまり時間的には a 炉が古く、これを放棄後、a 炉の南東側長辺のおよそ南西半分を切って、そこに地山の土をつぎたして炉のワクをつくり、b 炉となしたと考えられる。これら炉の方向、および周溝との位置関係からみて、b 炉が b 竪穴に伴うものであること a 炉は a 竪穴に伴うものと推定できる。

次に、これら各竪穴住居について述べる。

a 竪穴住居址

この竪穴住居址の存在を最も明確に示すものが、上にもふれたL-7・8区にまたがってのびる溝である。断面がV字形をなし、幅は3~8 cm、深さは2~4 cmである。これは一方でL-7区中ほど東よりの大きなピット25にいたって方向を北西に転じ、それより先に1.5 mくらいのびている。もう一方は、L-8区中央でb竪穴住居址の内溝によって切られているが、おそらくそのままの方向で約50 cmのびて、西に屈曲したものと思われる。その屈曲部は、これまたb竪穴住居址の外溝によって切られているが、そこからb竪穴住居址の外溝と分かれて西にのびる溝が先のa竪穴住居址の溝につながるものであろう。ただし、これもb竪穴住居址の内溝の屈曲部あたりで跡切れる。そしてM-8区にはいって、a竪穴住居址南壁直下には、これの続きと思われる溝が50 cmほど残されており、a竪穴住居址西南隅から壁沿いに北西にのびる溝につながっていたものと考えられる。



第9図　3号竪穴住居址の炉址

このようにa竪穴住居址の溝がめぐり、かつ、そのすぐ外側に竪穴の壁がつくられていたと想定すると、このa竪穴住居址は、その南西隅を頂点とする縦長の六角形の平面形をなすものと理解できる。したがって竪穴の長軸は、北東壁の中点、おそらくピット19あるいはピット17付近と、この南西隅を結ぶ線に合致するものと考えられる。失われた北西壁が、この長軸を中心にして南東壁と線対称の位置にあったとすると、それは破線のように推定・復原できる。この場合およそ7.3 ㎡、竪穴床面積の二割弱が失われたことになる[3)]。

次に柱穴を検討し、さらにそれのあり方をもとに竪穴住居の上屋の構造を考えよう。ただし、ピット自体は多数認められているものの、後に建てられた竪穴住居などのピットとの区別が不可能なものが多く、しかも竪穴が破壊を蒙っているために、ピットの配列に企画性を読み取ることは、一部を除き容易ではない。

ここでは差し当たり、深さが20 cm以上のピット（太く囲んだもの）が主要な柱穴であったと仮定して、これ

らを中心に考えることにする。まずa竪穴に関しては、想定される長軸およびその付近に位置する一群（「長軸柱」）として北東側から7・38・39・40・54・63・87~91・93~96、同南東周溝沿いに位置する一群（「側壁柱」25・110・115~117・119）、および丁度これらの中間にほぼ等間隔で一列に位置する一群（「中間柱」24・27・42・48・49・70・82・79）が挙げられる。竪穴北西側は崩落が著しいために柱穴の遺存状況も悪くa竪穴住居址に関しては関連する柱穴を挙げることができない。さて、これらのうち94もしくは96は既に述べたように、竪穴の長軸上、頂点に位置する太くて深い柱穴である。同長軸上のもう一端、即ち北東壁中央に、これに対応する柱穴があってよいはずであるが、94・96のようなしっかりしたものは見当たらない。強いて求めるとすれば上に述べたように、やや浅いが17あるいは東に振れるが11がこれにあたろうか。また、長軸上、炉の両端には一般に各一本しっかりした柱穴がみられることが多い。a竪穴では38もしくは39、これに対応するやや浅い56（54・63も可能性をもつ）がこれに該当するものと思われる。上屋を支える支柱はこれら4箇所の柱穴にいれられたのであろう。

南東周溝部では、深さが18 cmとやや浅いが110と一対で側壁を三等分する位置にある太い102を主要な柱穴とみることができよう。それかあらぬか、後に述べるb竪穴でも同じ位置にそれぞれ柱穴119・113がみとめられる。問題は、北東そして南東の各隅に位置する25と117である。これらがa竪穴に伴うものであるとすれば、側壁は各隅、および、それらの間に位置するやや浅い102、そして110に立てられた柱で構築されたことになる。ただし同型式の住居と考えられるb竪穴では、これら隅の柱穴にあたるものが明らかではなく、また他のオホーツク文化期の住居でもこれらを欠く例が少なくないので、ここでは断定しないでおく。

これら側壁をなす柱穴列と竪穴長軸の中間で、これらと並行にしかもほぼ等間隔に位置する42・49・70・82（中間柱）が、また長軸をはさんで82と対称の位置に62が認められるので、42~70に対応するものも炉の北西側にあったことが推定できる。そこに立てられた柱の役割が、上屋を支えることにあったのか、床の懸架、あるいは、間仕切の支えなどであったのかは明らかではないが、b竪穴その他に類例は多い。a竪穴にともなったピットはまだ他にもあろうかと思われるが、残念ながら確実にそれと指摘できるものはない。

最後に、炉について検討する。a炉がa竪穴住居址に伴うものであろうことは、両者の位置関係、特にそれらの長軸が、ほぼ重なり合う点からまず動かしがたい。これは長さ約2.1 m、幅0.6 mの長方形の平面形をもち、この部分を浅く掘り凹めてつくられている。炉の中ほどやや北寄りで炉底面が直径約0.5 mの範囲で熱をうけて赤変・硬化している。炉の東半部では、先に層位のところで述べたように、炉底面上に青砂が堆積している。これらは炉の西半部では、痕跡をとどめるにすぎないが、もとは全面に分布していたものと考えられる。くわえて、炉のほぼ中央部では、青砂上に径0.5 mくらいの範囲で、火熱をうけて変色したものと思われる黒褐色砂が認められる（破線部分）。また、この矩形の部分を縁どるような浅い段が炉の北西長辺と南西短辺に設けられている。これらは0.2 m前後の幅をもち、底は平らで、床面からの深さは3~4 cmほどである。他方、北東短辺側にはこれらはまったく認められない。また、東南長辺側では、b炉の築造で破壊された南半部は別にして、その北半部では、段ではなく、法面が設けられている。このような長辺の構造の非対称性はb炉でもみられるが、その意味するところは明らかではない。なお前記、北西長辺の段の北東延長方向に、これに続くかのように幅0.2 m弱の浅い溝が0.7 mほどのびている。それもまた用途不明である。また炉の周辺、南北両端部付近には礫が目立つ。すなわち炉の北東隅のピット40の中の大小3個、南西隅外側のピット63内外の3個などがそれである。これら石は特に焼けているようにはみえないので五徳の機能を果たしたものではないと判断できる。

さて、一般にオホーツク文化期の竪穴住居では、炉を三方から囲む形に粘土床（土間）が設けられ、炉は、竪穴中央よりも、その粘土床の開口部側にやや寄った位置に造られる。この3号竪穴住居址では、粘土床はみられないが、床の構造あるいは住居空間の意味としては意識されていたものと考えられる。

遺物の出土状況

竪穴住居址床面上でいくつかの遺物が得られている。しかし、a竪穴の床面は、ほとんどそのままb竪穴の床面として後に用いられているために、確実にa竪穴に伴うといえるものは、ごく僅かになってしまう。即ち、竪穴の奥壁頂点、ピット96の両側で発見された土器がそれである。いずれも壁直下の周溝底上にあり、上に述べた地山との区別が困難な程それとよく似た灰色砂質粘土層（やや褐色味をおびる）によって覆われていた。それらのうち、ピット96の東側の2点はいずれも破片であるが、西側では底部破片とともに、胴部に型押し文の施文された小形の土器（第41図：2）が正立した状態で見出された（PL. 4）。なおこれは、おそらく重機によると思われる削平によって口縁部は発見の当時既に欠けていたが、元々はa竪穴使用時の位置・原形を保っていたものと思われる。ではこの土器の口縁部はどのような文様をもっていたのであろうか。一般に、胴部文様に型押し文（すなわち刻文系文様の一種）をもつ土器の口縁部文様は刻文系、もしくは刺突文系であり、沈線文や貼り付け文をもつ例は知られていない。そしてこの遺跡で刺突文系文様をもつ土器は2号竪穴住居址例（第22図：4~8）など極めて稀であることから、この土器は口縁部に刻文系文様をもっていた可能性が高いこと、したがってa竪穴の時期はオホーツク文化の中期であったことを推定できる。

b竪穴住居址

この竪穴住居址は、その南東部で、地山を掘り込んで壁を造っており、壁が比較的よく残存している。L-8区で北東～南西方向に、ほぼ対角線上にのびる壁がそれであり、南東側壁にあたるものであろう。もっとも、これも重機による削平を全体に受けている。特に、北東に向かうにつれてその破壊の程度が甚だしくなるために、竪穴東隅にあたるL-8区北東隅では壁高はほとんど無いに等しく、また逆に、竪穴南隅にあたる同区南西隅近くでは20 cm程度残っている。この竪穴南隅をまわってM-8区にはいると、南壁の一部がイのところまで残されている。このあたりで壁高は30 cmに達し､最もよい保存状態を示す。壁はだいたい45°前後の角度で法面をもち、直下の周溝にほぼ直接つながっている。南壁のイより西、ハ・へのつながりに関しては、a竪穴を灰褐色砂質粘土で埋めて突き固めて造った壁があったと思われるが、壁としてはとらえられなかった。また、竪穴東隅より北の北東壁にあたるものは、重機によって完全に削りとられており、認められない。

壁に沿って、その直下に周溝がめぐっている。断面の形は、南壁部ではV字形、東南側壁部では逆台形をなす。規模は、前者で幅・深さとも5 cm内外、後者では幅は10 cm余り、深さは3~2 cm程である。さて、この周溝は南壁部イより西方ではやや外側に張り出し、a竪穴の周溝と重複する形で終っている。これより先、南西壁部の周溝末端との間1 mほどの空間には、他のいずれの竪穴の場合でもそうであるが、溝は痕跡すら認められないので、ここで周溝は一端途切れるものと考えられる。南西壁部では、断面が逆台形をなし、幅15 cm、深さ6~7 cmほどの規模をもって、僅かに内湾しながらのび、柱穴62に至っている。他方、L-7区北東壁部では、これに続くものは全くみられない。この辺りが重機による削平の被害の最もひどいことは先にも述べた。壁が全く残されていないのもそのためであろう。しかし、断面図にも明らかなとおり、削平が床面にまで及んだことは考えられない。また、実際、次に触れる内側の溝はここでも残っている。 従って、床面の余程高い位置に周溝が設けられていたことを想定しない限り、ここに周溝が本来あったと考えることはできない。ひるがえって、東南壁部をみると、周溝の掘り込み面は、なる程内側の溝より幾分高いが、それとてもせいぜい数cmの差にすぎない。したがって、この程度のレベル差で周溝が東北壁部にも設けられていたのであれば、それは何らかの跡をとどめている筈である。それが全く認められない以上、ここには他の壁部にみられた周溝は元もと存在していなかったものと判断せざるを得ない。

内側の溝は、外側の周溝と、近いところで5 cm程、遠い部分では30 cm位の間隔をおいてめぐっている。断面形はほとんどの部分で逆台形であるが、南東側壁部の南部ではV字形に近い。幅は、このV字部で5~10 cm

と狭く、他では大体 15 cm 前後で、東隅部では 40 cm 余りに達している。深さは、西壁部と東隅部で 7~8 cm と深いほかは、3~5 cm である。なお、この溝は、南壁部中程で a 竪穴の溝と重複し、その先、西方には大きなピットが連なっているため、南西壁部側の溝との直接のつながりは確認できない。また、北東壁部の中央付近では、柱穴より東方に 1 m 位の間が抜けている。これは先にみた a 竪穴の周溝における不連続部分とほぼ同じ位置にあたるので、住居の構造にかかわる共通の特徴であるのかも知れない。

問題はこれら 2 本の溝の意味である。両者は、間隔がきわめて狭く、また、形態が相互によく類似しており、異なる意味をもっていたようにはみえないので、同時に存在したとは考え難い。そして外側の溝が東北壁部で欠けていることは、内側の溝をそのまま緩用したためと理解できる。つまり、初め内側の溝を周溝とする竪穴が建てられ、後にその東北壁と周溝はそのままにして、少なくとも南東側壁・南壁・南西壁部を拡張する形で改築が行なわれたと考えられる。いずれも溝および壁のあり方からみて、ほぼ柱穴 87 と 27 を結ぶ線上に竪穴長軸が置かれていたものと思われる。ただしこのように考えても、それらの間の時間差がどの程度のものであったのか、住居の他の部分でもこの様な変化があったのかは不明であり、また各々に伴う柱穴を特定することも一部を除き、困難である。従ってここでは、特に断らない限り両者をまとめて扱うことにする。

ピットについて、a 竪穴の場合と同様に、深さ 20 cm 以上のものに主に注目すると、やはり長軸上の列、側壁上の列、そしてこれらと並行にそれらの中間に位置する配列を認めることができそうである。即ち、まず長軸上のピット列では、頂点近くのピット 87、北東壁中央でこれに対応するピット 27（24 も？）、炉の一端に位置するピット 54 などがそれであり、炉のもう一端にみられるピット 41 も、15 cm とやや浅いが、ピット 54 に対応するものとして、これら主柱穴に加えてよいと思われる。南東側壁部では、相互の間隔が若干小さいが、側壁を三分する位置にあるピット 116・113 が壁を支える柱をいれたものと考えられる。そして、これらと長軸の中間の ピット 79・106、それに 10 cm とやや浅いがピット 104 がほぼ等間隔に一列に位置し、また、長軸を介して、それと対称にピット 61・57 および、11 cm と少し浅いがピット 20 の一列が位置する。このように、縦位 5 列の柱穴列からなると推定される住居の構造は a 竪穴の場合と基本的に一致している。

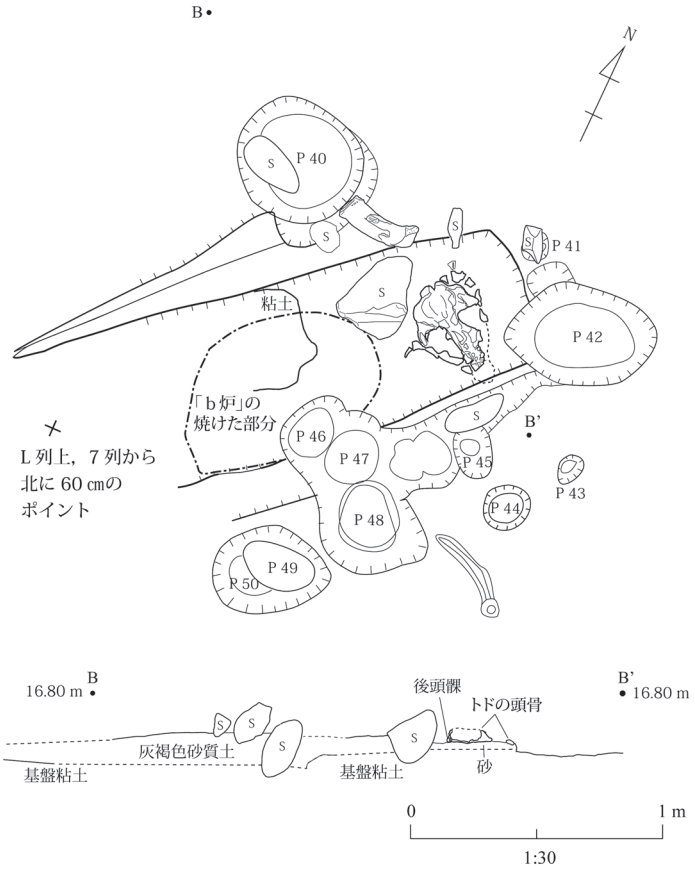
炉に関しては、竪穴との位置関係から、b 炉がこの住居に伴うものと判断される。長さ 3.1 m、幅は 1.0 m 前後で、床面から 10 cm 程掘り窪めている。また、a 炉と逆に、南東側の長辺の方を幅 20 cm 位、深さ 5 cm 程に平らな段状に削って炉の縁としている。これに対して北西側の長辺では、北半は地山を斜めに削って炉の縁に法面をつけ、既存の b 炉に重なる南半では、地山に類似した土で幅 10 cm、高さ 5 cm 程の断面三角形の土手を設けて、上記の法面を延長している。そして、この土手南端から、その真向い側南東側長辺には、炉底を幅 15 cm、高さ 5 cm の断面三角形に削り出した土手がつくられている。炉の断面図（第 9 図）A-A' にみられるように、砂・粘土・炭などからなる炉内堆積物の薄層は、いずれもこの炉底面状の土手のところで収束しており、土手を越えるものはない点から、b 炉の場合、その実質的な南西側の炉辺は、この土手の部分に置かれていたと考えられる。事実、熱を受けて赤変硬化した炉底部分は、この短辺と北東側短辺のほぼ中間、中心よりかなり北東寄り（下座側）に、径 0.6~0.8 m の規模で存在する。この土手の外 (南西) 側は、炉内とはいえ、燃焼とは直接関りのない部分であったと思われる。

ところで、この炉の北東短辺中ほどから南東側辺の北東部にかけて、ピット群とこれをつなぐ溝状のものがめぐっており、その中に礫が集積している（PL. 5）。すなわち北東隅ピット 42 の中で積み重なった状態でみつかった 15 点、ピット 45~48 内の 6 点、および a 竪穴の炉の記述で触れた南西外側ピット 63 内外の 3 点などがそれである。また、炉の南西端部から a 炉の南西部を覆って、さらにその西方にも若干拡がる範囲に礫群の分布がみられる。ほぼ炉の両短辺近くに対置されたような位置的関係から、これらは一対のものであったと考えられる。ただ南西部の礫群は a 炉に関る可能性もあり、もしそうであれば、北東部の礫群は b 炉をつくる時に a 炉から移されたことになる。これらの礫は、b 炉北東隅のピット 42 中の 6 点を除くと、強熱された痕跡はみられない

ので、燃焼に直接関係するものではないであろう。あるいは炉の両短辺部に並べられていたものであるのかもしれない。他方ピット 42 中の 6 点は五徳のように使われたことが考えられる。いずれにせよこれらは、炉を部分的に破壊するような形でピット中に集積したり、乱雑な分布をみせる点から、後にかなり動かされているものと判断される。

遺物の出土状況

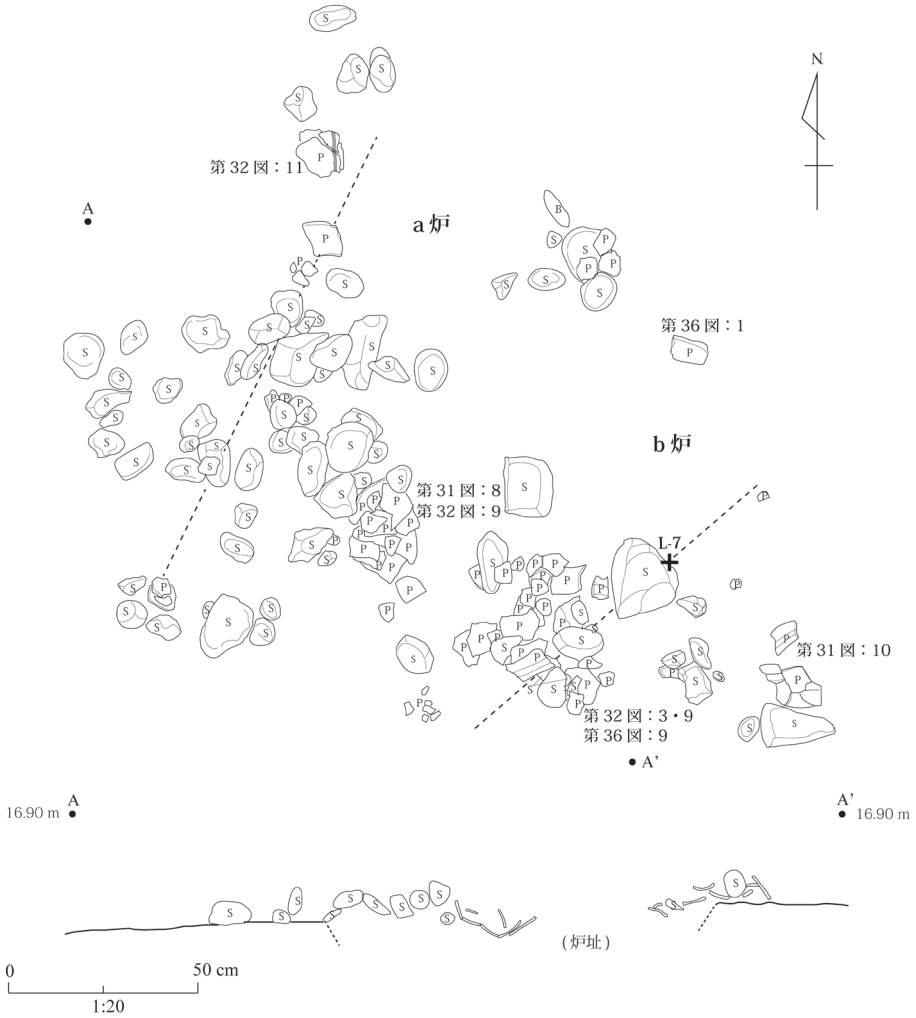
すでに述べたようにｂ竪穴住居址の床面レベルは先行したａ竪穴住居址とほとんど違わない。したがってａ竪穴住居址に重なる部分のｂ竪穴住居址床面の出土遺物中に、本来ａ竪穴住居址にともなったものが混入することは充分あり得る。したがって厳密には、ａ竪穴住居址外のｂ竪穴住居址固有の範囲の床面出土遺物のみをｂ竪穴住居址にともなうものと言える。この条件にかなう資料は、人工物では僅かに石鏃 1 点にとどまる（第 46 図）。これは竪穴東隅、内側の屈曲部北側、同周溝中の石の間で得られた。また L-7 区内その南西四半分部のｂ炉北東端部、炉の砂に部分的に接してトドの頭骨 1 点が南東方向を向く正置状態でみつかった (第 10 図、PL. 6)。これは左右の下顎骨を伴い、焼けていない。ただし儀礼的な要素は認められず、その直ぐ側で灰褐色砂質土層内にあった 30 cm 大の石や焼けていないクジラの肋骨などとともに、ｂ竪穴住居址廃棄後の埋没過程で残されたものと考えられる。



第 10 図　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（3）

このほかに比較的まとまった状態で出土した土器群がある。そのひとつは、炉の南西側の礫群中の土器群である。ここでは第 19 図：10 がｂ炉の南東側辺の南東端近くに見出され、そのすぐ北西側ａ炉の南西隅にあたるところに第 31 図:8 と第 32 図:3 が、その少し北に小型の第 32 図:11 がいずれも完全に壊れてはいたが、各々 50~60 cm ほどの範囲内にまとまっていた（第 11 図)。さらにｂ炉の北西長辺の土手の先端辺りでは、第 36 図:1 が発見された。またｂ炉の東側ではピット 102 との間で土器（第 31 図：3）などがみられた（第 12 図・PL. 7)。ほかにａ炉の南西短辺のすぐ外側に小形の土器（第 31 図：6）がほぼ完形の状態で存在した。ただしこれらはいずれも床面からやや浮いており、また当時置かれた元の位置で埋まったあるいは潰れた状態ではなく、かなりの広がりをもつ。したがってこれらは 3 号竪穴、今の場合ｂ竪穴にともなうものではなく、そこに堆積中の埋土内にあったものと考えられる。

いずれにせよこれらの竪穴住居址は他の例からみて炉の南側が「上座」であり、反対側・北が「下座」すなわち出入口側であると考えられる。つまりこれらの住居は北側に向けて建てられたものであり、それはチカポオツナイ沢に沿って延びていたと想定される海へのアクセス・踏分道への利便性によるのであろう。なお、出入口の実際の位置・構造は未詳である。



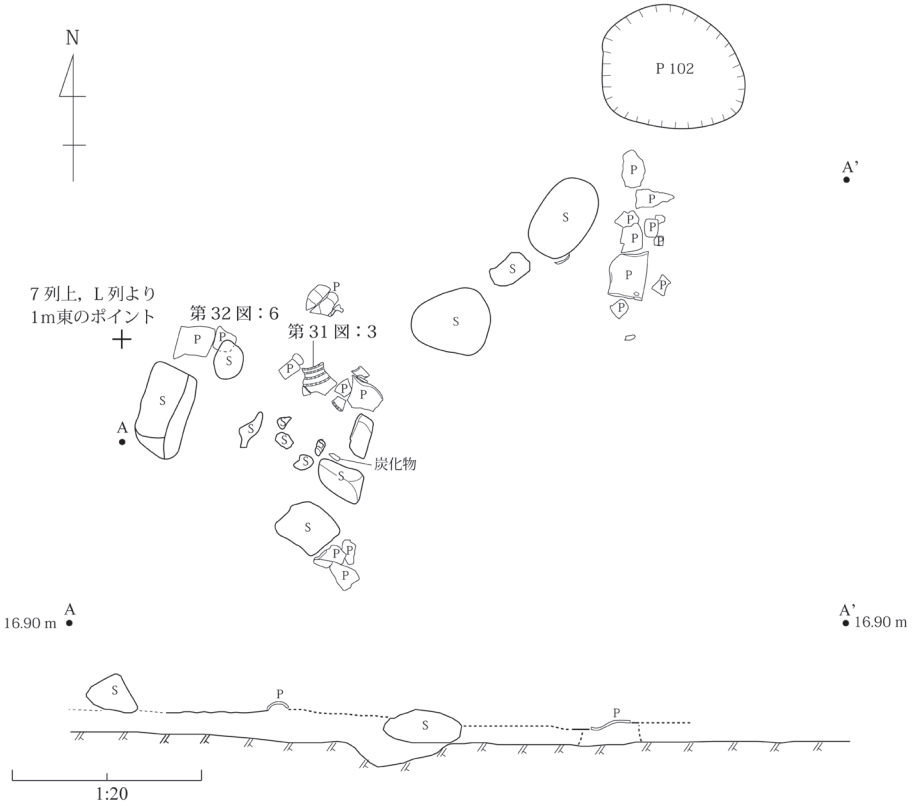
第11図　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（4）

加えて竪穴住居址外、南方M-9区の北西部では土器の底部（第13図：22）がうつ伏せの形で粘土層にめり込んだ状態で見つかっており、また同じく竪穴外、北側のピット4からはスラグが得られている。この遺跡では鍛治の炉壁・羽口に転用された土器（沈線文をもつ）がこの3号竪穴住居址埋土例（第35図：13）のほか2号竪穴住居址の埋土中でも見つかっており、後期にも鍛治作業が行われたことを推定できる。のちに総括のところで検討する。

以下、先に述べた層位ごとに遺物を記載する。

§2b.　3号竪穴住居址出土の土器・土製品

3号竪穴住居址関係の調査によって得られたオホーツク式土器は、口縁部で数えて925点であった。そのうちで、いずれかの竪穴住居址の床面上で発見されたもの即ち、いずれかの竪穴住居址に確実に共伴したと判断できる土器は僅か4点に過ぎず、他は竪穴住居址埋土・包含層中で得られた。もっとも後者の中に、本来竪穴住居址に伴っていたものが含まれている可能性は、竪穴住居址床面出土の土器片に同埋土出土のものが接合した第40図：2の資料が存在することなどからも小さくない。特に竪穴住居址中央部で床面に接して堆積している層中で土器片が比較的良くまとまった状態で得られた資料については、その可能性が大きいと考えられるので、個々の記載の所でその旨特記する。なお、このように本来より下位の層位的位置にあった土器あるいはその一部のも



第12図　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（5）

のが、後の二次的営力によって上位の層中へ移動することは、層位を異にする土器片同士の接合資料がかなりみられる点から、他の層においてもある程度起こったと推察できる。しかし先に層位の所で述べたように、ここでは竪穴住居址放棄後明らかに時期を異にする活動がここで行われ、それらによる層が形成されている。そこでこれらの活動を理解する手がかりを得るために、土器を含む遺物を前記の層位ごとに記載しよう。なおオホーツク式土器の他には、個体を異にする擦文式土器の破片が2点得られている。

Ⅰ層　表土層出土の土器（第13~24図）

Ⅰ　オホーツク式土器

未詳品ミニチュア土器を除くと全容のうかがえる資料はない。口縁部資料について文様要素によって分類を行うと沈線文系文様をもつ土器が多く28.4%を占める。貼付文系文様をもつ例がこれに次ぎ27.0%、刻文系例24.0%・無文例20.4%となる。これを資料数の多い第Ⅳ層と比較すると、第Ⅳ層において40%余りを占めていた沈線文系文様をもつ土器が大幅に減少し、ほぼその分だけ貼付文系文様をもつ土器が増加した点に本層の土器群の特徴を認めることができよう。

ただ、それにしても土器群全体に占める貼付文の割合は27%に過ぎず、ここではなお沈線文・刻文をもった土器が主である。しかも貼付文系文様をもつ土器の中ではHg擬縄貼付文が最も多く37.6%を占める。これにHcタイプ(23.0%)、Haタイプ(16.9%)、Hbタイプ(14.6%)と続き、Hdタイプは7.0%、Heタイプに至っては僅か0.9%に過ぎず、しかも典型的とは言えない例に尽きる。また貼付文様自体Hc・Hd・Heタイプでは細かく優美なものが多いが、Ha・Hbタイプでは太いものや太さにムラのあるものが目立ち、擬縄貼付では太さ3~4 mmで断面四角形の例がほとんどである。

器形の面では肥厚帯の無い甕(Ⅰ型)が一般に主である。ただ貼付文系土器では肥厚帯をもつ例がやや多いが、

それも第4図：2・4のように顕著な例は稀である。但し繰り返すことになるが、これがある一定の時期の土器群の特徴を表すことは、その層位的条件からみて期待できない。それはむしろ、より大きな時間的な流れの中における土器群の変遷の傾向を反映するものと理解すべきものであろう。

貼付文をもつ土器（第13図：1・2、第15図）

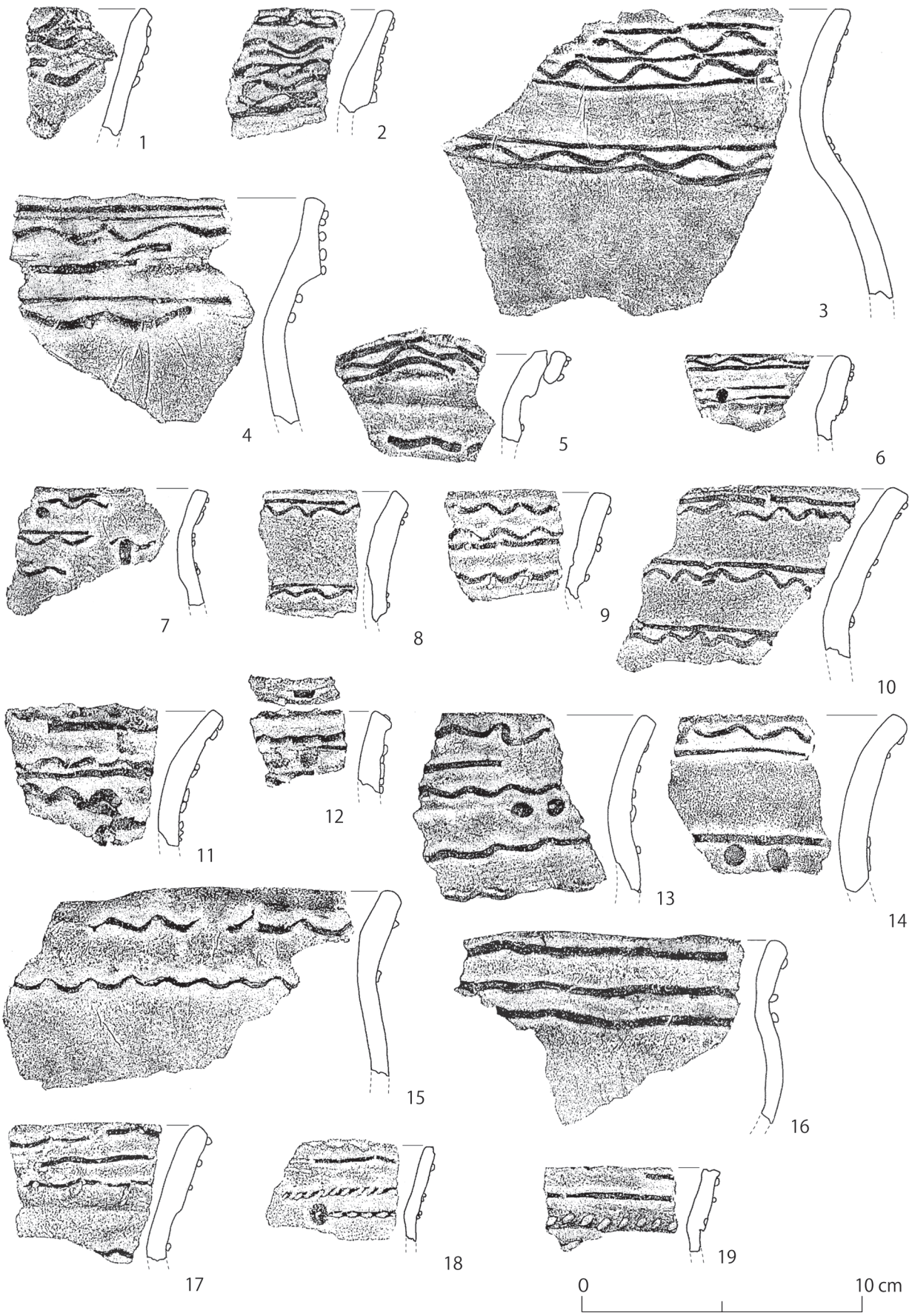
ある程度復原できた資料は2点である（第13図:1・2）。いずれも波状の貼付文をもつが、器形は互いに異なる。前者はやや幅広い肥厚帯をもつ開きの小さい口縁が、直立気味の長めの頸部に続き、肩部が角をもって張り出すⅠb型の器形である。口縁中ほどから肩部にかけて、波状の貼付文を5段めぐらし、更に肥厚帯下縁部の貼付文には6cm前後の間隔で小貼付文を加えている。また最下段のものには谷部から懸下する形で貼付文が太くなった部分がみられる。但しこの段は特に剥落が甚しいために、他にもこのような部分があるのか不明である。後者は頸部の縮約・肩の張りが小さく、口縁の開きも大きくないⅠd型の器形である。波状の貼付文を口縁～頸部に3段めぐらせている。

次に破片の資料によって特に文様のヴァリエイションをみることにする（第15図）。本層中の資料には、典型的な形のHeタイプの文様は認められないが、1は直線の貼付文を欠き、互いに波長・波高が多少異なる波状貼付文2本を1対にしたものを、やや間隔を置いて2段めぐらしており、Heタイプに近い例といえよう。2は肥厚帯上下縁に各1本、またその中間にも1本、いずれも太目の貼付文を直線状にめぐらせ、これらの中央部に篦状のもので等間隔に刻みをつけることによって鎖状の形態を生み出す特異な例である。そして中間部の鎖状の貼付文に接する形で、その上側には2本単位の、下側には1本の貼付文を波状に配している。3~12は直線と波状の貼付文が複合する一般的な例であり、うち4・5は顕著な肥厚帯をもつ。また5は厚い粘土帯を口縁部に部分的に貼り付けて小隆起部を作り、この上に貼付文をめぐらせている。6~8は繊細な貼付文の例であり、前二者には小貼付文が加えられている。9の肥厚帯下縁上の貼付文は爪先で押し上げる形で波状に作られており、その際につけられた爪痕が肥厚帯下縁に残されている。同様のものは17にもみられる。この9・10の貼付文が平均的な太さだとすると、11・12は太目の例と言える。13・14は直線と波状の貼付文を離して施文する稀な例である。もちろんこれをHaとHbの併用例とみてHbの所に分類することも可能であるが、ここではHcの変形とみておく。波状のみの貼付文は少なく、15がその代表例である。波頭部を下方から押さえた痕が良く認められる。直線状貼付文も多くない。細い例(16)、太い例(17)とも不規則な波動が若干みられる。貼付文と擬縄貼付文の併用例は3点あり、いずれも直線状のものであり、また貼付文は細く整っている。うち18は斜位の刻みと横位の刻みのみられる例である。貼付文と刻文は肥厚帯下縁に施文されている。肥厚帯は19ではさほど発達していないが、図示しなかった方では幅も広く、かつ下方に向かって厚みを増し顕著な段を成す。

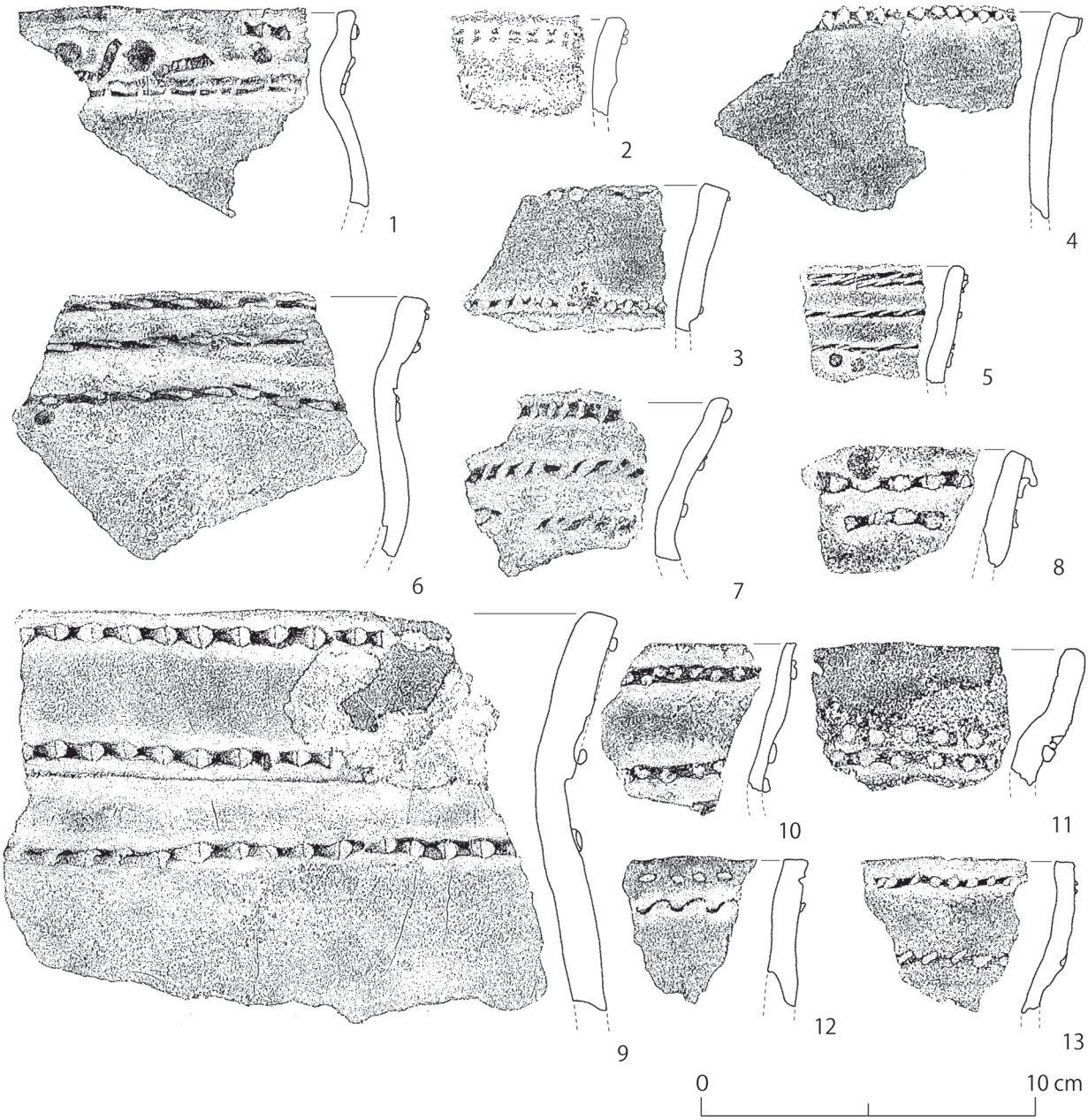
Hg擬縄貼付文をもつ土器（第16図）

口縁を含む資料では実測し得る程に復原できた例はない。破片資料でみると貼付文はほとんどが直線状のものであり、ただ1点の例外を図示する（1）。やや太めの貼付文を用いて、直線状と不規則な形の波状のモティーフを描いている。直線状の貼付文も3~4 mm程の太いものがほとんどであり、2 mm前後の細い例として2~5を掲げておく。2は口唇直下の相接した2本の貼付文に同時に縦に刻みを施している。この明褐色の胎土は他と異なって著しく脆弱で、1 mm大の灰白色の鉱物を多く含む。本遺跡出土の貼付文土器の一部に良く似るものと言える。3・4も貼付文上に縦位の深い刻みをもつ。5は貼付文に斜位の刻みをもち、最上段のみ2重にめぐらせている。注目されるのは、ここにその始めと終わりの両端末がみられることであり、これはいわゆるチューブ・デコレーション手法に関連するものであるのかも知れない。6~11は太い貼付文例であり、うち貼付文に並行な刻みを入れた6は稀な例である。量的には8・9のように縦位の刻みをもつものが多く、斜位のものがこれに次

第 13 図　Ⅰ層（表土層）出土の土器実測図（1）　オホーツク式土器



第15図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器



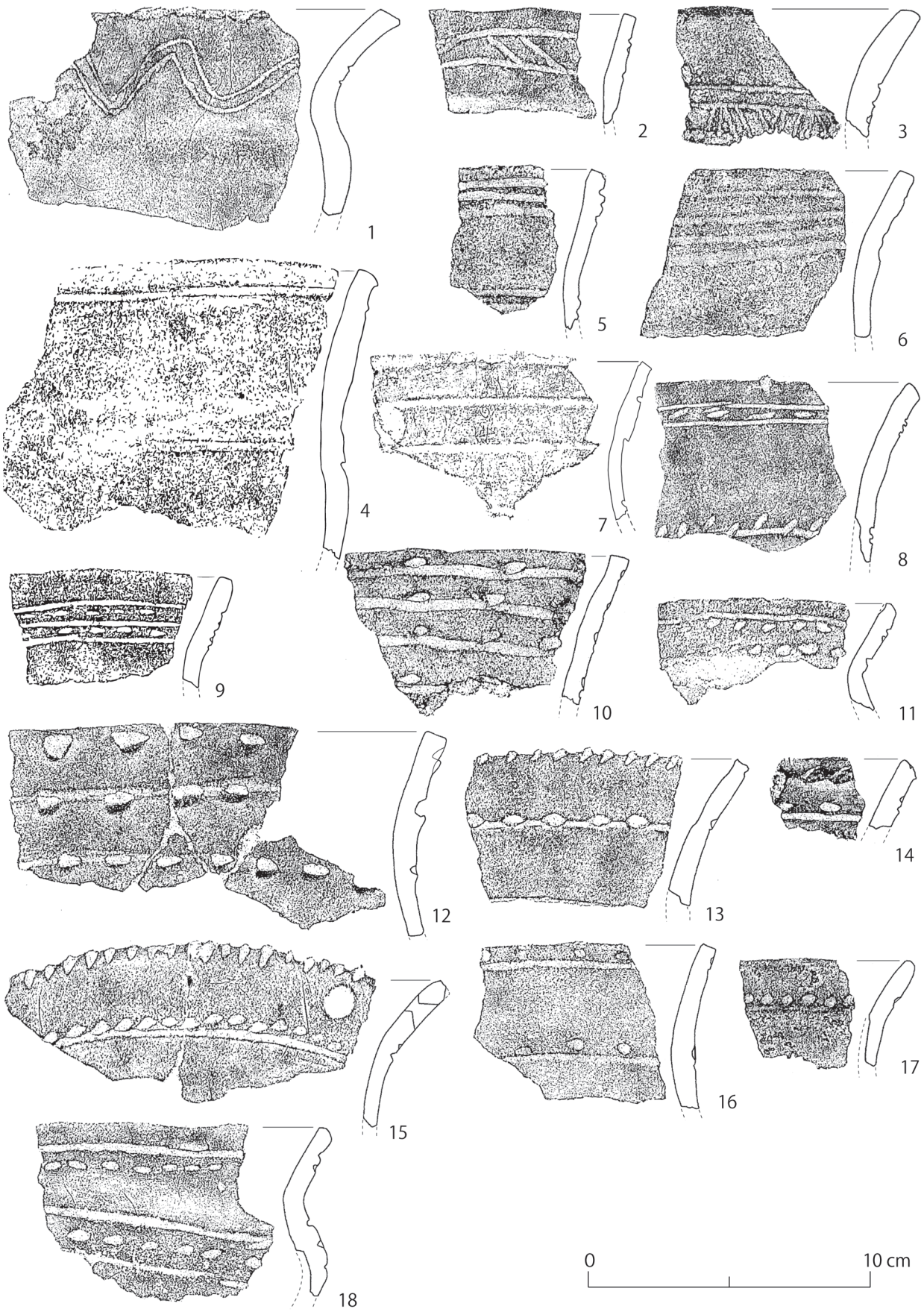
第16図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（2）　オホーツク式土器

ぎ、7などは双方が併用されている。10・11は円形の型押文を重ねたものであり、後者では型押文単独の列が設けられている。12・13は刻文との併用例であり、本層ではこの2点しか得られていない。

沈線文をもつ土器（第17図：1~7）

実測図に掲げ得る程に器形の復原できたものはない。

破片の資料をみると，文様の基本は横走する沈線であるが、ただ1点波状を描く例があり、器形も頸部縮約、肩の張りが顕著で特異である。更にまた横走する並行な沈線間に短い沈線を斜行させる例、更に沈線を鋸歯状に配して、やや複雑な文様を描く稀な例がある（2・3）。後者は擦文式土器の文様に類似している。沈線文は4・5のように頸部近くに施文し、結果的に文様帯の幅を広くとったものと6のように口縁上半部に集中する例がほぼ合い半ばする。7は唯一肥厚帯の作られた例である。深くしっかりした沈線が肥厚帯中央と頸部にめぐらされる。



第17図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（3）　オホーツク式土器

沈線に刻文の複合する土器（第13図：3・4、第17図：8~18、第18図：1~9）

器形のある程度うかがえる資料は2点ある。第13図：3は丸みのある肩部に最大径をもつ小形の土器で、口縁、ことにその外縁は角を落として丸みをつけられている。沈線と刻文列を交互に配する形で口縁から肩部まで文様帯を設けている。なお、口唇直下の刻文列は部分的にしかつけられていない。4は直線的で開きが極めて小さい口縁部資料である。この長めの口縁部に極浅い沈線というより、むしろ幅広、丸底の凹帯を2本めぐらせ、更にその下、頸部辺りに4歯の型押文を一列めぐらしている。これら凹帯は残された擦痕を含め、その形状からみて、指でつけられた可能性が大きい。

破片の資料で文様のヴァラエティーを中心にみていく。文様は一般に横走沈線に近接させて刻文を配し、それらは複段にわたる場合でも同じ形のものが用いられているが、第17図：8などでは口縁上半部と頸部では文様のモティーフもまた刻文の形態も異なっている。刻文は横位のものが多い（同9~12）。13~15も沈線文と複合する刻文は横位のものであるが、口唇外縁に単独に斜位の刻文や爪形文を用いる例である。16・17は極めて浅い刻文、18は頸部の縮約と肩の張りの著しい特異な器形の例である。刻文はこの他、沈線の近くに斜位に刻まれるもの（第18図：1）、あるいは鋸歯状や縦位に配されるもの（同2~5）が僅かながらみられる。うち4は肥厚帯をもつ唯一の例であり、中粒砂を若干含む胎土とともに、異色である。沈線に型押文の複合するものが若干存在する。6~8がそのすべてであり、前二者では刻文も併用され、しかも6では一つの文様帯中で型押文列が途中で刻文列に交替する極めて変則的な例である。9は沈線文と円形刺突文を併用し、口唇外縁に刻文を配する。

摩擦式浮文をもつ土器（第18図：10~15）

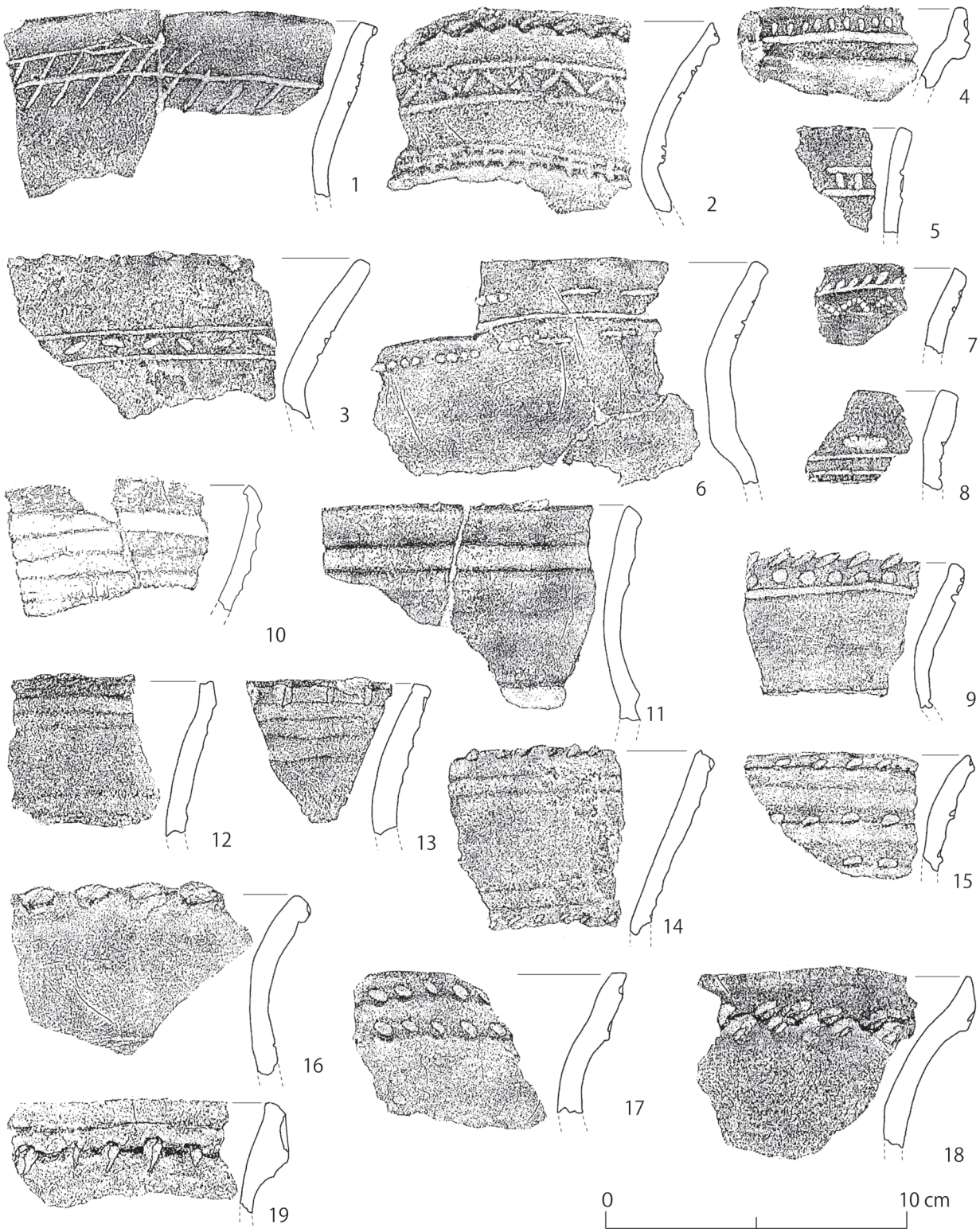
19個体とそもそも数が少なく、破片の資料しか得られていない。幅6 mm前後のやや細めの例（10）が一般的だが、11のように太いものもみられ、その配置も口縁全体に及ぶ例（10）、口縁上半か、同下半からに限られる（11~14）がある。13のように口唇直下、あるいは14のように口唇外縁と頸部付近、さらに15のようにそれらの中間に刻文もしくは爪形文列をめぐらす例も若干みられる。

爪形文をもつ土器（第18図：16~19）

50個体分弱の小破片しか得られていない。16のように肥厚帯が発達せず、また、屈曲に乏しい口縁では一般に文様帯も広くとられ、爪形文は17のように2~3段めぐる例が多い。他方肥厚帯が顕著な例では18のように口縁部の屈曲も明瞭であり、爪形文は肥厚帯下縁に施される。19も同趣の例だが、つまむ形ではなく、爪を立てて深く刻み込んでいる。

刻文をもつ土器（第19図：1~13）

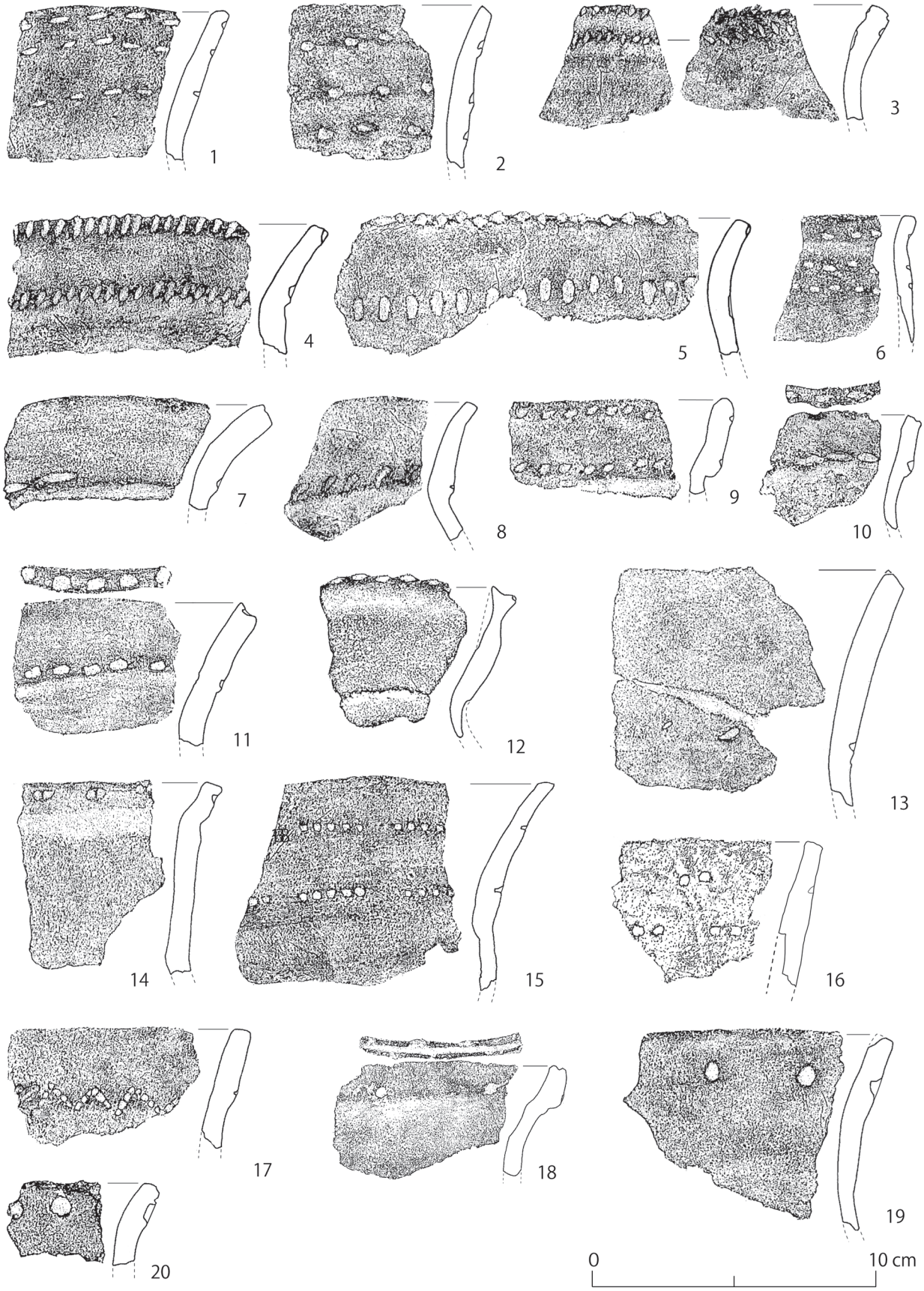
口縁部が屈曲に乏しく肥厚帯の作られないものと比較的顕著な屈曲をみせ肥厚帯の作られるものがあり、前者の方がやや多い。前者では1・2のように刻文列を数段めぐらすことが一般的であり、文様帯の幅が広い。後者では刻文は肥厚帯上下縁（3~5）、もしくは下縁（6~8）に位置が限定される。なお3は内壁口唇直下に二条の隆帯を設け、その上を斜位に刻んでいる。7は口縁の開きが大きく、文様も刻文が不揃いな間隔で施文されており特異である。9は口縁を折り返したためであろうか、肥厚帯下縁がオーバーハングしている。10・11は口唇面にも肥厚帯下縁と同じ刻文をもつ例であり、12は頸部が著しく縮約し、口唇部がやや肥厚する特異な器形を持ち、胎土も極細粒砂のみからなる。13は口縁部が長大な例であり、肥厚帯下縁相当部に刻文が刻まれているが、現資料で隣合っている二つの刻文は大きさに著しい差がみられる。



第18図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（4）　オホーツク式土器

型押文をもつ土器（第19図：14~17）

8個体分の小破片しか得られていない。いわゆる櫛状工具を押圧した例のみであり、やや稀な形をした14も二歯の工具によるものと理解できる。16は、現状はほとんど円筒状の器形であるが、同一個体のもう1片の方は平板状であり、二次的に高熱を受けて極度に変形したものであろう。灰色を呈するのもこの二次的な加熱のためと考えられる。



第 19 図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（5）　オホーツク式土器

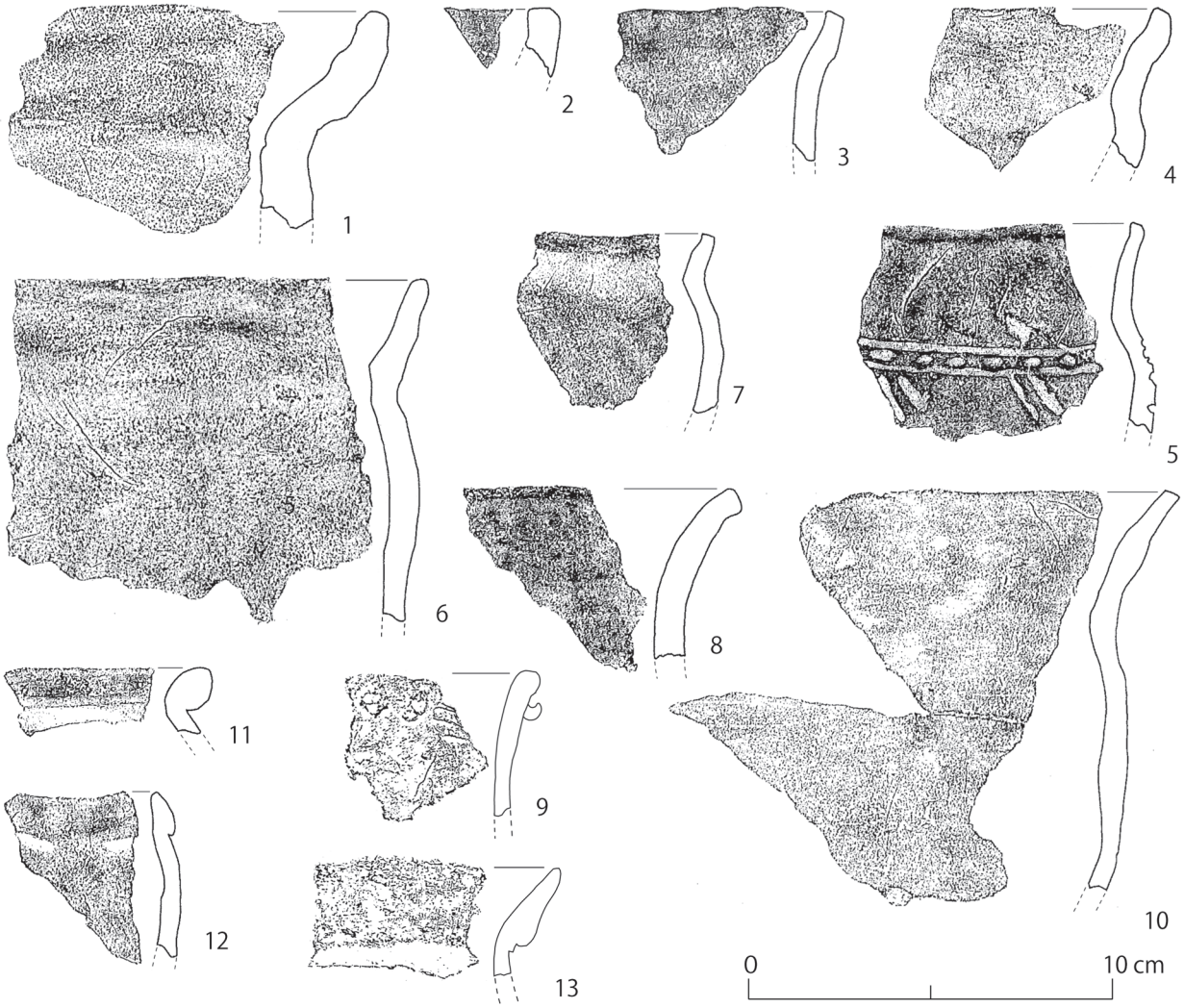
円形刺突文をもつ土器 (第19図：18~20)

小破片3点しか得られていない。肥厚帯をもつ18は文様が極めて浅く、かつ文様間隔が広いこと、さらに口唇面に沈線をめぐらす点ではなはだ特異である。19･20も円形刺突文はやや浅く、内壁に突瘤を生じるには至ってはいない。

無文の土器（第13図：5、第20図）

第13図：5はほとんど円筒形に近い小形の土器であり、口唇部内側が削ぎ落とされている。一塊の粘土から手づくねで作られているようであり、底面近くの内外両壁に押圧痕が明瞭に残されている。胎土は細砂が混ぜられ色は内外とも灰白色である。

破片の資料では口縁が一旦外反して最上部で立ち上がるもの（第20図：1~7と単純に開口するもの（8~10に分けることができそうである。前者にはごく薄い肥厚帯の作られた例（3・4もある。なお1は器厚が1 cmを越し、中粒砂を多く含む。接触様式に属するものと思われる。また6も1に比べると薄手だが、形態・胎土の面では、この種のものと関連すると考えられる。9は小貼付文の上から尖った工具を器表下に深く突き刺している。10は内外壁ともに整形痕が横走し、極細粒砂のみを含む硬い焼成で器形の面では擦文式土器に似ている。無文の土器ではっきりした肥厚帯をもつ例は11~13の3点のみである。11は断面円形の肥厚帯を口縁に貼り



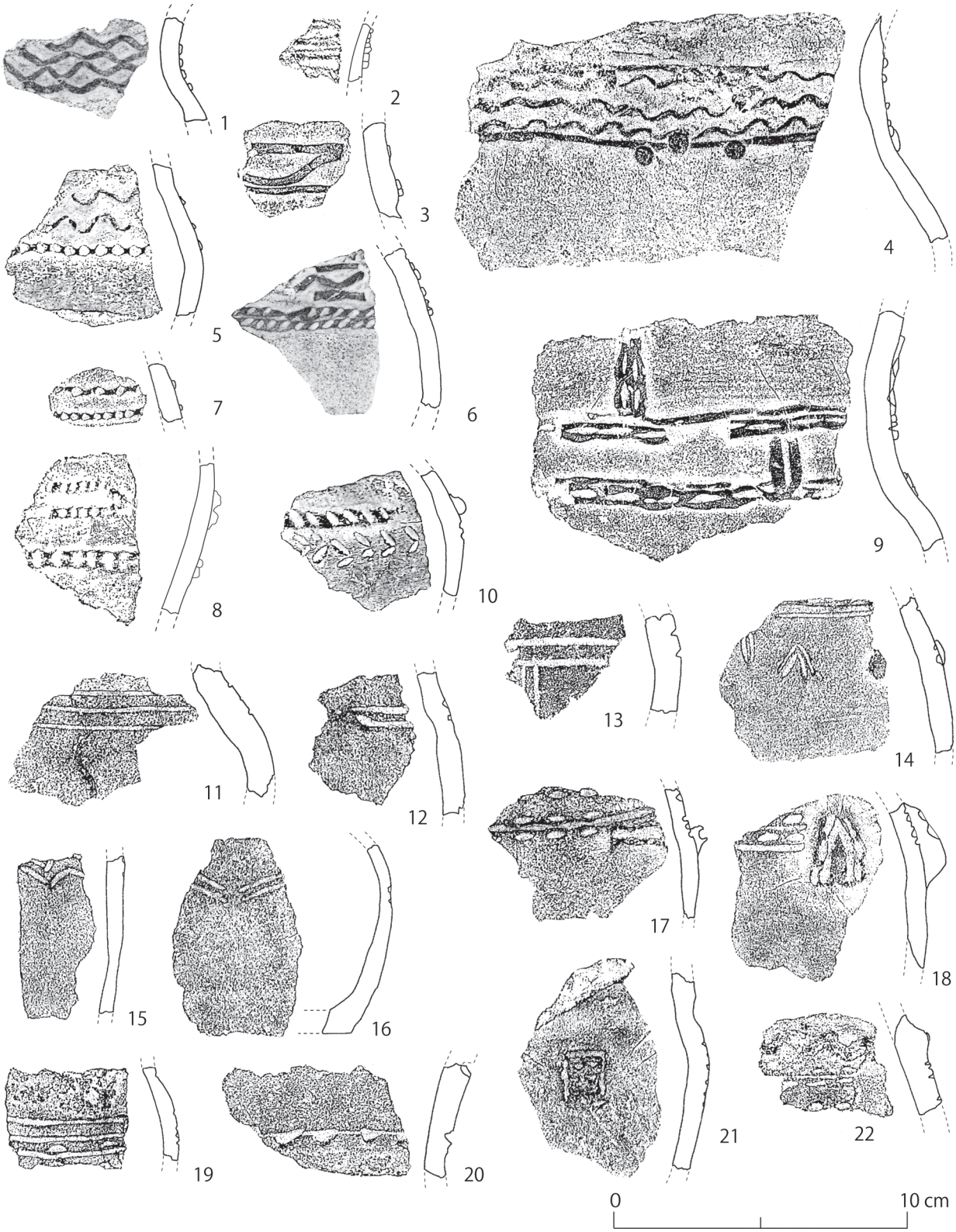
第20図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図（6）　オホーツク式土器

付けたもので、胎土は細礫を含むが入念に研磨されており、緻密であり2に共通する。小形薄手の12はやはり肥厚帯を貼り付けており、器形は口唇に向かって、ひたすら縮約する壺形のようである。13は刻文土器などにみられるものと同様の発達した明確な肥厚帯をめぐらす。

胴部の資料（第13図：6・7、第21図、22図）

器形をうかがえる資料は2点あり、うち一例は小形のやや特殊なものである。第13図：6は口縁下半から胴部にかけての資料で、器厚が9 mm前後と厚い。直線状の貼付文を0.5~1 cm程の間隔をおいて強く押し込んでいるため、押圧された部分は特に土器の表面よりも深く凹んでいる。現在残っている二条の貼付文のうち、上段のものは押圧が下方から突き上げ気味に行われたことによって波状を呈するが、定型的ではないので、必ずしも波形を意図したものではないであろう。また下段の貼付文下縁には円形の小貼付文が2個ずつ付されている。外壁は良く研磨されており緻密である。7は胴径が9 cmであり、器高はおそらくそれを越えない短寸、小形の土器である。

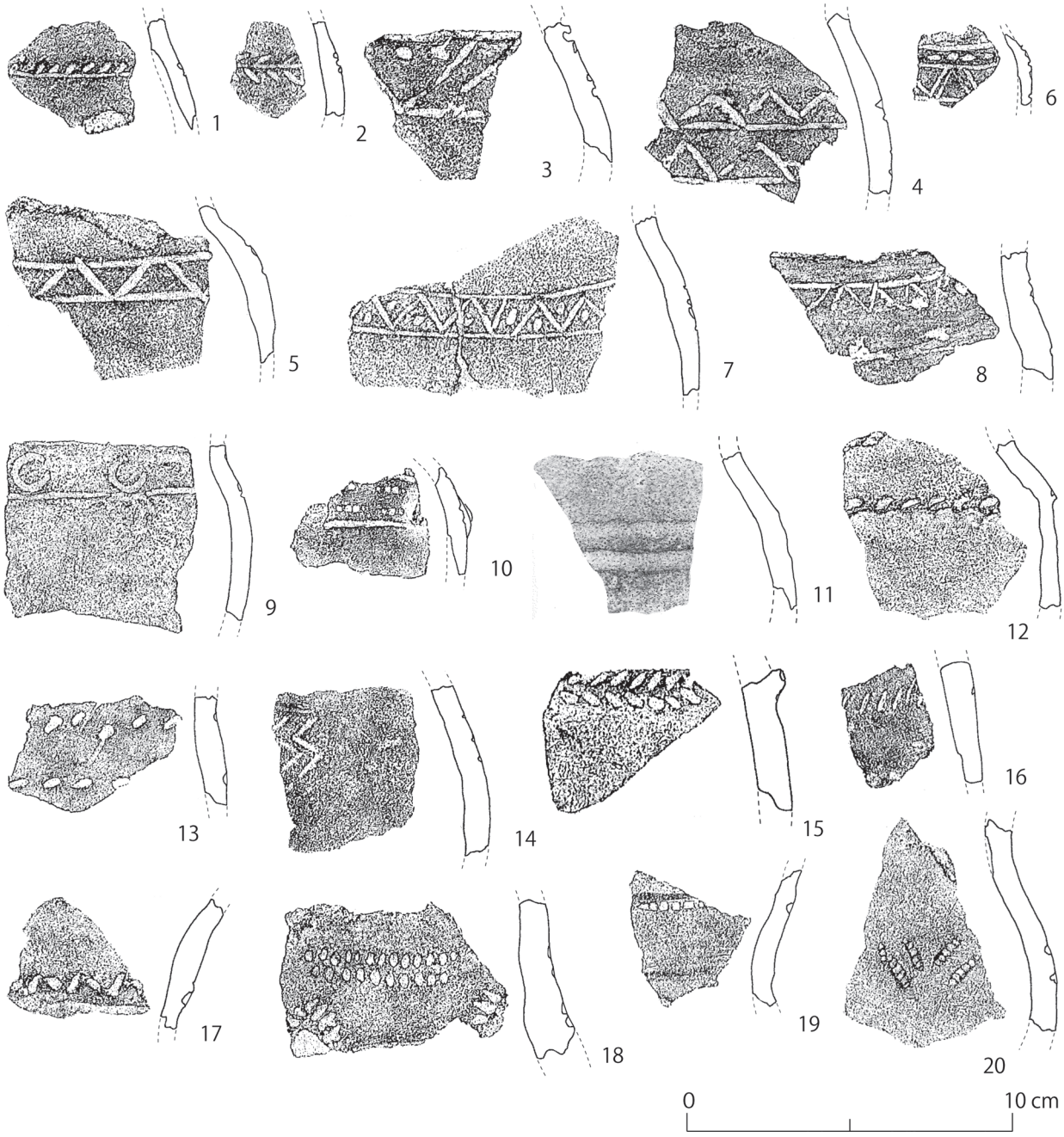
破片の資料で、おもに文様について、これまでにみられなかった特異なものを補うことにする。本層では貼付文Heタイプは口縁部資料にはみられなかったが、おそらく頸部にあたると思われる小破片が1点だけ得られている（第21図：1）。4段の貼付文は、いずれも軽く押さえられており、そのうち上から2段目は全体に波高が小さく、またその下のものはやや鋭角的なカーブをみせ、必ずしも整った貼付文とは言えない。貼付文が近接密集する例も少なく、図示した1点だけである（第21図：2）。きわめて小部分なので文様構成を掴み難いが、4~6条の貼付文が密接平行するもののようである。Hdタイプの貼付文例は多く、3のように波長が5~6 cmにも及ぶ長いものは他に例をみない。またこれは下段を除き、入念に押圧されているため、それらは低平であり、幅は3 mmあまりに達している。4は上下の直線状貼付文の間に波状のものを3段配する例でHbとHcの複合例とも理解できるが特異なものである。貼付文と擬縄文の複合例は少数ながら得られている。ともに直線的にモティーフを描くのが通例であり、5・6のように波状のHb・Hdタイプとの複合例は稀である。数条の擬縄貼付文が同一個体に施文される場合、いずれも同じ形態のものであることが一般的だが、稀に例外もある。7がそれであり、刻みの間隔を上下で変えている。8はU字形のモティーフを描き、9は頸部をめぐる貼付文から小貼付文がこれらと直角に分岐するモティーフを描くもので、横環する貼付文は細・太2本単位であり、いずれも太い方、並びに小貼付文は縦位に深く切り込まれている。擬縄貼付文と刻文の複合する例は胴部では1点しか得られていない（10）。ただし、この擬縄文は図中の右端で切られており、完全に一周するものではない。沈線文は11のように横走例が多いが、それが横環しない12などもみられ、13では縦横に沈線を引いている。山形文例も少なくなく、14では横走沈線と小貼付文を併用し、15・16では単独にいずれも2本の沈線を近接させて描いている。沈線に刻文を複合させる文様は多様であるが、17~20のように横走沈線に横位の刻文の複合例が最も一般的である。なお17・18では小貼付文を併用し、21は沈線で矩形を描いてその中に刻文を配し、22では波状の隆帯が平行する。横走沈線に斜位の刻文を複合させる例も少なくなく（第22図：1~8）、うち4~8のように鋸歯文も多い。沈線に型押文を複合させる例（9・10）は少ない。なお10は小貼付文間に沈線を2本平行に引き、その中に型押文を配しているが、左側の小貼付文は剥落している。11は肩部に摩擦式浮文をもつ稀な例である。爪形文が口縁部外に施文されることもほとんどなく、12は肩部にこれをもつ例である。刻文は多様なヴァリエイションをもつ。13は左手下方から突いたものであり、14~17は斜位の刻文例である。型押文では櫛状工具で横長の文様を刻み、また円形の凹みを囲む形に型押文を配した18がユニークであり、その胎土は中粒砂を多量に含み、器厚は1.3 cmにも及ぶ。19・20は一般的な例であり、後者の外壁は良く研磨されている。



第 21 図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影（7）　オホーツク式土器

底部の資料（第 13 図：8~50、第 14 図：1~12）

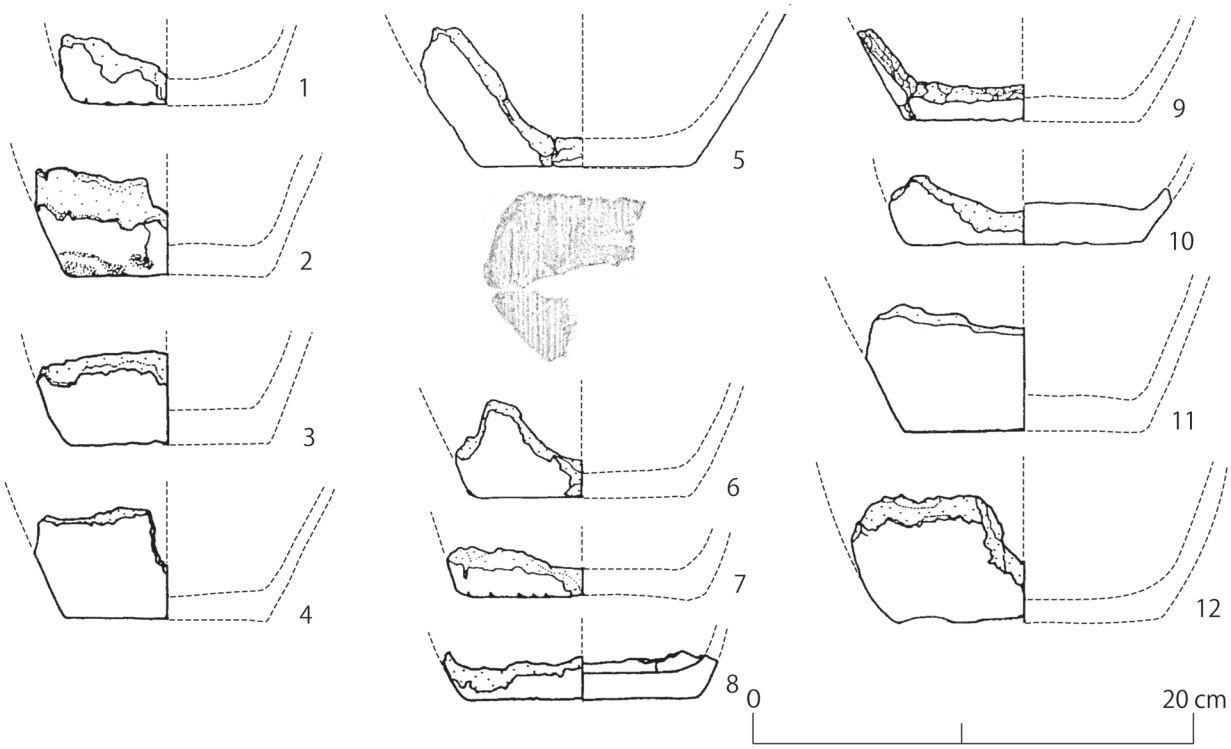
周囲の 1/4 以上残された資料は全部で 55 点得られている。ここでは便宜的に底径によって、これらを分けて記載する。底径 3 cm 代のものは 2 点あり（第 13 図：8・9）、いずれも壁の開きが小さく、うち 9 は壁・底面とも厚さが 2~3 mm 位であり、一般の土器ではなく、未詳品に分類されるべきものかも知れないが確証がない。



第 22 図　I 層（表土層）出土の土器拓影図（8）　オホーツク式土器

底径 4 cm 代の資料は 4 点（10~13）である。特に 11 は底面が相対的に厚く、また砂粒を多く含む例であり、12 の内側底面周縁辺りには指圧痕がめぐっている。

5 cm 代の底径の例は多く、12 点ある（14~25）。底部と壁の関係は、まず外側でみると 21・23 のように急角度の例は稀で、60°から 70°位のものが一般的である。また内側では壁と底面が 19・22 のように明瞭な境をもたずに接するものが少数みられる他は、多少とも角をもって接する。20 は内側底面に指圧痕が著しい。また 25 はほぼ細粒の砂のみが混ぜられており、23 は摩滅がすすんでいる。底径 6 cm 代のものは 9 点得られている（26~34）。27 は細粒砂のみが混ぜられ、30 は摩滅のすすんだ中粒砂が混和されている。底径 7 cm 代の資料 12 点（35~46）のうち、38 は成形の際の粘土等の接合面に由来するものと思われる横に帯状に伸びる破折面をもつ。39 は外側底面に 1.5 mm 程の間隔のスダレ状の圧痕をもつ。41 は壁直下が押圧されて凹んでおり、また混和された砂の量が非常に多く、42 は細粒砂のみからなっている。43 は底面の厚さが 1.7 cm を越す厚手の例



第 14 図　I 層（表土層）出土の土器実測図（2）　オホーツク式土器

である。

底径 8 cm 代の資料 6 点 (47~50、第 14 図:1~2) のうち、48 は底部厚 1.2 cm を超える例であり、逆に 49 は、それが 0.5 cm 程の薄手のものである。50 の外側底面近くには 1 mm 間隔のスダレ状の圧痕が明瞭に残されており、また 2：2 には、成形時の粘土塊の接合面が帯状にみられる。9 cm 代の資料 4 点（第 14 図：3~7）中、3 は特に厚手で底面の器厚が 1.3 cm もある。また本例も成形時の接合面で水平に破折しているが、この面の内縁は著しく摩滅している。あるいは意図的に縁を落として再利用した結果かも知れない。4 は全体に作りが丁寧であり、内外壁とも底面まで磨かれている。5 は極細粒砂を主に混和しており、外側底面に 1.5 cm 間隔のスダレ状の圧痕がみられる。10 cm を越える底径の資料は 6 点得られている（第 14 図：7~12）。さすがに厚手の例がほとんどで 12 を除き、みな底面厚は 1 cm を越す。中でも 10 は 1.6 cm に達しており、また本例は内側底面になでつけた整形痕が接線に直交する方向に残されている。11 は外壁、特にその底面に白色粒が目立つ。12 は成形時の粘土帯接合部に由来する帯状の破折面を留める。

未詳品 A（第 23 図）

1 は高さが 2 cm で口径 1.15 cm 程のものである。底部が極度に厚く、また外側底面中央は凹められている。胎土は細粒砂を若干混ぜられており、全体に灰白色を呈する。2 は口縁上に突起をもつ土製品の破片であり、もしこれが円形の容器であるとすれば、口径 7 cm 余りの浅鉢になろうかと推定される。極細粒の砂を主に混和し、比較的丁寧になでて整形されている。全体に色調は茶色味を帯びた灰白色で、正面図右端部は褐色味を帯びる。続縄文文化の浅鉢土器を模したものであろうか。

II　その他の土器（第 24 図）

擦文式土器の深鉢形の頸部にあたると思われる小破片が 1 点得られている（第 24 図）。横走するやや細目の

沈線群の上に、斜行する形で太目の沈線を鋸歯状に配している。これらの沈線内には工具の凸凹に由来する 1 mm 弱の等間隔で細い筋が並行して走っている。外壁は灰褐色、内壁は黒色で横方向に良く研磨されている。極細粒の砂を含む。

Ⅱ層　魚骨層出土の土器（第 25~27 図）

本層の由来によるところが大きいと思われるが、ここで得られた土器は極めて少なく、且つ断片的であり、実測し得る資料は底部の 2 点に過ぎない。口縁・胴部ともに文様をもつ破片は図示したものがその全てである。オホーツク式に限られる。

貼付文をもつ土器（第 25 図：1）

口縁と肩上部にそれぞれ Hc タイプの太目の貼付文を、またそれらの間、頸部には 5 mm を越える太い貼付文を配し、後者には縦に深い刻みを入れ擬縄文としている。器厚は 1 cm 前後で、内壁はよく研磨されている。

沈線に刻文の複合する土器（第 25 図：2）

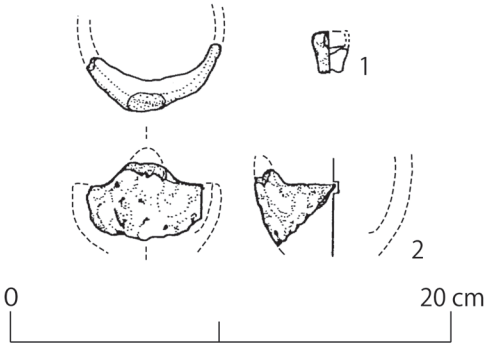
2 本の沈線間に横位の刻文を配する例だが、刻文の右半分程が欠損している。

胴部の資料（第 26 図：1・2）

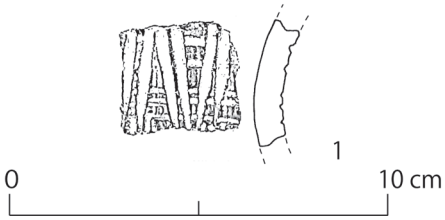
1 は貼付文が 2 段めぐる例であり、下段の方はおそらく貼付文の両端にあたると思われる部分が上下に食い違って接し、そこに小貼付文を付している。2 は太い貼付文を頸部にめぐらせ、これにやはり太い刻文を刻み込んで擬縄文とした例である。

底部の資料（第 27 図）

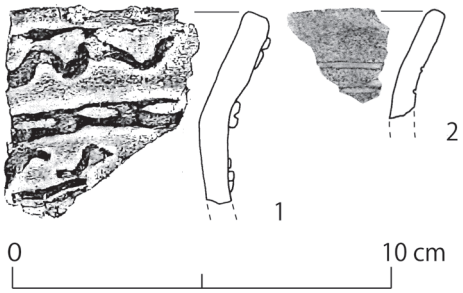
1 は外壁底面上に 1 cm 前後の辺りには連続的に押圧された凹みの列がめぐり、一種のくびれを形成している。類似の押圧痕は内側底面周縁にも一部残されている。2 は底径 11.6 cm、底面の厚さが 2 cm に達する大形・厚手の例である。外壁底面近くには硬質の工具で、押圧された成形、もしくは整形痕が幅・高さとも、1.5 cm 内外の面としてみられる。また内壁の底面と壁の境付近にヒビが横走している。あるいは底部と壁部の粘土塊の接合部に由来するものであるのかも知れない。



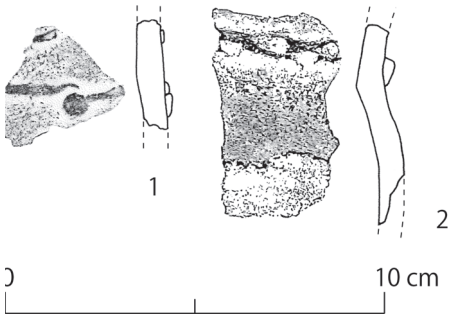
第 23 図　Ⅰ層（表土層）出土の土製品実測図
オホーツク式土器



第 24 図　Ⅰ層（表土層）出土の土器拓影図
擦文式土器



第 25 図　Ⅱ層（魚骨層）出土の土器拓影図（1）
オホーツク式土器



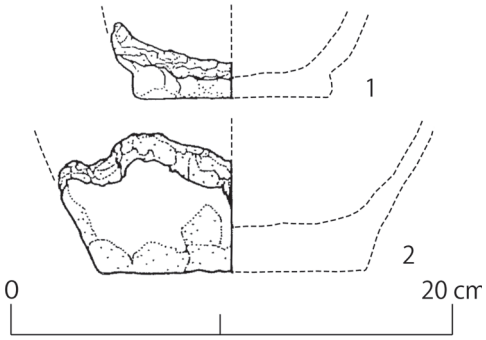
第 26 図　Ⅱ層（魚骨層）出土の土器拓影図（2）
オホーツク式土器

Ⅲ層　砂利層出土の土器（第 28~30 図）

資料の量が少なく、且つ断片的であり、実測し得るものは底部の 3 点にとどまる。全体として沈線と刻文の複合例が多く、無文、貼付文、それに爪形文の例が続く。いずれもオホーツク式である。

貼付文をもつ土器（第28図：1~5）

Hdタイプの貼付文は1点しかなく（1)、しかも1単位のみが口縁中央に存在する点で、あまり典型的な例ではない。Hcタイプは2点(2・3)あり、前者の波状貼付文は波頭部のみが押圧され、3の直線の貼付文には刻文が刻まれて擬縄文にされている。Hg擬縄貼付文は3点あり、5は刻みが浅い例で、図示しなかった2例は共にそれが深い。



第27図　Ⅱ層（魚骨層）出土の土器実測図　オホーツク式土器

沈線文をもつ土器（第28図：6）

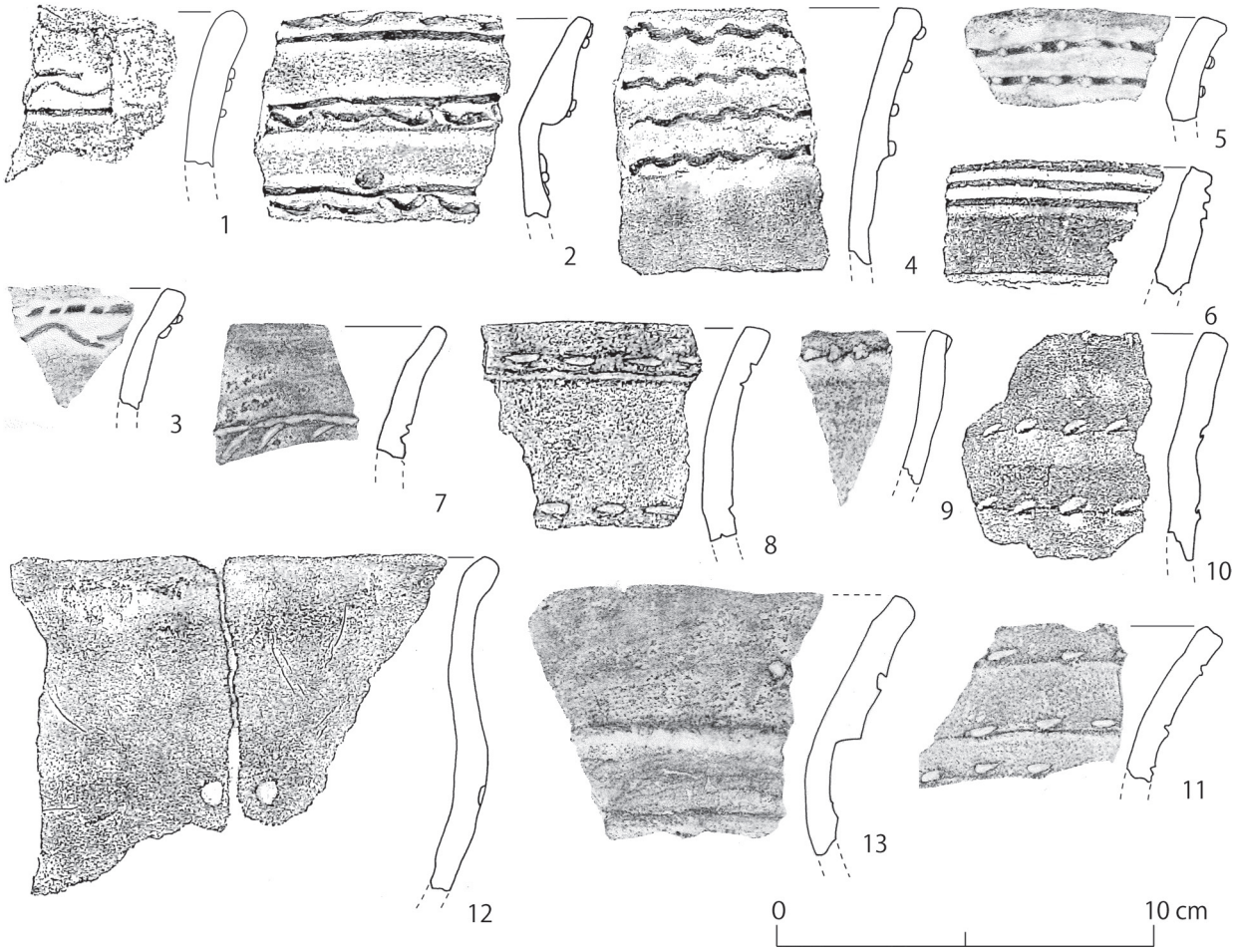
太い、しっかりした沈線を口唇直下と口縁下部にめぐらす例であり、もう一例、太目だが深さがまちまちな沈線をもつ資料が得られている。

沈線に刻文を複合した土器（第28図：7・8）

8点得られている。うち7は口縁部はほとんど無文で頸部近くに文様をもち、逆に8は口縁部中央の大きな無文帯を挟んで口唇近くと頸部付近に沈線と刻文の複合した文様をめぐらす。他の6点は一般的なものである。

摩擦式浮文をもつ土器（第28図：9）

摩擦式浮文そのものは、極めて浅いため不明瞭であるが、かろうじて3条程を識別できる。また口唇外縁を



第28図　Ⅲ層（砂利層）出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器

張り出させ、これに爪形文を刻んでいる。

爪形文をもつ土器（第 28 図：10）

口縁中程と下半部に幅の広い微隆帯を 2 条設け、これらの上に爪形文を刻んでおり、他の一例も同趣である。いま一つは口唇外縁に刻んだものである。

刻文をもつ土器（第 28 図：11）

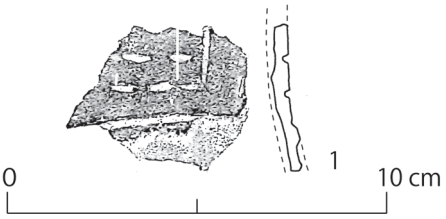
口縁に低平な段を 3 段削り出し、各段下縁近くに刻文を配するもので、他の一つは口唇外縁下を斜位に刻んでいる。

無文の土器（第 28 図：12・13）

12 は口唇部がやや膨らみをもち、肩部の張り出す器形で、肩部に未完の補修孔が一対残されている。外壁肩部以上は研磨されている。13 は良く発達し、且つ幅の広い肥厚帯をもつ例で、頸部にも断面三角の低い稜が一条めぐる。口縁中ほど右端近くに焼成前に開けられた深さ 3 mm 程の小さな穴がみられる。文様とするには間隔が開きすぎており、意味不明である。これらのほか無文の資料 7 点のうち、肥厚帯をもつ例が他に 2 点あるが、いずれもこれ程顕著ではない。

胴部の資料（第 29 図）

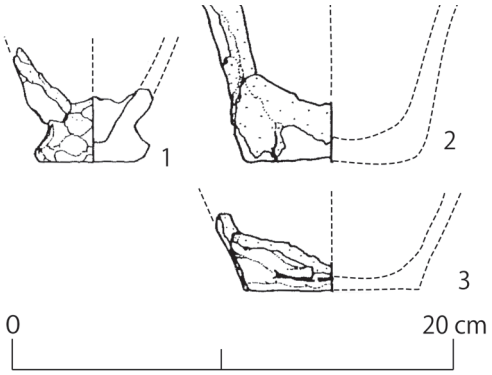
有文例 12 点のうち、稀な文様例として 1 点だけ図示しておく。文様の全容はつかめないが、沈線でおそらく矩形を描き、その中に刻文を充填するものである。



第 29 図　Ⅲ層（砂利層）出土の土器拓影図（2）
オホーツク式土器

底部の資料（第 30 図）

1 は外壁が底面上で極度にくびれ、また底部の張り出しも大きい特異な形態をもつ。内側はほとんど摺鉢状に近く、外側同様、器面に凹凸が目立つ。なおあまり鮮明ではないが、外側底面に間隔が 1 mm 余のスダレ状の圧痕がみられる。2 の外壁底面近くには幅 1.5 cm 位の成形ないし整形面が残されている。剥落が著しいために、その高さは明らかでないが、硬質で平らな面をもつ工具で押圧もしくは研磨した跡であろう。他方内側は底面まで良く研磨・整形されているが、そのような面は認められない。3 は内外とも良く研磨されているが、外壁底面上 0.5 cm 辺りに部分的にシワ状の溝が横走し、これに対応するかのように、内側壁と底面の境部にもかすかに凹所がみられる。おそらく成形時の粘土塊の接合部に由来するものであろう。



第 30 図　Ⅲ層（砂利層）出土の土器実測図
オホーツク式土器

Ⅳ層　埋土層出土の土器（第 31~38 図）

Ⅰ　オホーツク式土器

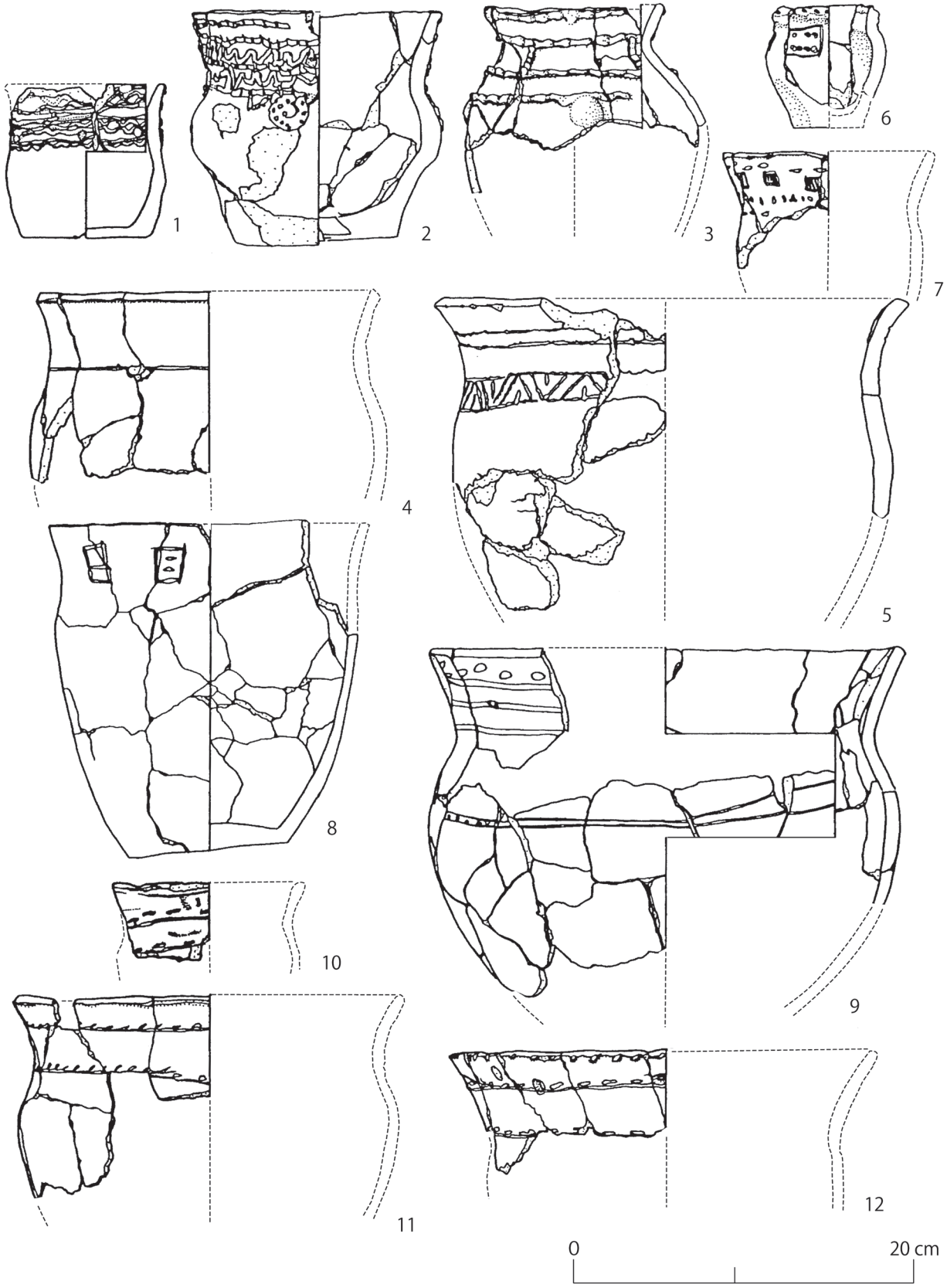
資料の量は表土層 [Ⅰ層] に次いで多く、口縁部で数えて 111 点得られている。このうち口縁部と底部を含む形で復原できた資料は 6 点、また実測しうる程度に復原できた口縁部資料は 12 点あり、まとまった資料が多

い。文様の種類としては、沈線文系文様をもつ資料が 41.4% で最も多く、無文例 24.3%、刻文系文様をもつ例 11.7%、貼付文系文様をもつ例 11.7% などがこれに続く。また貼付文の中では He・Hd タイプはみられず、Hc・Hb・Ha タイプも多くなく、Hg 擬縄貼付文がかなりみられる。器形の面では、肥厚帯をもたない例が主流であり、これをもつ例でも概して薄い。整形方法や胎土・器質などは他層と特に異なるところは認められない。

貼付文をもつ土器（第 31 図：1~3、第 33 図：1~9）

実測し得る程に復原できた資料は 3 点にとどまる（31 図:1~3)。いずれもあまり大きくなく、1 は小形であり、他は中形に分類できよう。器形・文様ともに区々である。1 は全体に屈曲に乏しく、特に底部がほとんど縮約しない、寸詰まりの器形である。ほぼその上半部にあたる口縁から肩部にかけて文様帯をもち、それは 3 つの単位で構成されている。まず He の下に Ha を付した貼付文を口縁部に、逆に He の上に Ha を付したものを頸部に、そして肩部には Hc の文様をめぐらせる。また各単位の間には小貼付文を配しており、残存部が小さいために小貼付文の企画性を掴み難いが、頸部、肩部では直径 4 mm、深さ 2 mm の剥落痕を含め、4 cm 前後の間隔で位置しているので、都合 7 個が付されていると推定できる。また口縁部・頸部間では前記下位のものとずれた位置に 1 個だけ残されている。特に剥落した痕も認められないので、ここでは小貼付文の数はずっと少ないのであろう。なお、文様は大部分が押圧・研磨されてつぶれているが、その程度には大きな差があるので、文様の低平化を意図して行われたのではないと考えられる。内壁はほとんど研磨を受けていないため、器面に凹凸、砂粒の露出が著しいのに対し、外壁は平滑・緻密である。炭化物は外壁全面に薄く付着し、内壁では口縁から胴部にかけて局部的にみられるにすぎない。2 は高さに比して径の大きい資料であり、肩部が突出気味に張る。口縁部全面に貼付文を施文しているが、文様の統一性に欠ける。即ち、この部分に直線擬縄文を 4 本めぐらせ、これらに挟まれた帯状空間 3 列のうち、下位 2 列にのみ波状の貼付文で充填することによって、モティーフ Hd を 2 段重ねた形になっている。これらの貼付文の施文はいずれもかなり乱雑であり、特に口唇直下の例は甚だしく波動しているため、第 2 列目のものと一部でほとんど接している。また波状の貼付文も波形の歪みと周期の不規則が著しい。更に最下段の擬縄文から懸下する形で小貼付文が施文されている。相互の間隔から推して合計 5 箇所に設けられたものとみられる。円形の小貼付文 2 個を縦に接して並べ、これらを囲むように太い貼付文を U 字形に配し、円形の刻文を刻んでいる。そして、これに接して左側にやはり貼付文を V 字形に施文している。なお、その太さは図示した箇所では 2 mm 程であるが、残存する他の 3 箇所では 5~6 mm に達している。器面に凸凹、及び器形の歪みが目立つ。3 は頸部の縮約と胴部の膨らみがかなり顕著な壺形土器であり、口縁部は比較的短い。口縁部と肩部に幅 4 mm 程の貼付文を 2 本ずつめぐらせて、これらを押圧することによって、擬縄風の効果を表している。その内側 2 本の貼付文をつなぐ形で、頸部の 5 箇所に縦に貼付文が施文され、より細かな刻みがつけられている。これらの間隔は狭い所で 3.5 cm、広い所では 6 cm 余りとまちまちである。また最下段の貼付文の下に接して直径 1.7 cm 程の円形の貼付文がやはり 5 箇所に付されている。これらの間隔も不等で 6.5 cm から 11 cm 位まで幅がある。外壁は全面にわたって、内壁は口縁部が、よく研磨されて器面平滑であり、全体に歪みが少ない。内外壁とも黒色で、外壁のほぼ全面に炭化物が厚く付着している。

破片の資料では、第 33 図：1 は幅の狭い肥厚帯上下縁を直線状の貼付文で縁取り、これらの間に太目の貼付文で He タイプのモティーフを描くもののように見受けられるが、施文後の押圧で文様がかなり変形し、また上部では剥落した箇所もあり、企画性が必ずしも明確ではない。口唇面と頸部に小貼付文が付されている。Hd タイプ 2 点のうち一つが 2 である。口唇直下のものは、ほとんどは剥落しているが、口縁下部の文様約半分の幅をもつ。3 は口縁に山形の隆起部をもつ例であり、結果的に拡大された口縁のこの部分に小貼付文を充填し、また頸部付近には細い貼付文と刻文の刻まれた太目の擬縄風の貼付文を接し合う形でめぐらせている。口縁を縁取



第 31 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器実測図（1）　オホーツク式土器

るモティーフは4と共にHcタイプとみられるが、全体として1と共に珍しい例である。Haタイプの貼付文例は2例あり、うち5は少なくともこれを5条めぐらせ、相当入念に押し拡げている。擬縄文は9例あり、6は口唇面に細いものをめぐらす稀な例であり、太目の擬縄文をもつ7は代表的な例である。8・9はHg擬縄貼付文が口縁を完周せず、個性的なモティーフを描く例であり、後者では口縁上下縁を刻文が縁取っている。

沈線文をもつ土器（第31図：4・5、第33図：10~13）

2点の資料についてかなりの程度に復原できた。4は口縁部というより、むしろ頸部に沈線を1本のみめぐらせたもので、内壁口縁部全面にやや厚く、また外壁口縁から頸部にかけて局部的に、炭化物の付着が認められる。5は頸上部に沈線を2本並行にめぐらし、頸下部では2本の沈線間に2本一組の沈線を鋸歯状に配し、さらに刻文で充填する資料である。外壁口縁部を除き、砂粒の露出が目立つ。口縁部に補修孔が1箇所みられる。炭化物は内壁口縁では帯状に厚く付着し、外壁口縁部の一部にも認められる。

破片の資料16点には小形の断片的な例が多い。複数の並行な沈線を水平にめぐらすものが一般的で、薄手の第33図：10のように波状の口縁の口唇外縁に沈線をめぐらす例は特異であり、沈線間に2本の沈線で鋸歯文を描く11も本層ではこれのみである。沈線文は12では深くて鋭く、逆に13では浅く、縁がなだらかである。

沈線に刻文等が複合施文される資料（第31図：6~12、第32図：1~3、第33図：14~21）

実測し得る程度にまで復原できた資料は10点ある（第31・32図）。文様のうえからこれらを二つに分けることができよう。一つは矩形を描くものである（第31図：6~8）。これらの文様は個体によって異なるだけでなく、同じ個体の中でも場所によって差違をもつ、というより意図的に描き分けられているように思われる。以下、個別にこれをみよう。6は口径5.5 cm、高さが7 cm余りの小さな例であり、あるいは他の一般の土器と用途を異にするのかも知れないが、確証がないのでここにとりあげる。口縁部が極めて短く、口唇面は外傾し、且つ口縁との境が円味をもっている。文様はこの口唇面に刻文を、そして頸部から肩部~胴部最大径の辺りにかけて、沈線を用いて矩形を描き、その中に刻文を施している。矩形の文様は全部で6個あり、うち1個は半ば以上が失われているため、全容は不明である。これらの矩形のうち最大の例（図示した）は縦1.7 cm、横2.2 cmに達するのに対し、最小の例は、その一つ置いた右側に位置するもので、1.0 × 1.4 cmしかない。また矩形の中に刻まれた刻文は、いずれも上段は3個であるが、これら最大、最小例の下段のみ4個である。小形のわりに器厚は厚く、成形も丁寧であり、外壁全面と内壁口縁部、更に部分的には胴部まで研磨されている。7は口縁部の開きが直線的なやや小形の資料である。口縁部のほぼ中央に沈線でもって矩形を描き、その中に縦に沈線を何本か引いている。この中の沈線の数は残存部でみる限り、1本から5本まで矩形ごとにまちまちである。矩形列の上下には、横位長目の刻文が一列ずつめぐらされているが、下位側では一部で縦位の短目のものになっており、且つ横位長目の刻文列と段違いに重複している。外壁肩部は研磨されて平滑である。炭化物は内壁では全面的に、そして口縁部で特に厚く付着し、外壁では口縁から肩部にかけて、局部的にみられる。8は頸部があまり縮約せず、また底径も比較的大きい、全体に屈曲に乏しい器形である。開きの小さな口縁部中程に太目の沈線で縦長の矩形を描いている。残存する全周の約3分の2にあたる部分に3~6 cmの間隔を置いて、このような矩形が5箇所にみられるので、本来は全部で9ないし10箇所に描かれていたと推定される。矩形は大体中程よりやや下の位置で横位に引かれた沈線で二分されているが、図にみられるように中に横位の刻文2点が施された例、及び横位の沈線で二分された上下の横長の区画、各々の左端に寄せて縦位の刻文、もしくは沈線を施した例が各1点残されている。粘土塊接合部に由来すると思われる横方向に良く伸びる破折面が頸部と同中程、そして同下部に認められるので、この程度の大きさの土器は、4段の輪積みで成形されたものと思われる。内外壁とも研磨が施されており、器面に凹凸が少ない。炭化物は内壁口縁部に帯状にやや厚く、胴部中程まで薄く付着し、外壁

では口縁と胴部上半の全面、及び一部で底部にまで付着がみられる。

第31図：9~12、第32図：1~3は、いずれも横還する沈線部に刻文、あるいは型押文を複合させた例である。器形は32：2のみが幅の狭い厚い肥厚帯を持ち、長目の頸部が顕著に縮約する壺形であり、第32図：3の他はその開口度が大きい。文様は後者、つまり口縁部幅が広い場合には第31図：11~12のように文様帯も広い例が多い。9では沈線の幅は太く3~4 mmに達する。上段の沈線に沿って同様の太さの刻文が1例めぐらされているが、その列は整っていない。肩部には細い鋭い沈線が2本めぐらされ、一箇所でのみその間に刻文を配している。なおこの沈線も互いに並行であることを意図されたものであろうが、間隔は一部で2 mm程に狭まり、他方で13 mmまで拡がっている。器面は研磨の痕が内壁口縁を除き、ほとんどみられないにも拘わらず滑らかであり、器形の歪みも少ない。胎土は細粒以下の砂が混ぜられており、中に角閃石が認められる。10~12は沈線上縁に刻文を複合させたものを2段めぐらせる例であり、12は更に口唇外縁にも刻文を刻んでいる。このうち口径10.5 cm程の小形の資料10は、他に比して胎土に砂を多く含み、整形が入念でないために器面に凸凹が目立つ。炭化物は内壁口縁部に帯状に、特に10・12では厚く、また11の外壁口縁部にも顕著にみられる。12には補修孔が一対と1個残されている。第32図：1は口縁の開きが大きい大形の土器であるが、そのわりに底径が小さい。口縁部上下を3本ずつの沈線で画し、その間の空間に2本ずつの沈線で山形文を描いている。そして、この山形文の下縁及び上下の横走沈線間に刻文を配している。外壁口縁部から肩部にかけては横位、それ以下では縦位に研磨され、底面には柾目状の圧痕が全面にみられる。内壁はほぼ全面に横位になでられている。2は発達した肥厚帯上下縁に刻文を刻み、肥厚帯中央に沈線を1本めぐらす例である。内外壁とも良く研磨されている。また、炭化物も内外両壁全面にみられ、特に内壁口縁部近くでは厚い。3はやや直立気味の口縁部中央に沈線を2本並行にめぐらせ、その間にクマの足跡を象ったと思われる型押文を縦位の刻文と交互に配している。なお、この刻文は2点ずつ刻まれた例が多いが、3点のもの、更に4点のところもみられる。また口唇外縁には爪形文を施している。他方、肩部には刻文列をめぐらせ、その下に上下を幅の広い凹帯で縁取った低平な隆帯を設け、ここに口縁部と同様に型押文と刻文を配列している。この隆帯は上下を支えながら、内壁側から押圧する形で形成されたらしく、内壁の対応する部分には指圧によると思われる凹みが連続し、結果的に凹帯をなしている。内壁全面になでによる擦痕が横走し、外壁上半部は横位に研磨され、平滑である。炭化物は外壁口縁部で厚く、一部で胴にまで及んでいる。

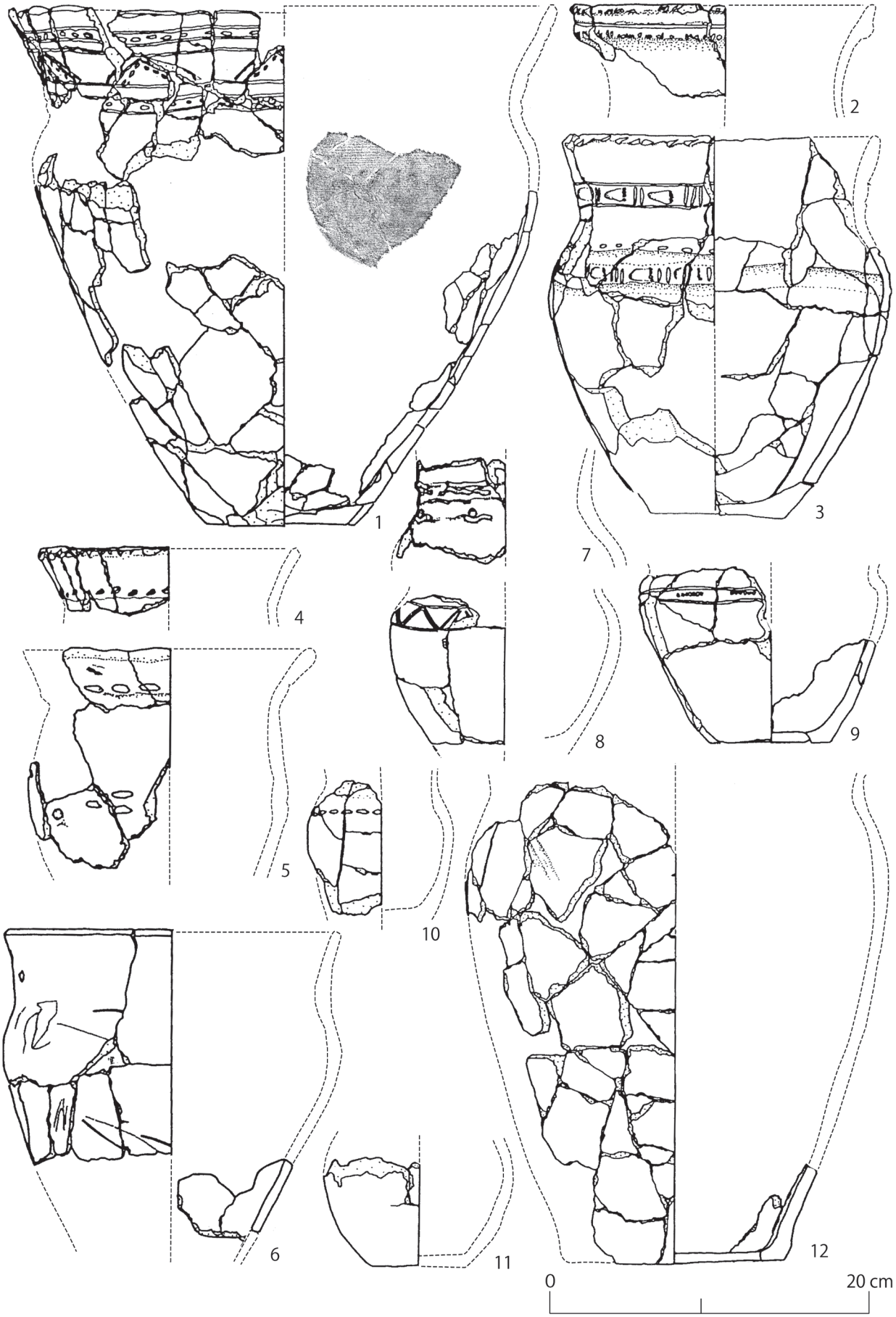
破片の資料39点の多くは14のように、同趣の沈線と刻文を交互に配するものであるが、中には異なったモティーフの刻文を併用する例（15~17）、沈線と刻文が交互に位置しない例（19）もみられる。20はやや小形の土器であり、21は沈線に型押文を複合する例である。

摩擦式浮文をもつ土器（第34図：1~3）

破片の資料が6点得られており、幅6~8 mmの凹帯が3条程めぐる1が一般的なものと思われる。2は凹帯の幅が5 mm程の細い例で、頸部の縮約が著しい薄手小形の資料であり、逆に3は互いに2 cm前後の間隔を取って微隆起状の稜を3段めぐらす例である。

爪形文をもつ土器（第34図：4~6）

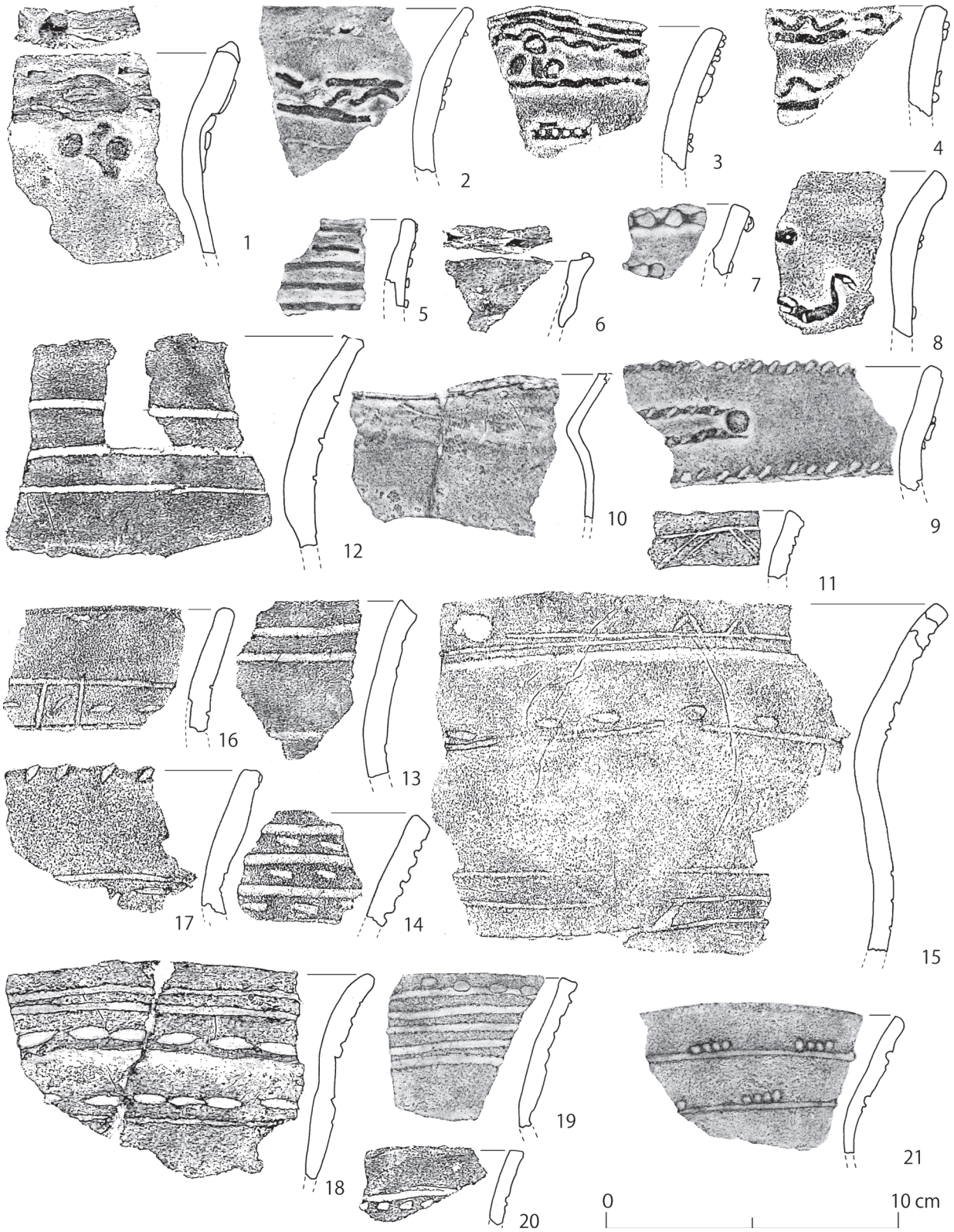
破片が11点得られているに過ぎない。低平な肥厚帯を設け、その下縁に沿って長短2種類の型押文を、そして口唇外縁に爪形文を刻んだ4は異例のものであり、複数の微隆帯上に爪形文を配する5、肥厚帯下縁にこれを刻む6が通例である。



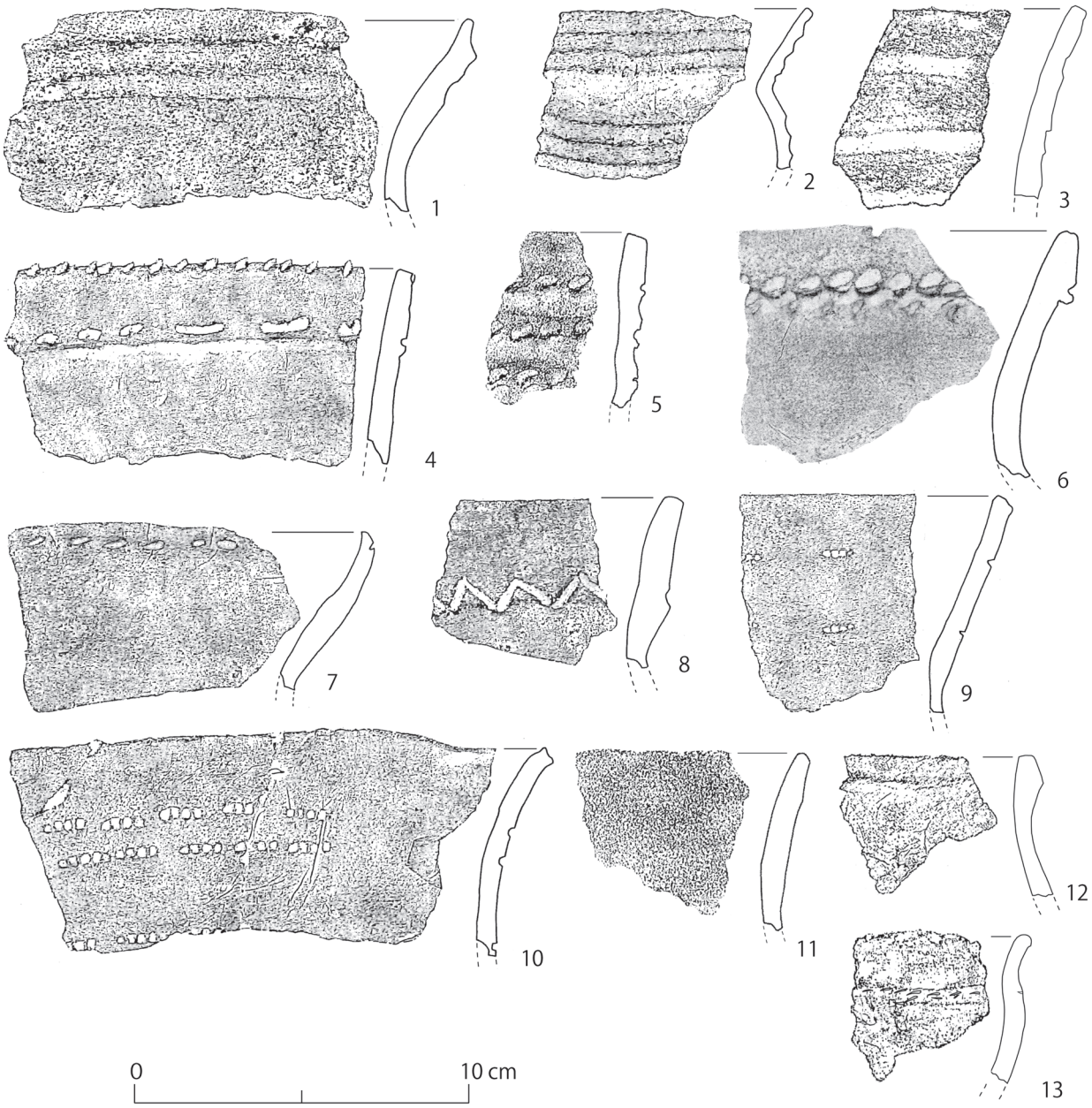
第32図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器実測図（2）　オホーツク式土器

刻文をもつ土器（第32図：4・5、第34図：7・8）

ある程度に口縁部を復原できた資料と、同じく口縁から胴部まで復原できた資料が各1点ある（第32図：4・5）。前者は上方から押圧することによって、外にやや張り出させた口唇外縁上、及び口縁部下端に刻文を刻むものである。後者は全体に厚みがあり、口唇部は丸みをもって膨らむ。特に内壁全面に凹凸が、また外壁口縁部は歪み



第33図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器



第 34 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器拓影図（2）　オホーツク式土器

の目立つ土器である。口縁部のあまり顕著ではない肥厚帯下縁に幅の広い舟形の刻文を刻み、同趣の刻文を胴部にも２段施している。外壁口縁から肩部にかけて横方向に研磨されたために、特に口縁部文様の一部が損なわれている。炭化物は 4・5 の内壁口縁部には帯状に厚く、また５の外壁頸部から肩部にかけて厚く付着している。

破片資料は 15 点得られている。外反した口縁が口唇近くで立ちあがる珍しい器形の第 34 図：7 は、円味をもつ口唇面上に刻文が刻まれている。8 は肥厚帯下縁に沿って、鋸歯形に刻文を配する。図示していないが、本層では肥厚帯下縁に沿って斜位の刻文を配する例が多い。

型押文をもつ土器（第 34 図：9・10）

破片資料が３点だけ得られている。9 は微かな微隆帯を２条設け、そのなだらかな隆帯上に型押文を刻み、10 は開口度の大きい口縁の中程と頸部に型押文を配する例であるが、少なくとも口縁部では型押文列は等間隔で完周するのではなく、あるまとまりをもつようである。

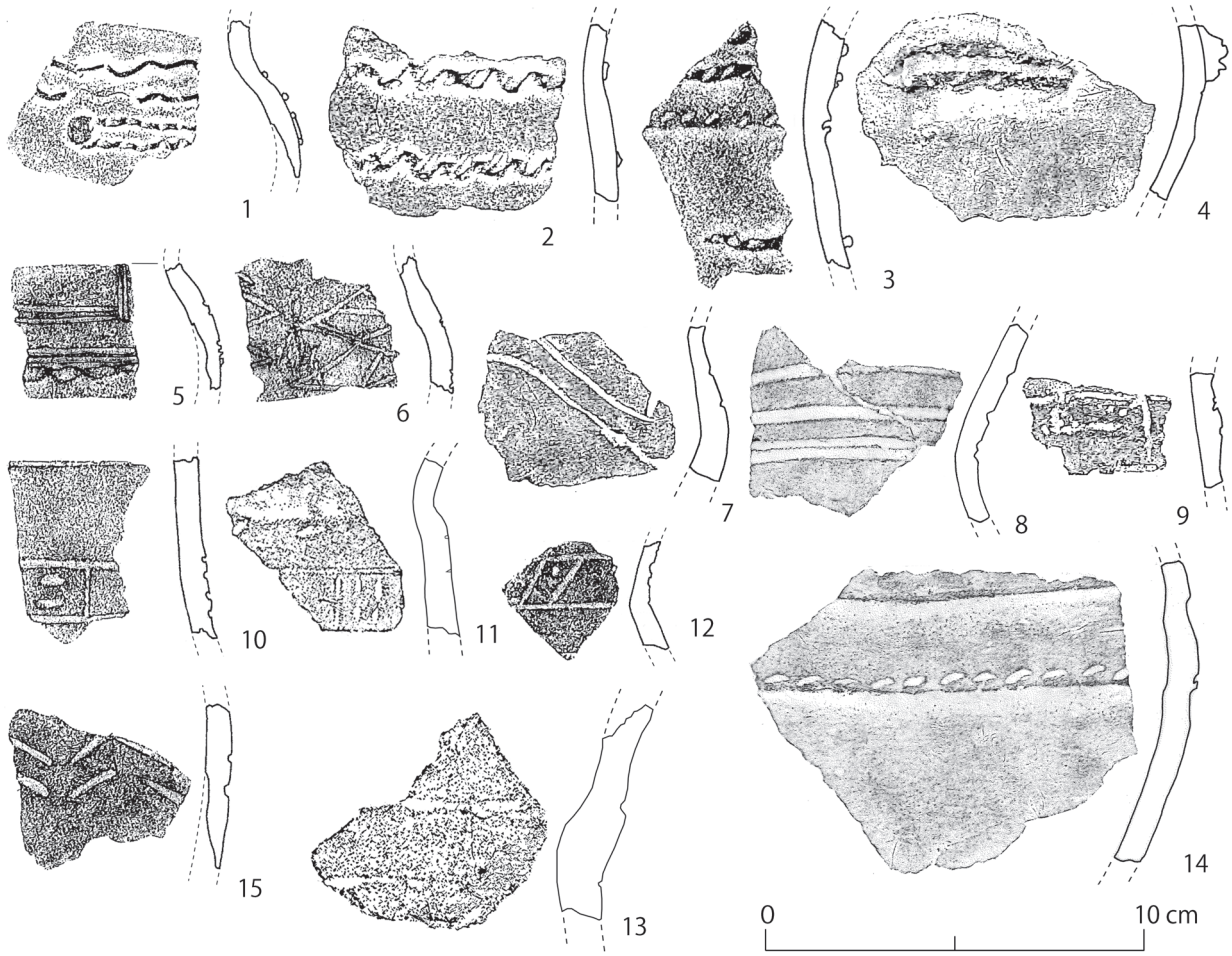
無文の土器 (第 32 図 6、第 34 図：11~13)

底部は欠くもののかなりの程度に復原できた資料が 1 点ある。口縁部の開きが小さい器形である。外壁は横方向に研磨されているが、器面は平滑でなく、また肩より下位では、それ以前につけられた引掻き痕が均されずに残っている。内壁も横方向になでられているが、器面の凹凸が目立つ。炭化物は内壁肩部の一部に厚く付着している。胎土は極細粒の砂のみを少量含み、器質堅緻である。

破片の資料は 10 点得られている。11 のように肥厚帯をもたない例が一般的であり、その点で幅は狭いが、肥厚帯の作られた 12 は稀な例である。13 は小形の土器であり、肩部に微隆帯を 2 条めぐらせ、それらの上に爪を押して繊細な爪形文としている。

胴部の資料（第 32 図：7~12、第 35 図：1~15、第 36 図：1）

実測図に掲げた 7 点の資料のうち、文様をもつ例は、いずれも小形である。肩がかなり張り出す 7~9 のうち、7 は頸部が長め立ち気味の壺形の器形であり、8・9 は径に対して器高の小さい形が推定される。以下個々に記載する。7 は僅かに口縁部を欠く資料であり、直立した口縁下半に Hc タイプ、頸部に Ha、そして肩部には小貼付文と Hb タイプの貼付文を配している。なお頸部で粘土帯が接合されたらしく、一部で口縁部の胎土が肩の上にかぶさっている。8•9 は肩部に沈線をめぐらす例で、2 本の並行な沈線の間に、前者は沈線 2 本で鋸歯文を、後者は最大 7 歯の型押文を配列している。共に胴部に粘土帯の接合部に由来すると思われる直線的な横位の割目がみられる。また 8 は円盤状に作られた底部が壁と接合されたらしく、これらの剥離面がみられる。10 は整っ



第 35 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器拓影図 (3)　オホーツク式土器

た形の舟形刻文を肩部に1列めぐらす小形の資料である。11は8に類似した器形の小形の資料であり、12は口縁部を欠く大形の例であり、殊に底部が大きく、底径は13 cmに達する。肩部の張りは緩やかであり、更にそのカーブからみて、頸部の縮約は小さいと想定できる。頸部破折部には横位の浅い沈線が一本みられる。43は胴部中程にあたろうかと思われる部分である。幅6 cm余りの粘土帯を輪積みにして成形したらしく，粘土帯接合部に由来する幅1~2 cmの滑らかな破折面が外傾する形で横走している。粘土帯の幅に著しい差がないとすれば、これらの下はもう一段で底面に至り、またその場合、底経は12 cm前後であろうと推定される。第36図：1は胴下半部にあたる資料であり、成形時の粘土帯接合部に由来する外傾した破折面がよくみてとれる。

破片の資料で文様のヴァリエィションをみておくことにしよう。第35図：1は細い貼付文でHbタイプのモティーフを描き、更に同じく細い貼付文に刻みを入れたものと小貼付文を組み合わせた胴部文様をもつやや小形の資料であり、2は貼付文にひねりを加えて波状にしている。3はHg擬縄貼付文を口縁と肩部に配し、口縁の肥厚帯下縁に刻文をもつ。4は比較的小型の例で、肩部に設けた長さ5 cm、幅1.5 cmほどの粘土帯を上下に2分し、それぞれに刻文を加えている。沈線文の資料では2本ずつの沈線を縦横に引き、これに押圧した隆帯を組み合わせる例（5)、斜めに交錯する例（6)、緩やかに波状のカーブを描く例（7)、幅3 mm余りの太い例（8）などがみられる。なお8は、大きく開く器形と横走沈線群の文様は擦文式土器に類似しており、胎土は細砂を含み焼成極めて堅緻である。沈線と刻文の複合例には、沈線で矩形を描き、中に刻文を配するもの（9~11)、並行な沈線間を刻文列で繋ぐもの（12）が珍しいものとしてあげられる。13は口縁下部から頸部にかける部分に沈線と刻文の複合文を巡らす。2号竪穴例に共通ないし、それと同一個体をなすもので、鍛治作業に転用されたため高熱によって膨張・発泡している。爪形文が胴部に刻まれた（14）は非常に稀な例である。刻文を鋸歯状に配する15もあまり例をみない。

底部の資料（第36図：2~19）

底径4 cmの例から11 cm余りのものまでみられる。2や11・15等は丁寧で、整った形をしており、また前二者は内外両壁が、後者は外壁が研磨によって平滑にされている。他方3や19等は器面に凸凹が目立ち、やや粗雑な作りと言えよう。器面の整形は外壁では底面から上方に行われた例が一般的であるが、5・11では底面から1~2 cmの範囲を特に横、あるいは斜めに削っている。また内壁は、観察できる3例ではいずれも横方向になでられており、16では用いられた工具の幅が3.5 cm位であったことが始点に残された圧痕から知られる。なお17内壁底面には、爪の圧痕が残されている。成形時の粘土帯接合部で破折した例が多い。3は底径が小さい小形の土器であるためであろう、底面から僅か1.5 cm余りのところで接合されたらしく、ここで横に折損している。他は大体3~5 cm位の間隔で、この種の破折部が認められ、接合面が現れている場合はいずれも外傾している。胎土の特徴としては、16・19が極細粒砂が混和されている点を挙げることができる。なお17の破折面には炭化物が顕著に付着している。おそらく接合面できれいに折損したために、この底部をあらためて容器として使用したのかも知れない。

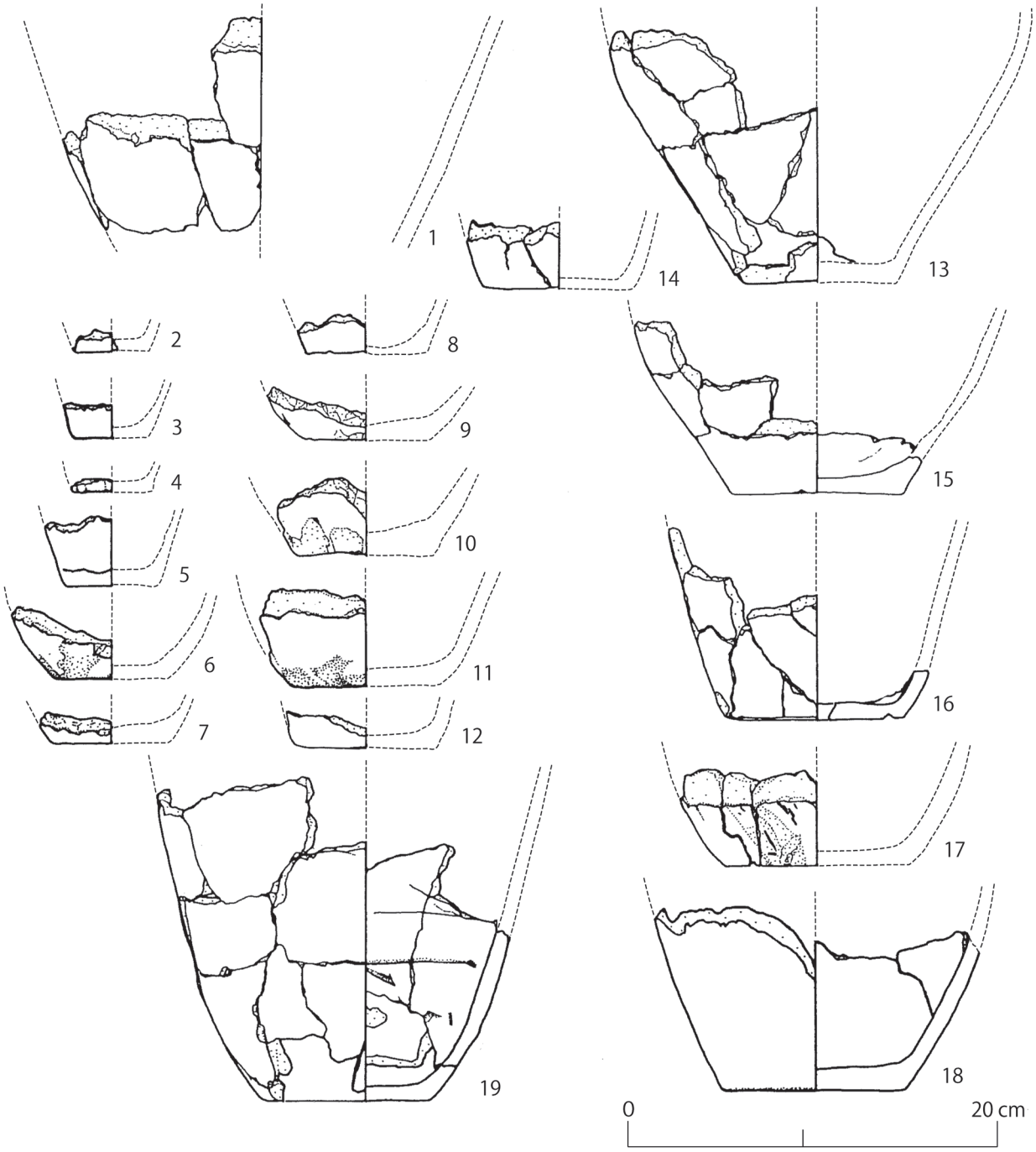
未詳品A（第37図）

手づくねで作られたと思われる無文の土器である。口縁部は丸みをもっており、外壁全部と内壁口唇近くが研磨されている。

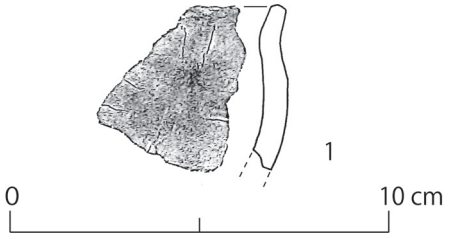
Ⅱ　その他の土器

擦文式土器（第38図）

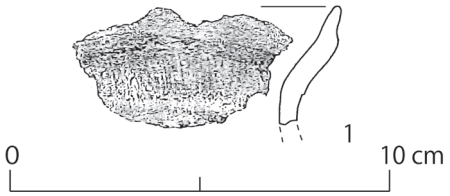
比較的小形の深鉢形土器の口縁部破片である。外反した口縁が立ち上がる器形で、外壁ではこの立ち上がり以



第 36 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器実測図　　オホーツク式土器



第 37 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器拓影図（4）

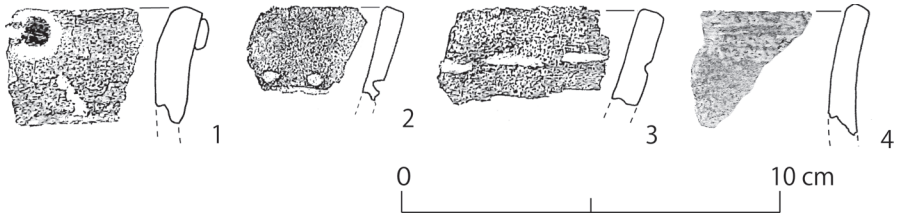


第 38 図　Ⅳ層（埋土層）出土の土器拓影図（5）
擦文式土器

下も縦位に、内壁では頸部以下も、横ないし斜めに粗い整形痕がはしる。

V層　竪穴床面出土の土器（第39~41図）

本層で得られた土器資料は僅かであり、実測図に掲げ得る資料は、口縁部を含む例1、胴部を含む例3で、他に底部の例が5点あるに過ぎない。破片の資料では、口縁部を含むものを全点図示する。全体の傾向として刻文をもつ土器が多いことを指摘できる。



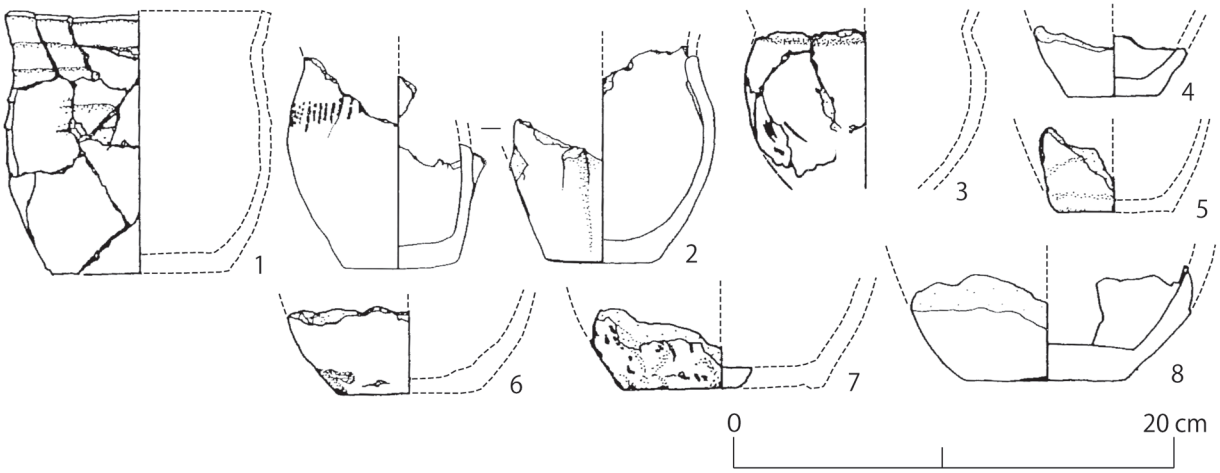
第39図　V層（床面）出土の土器拓影図（1）　オホーツク式土器

貼付文をもつ土器（第39図：1）

文様の残存部が僅かなので、全容は不明だが、弧状の貼付文を両端同士が接するよう上下に配し、両接点を小貼付文で押さえる文様ではないかと思われる。

沈線文をもつ土器（第41図：1）

器形のほぼ全容をうかがえる資料が1点得られている。高さに比して全体に径が大きく，しかも頸部の縮約、肩の張り、更に口縁の開きが小さいやや特異な器形である。文様は器面を削るか、もしくは擦ることによって出来た浅い凹帯からなる。この凹帯は縦断面でみると上方でやや深く、下方に向かって次第に浅くなっている。したがって、これらが2本ずつ近接して施文された口縁と肩部では上位の方は、その直上の器面との比高の大きさが強調されて肥厚帯の効果を表し、下位の方は上位の凹帯と対で微隆起帯ないし一種の摩擦式浮文を形成するような印象を受ける。残存部で判断する限り、胴部にも3 cm程の長さの同様のものが、やはり3~4 cmの間隔をおいて配列されるようである。なお、小形であることにもよるのであろうが、本例は薄手で、器厚は5 mm程のところが多く、胴部には3 mmしかない部分がみられる。成形時の粘土帯複合部に由来すると思われる直線的な割れ目が、ほぼ土器を三等分する形で、頸部と胴部に横走している。この程度の大きさの土器では、三段積みで成形されるのかも知れない。



第41図　V層（床面）出土の土器実測図　オホーツク式土器

沈線に刻文を複合させる土器 (第 39 図：2)

沈線の所で破折した資料であり、円味をもった刻文が沈線上方にかなり深く刻まれている。

刻文をもつ土器 (第 39 図：3)

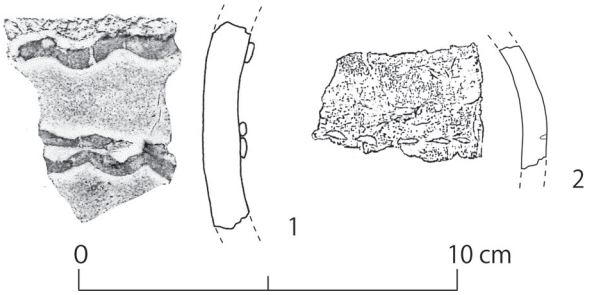
これは長い刻文を少なくとも 2 列めぐらす例であり、下位の刻文列のところで破損している。

無文の土器 (第 39 図： 4)

外壁に横走する擦痕が顕著である。

胴部の資料（第 41 図：2・3、第 40 図）

いずれも頸部で破損した小形の土器である。2 は胴部器壁の一部を平坦にし、(よって横断面は D 字形になる)、この平坦面に把手状のものを設けている点で特異である。土器残存部分での平坦面の最大幅は、底面上 5 cm のところで 4.5 cm を計り、以下 U 字形に収束してゆき、底面上 1.3 cm 辺りで終わっている。突起は平坦面の両端、底面上 2.5 cm の位置に対をなす形で上向きにつけられている。いずれも破損しているが、やや残りの良い右側のものでみると、直径 1 cm 程の棒状の粘土を、土器の縦軸を含む面に平行に、そして器面に対して斜めに貼り付けているようである。その接着部は粘土を押し拡げたこともあって、元の直径よりはるかに大きく、縦は推定 2.5 cm、横 1.8 cm 程になっている。他方、左側の突起接着部はやや小さく、それぞれ 2.3 cm、1.3 cm である。遺憾ながら、平坦面のある側ではほぼ上半部が失われているために、突起の全容は不明であるが、おそらく把手のようなものであろうと思われる。また胴部文様として縦位の型押文が肩部に一列にめぐらされている。櫛状工具を押捺したものであり、最も長い例では、「歯」の跡が 7 個残されている。上にみたように、この土器は口縁部に刻文系の文様をもっていた可能性が高いこと、したがってオホーツク文化の中期のものであることを推定できる。なおこの土器の類例は目梨泊遺跡には乏しく、あえて求めるとすれば香深井 1 遺跡の魚骨層 IV 第 351 図：13（大場・大井 1981）などを挙げることができる。



第 40 図　V 層（床面）出土の土器拓影図（2）
オホーツク式土器

3 は球形に膨らみをもつ胴部資料である。ごく一部残された頸部の小さな縮約度からみて、口縁の開きの僅かな器形が想定される。

破片資料の第 40 図：1 は Hc の貼付文例であり、同 2 は肩の部分に小さめの刻文を少なくとも 1 段刻むものである。

底部の資料（第 41 図：4~8）

4・6 は外壁底面上 1 cm あたりを境に，下部は研磨による整形が不充分なために器面が出っ張り、砂粒も露出したものが多い。5 は薄手であり、外壁底部近くに縦に整形擦痕が走る。8 は厚手で外壁底面近くに、硬質の工具の平面が当てられた幅 1 cm 余、高さ 2 cm 弱の面が、少しずつ両側縁が重なり合う形で横に並んでいる。その上方一帯には、幅 8 mm 前後の研磨条痕が密接して斜走する。また内側底面周辺から壁下部には箆状工具の刃部が当たった横長の痕がみられる。なお本例は粘土塊の接合部で破折したらしく、幅 1.5~2 cm の帯状の比較的滑らかな外傾する破折面が上縁に残されている。混和された砂は、4~6 は摩滅した中粒砂主であり、7 は有色鉱物を多く含み、8 は主に細粒砂からなる。

第1表　3号竪穴住居址出土の土器・土製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類		口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物		備考
				文様	器形							内壁	外壁	
第13図：1	I	8742	K-7	Hb	IVa	16.25	16.8				緻密	A	X	
第13図：2	I	8027, 8026, 8454, 10415	L-8	Hb	Id	26.7	25.2					A	Y	
第13図：3	I	8112	L-7	沈＋刻	IIa	10.15	11					A	X	
第13図：4	I	8142	L-7	沈＋刻	Ib	21.9						A	X	
第13図：5	I	8023	L-8			4.75		4.5	3.45			－	－	
第13図：6	I	8425	M-8				14.85							外壁研磨
第13図：7	I	10431	M-8				9	5.55						
第13図：8	I	10427	M-8					3.65						
第13図：9	I	8015	L-8					3.8						
第13図：10	I	8716	K-7					4.15						
第13図：11	I	8425	M-8					4.65						
第13図：12	I	8425	M-8					**4.8**						
第13図：13	I	8509	M-7					4.85						
第13図：14	I	8112	L-7					5.15						
第13図：15	I	8538	M-7							白色粒				
第13図：16	I	10415	M-8					5.05						
第13図：17	I	8208	L-6					5.05		白色粒				
第13図：18	I	10518	M-8					5.25		白色粒				
第13図：19	I	2103	M-9					**5.4**						
第13図：20	I	5502/5402?	L-8					**5.3**						
第13図：21	I	10431	M-8					5.1						
第13図：22	I	2115	M-9					**5.3**						
第13図：23	I	5502	M-8					5.7		大量の 白色粒				
第13図：24	I	5502	L-8					5.85						
第13図：25	I	10518	M-7					5.8		白色粒				
第13図：26	I	8501	M-7					5.9						
第13図：27	I	8015	L-8					6.1		白色粒				
第13図：28	I	8101	L-7					6						
第13図：29	I	5501	L-8					5.8						
第13図：30	I	10415	M-8					6						
第13図：31	I	8223	L-6					6.1		白色粒				
第13図：32	I	10522	M-7					6.2		大粒の 白色粒				
第13図：33	I	8425	M-8					6.45		白色粒				
第13図：34	I	10532	M-7					6.4		白色粒	砂っぽい			
第13図：35	I	8729	K-7					**6.9**						
第13図：36	I	2103	M-9					6.7						
第13図：37	I	8701	K-7					6.3-7.8						
第13図：38	I	8195	L-7					**8**						
第13図：39	I	8201	L-6					7.2						
第13図：40	I	2103	M-9					7.8						
第13図：41	I	8240	L-6					7.3						
第13図：42	I	8401	M-8					7.25			緻密			
第13図：43	I	10427	M-8					**7.3**		白色粒	緻密			
第13図：44	I	10427	M-8					**7.45**						
第13図：45	I	8223	L-6					7.2			緻密			
第13図：46	I	8102	L-7					8						
第13図：47	I	8015	L-8					8.05						
第13図：48	I	8023	L-8					8						
第13図：49	I	8538	M-7					8						
第13図：50	I	8112, 10431	L-7					8.2		大量の 白色粒				
第14図：1	I	8730	K-7					8.65		白色粒				
第14図：2	I	8561	M-7					9		白色粒				
第14図：3	I	8436	M-8					9.1						
第14図：4	I	8142	L-7											
第14図：5	I	10532, 10515	M-7					9.5						
第14図：6	I	10532	M-7					9.8						

（第１表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類		口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物		備考
				文様	器形							内壁	外壁	
第14図：7	I	5501	L-8					10.3						
第14図：8	I	8032	L-8					10.45						
第14図：9	I	8425	M-8					10.6		白色粒				
第14図：10	I	5502	L-8					10.4-10.7						
第14図：11	I	8742	K-7					**10.9**		白色粒				
第14図：12	I	10532	M-7					12.2		白色粒				
第23図：1	I	2112	M-9			1.15	2	1.1	2.25		緻密			
第23図：2	I	8407	M-8			7.4								
第27図：1	II	8585	M-7					8.6		白色粒				魚II
第27図：2	II	8595	M-7					**11.85**		白色粒				魚II
第30図：1	III	10512	M-7					4.3					厚く付着	
第30図：2	III	8599	M-7					7.6		白色粒				III層
第30図：3	III	10124	L-7					8						III層
第31図：1	IV	10532, 10515	L-7	Hd	IVb	9.4	8.55	7.3	9			C	X	Heの要素も
第31図：2	IV	10437	M-8	Hd	IVa	14.55	14.6	**9.5**	13.55			C	Y	Heの要素も
第31図：3	IV	8060	L-8	Hg	IIb	10.65	14.2					B	X	
第31図：4	IV	8031	L-8	沈	Ic	20.15	21					A	Y	
第31図：5	IV	8038	L-8	沈	Id	27.9	25.85					A	Y	
第31図：6	IV	10537	M-7	沈＋刻	IVb	6.35	7	**4.05**	7			－	－	
第31図：7	IV	8064	L-8	沈＋刻	Id	12.4	10.9					A	B	
第31図：8	IV	10529	M-7	沈＋刻	Ic	18.8	16	**9.15**	19			A	Y	
第31図：9	IV	8032, 8038,8044,8 048, 8056, 8052, 8053,8050, 8051	L-8	沈＋刻	Id	28.1	27.7					－	－	
第31図：10	IV	10136	L-7	沈＋刻	Ic	11.2	10.65					A	Y	
第31図：11	IV	8053	L-8	沈＋刻	Id	23	22.2					A	X	
第31図：12	IV	8053	L-8	沈＋刻	Id	25.1						B	X	
第32図：1	IV	8052	L-8	沈＋刻	Id	34.6	32	9.25	31.9			－	－	
第32図：2	IV	8007	L-8	沈＋刻	IIb	19.2						A	X	
第32図：3	IV	8040,8142,8 590,10137,1 0525,10529	L-7, L- 8, M-7	沈＋刻	IIa	20	21.1	**8.6**	23.5			－	Y	
第32図：4	IV	10126	L-7	刻	Id	16.4						B	Y	
第32図：5	IV	8032	L-8	刻	IIa	18.25	16.25					A	Y	
第32図：6	IV	8059	L-8	無文	Ic	21.2	21.3					C	Y	
第32図：7	IV	10437	M-8				14.75					C	X	
第32図：8	IV	10525	M-7				14.5					－	－	
第32図：9	IV	10132,1013 7	L-7				15.5	17.4				C	Y	
第32図：10	IV	8072	L-8				9.1					－	X	
第32図：11	IV	10531	M-7				12	5.9				C	X	
第32図：12	IV	8010	L-8				26.5	**13.5**				－	－	
第36図：1	IV	10138	L-7											
第36図：2	IV	10525	M-7					**4**						
第36図：3	IV	8544	M-7					4						
第36図：4	IV	8441	M-8					4.15						
第36図：5	IV	10525	M-7					4.9						
第36図：6	IV	8051	L-8											
第36図：7	IV	10144	L-7					6.25						
第36図：8	IV	8558	M-7					6.4						所在不明
第36図：9	IV	10108	L-7					6.45						所在不明
第36図：10	IV	10108	L-7					7.1						所在不明
第36図：11	IV	8552	M-7					7.95						
第36図：12	IV	10144	L-7					7.7						
第36図：13	IV	10525	M-7					8.25						
第36図：14	IV	10113	L-7					8.1						所在不明
第36図：15	IV	10525	M-7					9.05						

（第1表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類		口径 cm	胴径 cm	底径 cm 太字：実測値	高さ cm	胎土	器質	炭化物		備考
				文様	器形							内壁	外壁	
第36図：16	IV	8054	L-8					**9.7**			緻密			
第36図：17	IV	8032,8051	L-8					10						
第36図：18	IV	10514	L-7					9.95						
第36図：19	IV	10137	L-7					9			緻密			
第41図：1	V	8011	L-8	沈	Ic	12.15	12.2	8.05	11.7			A	X	摩擦式浮文の要素も
第41図：2	V	10451	M-8				9.1	5				C	X	
第41図：3	V	8068	L-8				10.9					−	Y	
第41図：4	V	8068	L-8					4.15		白色粒				
第41図：5	V	10454	M-8					5.3						
第41図：6	V	8069	L-8					6.4		白色粒				
第41図：7	V	10451	M-8					9.1		白色粒				
第41図：8	V	10537	L-7					**7.25**		白色粒				

§3c. 3号竪穴出土の石器・石製品

この竪穴住居址の調査で得られた石器は破損・未完成の例を含めて121点であり、うち確実に住居に伴うものは1点にとどまる。オホーツク文化より前の時代のものと思われる石器があり、それはこの集落外で採集して持ち込まれたのであろう。全体の特徴として、石鏃が圧倒的に多く銛先鏃が少なく、また石錘・砥石が多く石斧・叩き石が見られないことを指摘できる。この砥石と石斧の関係は鉄器の普及と関連するのかもしれない。

I層　表土層出土の石器（第42~44図）

銛先鏃（第42図：1~5）

大小5点のうち大きい方の1~3は珪質頁岩製で、1は基底部を深く抉っている。黒曜石製のうち、4は作りが粗く小型の割に厚みがあり、逆に5は極めて薄く精美なので採集品である可能性が考えられる。

鏃（第42図：6~61・第43図：1~11）

未完・破損品を含めて67点得られている。

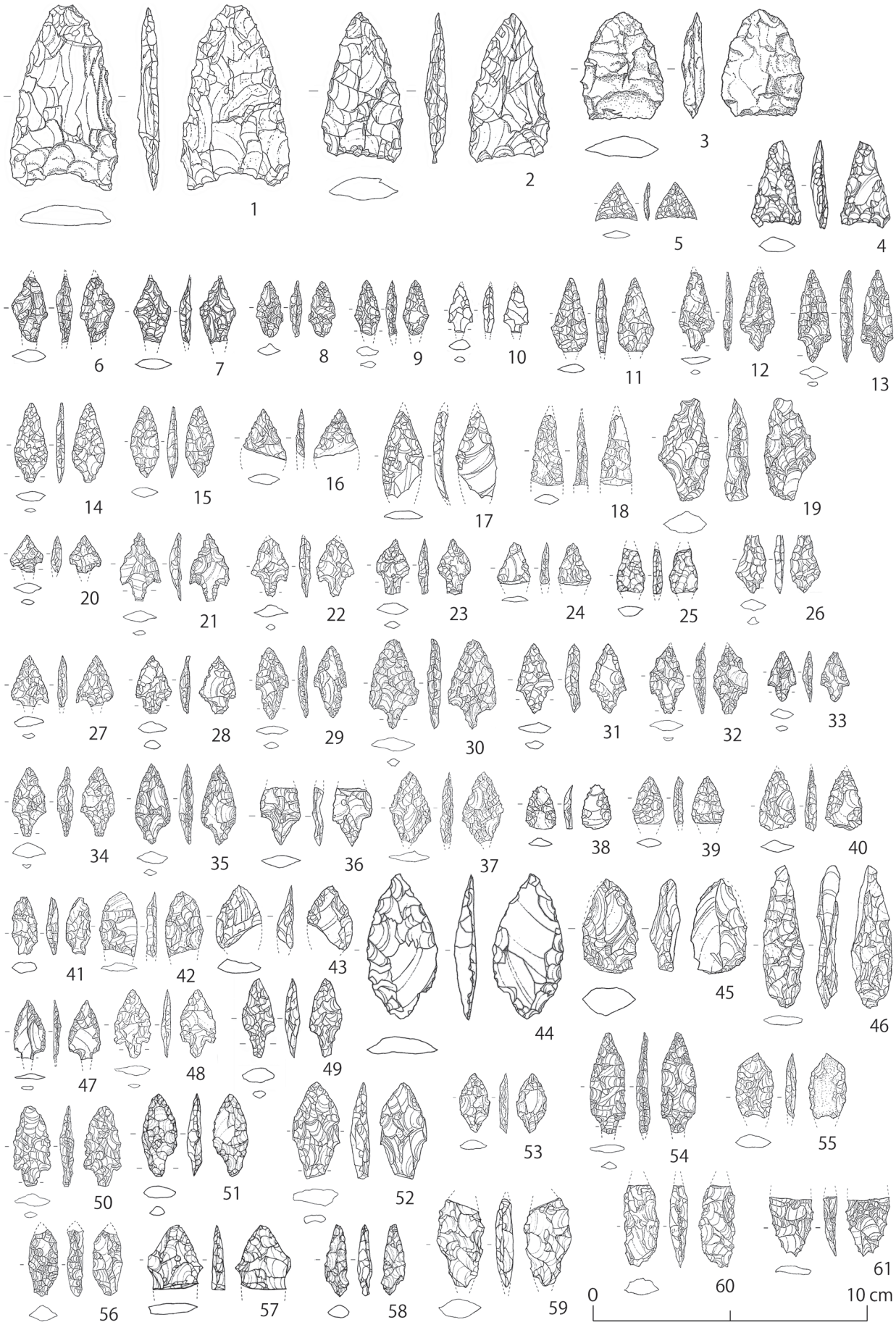
うち身部が三角形をなすaタイプ6~19のうち、柄部の抉りが僅かな6~9は一つの定型をなすものであり、10~14は多少とも柄部の抉りが顕著である。15はII型に分類できるほど柳葉形であり、一部の欠けた16・17もそれに近いものと想定できる。細身でやや厚めの18、身部の剥離は始まっているが基部はほとんど未完の19もここaに加えておく。

身部両側縁が多少とも内湾するbタイプ20~26のうち、20~22は柄部の抉りが強く、逆刺を形成する例であり、柄部の抉りは23では緩く24~26ではほとんど見られない。

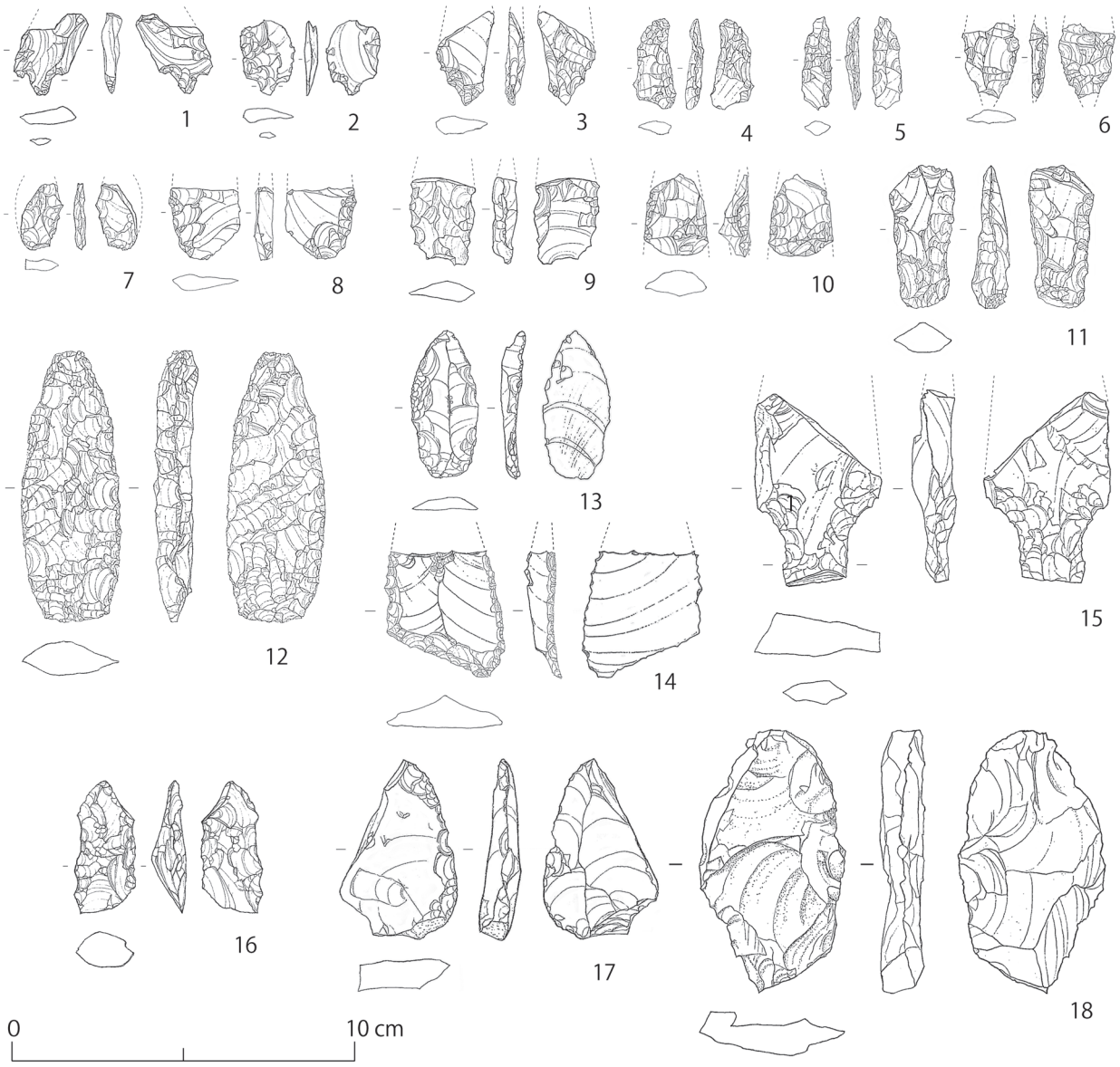
身部側縁が外湾するcタイプ27~46のうち27~36は柄部の抉られたもので、特に27~32では抉りが強く、逆刺(片側のみの例も含む)が見られる。37~46は柄部が太く、うち44は大型剥片の片面はほぼ周縁のみの剥離で製作しており、石質は黒色硬質（珪質）頁岩である。なお左図右下部に残された抉り状の窪みは剥離面の新鮮さから見て近時の破損と考えられる。45は厚めの剥片から剥離加工を開始した段階で特に柄部はほとんど手がつけられていない。46はやや肉厚細身のもので片側上半部を折損している。

47~61は身部両側縁の平行性が大きいdタイプであり、柄部の抉りが比較的大きい47~50から、それが緩やかな51~56、不明・未詳な57、未成の58~60があり、うち58は細い割に太めである。上半部を欠く61は両側縁が並行なのでここに掲げる。

未完・破損品（第43図：1~11）のうち1~3は柄部の作出が進んだ段階の例で製作工程が窺われる。同様に4・



第 42 図　Ⅰ層（表土層）出土の石器実測図（1）

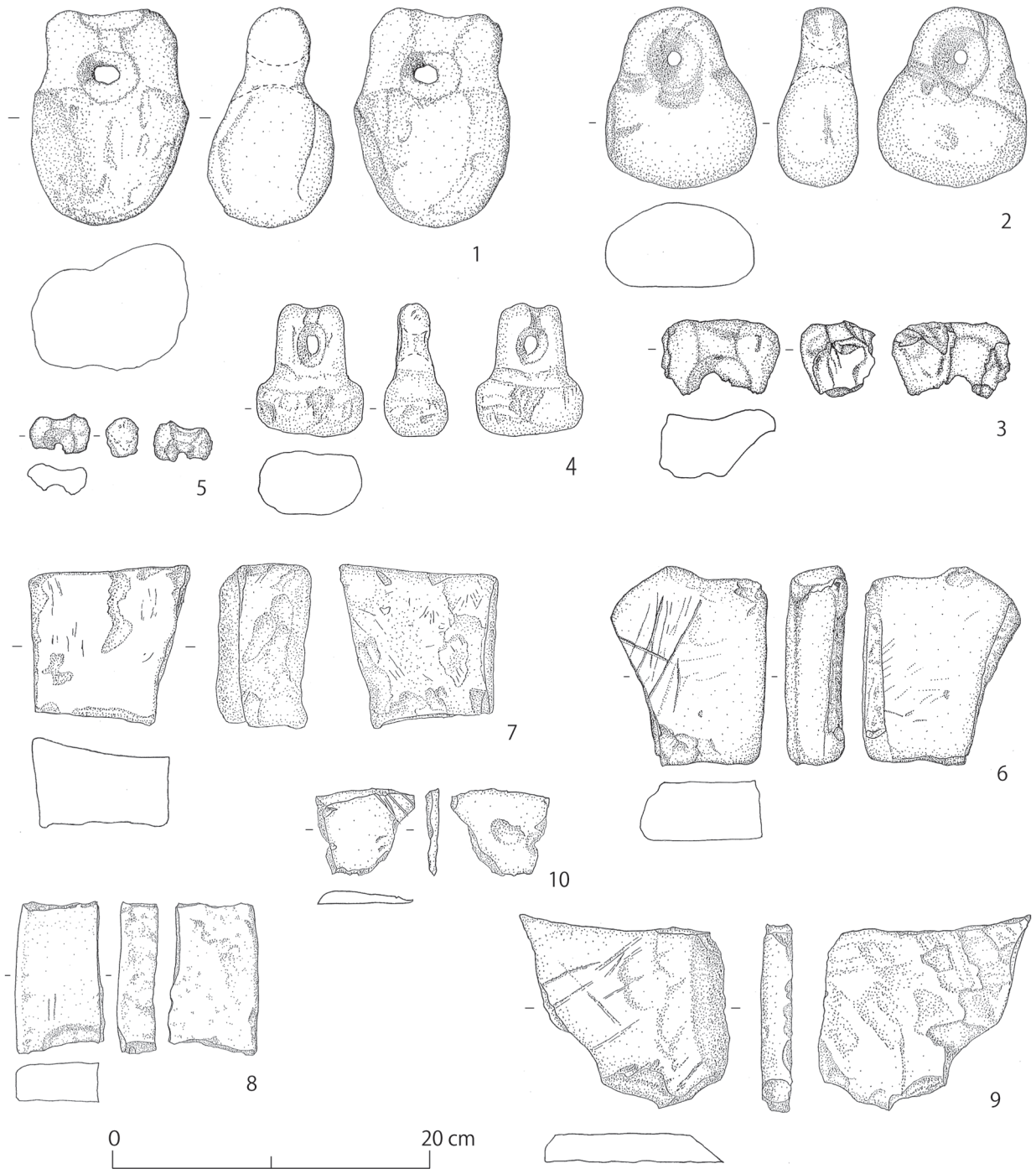


第 43 図　Ⅰ層（表土層）出土の石器実測図（2）

5 も製作途中例であるが部位の推定が正しければ両者とも柄部未完で、先の 1~3 とは製作工程が逆となる。ほぼ半損した 6~9 もタイプ未詳で、10・11 は両面加工がかなり進んだ段階のフレイクである。

その他（第 43 図：12 ~18）

石刃（様）の原材から製作されたと考えられる 12~14 のうち、12 は入念に両面加工されたバイフェイスで、上端部には原礫面かと思われる粗い部分が残っており、使用の結果両側縁は鋭さを失っている。13・14 は主剥離面は殆ど無加工で、13 では左側縁が、14 は両側縁と下底縁が加工されている。15 は分厚い剥片を両面加工し細い柄部を作り出している。身部で折損したため放棄されたものと思われる。鏃にしては大きいので、槍を目指して製作されたものかもしれない。その場合やはり前時代の採集品ということになろう。16 は鏃を目指したものか、両面に自然面を残す不定形な剥片に両面から加工を進めているが、背面の高まりはなお除去し切れていない。17・18 は大きさからみて銛先鏃の作製を目指したもの、もしくはコアで、17 では尖頭部の剥離が進められており（所在不明）、褐色硬質（珪質）頁岩製の 18 は左図右上端部に原礫面を残し、それより下部に両面から剥離を加えている。以上のうち少なくとも 12~14 の 3 点は前時代の採集品であろう。



第 44 図　Ⅰ層（表土層）出土の石器実測図（3）

石錘（第 44 図：1~5）

大小破損品を含め５点得られており、いずれも有孔タイプである。ただ、垂下させるための紐を単に横に通すための孔だけでなく、収まりをよくするために、２を除き、上部 - 頭部に溝を縦に切っている。さらに必ずしも鮮明ではないが、2・4 では孔の位置もしくはそれよりやや下位に横溝かと思われるものが認められる。また 4 は次の埋土例（第 45 図：26）同様に自立可能なほど底面が平坦であり、紐の掛け方を含めて使用方法の解明が求められる。

砥石（第44図：6~10）

左部を欠損した6は左図左半部に幅・深さ1 mm程の鋭い直線的な溝が交錯している比較的目の細かい石材である。薄いもしくは細い硬質の素材を繰り返し砥磨したのであろう。7~9は砥磨作業に因る滑らかな凹みをもつもので、7は左図面とその上側面および右図の中央部縦位にこれがみられ、8•9も左図の面が砥磨作業によって比較的滑らかになっている。10は所在不明である。

Ⅳ層　埋土層出土の石器（第45図）

銛先鏃（第45図：1・2）

1は扁平な剥片の背面側を周縁加工し、主剥離面側は側縁のみに剥離を加え、その途中で折損・破棄されたのであろう。2は厚目の素材を両面剥離し左図左側縁の先端付近は未加工である。

鏃（第45図：3~25）

破損・未製品を含めて23点得られている。

aタイプのうち3・4はやや厚めで両側縁を粗い鋸歯状に作り出し、基部の非対称的な形状とも相互によく類似している。並置された出土状況を含めて特異である。5•6は柄部の抉りが強く、7•8ではそれが弱い。なお7•8の基部はやはり対称的ではない。破折した9~11のうち11は左図右辺が加工途中である。

bタイプに分類されるごく小型で精工な12は身部両側縁が極端に内湾し、しかも柄部よりも細く短い特異な形態であり、実用品であるのか疑問が残る。

身部両側縁が外湾するcタイプ13~15のうち15は著しく大型で石質も細粒砂岩製で特異である。

身部両側縁並行なdタイプ16~18のうち17は身部と柄部の境部および身部先端部近くが突出する稀な形態であり、18は両面とも幅広の剥離が斜断する稀な例である。

折損例19~22のうち19は細身の割に厚手で、茎と推定したが先の3・4のような細身の鏃の尖頭部である可能性もある。23~25は未製品で、23右図右辺は使用されたのか潰れており、24は左図左側茎部の抉りを含め主剥離面側の細かな周縁加工はほぼ完了しており、背面側の加工途中に折損し、25は尖頭部加工途上のものであろう（所在不明）。

石錘（第45図：26~29）

大小破損品を含め4点得られており、いずれも有孔タイプである。26には孔から頂部にかけて、27では上部両側に浅い溝がつくられている。小型の29は縦長の稀な例である。

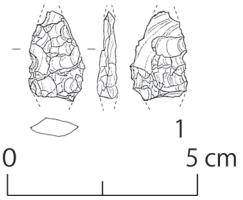
砥石（第45図：30・31）

30は縁が自然に摩滅して滑らかな平石であり、中央部にやや斜めの浅い溝が残されている。砥磨使用痕であろう。31は厚さ1 cmほどで薄手である（所在不明）。

第 45 図　Ⅳ層（埋土層）出土の石器実測図

Ⅴ層　床面出土の石器（第 46 図）

一点のみ得られている。左図右辺下端部を鏃茎部の抉りと見立てた。



第 46 図　Ⅴ層（床面）出土の石器実測図

第2表 3号竪穴住居址出土の石器・石製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 mm	幅 mm	厚 mm	重 g	材質	備考
第42図: 1	I	8410-①	M-8	銛先鏃	67	39	7.53	18.6	黒色硬質（珪質）頁岩	
第42図: 2	I	8414-①	M-8	銛先鏃	54.84	29.43	8.16	10.4	黒色硬質（珪質）頁岩	
第42図: 3	I	10428-①	M-8	銛先鏃	39.06	29.92	7.76	9.8	点紋状黒色硬質（珪質）頁岩	
第42図: 4	I	8034-①	L-8	銛先鏃	31.48	18.21	5.35	2.5	黒曜石	
第42図: 5	I	8226-①	L-6	銛先鏃	13.49	15.33	2.88	0.4	黒曜石	
第42図: 6	I	8143-②	L-7	石鏃 a	23.62	13.08	4.18	1	黒曜石	
第42図: 7	I	8226-②	L-6	石鏃 a	23.36	13.4	3.14	0.9	黒曜石	
第42図: 8	I	8143-①	L-7	石鏃 a	20.2	10.14	3.67	0.5	黒曜石	
第42図: 9	I	10534	M-7	石鏃 a	19.72	8.87	3.08	0.5	黒曜石	
第42図: 10	I	8427-②	M-8	石鏃 a	17.2	8.86	3.74	0.4	黒曜石	
第42図: 11	I	8529-③	M-7	石鏃 a	26.7	13.17	3.33	0.9	黒曜石	
第42図: 12	I	8022	L-8	石鏃 a	28.15	12.56	3.56	0.8	黒曜石	
第42図: 13	I	8114	L-7	石鏃 a	32.86	12.01	4.25	1.2	黒曜石	
第42図: 14	I	2105-②	M-9	石鏃 a	(29)	(12)	(3.5)	−		所在不明
第42図: 15	I	8226-③	L-6	石鏃 a	25.23	10.55	3.41	0.7	黒曜石	
第42図: 16	I	8511-①	M-7	石鏃 a	18.14	15.69	2.97	0.5	黒曜石	
第42図: 17	I	8248	L-6	石鏃a	30.96	15.4	4.34	1.5	黒曜石	未成品
第42図:18	I	8405-①	M-8	石鏃a	25.03	12.19	4.11	0.9	黒曜石	未成品
第42図: 19	I	8410-③	M-8	石鏃a	37.16	19.03	8.09	4.9	黒曜石	未成品
第42図: 20	I	8529-①	M-7	石鏃 b	13.2	12.09	3.34	0.4	黒曜石	
第42図: 21	I	8508	M-7	石鏃 b	24.53	14.92	3.85	0.9	黒曜石	
第42図: 22	I	8427-①	M-8	石鏃 b	20.73	13.37	4.28	0.8	黒曜石	
第42図: 23	I	8504-①	M-7	石鏃 b	19.52	11.88	3.25	0.6	黒曜石	
第42図: 24	I	10428-④	M-8	石鏃 b	14.94	11.83	3.09	0.4	黒曜石	
第42図: 25	I	8003-①	L-8	石鏃 b	15.55	10.41	3.65	0.6	黒曜石	
第42図: 26	I	5503-①	L-8	石鏃 b	23.6	11.15	4.31	0.7	黒曜石	
第42図: 27	I	8529-②	M-7	石鏃 c	18.31	13.43	4.17	0.7	黒曜石	
第42図: 28	I	10428-②	M-8	石鏃 c	20.45	12.99	3.68	0.8	黒曜石	
第42図: 29	I	8404-①	M-8	石鏃 c	26	11.82	3.06	0.8	黒曜石	
第42図: 30	I	8153-③	L-7 WB	石鏃 c	32.12	18.25	4.69	2	黒曜石	
第42図: 31	I	8504-③	M-7	石鏃 c	24.67	13.76	4.11	1.1	黒曜石	
第42図: 32	I	8153-②	L-7 WB	石鏃 c	24.26	12.73	4.12	1	黒曜石	
第42図: 33	I	8504-②	M-7	石鏃 c	18.15	10.4	3.42	0.4	黒曜石	
第42図: 34	I	8153-①	L-7 WB	石鏃 c	25	12.66	5.27	1.2	黒曜石	
第42図: 35	I	8438-①	M-8	石鏃 c	29.23	13.1	4.26	1.3	黒曜石	
第42図: 36	I	8537	M-7	石鏃 c	21.44	15.12	4.65	1	黒曜石	
第42図: 37	I	8410-②	M-8	石鏃 c	25.94	16	3.89	1.2	黒曜石	
第42図: 38	I	10429	M-8	石鏃c	15.11	10.69	2.41	0.3	黒曜石	未成品
第42図: 39	I	8702	K-7	石鏃 c	17.39	11.48	3.27	0.6	黒曜石	
第42図: 40	I	10428-③	M-8	石鏃 c	21.29	13.33	3.6	0.9	黒曜石	
第42図: 41	I	8529-⑤	M-7	石鏃 c	20.32	9.4	3.61	0.7	黒曜石	
第42図: 42	I	8428-②	M-8	石鏃c	23.93	14.21	3.64	1.2	黒曜石	未成品
第42図: 43	I	10432	M-8	石鏃c	23.04	17.3	5.72	1.4	黒曜石	未成品
第42図: 44	I	5503-②	L-8	石鏃 c	52.31	25.71	6.57	8.7	黒色硬質（珪質）頁岩	未成品
第42図: 45	I	8511-②	M-7	石鏃c	35.02	21.3	9.11	5.5	黒曜石	未成品
第42図: 46	I	8241	L-6	石鏃c	51.2	14.82	8.28	5.4	黒曜石	未成品
第42図: 47	I	10519-②	M-7	石鏃 d	21.39	11.81	2.8	0.6	黒曜石	
第42図: 48	I	2105-①	M-9	石鏃 d	(25)	(13)	(3.5)	−		所在不明
第42図: 49	I	2101	M-9	石鏃 d	(29)	(6)	(5)	−		所在不明
第42図: 50	I	10519-①	M-7	石鏃 d	29.4	14.37	4.47	1.6	黒曜石	
第42図: 51	I	8602	排土（3号）	石鏃 d	29.91	12.69	4.95	1.5	黒曜石	
第42図: 52	I	10519-③	M-7	石鏃 d	35.69	17.34	6.71	3.5	黒曜石	
第42図: 53	I	8563	M-7	石鏃 d	21.05	10.69	3.54	0.7	黒曜石	
第42図: 54	I	8183	L-7	石鏃 d	36.28	13.4	3.63	1.7	黒曜石	
第42図: 55	I	8529-④	M-7	石鏃 d	23.42	14.16	4.28	1.5	黒曜石	
第42図: 56	I	8197	L-7（柱）	石鏃 d	24.02	11.01	5.07	1.3	黒曜石	
第42図: 57	I	8003-②	L-8	石鏃 d	23.02	19.58	5.19	2	黒曜石	
第42図: 58	I	8610	3号	石鏃 d	25.91	8.75	4.99	0.8	黒曜石	
第42図: 59	I	8034-②	L-8	石鏃 d	32.5	17.52	6.73	3.3	黒曜石	
第42図: 60	I	8202-①	L-6	石鏃d	29.02	12.87	6.54	2.3	黒曜石	未成品
第42図 : 61	I	8404-②	M-8	石鏃d	21.35	15.91	4.61	1.4	黒曜石	
第43図 : 1	I	10443	M-8	石鏃	26.08	16.2	5.03	1.4	黒曜石	未成品
第43図 : 2	I	8230	L-6	石鏃	(22)	(15.5)	(4)	−		所在不明
第43図 : 3	I	8411-①	M-8	石鏃	27.76	18.57	5.07	1.6	黒曜石	未成品
第43図 : 4	I	8405-②	M-8	石鏃	26.01	12.84	3.85	1.1	黒曜石	未成品

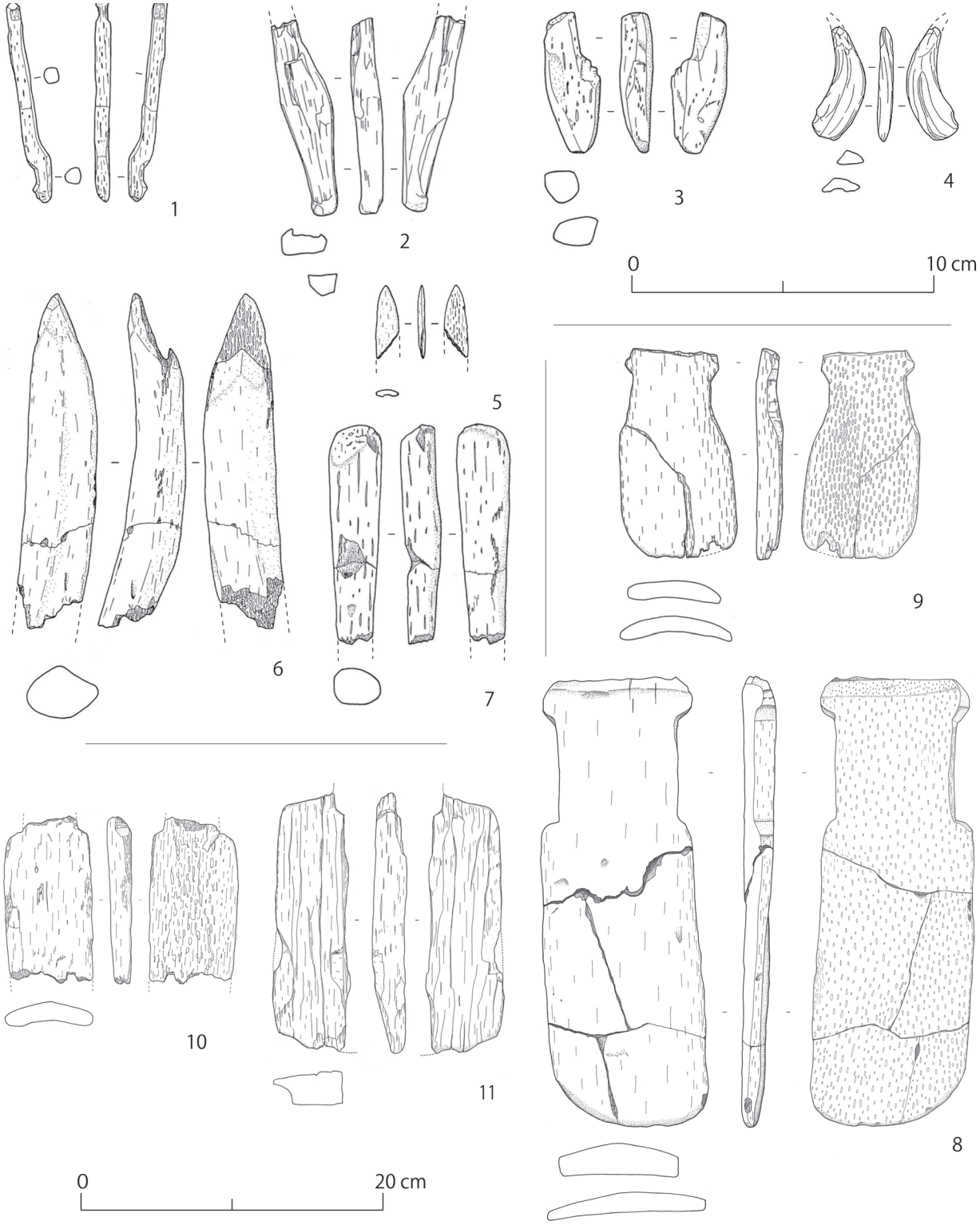
（第２表の続き）

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 ㎜	幅 ㎜	厚 ㎜	重 g	材質	備考
第43図：5	I	8428-①	M-8	石鏃	26.79	8.68	3.49	0.8	黒曜石	未成品
第43図：6	I	8438-②	M-8	石鏃	21.74	16.72	4.93	1.4	黒曜石	
第43図：7	I	8504-④	M-7	石鏃	19.8	10.57	3.1	0.7	黒曜石	
第43図：8	I	8428-③	M-8	石鏃	20.66	21.18	4.48	1.9	黒曜石	未成品
第43図：9	I	8511-③	M-7	石鏃	25.25	19.79	6.77	3.3	黒曜石	未成品
第43図：10	I	8411-②	M-8	フレイク	23.52	18.81	8.6	3.1	黒曜石	
第43図：11	I	8108	L-7	石鏃	41.12	18.79	9.53	6.3	黒曜石	未成品
第43図：12	I	8232	L-6	削器	77.76	28.89	11.44	29.1	黒曜石	
第43図：13	I	8202-②	L-6	削器	43.36	20.03	6.42	4.5	黒曜石	
第43図：14	I	8115	L-7	削器	38.42	34.29	9.2	11.4	黒曜石	
第43図：15	I	10448	M-8 WB	石槍	56.68	37.6	11.67	20.2	黒曜石	未成品
第43図：16	I	8034-③	L-8	銛先鏃	38.1	17.41	9.56	5.2	黒曜石	
第43図：17	I	2114	M-9	削器？	(52)	(34)	(8.5)	−		所在不明
第43図：18	I	10428-⑤	M-8	石鏃	76.78	42.51	12.81	41.6	褐色硬質（珪質）頁岩	未成品
第44図：1	I	10420	M-8	石錘	138.5	99	82	1167.6	球顆状流紋岩	
第44図：2	I	8465	M-8	石錘	112.5	95	52.5	645.9	球顆状流紋岩	
第44図：3	I	8114	L-7	石錘	(47.5)	(73.0)	(42.5)	145.6	球顆状流紋岩	
第44図：4	I	8465	M-8	石錘	82.5	68.5	40.5	216.2	球顆状流紋岩	
第44図：5	I	8108	L-7	石錘	(25)	(37.5)	(18.5)	18.5	球顆状流紋岩	
第44図：6	I	8211	L-6	砥石	125.5	99.5	38	718.4	細粒砂岩	
第44図：7	I	8414	M-8	砥石	102.5	10.2	56.5	802.1	中粒砂岩	
第44図：8	I	8608	排土	砥石	108	60	27.5	340.9	細粒砂岩	
第44図：9	I	8103	L-7	砥石	108.5	120	18	362.7	粗粒～中粒砂岩	
第44図：10	I	8404	M-8	砥石	55	62.5	8.5	−		所在不明
第45図：1	IV	8433-①	M-8	銛先鏃	14.95	26.09	4.05	1.6	黒曜石	未成品
第45図：2	IV	8560	M-7	銛先鏃	39.22	31.67	10.17	9	黒曜石	未成品
第45図：3	IV	8578-①	M-7 SB	石鏃 a	50.01	13.48	5.77	2.7	黒曜石	
第45図：4	IV	8578-②	M-7 SB	石鏃 a	51.08	14.89	6.8	3.5	黒曜石	
第45図：5	IV	8111	L-7	石鏃 a	28.39	13.85	4.17	1.2	黒曜石	
第45図：6	IV	8419-①	M-8	石鏃 a	25.02	11.7	2.4	0.5	黒曜石	
第45図：7	IV	10526-②	M-7	石鏃 a	29.7	14.19	3.34	1.1	黒曜石	
第45図：8	IV	10526-③	M-7	石鏃 a	25.63	12.3	3.24	0.7	黒曜石	
第45図：9	IV	8424-②	M-8	石鏃 a	17.74	12.19	3.85	0.8	黒曜石	
第45図：10	IV	8433-⑤	M-8	石鏃 a	19.77	10.85	2.13	0.4	黒曜石	未成品
第45図：11	IV	8433-④	M-8	石鏃 a	24.5	15.24	4.25	1.3	黒曜石	未成品
第45図：12	IV	8419-②	M-8	石鏃 b	15.5	12.82	2.94	0.3	黒曜石	
第45図：13	IV	8124-①	L-7	石鏃 c	21.19	13.74	3.36	0.6	黒曜石	
第45図：14	IV	8188	L-7	石鏃 c	16.26	14.17	3.44	0.8	黒曜石	
第45図：15	IV	8124-②	L-7	石鏃 a	41.43	25.61	5.64	5.5	細粒砂岩	
第45図：16	IV	10526-①	M-7	石鏃 a	21.28	12.42	3.31	0.9	黒曜石	
第45図：17	IV	8432-①	M-8	石鏃d	31.08	14.89	4.29	1.5	黒曜石	未成品
第45図：18	IV	10439	M-8	石鏃 d	32.49	11.98	4.14	1.8	黒曜石	
第45図：19	IV	8424-①	M-8	石鏃	10.26	6.64	4.56	0.2	黒曜石	
第45図：20	IV	8433-③	M-8	石鏃	22.28	8.23	3.44	0.5	黒曜石	未成品
第45図：21	IV	8433-②	M-8	石鏃	18.58	12.56	3.6	0.8	黒曜石	未成品
第45図：22	IV	8432-②	M-8	石鏃	14.22	11.15	4.13	0.6	黒曜石	未成品
第45図：23	IV	8433-⑥	M-8	石鏃	20.98	17.97	5.89	2.2	黒曜石	未成品
第45図：24	IV	8125	L-7	石鏃	34.98	17.21	4.88	3.1	黒曜石	未成品
第45図：25	IV	8049	L-8	石鏃	28.5	18	6	−		所在不明
第45図：26	IV	8743	K-7	石錘	140	144.5	44	1857.6	球顆状流紋岩	
第45図：27	IV	8012	L-8	石錘	(54.5)	(63.5)	(37.0)	156.9	球顆状流紋岩	
第45図：28	IV	8708	K-7	石錘	(23.5)	(29.0)	(16.5)	12.7	球顆状流紋岩	
第45図：29	IV	8118	L-7	石錘	(65.5)	32	(21.5)	57.1	球顆状流紋岩	
第45図：30	IV	10514	M-7	砥石	120.5	95	25.5	472.9	粗粒～中粒砂岩	
第45図：31	IV	10457	M-8	砥石	62.5	84.5	10.5	−		所在不明
第46図	V	10452	M-8	石鏃	23.02	15.23	4.4	1.4	黒曜石	未成品

§4d.　３号竪穴出土の骨角器・骨角製品

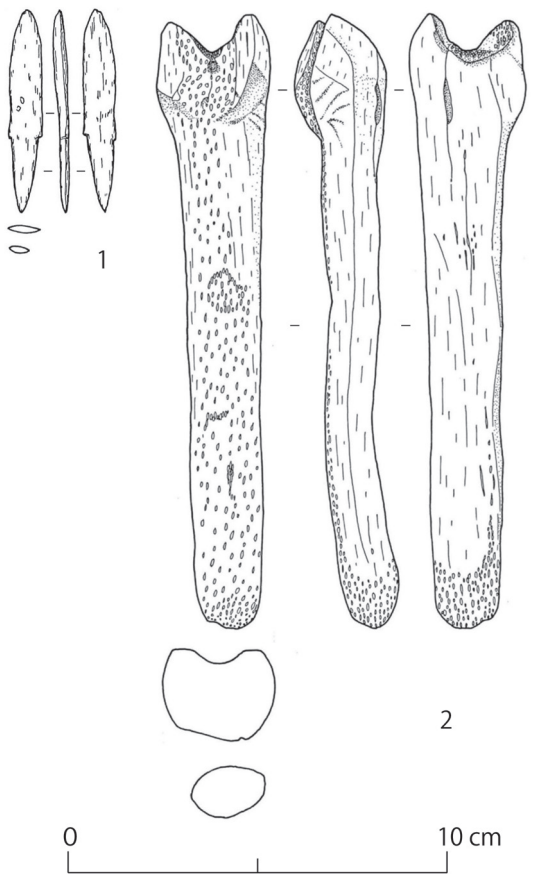
I 層　表土層出土の骨角器（第 47 図）

様々な種類が見られるが掘具を除くと断片的な状態である。1~4 は組み合わせ式釣り針の部品であり、主軸 1~3 のうち 1 は極端に小型で細く、２は高熱を受けたため白色化している。３は結合部に若干凹凸が認められるので未完かもしれない。4 は未完の鉤部分であろう（所在不明）。未詳品 A の 5・6 はいずれも尖端部であり、



第47図　I層（表土層）出土の骨角器実測図

薄い5はヘラのような用途をもつものかもしれず、逆に分厚くて背面を入念に削ぎ落としている6は銛先の未製品の可能性をもつ。未詳品Bの7は横断面が丸みをもつ三角形で端部は丸く削られており、何かの柄部であるのかもしれない。掘具8~11のうちBタイプの8は長さが30 cm近い大型製品で、尖端部はよく使い込まれて片減りしている。9は上端部で折損しているので突起部は長い柄部中間の突起である可能性も残る。10・11は辛うじて肩の抉り部が残されたものである。



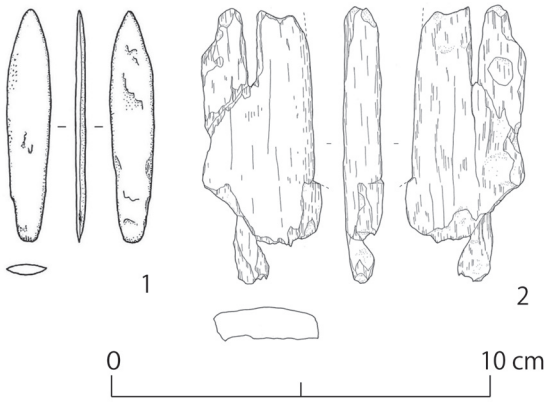
第48図　Ⅱ層（魚骨層）出土の骨角器実測図

Ⅱ層　魚骨層出土の骨角器（第48図）

1は左右対称に非常に薄く整美に作られた鏃Ⅰである。形態には若干違いがあるが、次に挙げる下層・砂利層でみつかった骨鏃と一連のものであるのかもしれない。2は長さ15 cm余りの棒状のもので、太めの一端は抉られ、他端は丸く削られた未詳品である（所在不明）。

Ⅲ層　砂利層出土の骨角器（第49図）

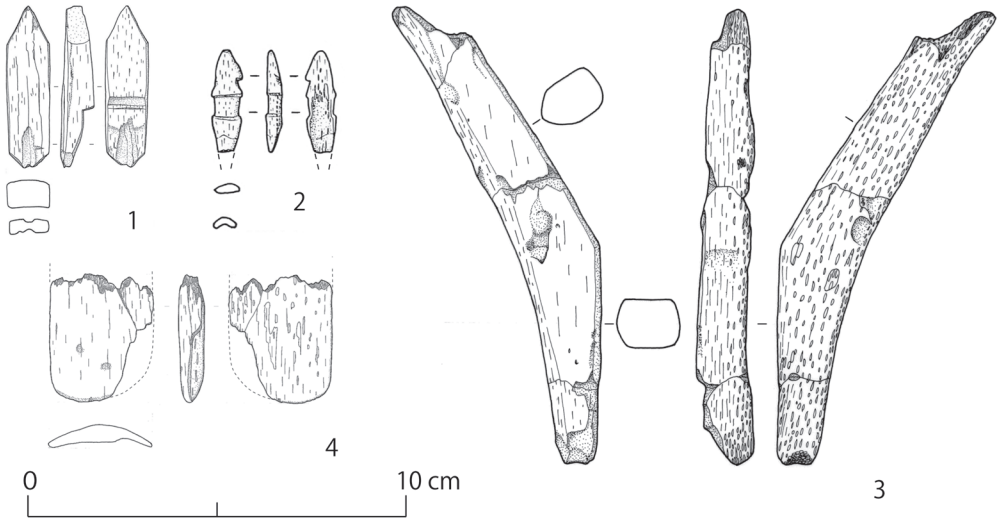
1は薄く整美な作りの鏃Ⅰであり、逆刺はない（左図左側縁下部の段は欠損に因る）。2は横断面の形状からみて、左側の欠損は然程大きくはないと推定できるので、細身の掘具BⅠもしくは同Ⅱであると考えられる。



第49図　Ⅲ層（砂利層）出土の骨角器実測図

Ⅴ層　埋土層出土の骨角器（第50図）

銛先2点のうち1は鏃の受けやソケット・紐穴・尾棘など細部加工・仕上げ工程に入る直前段階のもので製作工程の解明に役立つ。特に右図ソケット部に残された水平の溝は叩き込まれたタガネもしくは斧などの刃の痕と考えられ、貴重である。尾部には棘を作出するために内外両面からラフに溝を入れている。2は尖頭部に逆刺



第50図　Ⅳ層（埋土層）出土の骨角器実測図

をもつオープンソケット式で、全長 4 cm 足らずなので実用品であるのか疑問が残る。3 は結合式の釣針であり、結合面などを除き未完成である[4)]。4 はやや薄手・小型の掘具先端部である。

第 3 表　3 号竪穴住居址出土の骨角器・骨角製品一覧

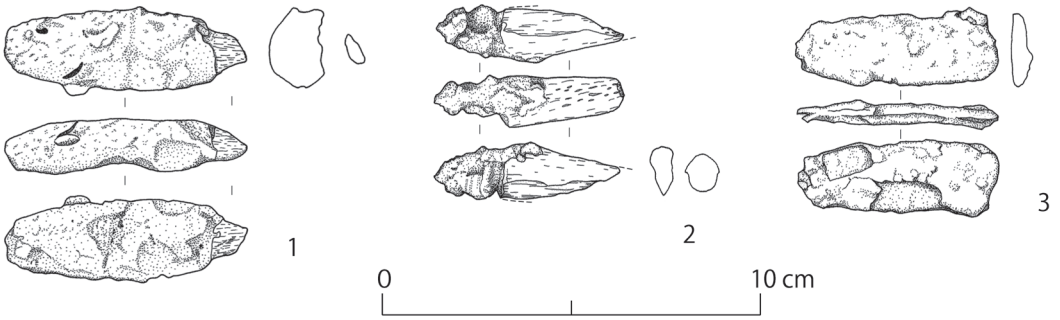
挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 ㎜	幅 ㎜	厚 ㎜	重 g	材　質	備　考
第47図：1	Ⅰ	8533	M-7	釣針軸	67.05	4.59	5.66	1.3	海獣骨	8542と接合
第47図：2	Ⅰ	8704	K-7西ブリッジ	釣針軸	(65.42)	(16.63)	(8.85)	10.4	クジラ	焼けて灰白色
第47図：3	Ⅰ	8543	M-7	釣針軸	(46.02)	(16.86)	(10.36)	(4.5)	クジラ	
第47図：4	Ⅰ	8543	M-7	釣針の逆鉤	−	−	−	−	オットセイの下顎犬歯	所在不明
第47図：5	Ⅰ	10409	M-8	未詳品A	(23.95)	(7.06)	(2.15)	(0.2)		
第47図：6	Ⅰ	8543	M-7	未詳品A	(109.94)	(20.87)	(17.05)	(17.8)	トド？の肋骨	刺突具？
第47図：7	Ⅰ	8567	M-7	未詳品B	(72.18)	(16.54)	(12.24)	(7.7)	クジラ	柄？
第47図：8	Ⅰ	8568	M-7南ブリッジ	掘具BI	298.00	104.70	20.75	337.2	クジラ	
第47図：9	Ⅰ	8543	M-7	掘具B	136.65	74.44	12.33	60.8	クジラ	
第47図：10	Ⅰ	8156	0	掘具B	(108.67)	(57.22)	(13.97)	(51.5)	クジラ	
第47図：11	Ⅰ	8515	M-7	掘具B	(171.0)	(51.05)	(19.45)	(118.2)	クジラ	
第48図：1	Ⅱ	8575	M-7南ブリッジ	鏃I	52.94	8.58	2.58	1	海獣骨	
第48図：2	Ⅱ	8586	M-7南ブリッジ	未詳品	−	−	−	−	海獣骨	所在不明
第49図：1	Ⅲ	10507	M-7南ブリッジ	鏃I	60.28	11.12	2.53	1.5	海獣骨	
第49図：2	Ⅲ	10101	L-7	掘具B	(145.5)	(60.86)	(18.38)	(61.5)	クジラ	
第50図：1	Ⅳ	10106	L-7西ブリッジ	銛先AⅠ	85.16	22.33	16.04	19.5	クジラ	
第50図：2	Ⅳ	10514	M-7	銛先BⅠ	(27.00)	(7.62)	(3.54)	(0.3)	海獣骨？	
第50図：3	Ⅳ	10104	L-7西ブリッジ	釣針軸	13.42	20.31	12.84	12.5	クジラ	
第50図：4	Ⅳ	10106	L-7西ブリッジB-2	掘具B	(67.33)	(54.55)	(8.25)	(15.6)	クジラ	

§5 e.　3 号竪穴出土の金属器

合わせて 5 点得られた。以下、層位別に記載する。

Ⅰ層　表土層出土の金属器（第 51 図）

刀子 3 点のうち 1・2 は柄が残存しているもので、1 は木製、2 は角製で角座面に茎を装入し面取り加工が認められる。先に近い部分の 3 は、刃の側にわずかに湾曲しており鎌の可能性もある。



第 51 図　Ⅰ層（表土層）出土の金属器実測図

Ⅳ層　埋土層出土の金属器（第 52 図）

1 は柄の末端部で湾曲しており曲手刀子であろう。2 は幅 7 mm 前後と細く薄いもので、下端の突起状の部分は刀子の柄末端を想起させるが確かではなく、素材などの可能性も残る。

第 52 図　Ⅳ層（埋土層）出土の金属器実測図

第4表　3号竪穴住居址出土の金属器・金属製品一覧

挿図番号	層位	遺物番号	出土区	分類	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　考
第51図：1	I	8229	L-6	刃子	(6.4)	(2.0)	(1.2)	(11.9)	柄木部残存、腐食で身部中空化、泥全面被覆
第51図：2	I	8543	M-7	刃子	(4.8)	(1.5)	(0.9)	(4.8)	鹿角製柄に装着
第51図：3	I	5505	L-8	刃子	(5.3)	(1.8)	(0.2)	(10.1)	
第52図：1	IV	8120	L-7	刃子	(4.0)	(1.8)	(0.4)	(7.6)	曲手刀子の柄？
第52図：2	IV	8711	K-7 西ブ	刃子？	(3.2)	(0.7)	(0.4)	(2.9)	

§6 f.　3号竪穴出土の自然遺物

上記のII層（魚骨層）を除くとここでは動物遺存体の保存状態は概してよくないが、トドやクジラ・フイリアザラシ・イルカなど海獣骨やシカ・鳥類他それにイヌが得られている。詳細は次号に報告することにする。

§7 g.　小　括

この竪穴住居は2号・4号竪穴住居址にはさまれる形で、これらとともに台地の北西縁に位置し、ほぼ同じ地点で少なくとも一度は建て替えがおこなわれている。これら2軒の住居は、長軸の方向を奥壁中央部を中心にして20°ほど東に振る形で建て替えているが、床面さらに炉のかなりの部分が重なるので、時間的間隙は然程大きいとは考えられない。古い方のa竪穴住居址は、その奥壁部でともなった土器が刻文をもつ可能性が大きいので、中期に位置付けることが妥当であろう。建て替え後のb竪穴住居址は、埋土中でまとまった形で見つかった多くの土器が後期・沈線文をもつので、後期以前に廃絶していたと推定できる。おそらく3号竪穴住居は中期のうちに終わっていたのであろう。では埋土中のこれら沈線文をもつ土器はどこからもたらされたのであろうか。最も近い2号竪穴住居址がまず挙げられる。これは上に見たように刻文をもつ土器が床面にともなっているので3号竪穴住居址と同様に中期に遡るものであることが言える。またその埋土中では擬縄貼付文をもつ土器が伏せられた状態で、しかも管玉や牙製穿孔円盤をともなってみつかっており、これらは墓に関わるものである可能性をもつ。したがって後期初頭にはこの竪穴住居は廃絶しているものの、その上ではなんらかの活動が展開されていた可能性が高く、この隣接する3号竪穴住居址の埋土中に投棄された沈線文をもつ土器や魚骨層などはこの活動と一連のものであるのかもしれない。さらに、強いて竪穴住居と条件を絞ってこれを求めるとすれば2号竪穴住居址の南西側に残された竪穴住居址に由来する窪みが挙げられる。

ついでながら、1号竪穴住居址の土器は胎土に砂を多量に含み表面がざらつき赤褐色を呈するものが主であるのに対して、4号竪穴住居址の土器は砂が少なく器面滑らかなものが多い点が注目される。3号竪穴住居址の埋土・表土などに散在する貼付文土器の多くは砂が少なく器面滑らかなので主に4号竪穴住居址との関係が考えられる。

なお上記の魚骨層はコマイが主 (67%) で、ニシンがそれにつぐ (28%) 内容である。前者コマイは厳冬期1~3月、後者は春から初夏に産卵のために岸近くに寄って来た群れであろう。この魚骨層内外で石錘がみられる点も漁法を推定する上で興味深い。いずれにせよこれらはこの目梨泊遺跡付近の海が極めて恵まれた漁場であったことを物語っており、集落形成の要件を示唆するものといえよう。さらに、この遺跡において石鏃の多さが目立つことも、それと無関係ではないであろう。

最後に鍛治作業について触れておきたい。3号竪穴住居址外、北側のピット4からはスラグが得られており、またこの遺跡では鍛治の炉壁・羽口に転用された土器が3号竪穴住居址埋土（第35図：13）のほか2号竪穴

住居址埋土でも見つかっている。これらの土器は沈線文をもち同一個体である可能性が大きい。いずれにせよ後期・沈線文土器の段階にここでは鍛治作業が行われていた。この問題も今後の刊行予定の総括で検討することにする。

（天野哲也）

後　記

３号竪穴住居址の原稿は、石器・骨角器の部分を除き、1986 年秋までに書き終えて、翌 87 年５月からの読み合わせ検討会に回した。ただし土器のトレース図・組図版はいずれも所在不明なのでやむを得ず、残された B5 版コピー図をスキャンして使用する。また石器も大半はトレース図が所在不明であり、これについては実測図をスキャンして使用した。先の２号竪穴住居址と同じく、自然遺物の観察・同定・記録は西本豊弘氏（北海道大学大学院修士課程）と金子浩昌氏（早稲田大学教育学部講師）が担当した（肩書はいずれも当時）。

註

註１　なお、実際 1974 年の発掘調査の結果、台地の北西縁は、直下の沢沿いの小径（磯に通じる）を開鑿する工事に直接よるものか、さらに自然崩落も加わったのかは明らかでないが崩れており、この住居址自体も北西側壁とこの近くの部分をかなり失っていることが判明した（第２・３図の A-A’・C-C’ 断面図）。また隣の２号竪穴住居址も甚だしい削平を被っているために壁をほとんど残さないが、そのピット群はこの３号竪穴住居址に比べると深いものが遥かに多い。３号竪穴住居址に関しては部分的に床面近くに及ぶ削平もあったのかもしれない。

註２　天野哲也　2003 「オホーツク文化前期の地域開発について」『北海道大学総合博物館研究報告』1 号　北海道大学総合博物館　pp. 66-77 など参照。

註３　a 竪穴住居址の壁にともなう周溝と想定した溝の内側に周溝状のものがもう一本みられる。この周溝状のものと a 竪穴住居址の周溝との間隔は、北東壁部でやや広く 0.3 m、他では 0.2 m 前後である。大体においてこれは a 竪穴住居址の周溝に並行するが、北東隅でははるかにゆるやかに屈曲し、また南壁部イあたりでこの溝は b 竪穴住居址内側の周溝と重なっており、その先をたどることが難しい。しかしそのカーブ、および他の竪穴周溝との関係からみて、ローハの中間に位置する溝と一連のものであろうと推定される。ただし、前者は連続せず、南壁頂点部で約 30 cm の空白がある。その断面は逆台形である。幅は北東壁部でやや細く 10 cm 余り、他では 20 cm 前後のところが多い。深さはだいたい 10 cm ほどで、南壁部でやや浅く 7 cm 内外である。可能性としては a 竪穴住居址の内溝あるいは縮小・改築に伴うものと考えることができるが確証がない。

註４　類例は駒井和愛・佐藤達夫　1964 「オホーツク遺物の特色」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（下）　東京大学　p. 71 などにみられる。

PL. 1　3 号竪穴住居址全景

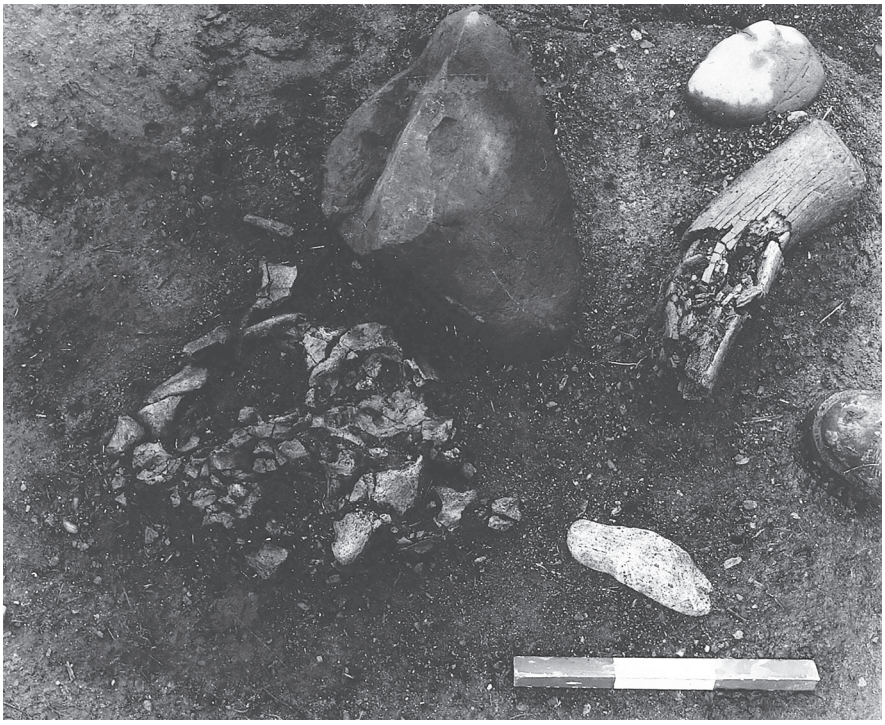
PL. 2　Ⅰ層（表土層）中の遺物出土状況　（スケールは 30 cm）

PL. 3　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（1）（スケールは 10 cm）

土器（第41図：2）

PL. 4　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（2）（スケールは 30 cm）

PL. 5　3 号竪穴住居址の炉址



PL. 6　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（3）（スケールは 30 cm）

PL.7　Ⅳ層（埋土層）中の遺物出土状況（4）